千音寺遺跡　第10次・第11次発掘調査報告書

二〇二三

名古屋市千音寺土地区画整理組合

株式会社イビソク

千音寺遺跡
第10次・第11次発掘調査報告書

－商業施設建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

2023

名古屋市千音寺土地区画整理組合
株式会社イビソク

千音寺遺跡
第10次・第11次発掘調査報告書

－商業施設建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

2023

名古屋市千音寺土地区画整理組合
株式会社イビソク

Ａ区　調査区全景（南西から）

Ｂ区　調査区全景（北東から）

Ｃ区　調査区全景（南から）

Ｄ区　調査区全景（西から）

例　　言

１．本書は愛知県名古屋市中川区富田町大字千音寺に所在する千音寺遺跡の発掘調査報告書である。

２．本調査は名古屋市千音寺土地区画整理事業地内にて、株式会社バローマックスが計画した商業施設建設工事に伴う事前調査として実施した。

３．本調査における調査体制は以下のとおりである。

第10次調査:調 査 主 体　株式会社イビソク

調　査　員　岡田　有司

佐野　貴紀

調査補助員　前原　一仁

関口　拓海

第11次調査:調 査 主 体　株式会社イビソク

調　査　員　澤田　孝

壁谷　奈央

調査補助員　吉田　皓

勢力　祐貴

金箱　薫

調 査 監 督　名古屋市教育委員会事務局生涯学習部文化財保護室

監　督　員　野澤則幸（発掘調査時)、安田彩音（整理作業時）

調 査 協 力　名古屋市千音寺土地区画整理組合

株式会社バローマックス

中部地域整備株式会社

株式会社上野山都市設計

４．調査面積および調査期間は以下のとおりである。

第10次調査:面積3,111㎡

調査期間　令和３年11月８日から令和４年３月28日まで

第11次調査:面積1,932㎡

調査期間　令和３年12月９日から令和４年４月７日まで

５．本報告書の執筆分担は以下のとおりである。

第１章を前原が、第２章を岡田、第３章第１節を前原、第３章第２節を吉田、第４章第１節を鈴木萌愛（株式会社イビソク)、同第２節を山本和人（株式会社イビソク)、第５章を株式会社パレオ・ラボ、第６章第１・４節を岡田、第６章第２節を澤田、第６章第３節を鈴木美咲（株式会社イビソク）が執筆した。編集は岡田の指示のもと、山田里美（株式会社イビソク）が行った。

６．遺構の写真撮影については、岡田・澤田・吉田が行い、遺物の写真撮影については横山亮（オフィスメガネ）が行った。

７．本書で用いた土色は、小山正忠・竹原秀雄編著『新版　標準土色帖』2011年度版を使用した。

８．調査記録の方位及び座標は世界測地系（平面直角座標第Ⅶ系）に準拠した。基準面は、東京湾平均海面（Ｔ．Ｐ.）を使用している。

９．本書で使用する遺構名は、はじめに調査区名（Ａ～Ｄ）と遺構分類記号、遺構の通し番号を付した。分類記号は、次の通りである。

柱列・柵（ＳＡ)、溝（ＳＤ)、井戸（ＳＥ)、土坑（ＳＫ)、ピット（ＳＰ)、土器集中遺構（ＳＵ)、性格不明遺構（ＳＸ)、古墳（ＳＺ）

10. 本書で使用する遺物番号は種類を問わず通し番号を付与した。本文・観察表・実測図・写真において同一の番号を使用している。

11. 調査に関する資料は、すべて名古屋市教育委員会で保管している。

12. 調査及び報告書をまとめるにあたり、青木修氏・岡本直久氏・河合君近氏（瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター)、城ヶ谷和弘氏（愛知県埋蔵文化財調査センター)、中野晴久氏・山本智子氏（愛知学院大学）からご教示をいただいた。記して感謝する次第である。

目　　次

巻頭図版 / 例　言

第１章　遺跡の位置と環境
　第１節　遺跡の位置……1
　第２節　周辺の遺跡……2
第２章　調査の経緯と経過
　第１節　調査に至る経緯……4
　第２節　調査方法……4
　第３節　調査の経過……7
第３章　遺　構
　第１節　第10次調査……9
　　１．基本土層……9
　　２．Ａ区の遺構（第１遺構面）……15
　　３．Ａ区の遺構（第２遺構面）……15
　　４．Ｂ区の遺構（第１遺構面）……28
　　５．Ｂ区の遺構（第２遺構面）……31
　　６．Ｃ区の遺構……42
　第２節　第11次調査……49
　　１．基本土層……49
　　２．Ｄ区の遺構（第１遺構面）……52
　　３．Ｄ区の遺構（第２遺構面）……61
第４章　遺　物
　第１節　第10次調査……70
　　１．Ａ区の遺物……70
　　２．Ｂ区の遺物（第１遺構面）……78
　　３．Ｂ区の遺物（第２遺構面）……81
　　４．Ｃ区の遺物……96
　第２節　第11次調査……101
　　１．Ｄ区の遺物（第１遺構面）……101
　　２．Ｄ区の遺物（第２遺構面）……121
第５章　自然科学分析
　第１節　第10次調査……145
　　１．放射性炭素年代測定……145
　　２．第10次調査から出土した大型植物遺体……147
　　３．第10次調査跡出土木製品の樹種同定……148
　　４．繊維製品の素材同定……149
　　５．第10次調査出土の動物遺体……151
　第２節　第11次調査……154
　　１．放射性炭素年代測定……154
　　２．第11次調査から出土した大型植物遺体……156
　　３．第11次調査跡出土木製品の樹種同定……158
第６章　結　語
　第１節　第10次調査のまとめ……161
　　１．第Ⅰ期（古墳時代）……161
　　２．第Ⅱ期（奈良時代～平安時代初期）……161
　　３．第Ⅲ期（平安時代中期）……162
　　４．第Ⅳ期（平安時代後期～鎌倉時代）……162
　　５．第Ⅴ期（室町時代以降）……165
　第２節　第11次調査のまとめ……165
　　１．第Ⅰ期（古墳時代）……165
　　２．第Ⅱ期（奈良時代～平安時代初期）……165
　　３．第Ⅲ期（平安時代中期）……166
　　４．第Ⅳ期（平安時代後期～鎌倉時代）……166
　　５．第Ⅴ期（室町時代以降）……167
　第３節　加工円板……168
　第４節　井戸……168

引用・参考文献 / 写真図版 / 報告書抄録 / 奥付

挿　図　目　次

第１図　千音寺遺跡の位置・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１
第２図　尾張平野の地形図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１
第３図　千音寺遺跡位置図および
　　周辺遺跡分布図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３
第４図　調査区配置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５
第５図　調査区位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６
第６図　調査区グリッド設定図・・・・・・・・・・・・・・・７
第７図　第10次調査　基本土層図・・・・・・・・・・・・・９
第８図　Ａ区　全体図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
第９図　Ａ区　北壁土層断面図１・・・・・・・・・・・・・13
第10図　Ａ区　北壁土層断面図２・・・・・・・・・・・・・14
第11図　A-SN1平面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
第12図　A-SD31、SD39、SD40平面図・断面図・・・16
第13図　A-SE35・SK8平面図・断面図・・・・・・・・・・17
第14図　A-SK10、SK14、SK15平面図・断面図・・・18
第15図　A-SK18、SK19平面図・断面図・・・・・・・・・19
第16図　A-SK20、SK23平面図・断面図・・・・・・・・・20
第17図　A-SK28、SK33、SK34、SK41、SK42
　　平面図・断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
第18図　A-SK43平面図・断面図・・・・・・・・・・・・・・22
第19図　A-SU29・SU30遺物出土状況図・・・・・・・・・23
第20図　Ｂ区　全体図（第１遺構面）・・・・・・・・・・24
第21図　Ｂ区　全体図（第２遺構面）・・・・・・・・・・25
第22図　Ｂ区　北壁土層断面図・・・・・・・・・・・・・・26
第23図　Ｂ区　西壁土層断面図・・・・・・・・・・・・・・27
第24図　B-SD17、SD33平面図・断面図・・・・・・・・・28
第25図　B-SE24・SK25平面図・断面図・・・・・・・・・29
第26図　B-SX21、SX31平面図・断面図・・・・・・・・・30
第27図　B-SD95平面図・断面図・・・・・・・・・・・・・・31
第28図　B-SE37平面図（出土状況）・断面図・・・・31
第29図　B-SK41、SK44、SK45、SK78
　　平面図・断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33
第30図　B-SK86～89平面図・断面図・・・・・・・・・・34
第31図　B-SK97、SK98平面図・断面図・・・・・・・・・35
第32図　B-SK104、SK111平面図・断面図・・・・・・・36
第33図　B-SP10平面図・断面図・・・・・・・・・・・・・・36
第34図　B-SP12、SP35、SP63、SP77、SP112、
　　SP113平面図・断面図・・・・・・・・・・・・・・37
第35図　B-SP124、SP125、SZ53平面図・断面図・38
第36図　Ｃ区　全体図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・39
第37図　Ｃ区　西壁土層断面図・・・・・・・・・・・・・・40
第38図　Ｃ区　南壁土層断面図・・・・・・・・・・・・・・41
第39図　C-SE2平面図・断面図・・・・・・・・・・・・・・・42
第40図　C-SK5、SK8、SK10、SK11
　　平面図・断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43
第41図　C-SK17、SK26、SK31平面図・断面図・・・44
第42図　Ｄ区　全体図（第１遺構面）・・・・・・・・・・45
第43図　Ｄ区　全体図（第２遺構面）・・・・・・・・・・47
第44図　第11次調査　基本土層図・・・・・・・・・・・・・49
第45図　Ｄ区　北壁土層断面図１・・・・・・・・・・・・・50
第46図　Ｄ区　北壁土層断面図２・・・・・・・・・・・・・51
第47図　D-SA296平面図・断面図・・・・・・・・・・・・・52
第48図　D-SA297平面図・断面図・・・・・・・・・・・・・53
第49図　D-SD1平面図・断面図・・・・・・・・・・・・・・・54
第50図　D-SD22、SE33平面図・断面図・・・・・・・・・55
第51図　D-SK2～4、SK14、SK32
　　平面図・断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・57
第52図　D-SK34、SK36、SK40～42、SK97
　　平面図・断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・59
第53図　D-SK99、SK103、SK113、SK168、
　　SK244、SK245平面図・断面図・・・・・・・60
第54図　D-SP189、SD211平面図・断面図・・・・・・・61
第55図　D-SD251平面図・断面図・・・・・・・・・・・・・62
第56図　D-SE246、SE247平面図・断面図・・・・・・・63
第57図　D-SK202～204平面図・断面図・・・・・・・・64
第58図　D-SK207、SK212、SK213
　　平面図・断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・66
第59図　D-SK218、SK228、SK229、SK234
　　平面図・断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・67
第60図　D-SK237、SK265平面図・断面図・・・・・・・68
第61図　D-SP240、SP252平面図・断面図・・・・・・・69
第62図　A-SD31、SE35遺物実測図・・・・・・・・・・・・・70
第63図　A-SK10、SK14、SK19遺物実測図・・・・・・・72
第64図　A-SK33、SK34、SK42遺物実測図・・・・・・・75
第65図　A-SK42、SK43、SU29、SU30
　　遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・76

第66図　Ａ区　包含層遺物実測図・・・・・・・・・・・・・77
第67図　B-SD17、SD33、SE24、SK25
遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・79
第68図　B-SX21、SK31遺物実測図・・・・・・・・・・・・・80
第69図　B-SD95遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・81
第70図　B-SE37遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・82
第71図　B-SK41、SK44、SK45、SK78
遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・83
第72図　B-SK86遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・85
第73図　B-SK87～89遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・87
第74図　B-SK97、SK98、SK104遺物実測図・・・・・・88
第75図　B-SP12、SP35、SP63遺物実測図・・・・・・・89
第76図　B-SP77、SP112、SP113、SZ53
遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・90
第77図　Ｂ区　遺構外出土遺物実測図１・・・・・・・91
第78図　Ｂ区　遺構外出土遺物実測図２・・・・・・・93
第79図　Ｂ区　遺構外出土遺物実測図３・・・・・・・95
第80図　C-SE2遺物実測図１・・・・・・・・・・・・・・・・・96
第81図　C-SE2遺物実測図２・・・・・・・・・・・・・・・・・97
第82図　C-SK8遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・98
第83図　C-SK26、SK31遺物実測図・・・・・・・・・・・・・99
第84図　Ｃ区　遺構外出土遺物実測図・・・・・・・・・100
第85図　D-SP76遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・101
第86図　D-SD1遺物実測図１・・・・・・・・・・・・・・・・・103
第87図　D-SD1遺物実測図２・・・・・・・・・・・・・・・・・105
第88図　D-SD1遺物実測図３・・・・・・・・・・・・・・・・・107
第89図　D-SD1遺物実測図４・・・・・・・・・・・・・・・・・108
第90図　土師器皿　法量分布図・・・・・・・・・・・・・・109
第91図　D-SD1遺物実測図５・・・・・・・・・・・・・・・・・109
第92図　D-SD1遺物実測図６・・・・・・・・・・・・・・・・・111
第93図　D-SD22遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・112
第94図　D-SE33遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・113
第95図　D-SK2～4、32遺物実測図・・・・・・・・・・・115
第96図　D-SK34、SK36、SK40、SK41、SK97
遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・116
第97図　D-SK103、SK113、SK168、SK244、
SK245、SP189遺物実測図・・・・・・・・・・117
第98図　Ｄ区　遺構外出土遺物実測図・・・・・・・・119
第99図　D-SD251、SE246遺物実測図・・・・・・・・・・121
第100図　D-SE247遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・122
第101図　D-SK204、SK213、SK228、SK229、SK237、
SK265、SP240遺物実測図・・・・・・・・・・・123
第102図　暦年校正結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・146
第103図　第10次調査において出土した
大型植物遺体・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・148
第104図　第10次調査出土木製品の
光学顕微鏡写真・・・・・・・・・・・・・・・・・・・150
第105図　素材束の光学顕微鏡写真と試料写真・・152
第106図　第10次調査出土の
ウマ左下顎骨（頬側）・・・・・・・・・・・・・・153
第107図　第10次調査出土の
ウマ左下顎骨（舌側）・・・・・・・・・・・・・・153
第108図　暦年校正結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・155
第109図　第11次調査において出土した
大型植物遺体・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・158
第110図　第10次調査出土木材の
光学顕微鏡写真・・・・・・・・・・・・・・・・・・・160
第111図　Ａ区遺構変遷図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・163
第112図　Ｂ・Ｃ区遺構変遷図・・・・・・・・・・・・・・・・163
第113図　空中写真・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・164
第114図　第10次島畑範囲・・・・・・・・・・・・・・・・・・・165
第115図　第11次遺構変遷図・・・・・・・・・・・・・・・・・167

表　目　次

第１表　遺物観察表…… 125
第２表　測定試料および処理…… 145
第３表　放射性炭素年代測定および
　　暦年較正の結果…… 146
第４表　第10次調査において出土した
　　大型植物遺体…… 147
第５表　第10次調査出土木製品の
　　樹種同定結果一覧…… 148
第６表　植物束の素材同定…… 151
第７表　千音寺遺跡出土動物遺体の同定結果… 151
第８表　測定試料および処理…… 154
第９表　放射性炭素年代測定および
　　暦年較正の結果…… 155
第10表　第11次調査において出土した
　　大型植物遺体…… 157
第11表　モモ核の大きさ…… 157
第12表　第11次調査出土木製品の
　　樹種同定結果一覧…… 159
第13表　Ａ区遺構別山茶碗の産地一覧…… 162

写真図版目次

巻頭図版１　Ａ区　調査区全景（南西から）
　　Ｂ区　調査区全景（北東から）
巻頭図版２　Ｃ区　調査区全景（南から）
　　Ｄ区　調査区全景（西から）

図版１　空中写真
図版２　１．Ａ区　調査前風景（南東から）
　　２．Ａ区　第１調査面（島畑）（南西から）
　　３．Ａ区　第１調査面（島畑）（南西から）
　　４．A-SN１検出状況（東から）
　　５．A-SN１完掘状況（東から）
図版３　１．Ａ区　調査区全景　第２遺構面
　　（北が上）
　　２．Ａ区　調査区全景　第２遺構面
　　（北東から）
図版４　１．A-SD31・SD39完掘状況（南東から）
　　２．A-SD39・SD40完掘状況（北西から）
　　３．Ａ区調査区西部近景（西から）
　　４．A-SE35曲物検出状況（南西から）
　　５．A-SE35曲物検出状況（南西から）

写真１　Ａ区　作業風景
写真２　Ｂ区　作業風景
写真３　Ｃ区　作業風景
写真４　Ｄ区　作業風景
写真５　D-SE246出土「江」墨書
写真６　D-SE247斎串出土状況

図版５　１．A-SK８完掘状況（南東から）
　　２．A-SK15完掘状況（西から）
　　３．A-SK10完掘状況（西から）
　　４．A-SK10完掘状況（東から）
　　５．A-SK14遺物出土状況（西から）
　　６．A-SK14遺物出土状況（西から）
　　７．A-SK19遺物出土状況（北から）
　　８．A-SK19遺物出土状況（北から）
図版６　１．A-SK18完掘状況（南西から）
　　２．A-SK20完掘状況（西から）
　　３．A-SK23完掘状況（西から）
　　４．A-SK28完掘状況（西から）
　　５．A-SK33完掘状況（南から）
　　６．A-SK41完掘状況（南から）
　　７．A-SK43完掘状況（北西から）
　　８．A-SU29・SU30完掘状況（北から）

図版７　１．Ｂ区　調査前風景（北から）
　　２．Ｂ区　調査区全景（第１遺構面）
　　（北が上）
図版８　１．B-SD17完掘状況（南から）
　　２．B-SD33完掘状況（南東から）
　　３．B-SE24遺物出土状況（南から）
　　４．B-SE24完掘状況（南から）
　　５．B-SK25完掘状況（南から）
　　６．B-SX21完掘状況（南から）
　　７．B-SX31完掘状況（南から）
　　８．包含層（Ⅲ層）遺物出土状況（南から）
図版９　１．Ｂ区　調査区全景　第２遺構面
　　（北が上）
　　２．Ｂ区　調査区全景　第２遺構面
　　（北東から）
図版10　１．B-SE37遺物出土状況（南から）
　　２．B-SE37完掘状況（南から）
　　３．B-SK41完掘状況（南から）
　　４．B-SK44完掘状況（北東から）
　　５．B-SK45完掘状況（東から）
　　６．B-SK78完掘状況（南から）
　　７．B-SK86遺物出土状況(西半)(北西から)
　　８．B-SK86遺物出土状況(西半)(北西から)
図版11　１．B-SK86遺物出土状況（東半）（西から）
　　２．B-SK86遺物出土状況（東半）（西から）
　　３．B-SK86完掘状況（西から）
　　４．B-SK87完掘状況（南から）
　　５．B-SK88完掘状況（東から）
　　６．B-SK89完掘状況（南から）
　　７．B-SK97完掘状況（南西から）
　　８．B-SK98完掘状況（南から）
図版12　１．B-SK104完掘状況（南から）
　　２．B-SK111完掘状況（北東から）
　　３．B-SP12遺物出土状況（北から）
　　４．B-SP35遺物出土状況（北から）
　　５．B-SP63遺物出土状況（西から）
　　６．B-SP77完掘状況（南から）
　　７．B-SP112完掘状況（南から）
　　８．B-SP113完掘状況（南から）
図版13　１．B-SP124完掘状況（南から）
　　２．B-SP125完掘状況（東から）
　　３．B-SZ53遺物出土状況（西から）
　　４．B-SZ53遺物出土状況（東から）
　　５．B-SZ53完掘状況（南から）
　　６．B-SD95完掘状況（東から）
　　７．Ｂ区北西部柱穴群（北西から）
　　８．Ｂ区北西部柱穴群（北東から）
図版14　１．Ｃ区　調査前風景（南から）
　　２．Ｃ区　調査区全景（西が上）
図版15　１．Ｃ区　調査区全景（南東から）
　　２．C-SE2井戸枠検出状況（南西から）
　　３．C-SE2遺物検出状況（南から）
　　４．C-SK5完掘状況（東から）
　　５．C-SK10完掘状況（東から）
図版16　１．C-SK8遺物出土状況（南半）１
　　（北東から）
　　２．C-SK8遺物出土状況（南半）２
　　（北東から）
　　３．C-SK8遺物出土状況(北半)(北東から)
　　４．C-SK8完掘状況（南東から）
　　５．C-SK11完掘状況（東から）
　　６．C-SK17完掘状況（東から）
　　７．C-SK26完掘状況（西から）
　　８．C-SK31完掘状況（東から）
図版17　１．Ｄ区　調査前風景（南東から）
　　２．Ｄ区　調査区全景　第１遺構面
　　（北が上）
図版18　１．D-SD1完掘状況（北から）
　　２．D-SD1漆碗出土状況（西から）
図版19　１．D-SA296完掘状況（北西から）
　　２．D-SP76完掘状況（南から）
　　３．D-SA297完掘状況（南東から）
　　４．D-SD22完掘状況（南東から）
　　５．D-SE33枠状構造検出状況（東から）
　　６．D-SE33完掘状況（東から）
　　７．D-SK2完掘状況（南から）
　　８．D-SK3完掘状況（南から）

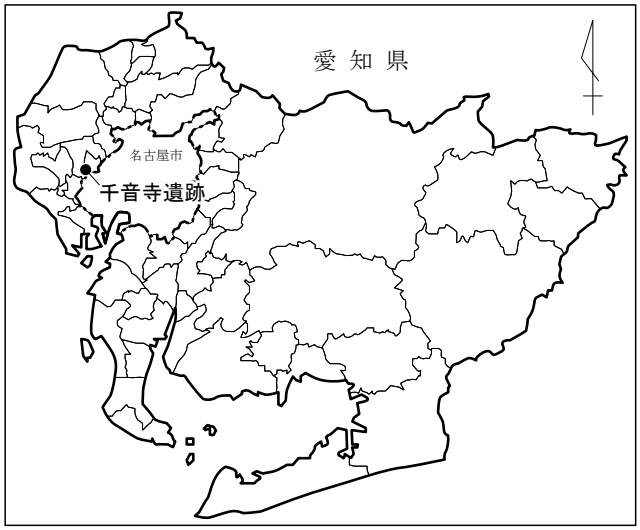
図版20　１．D-SK4完掘状況（南から）
２．D-SK14完掘状況（南東から）
３．D-SK32完掘状況（南から）
４．D-SK34完掘状況（南から）
５．D-SK36完掘状況（西から）
６．D-SK40完掘状況（南から）
７．D-SK41完掘状況（南から）
８．D-SK42完掘状況（南から）
図版21　１．D-SK97完掘状況（南から）
２．D-SK99完掘状況（南から）
３．D-SK103完掘状況（南から）
４．D-SK113完掘状況（南から）
５．D-SK168完掘状況（南から）
６．D-SK244完掘状況（西から）
７．D-SK245完掘状況（西から）
８．D-SP189完掘状況（南から）
図版22　１．Ｄ区　調査区全景　第２遺構面（北が上）
２．Ｄ区　調査区全景　第２遺構面（南東から）
図版23　１．D-SD211完掘状況（南東から）
２．D-SD251完掘状況（南東から）
３．D-SE246曲物出土状況（南から）
４．D-SE247出土状況（北から）
５．D-SE247曲物出土状況（北から）
図版24　１．D-SK202完掘状況（南東から）
２．D-SK203完掘状況（東から）
３．D-SK204完掘状況（南東から）
４．D-SK207完掘状況（南東から）
５．D-SK212完掘状況（南東から）
６．D-SK213完掘状況（西から）
７．D-SK218完掘状況（南から）
８．D-SK234完掘状況（南東から）
図版25　１．D-SK228完掘状況（南から）
２．D-SK228完掘状況（南から）
３．D-SK229出土状況（南から）
４．D-SK229完掘状況（南から）
５．D-SK237完掘状況（南東から）
６．D-SK265完掘状況（南東から）
７．D-SP240出土状況（南から）
８．D-SP252出土状況（南から）
図版26　１．Ａ区　出土遺物１
図版27　１．Ａ区　出土遺物２
図版28　１．Ｂ区　出土遺物１
図版29　１．Ｂ区　出土遺物２
図版30　１．Ｂ区　出土遺物３
図版31　１．Ｂ区　出土遺物４
図版32　１．Ｂ区　出土遺物５
図版33　１．Ｃ区　出土遺物１
図版34　１．Ｃ区　出土遺物２
図版35　１．Ｄ区　出土遺物１
図版36　１．Ｄ区　出土遺物２
図版37　１．Ｄ区　出土遺物３
図版38　１．Ｄ区　出土遺物４
図版39　１．Ｄ区　出土遺物５
図版40　１．Ｄ区　出土遺物６
図版41　１．Ｄ区　出土遺物７
図版42　１．Ｄ区　出土遺物８
図版43　１．Ｄ区　出土遺物９

第１章　遺跡の位置と環境

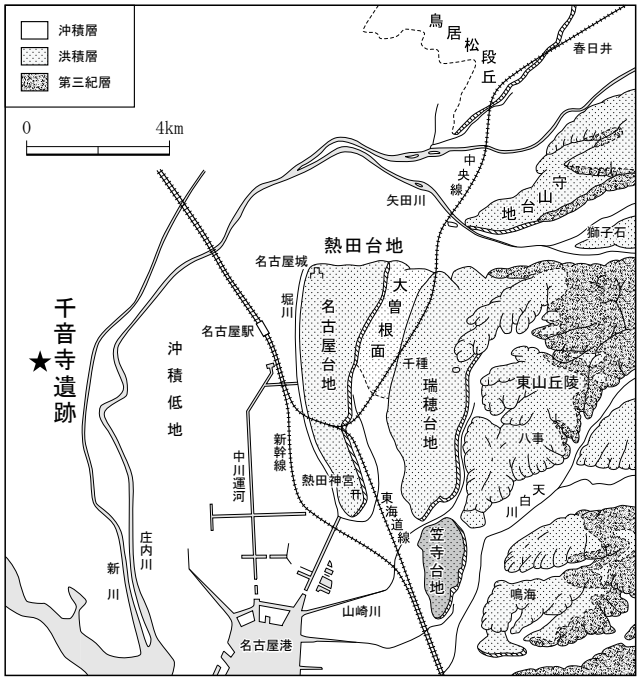
第１節　遺跡の位置

千音寺遺跡は愛知県西部の海部郡大治町、あま市と隣り合う名古屋市中川区富田町大字千音寺に、東西600m、南北1,000mの範囲にわたって存在する。この地は名古屋市の西端にあたり、昭和30（1955）年になって名古屋市に編入された。

名古屋市の地形は、市のほぼ中央となる熱田周辺の台地、東部の丘陵地、北・西・南部の沖積地と大きく３つに分けられる。『富田のあゆみ』によれば、「この低地は海抜０メートル地帯の濃尾平野の一角をなすものである。川の流れは太古より豊かで、現在でいう木曽川水系が運搬した砂や泥が海を埋めていったことで沖積層が形成されて陸地となった。そして豊かに流れ続ける川は、さらに堆積を進めて自然堤防と呼ばれる微高地を形成しながら、幾度となく氾濫を重ねて流路を変化させる。低地ではこうして作られた自然堤防上に多くの遺跡が分布するように、千音寺遺跡も同様に自然堤防上に広がっている。こうした立地の千音寺の自然環境は、冬季の強風と夏季の多湿が特徴である。冬は濃尾平野から渥美半島にかけての地域において、北西の方角から伊吹おろしと呼ばれる強い風が吹く。対して夏は伊勢湾の湿った海風が入り込むうえに庄内川、新川といった一級河川からも高湿な空気が侵入して停滞する」とある。



第１図　千音寺遺跡の位置



第２図　尾張平野の地形図
出典:『名古屋市史　別編　自然』より抜粋　一部改編

今回の調査を行った時点で既に、土地区画整理事業は大詰めに差し掛かっており、往時の姿は想像できないが、2010年代初頭までは事業地全体が農地であった。第10次・第11次の調査区も共に例外なく、水田や畑が存在していた土地に造成工事を行って厚い盛土がなされている。大日本帝国陸地測量部による明治31（1898）年の『1/20,000「枇杷島」』と区画整理前の平成13（2001）年の国土地理院『1/25,000「蟹江」』を見比べてみると、農道や橋の位置が全く同じであることが読み取れる。天保15（1844）年に編纂された『尾張志』には「『戸田米』戸田村の産尤よし糯粳ともに日本一とす拾遺集の物の名にをはり米の歌あるをもて知るへし當村の粳米をむかしより御

膳米とす知多郡米よりもまさり凡日本に米のよきは肥後米近江米等を上品とすれと當國の米のよきにはしかず」という一節がある。要約すると「『戸田米』戸田村産の米は糯、粳ともに日本一とされ、『拾遺和歌集』に尾張米を詠んだ歌があることで知られる。また古くから当村の粳米を御膳米として献上している。（この米）は知多郡の米よりも優れており、日本の良い米と言えば肥後米、近江米などが上品質のものだが、当国の米の良さには及ばない。」と解釈される。現在の戸田は千音寺から南へわずか２kmほどの地域の大字名であり、千音寺の農地も戸田と同様の品質を誇っていたであろうことが想像できる。

第２節　周辺の遺跡

千音寺遺跡の推定範囲は広いものの、その周囲２kmの範囲には周知の埋蔵文化財包蔵地は少ない。北へ約５ｋｍ離れた地点では、土田遺跡（清須市）、森南遺跡・阿弥陀寺遺跡・大渕遺跡（あま市）といった弥生時代の集落遺跡などとして知られた遺跡がある。これらは一大環濠集落である朝日遺跡から南へ約２kmの距離に分布しており、一帯は古くから人々が定着していた土地であったことをものがたる。

そしてそのすぐ南には、甚目寺遺跡・清林寺遺跡（あま市）があり、千音寺遺跡の東側には庄内川の対岸に稲葉地東遺跡といった古代の遺跡が見られる。稲葉地東遺跡の南方には、岩塚１・２・３号墳も所在する。

千音寺遺跡の南側には、約２～３km離れたところに戸田遺跡、戸田Ａ遺跡、包里遺跡、伏屋遺跡といった平安～江戸時代の遺跡が存在する。

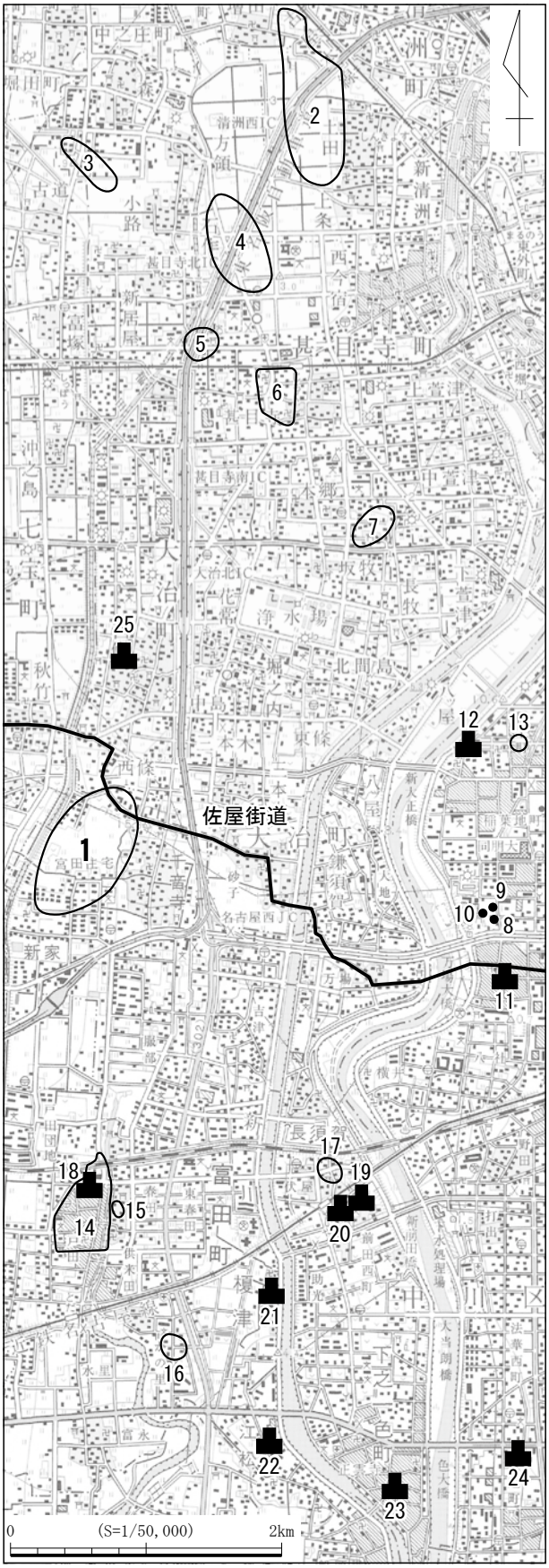
この近辺は築城も盛んで、千音寺遺跡の２km圏内には松葉城跡（大治町）、深田城跡、桂城跡、東には庄内川の対岸に岩塚城跡、稲葉地城跡。南には戸田城跡、前田城跡、助光城跡、榎津城跡、江松城跡、下之一色城跡、東起城跡が戦国時代以降に築かれている。

以上のことからこの地域では北から南にかけて遺跡の時代が新しくなるという特徴が見てとれる。現代では住宅地が広がる「円覚寺領尾張国冨田荘絵図」の南端に位置する江松周辺のエリアも、絵図では草木が生い茂り、波が打ち付けるような荒廃した土地の様子が描かれている。長い年月をかけて川の氾濫によって形成された陸地に、だんだんと人々が進出していった様子が浮かび上がってくる。

千音寺遺跡の包蔵地内北端部付近を東西に佐屋街道が通っている。慶長13（1608）年の備前検地の際に出された、万場の渡しの船頭への宛行状、慶長20（1615）年の大坂夏の陣に向かう徳川家康が佐屋街道を使ったという資料などあり、街道が整備される以前から利用されていたと考えられる。元々東海道は熱田から桑名までを七里の渡しという海路をとっていたが、天候に左右されるうえに命の危険も伴うこのルートを避けるために、陸路を通る佐屋街道が寛文11（1634）年に開設された。千音寺遺跡から東へ1.5kmのところに新川が流れるが、これは庄内川の洪水被害を和らげるために天明７（1787）年に完成した川であるため、もう一本東の庄内川を万場の渡しで渡ってから千音寺遺跡をかすめるように佐屋街道は大きく湾曲するルートをとっている。

千音寺遺跡の発掘調査は平成10（1998）年に初めて行われており、その後の調査から遺構の密度はそれほど高くないが、中世の屋敷地が点在していた様子がうかがえる。今回の調査と隣接する第８次調査では、島畑を形成する層位から「山吹双鳥鏡」が出土している。また中世期よりもさらに遺構の密度が希薄ではあるが、奈良時代の遺構も確認されている。現在の千音寺遺跡包蔵地範囲内は、近世以降は農耕作地とし

て利用されていたことがこれまでの調査でわかっているが、この地は街道のわきで幾多の人々の瞳に映っていた土地であろう。



1	**千音寺遺跡**	14	戸田遺跡
2	土田遺跡	15	戸田Ａ遺跡
3	森南遺跡	16	包里遺跡
4	阿弥陀寺遺跡	17	伏屋遺跡
5	大渕遺跡	18	戸田城跡
6	甚目寺遺跡	19	前田城跡
7	清林寺遺跡	20	助光城跡
8	岩塚１号墳	21	榎津城跡
9	岩塚２号墳	22	江松城跡
10	岩塚３号墳	23	下之一色城跡
11	岩塚城跡	24	東起城跡
12	稲葉地城跡	25	松葉城
13	稲葉地東遺跡		

第３図　千音寺遺跡位置図および周辺遺跡分布図

（国土地理院発行1/50,000名古屋北部・南部）

第２章　調査の経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

株式会社バローマックスは、名古屋市千音寺土地区画整理事業地内において商業施設建設を計画した。計画地を含む周辺地域は、周知の埋蔵文化財包蔵地である千音寺遺跡の範囲内に含まれていることから、試掘調査による埋蔵文化財の有無の確認が名古屋市教育委員会によって行われた。その結果、埋蔵文化財が確認された残存範囲かつ建築で遺跡の破壊が避けられない範囲について、施工前に埋蔵文化財発掘調査が必要となった。

本調査に先立ち、名古屋市教育委員会により令和３（2021）年５月から６月にかけて13ヶ所の試掘調査が実施された。

商業施設建設に伴い、事業者である名古屋市千音寺土地区画整理組合は、事業地内93街区１、２については令和３（2021）年９月６日付け、78街区１については令和３（2021）年10月８日付で、文化財保護法第93条第１項に基づく埋蔵文化財発掘調査の届出を提出した。

事業地を管理している名古屋市千音寺土地区画整理組合より株式会社イビソクが委託を受け、株式会社バローマックス、名古屋市教育委員会及び株式会社イビソクの三者で、93街区１、２については令和３（2021）年10月４日に協定を締結し、株式会社イビソクは令和３（2021）年10月８日付けで、愛知県教育委員会に文化財保護法第92条第１項に基づく埋蔵文化財発掘調査の届出を提出し、令和３（2021）年10月19日付３文芸1674－２号をもって受理された（第10次調査）。

また78街区１については令和３（2021）年11月10日に協定を締結し､株式会社イビソクは令和３（2021）年11月15日付けで、愛知県教育委員会に文化財保護法第92条第１項に基づく埋蔵文化財発掘調査の届出を提出し、令和３（2021）年11月25日付３文芸1904号をもって受理された（第11次調査）。

届出の受理を受けて、名古屋市教育委員会の指導、監督のもとに、調査の委託を受けた株式会社イビソクが主体となり、発掘調査、整理作業、報告書の作成を行った。

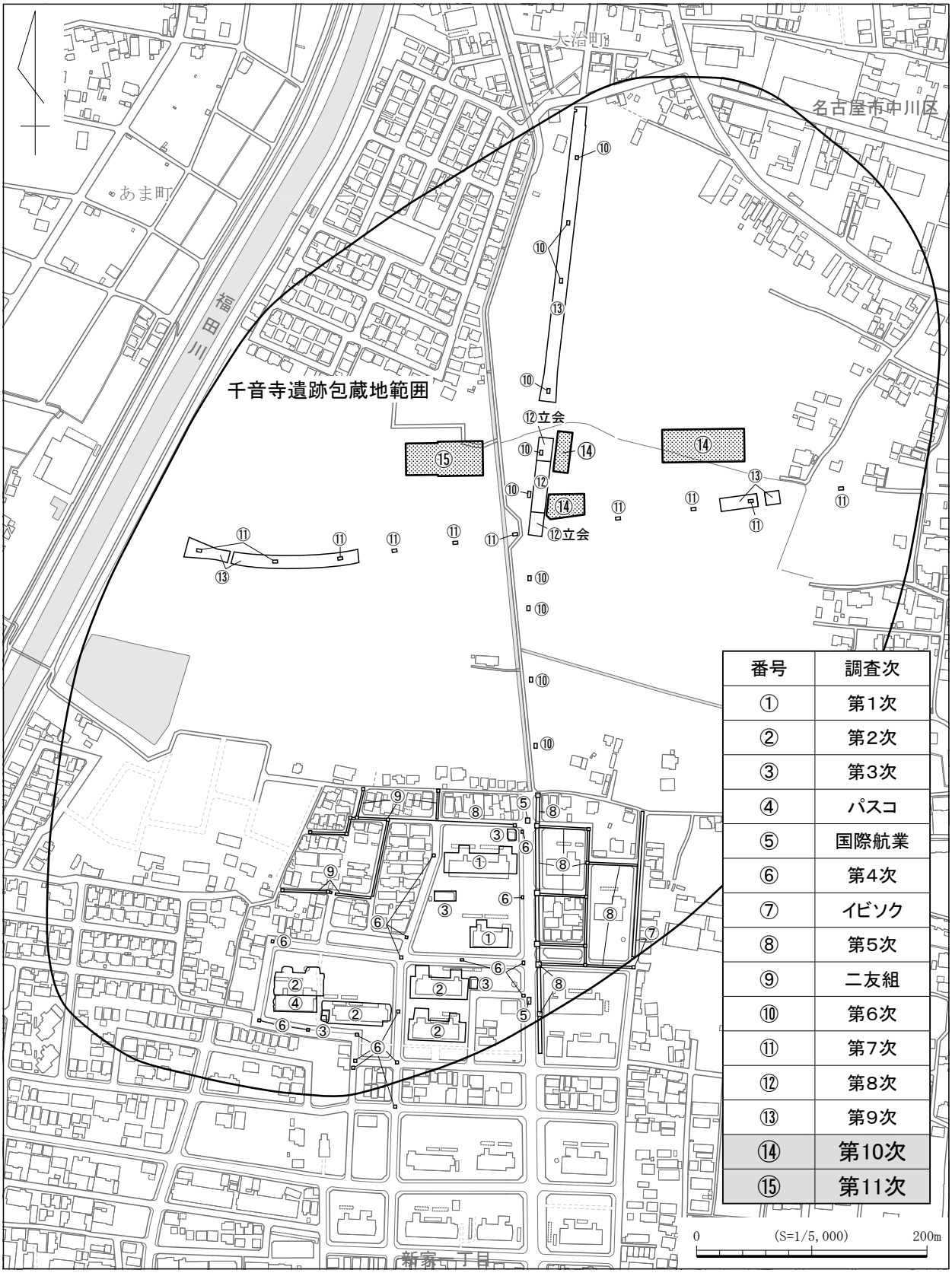
第２節　調査方法

今回の調査において、第10次調査及び第11次調査は同時期に並行して作業を行っており、第10次調査においては調査対象が３区画あったため、作業を開始した順にＡ区、Ｂ区、Ｃ区とし、第11次調査に関してはＤ区とした（第５図）。

掘削作業については、表土掘削を重機により行い、土地区画整理事業に伴って整地された際の盛土及び盛土前の耕作土の除去を行った。その後の調査は人力掘削によって行った。

世界測地系平面直角座標第Ⅶ系に基づいて５ｍグリッドを設定し、すべての調査区を網羅できるよう、Ｘ=-92590.0、Ｙ=-32735.0座標を北西の起点とし、東方向にアラビア数字、南方向にアルファベットを付した（第６図）。

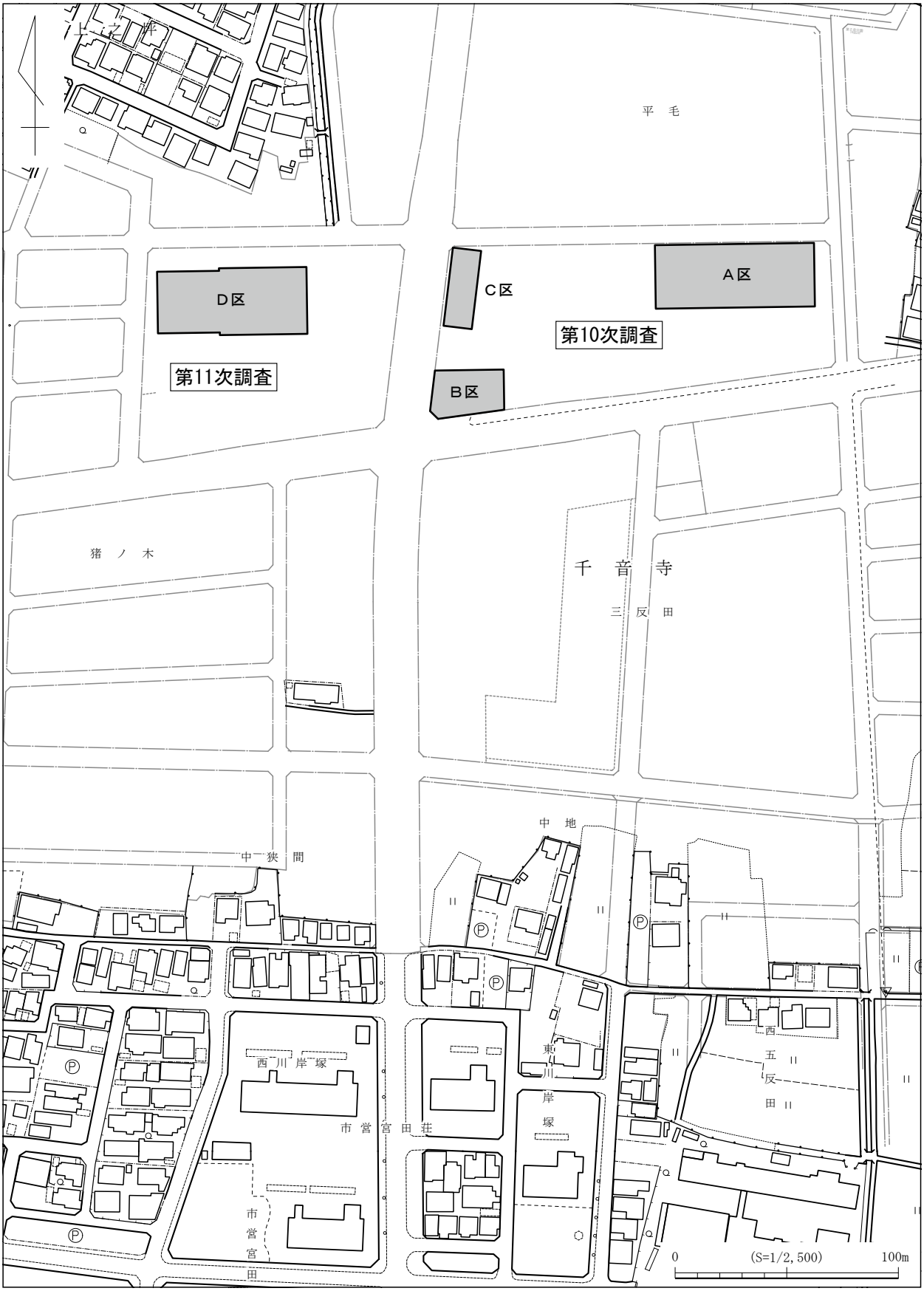
遺構には発掘区ごとに連番を付け、整理作業時に遺構の属性に従って番号の前に遺構略号を付した。遺物包含層掘削や遺構検出時に出土した遺物については、グリッド及び土層ごとに取り上げ、遺構内から出土したものについては、遺構ごとに取り上げを行った。遺構の記録は、土層断面、遺物出土状況、完掘状



番号	調査次
①	第1次
②	第2次
③	第3次
④	パスコ
⑤	国際航業
⑥	第4次
⑦	イビソク
⑧	第5次
⑨	二友組
⑩	第6次
⑪	第7次
⑫	第8次
⑬	第9次
⑭	第10次
⑮	第11次

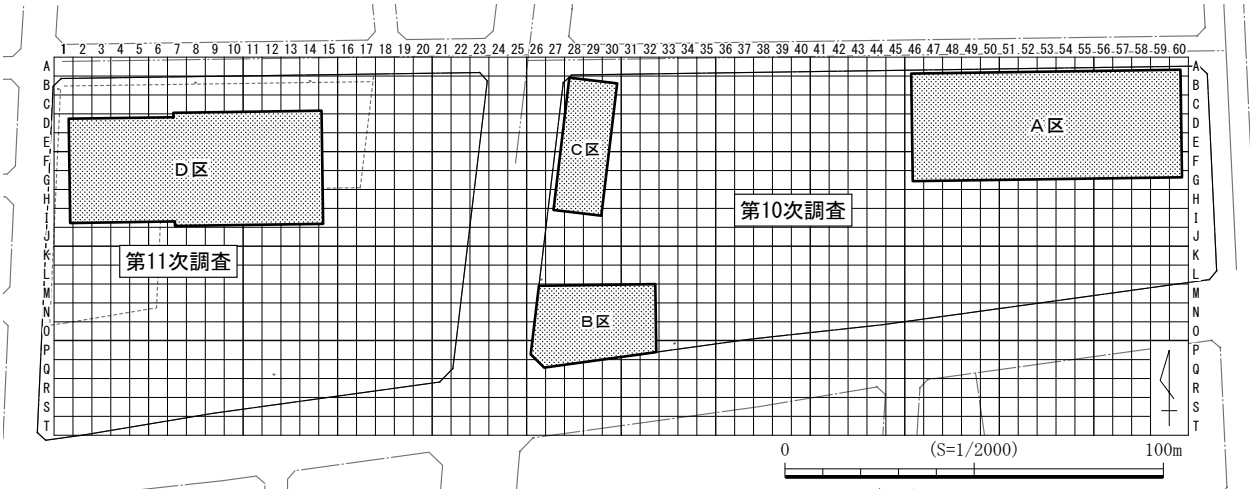
第４図　調査区配置図

出典:「基盤地図情報」（国土地理院）[https://fgd.gsi.go.jp/download/menu.php]
をもとに株式会社イビソク作成



第５図　調査区位置図

出典:「基盤地図情報」（国土地理院）[https://fgd.gsi.go.jp/download/menu.php]
をもとに株式会社イビソク作成



第６図　調査区グリッド設定図

況の写真撮影を一眼レフデジタルカメラにて行った。遺構測量は手測りによる実測とトータルステーションによる三次元測量及び写真測量を併用した。

整理作業は発掘調査終了後に行った。出土遺物の注記には注記機械を使用した。遺物実測後にデジタルトレースを行い、遺構実測図と合わせて編集、図版作成を行った。

第３節　調査の経過

第10次調査　発掘調査は令和３（2021）年11月８日から令和４（2022）年３月28日まで実施した。

Ａ区は重機による表土掘削を11月８日から開始し、11月26日に終了した。11月24日から人力による掘削作業を開始した。島畑状盛土上面の調査が12月２日に終了した。写真撮影及び実測作業の後、島畑状盛土の掘削を開始した。盛土の除去後の12月22日より遺構検出を開始し、遺構掘削も並行して作業を行い、令和４年２月３日に空中写真撮影を行った。協力事業者向けの現地見学会が行われた後、２月19日に下層確認を行い、調査を終了した。

Ｂ区は重機による表土掘削を12月１日から開始し、12月８日に終了した。令和４（2022）年１月12日から人力による掘削作業を開始し、２月28日に空中写真撮影を行った。一部中間層が残っていたため３月３日に掘削を開始し、３月７日から遺構検出及び遺構掘削を行い、３月10日に空中写真撮影を行った。３月17日に下層確認を行い、調査を終了した。

写真１　Ａ区　作業風景

写真２　Ｂ区　作業風景

写真３　Ｃ区　作業風景

Ｃ区は重機による表土掘削を令和４（2022）年２月21日から開始し、２月23日に終了した。２月28日から人力による掘削作業を開始し、３月11日に空中写真撮影を行った。３月17日に下層確認及びC-SE2の調査を行い、すべての調査記録作業を終了した。

第11次調査　発掘調査は令和３（2021）年12月９日から令和４（2022）年４月７日まで実施した。

Ｄ区は重機による表土掘削を12月９日から開始し、12月24日に終了した。

令和４年１月13日から人力による掘削作業を開始した。第１遺構面の島畑状盛土上面の調査が２月15日に終了した。写真撮影及び実測作業が終了した後、２月16日から島畑状盛土堆積がない箇所から遺構検出を開始し、遺構掘削も並行しながら２月24日から島畑状盛土の掘削を開始し、３月17日に空中写真撮影を行った。３月24日に下層確認及びD-SE247の調査を行い、３月25日にすべての調査記録作業を終了した。

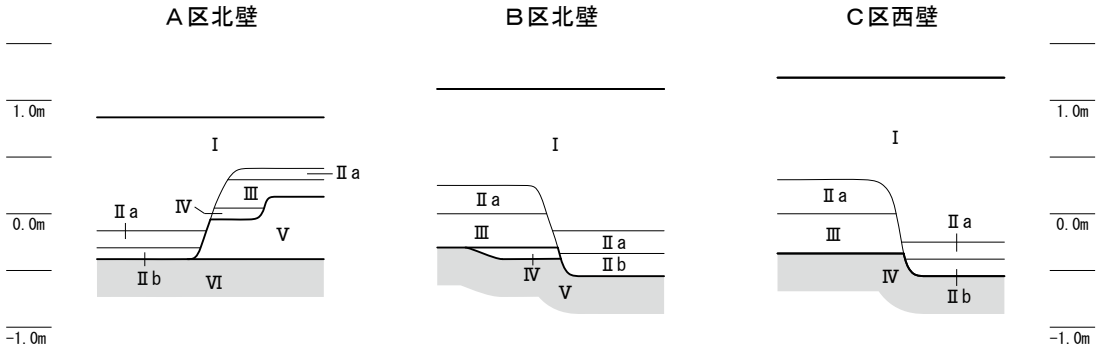
写真４　Ｄ区　作業風景

第３章　遺　構

第１節　第10次調査

１．基本土層（第７図）

以下に記す層位は、各調査区の壁面において確認したものである。本報告の土層の表記について、全体の層位は、ローマ数字の大文字（例：Ⅰ層、Ⅱ層）を使用した。各調査区の解釈の層は算用数字（例：１層、２層）を使用した。各調査区の基本層位は以下のとおりである。



	Ａ区	Ｂ区	Ｃ区
現代の造成土	Ⅰ層	Ⅰ層	Ⅰ層
耕作土・水田耕作土（近現代）	Ⅱａ層	Ⅱａ層	Ⅱａ層
水田床土（近現代）	Ⅱｂ層	Ⅱｂ層	Ⅱｂ層
島畑形成土（近世以降）	Ⅲ層	－	－
旧耕作土（近世か）	Ⅳ層	－	－
島畑形成土（古代～中世）	Ⅴ層	Ⅲ・Ⅳ層	Ⅲ層
自然堆積層（地山）	Ⅵ層	Ⅴ層	Ⅳ層

第７図　第10次調査　基本土層図

Ⅰ層は区画整理事業による造成土である。大きく２層に分かれており、上層は礫が多く含まれるいわゆるガラ土で、下層は石灰が混じっていることから地盤改良された土であることがわかる。Ⅱa層は造成前まで使用されていた水田もしくは畑の耕作土である。Ⅱb層は同じく水田の床土である。Ⅲ層以下は調査区ごとに記述する。

［Ａ　区］

Ⅲ層（第９・10図15～16層）は褐灰色砂質シルトもしくは暗灰黄色土で、Ⅳ層が近世の耕作土と思われる堆積のため、近世以降に盛土された島畑形成土であると思われる。標高0.2m付近でⅢ層の上面を確認した。Ⅲ層内の遺物は土師器・須恵器・灰釉陶器・陶磁器類が出土しているがほとんどが小片である。また同時に近世以降の瓦の破片も出土している。Ⅳ層（第９・10図17層）はやや砂質の灰色土で、近世以

降の陶磁器等の小片が含まれており、畝状の遺構（A-SN1）も確認できたことから旧耕作土であると思われる。Ｖ層（第９・10図18層）は灰褐色砂質土で、自然堆積層の上に盛土された島畑形成土である。この島畑形成土は調査区の北東部のみで検出し、標高-0.25～0.05m付近で本層の上面を確認した。Ａ区の調査においては、この層の上面を第１遺構面とした。遺物は土師器・須恵器・灰釉陶器・山茶碗等が出土している。Ⅵ層（第９・10図23～24層）は灰褐色の漸移層を経て明褐灰色砂質土（シルト）で、各調査区において共通した遺構検出面（自然堆積層）である。本層の上面を標高-0.75～-0.45m付近で確認し、ここを第２遺構面とした。層自体に遺物は含まれていない。

［Ｂ 区］

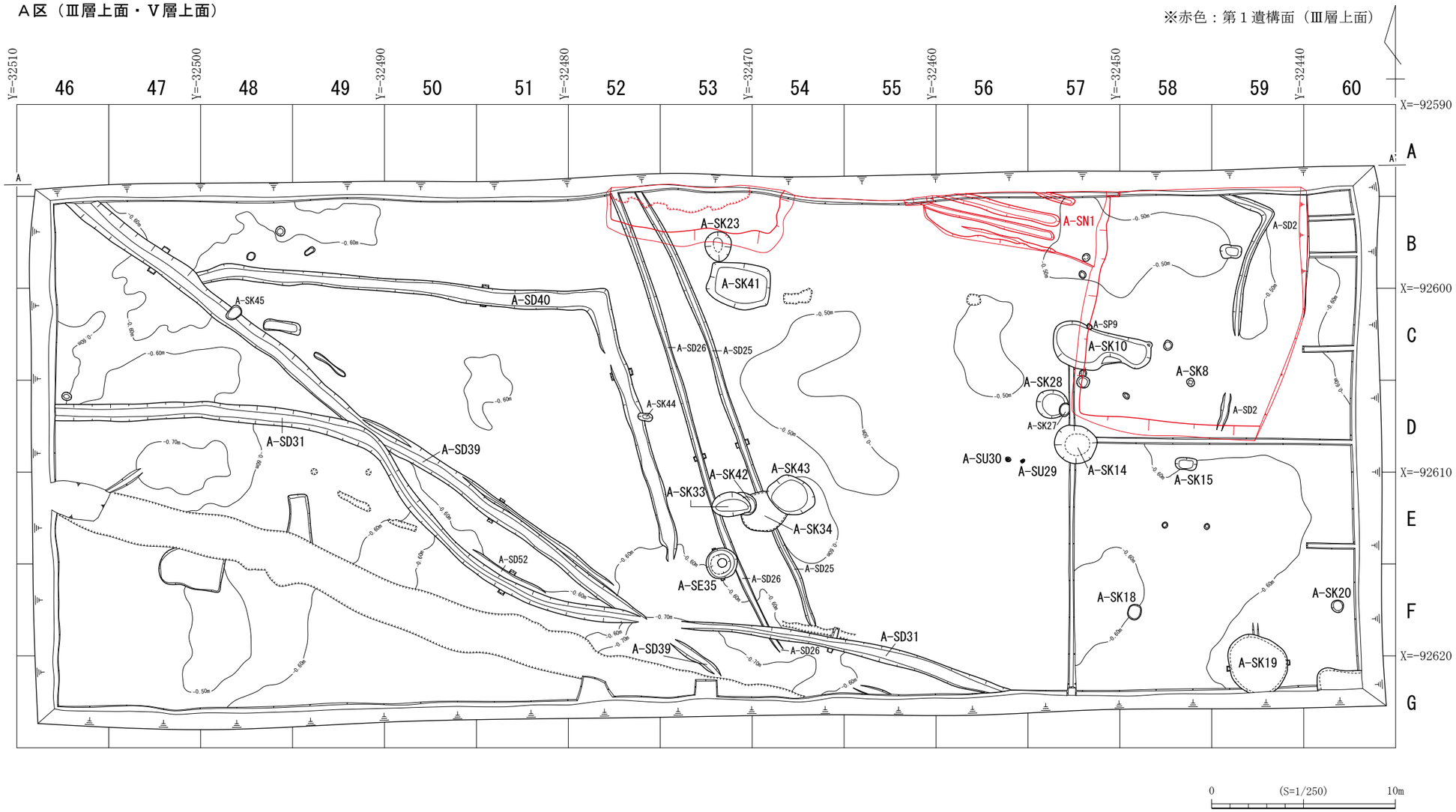
Ⅲ層（第22図９層、第23図13～14層）は黄褐色砂質土や褐灰色土で、島畑形成土である。北西部のみで確認できた。また土層断面図からも観察できるが、やや微高地であった場所に盛土した状況がうかがえる。標高0m付近で本層の上面を確認した。遺物は須恵器の盤や長頸瓶、尾張型第４～７型式の山茶碗、土師器甕や伊勢型鍋、土錘のほか、青磁や白磁が出土している。また刀子もこの層から出土しており、範囲が限定されていたにもかかわらず多量の遺物が含まれていた。Ⅳ層（第22図15～16層）は褐灰色砂質土もしくは灰黄色砂質土で、微高地上の一部に盛土した島畑形成土である。標高-0.15～-0.05m付近で本層の上面を確認した。Ｂ区の調査においては、この層の上面を第１遺構面とした。遺物は須恵器の鉢や高盤、灰釉陶器・山茶碗・伊勢型鍋・土錘のほか、極めて稀ではあるが弥生土器も出土している。Ｖ層（第22図20～23層、第23図19～20層）は土色や土質に違いがあるが、各地区共通した遺構検出面（自然堆積層）である。北西部や南東部の微高地では標高-0.3～-0.2m付近で、低地では-0.7～-0.5m付近でＶ層の上面を確認し、ここを第２遺構面とした。層自体に遺物は含まれていない。

［Ｃ 区］

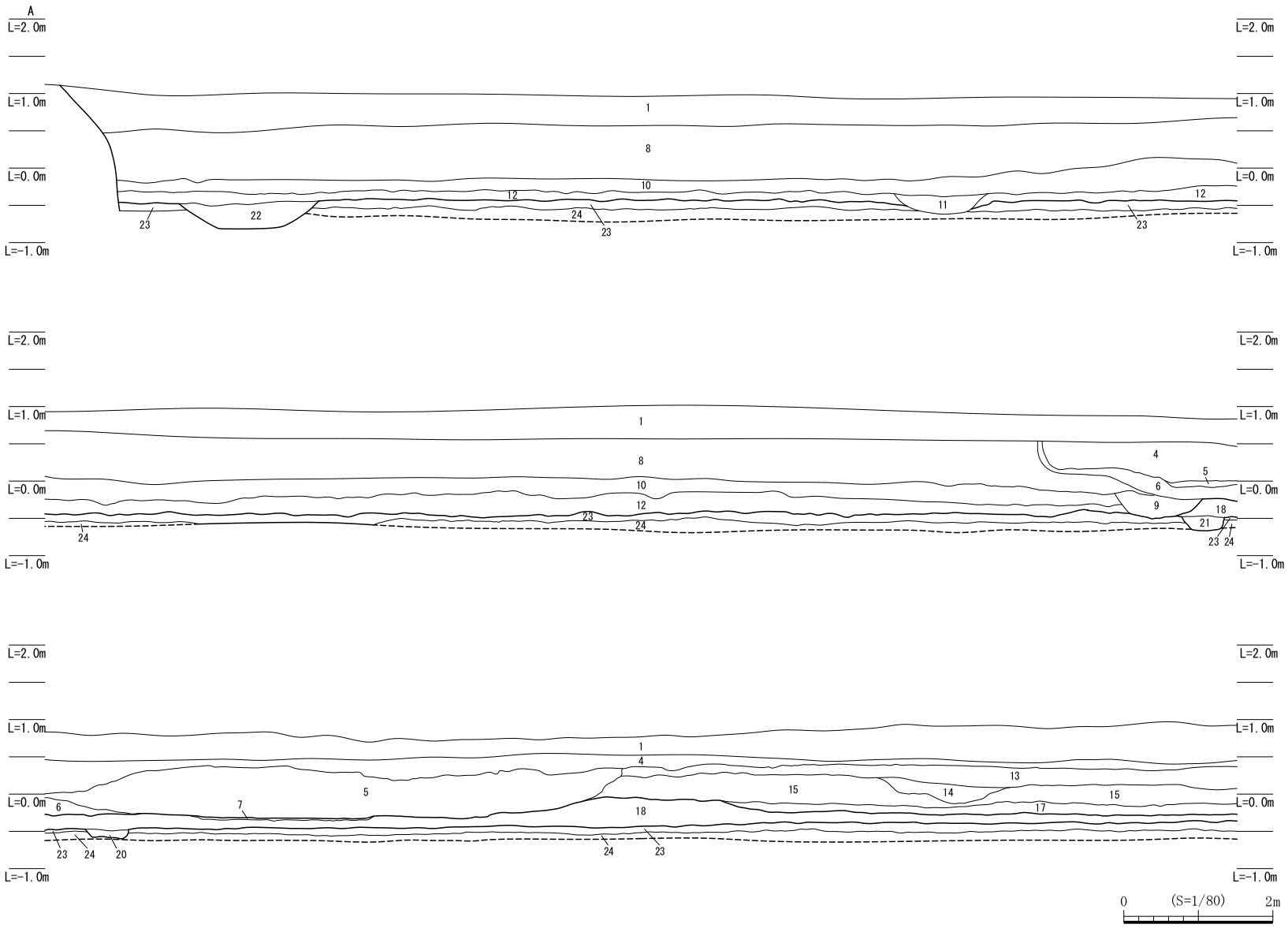
Ⅲ層（第37図18層、第38図６～９層）はにぶい褐色砂質土、灰白色シルト、灰黄褐色土、灰褐色土で、島畑形成土である。調査区の南部のみで確認できた。標高隣接しているＢ区同様、やや微高地であった場所に盛土した状況がうかがえる。標高０m付近で本層の上面を確認した。遺物は灰釉陶器の椀のほか、土師器・灰釉陶器・山茶碗などの破片が比較的多く出土している。Ⅳ層（第37図30～31層、第38図10～11層）は土色や土質に違いがあるが、各地区共通した遺構検出面（自然堆積層）である。南部の微高地では標高-0.4m付近で、低地では標高-0.75～-0.6m付近でＶ層の上面を確認し、ここを遺構検出面とした。層自体に遺物は含まれていない。

Ａ区（Ⅲ層上面・Ⅴ層上面）

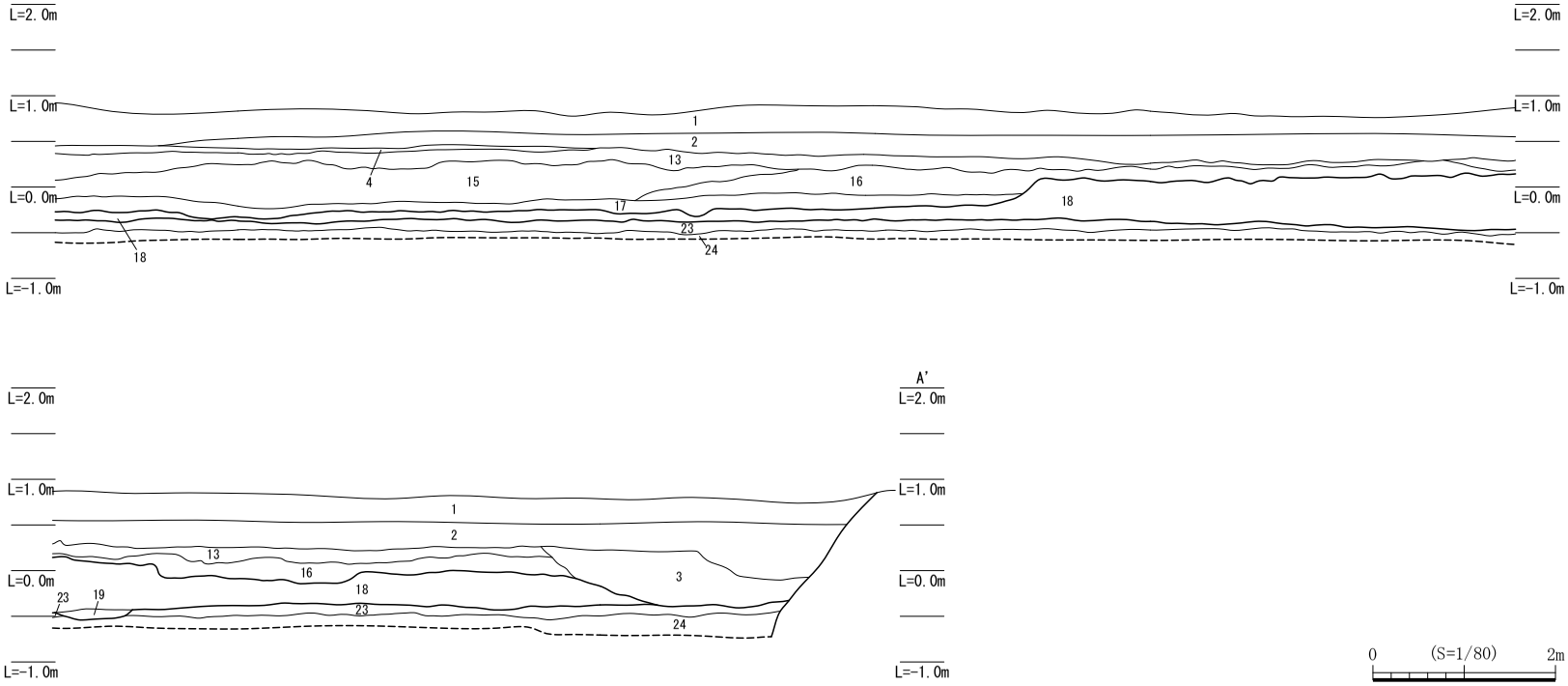
※赤色：第１遺構面（Ⅲ層上面）



第８図　Ａ区　全体図



第９図　Ａ区　北壁土層断面図１



1　7.5YR4/3　褐色砂質土　　しまりあり　粘性なし　礫を含む（Ⅰ層・盛土）
2　10Y4/1　　灰色砂質土　　しまりあり　粘性なし（Ⅰ層・盛土）
3　7.5YR6/3　にぶい褐色土　しまりややあり　粘性ややあり
　　7.5YR6/1　褐灰色砂質土ブロックを含む（Ⅰ層・盛土）
4　N6/　　灰色砂質土　　しまりあり　粘性ややあり　礫を含む（Ⅰ層・盛土）
5　5Y5/1　　灰色砂　　しまりあり　粘性なし　礫を含む（撹乱土）
6　5YR4/1　　褐灰色土　　しまりなし　粘性ややあり　7.5YR6/3　にぶい褐色土ブロックを含む（撹乱土）
7　5G4/1　　暗緑灰色土　　しまりなし　粘性あり（撹乱土）
8　N7/　　灰白色土　　固くしまる　粘性あり（Ⅰ層・改良土）
9　5BG6/1　　青灰色シルト　しまりややあり　粘性ややあり
10　2.5Y3/1　　黒褐色土　　しまりなし　粘性あり（Ⅱa層・耕作土）
11　7.5YR6/1　褐灰色シルト　しまりややあり　粘性ややあり　鉄分の沈着あり
12　5Y5/2　　灰オリーブ色砂質シルト　しまりあり　粘性ややあり（Ⅱb層・床土）
13　5Y3/1　　オリーブ黒色砂質シルト　しまりあり　粘性ややあり（Ⅱa層・耕作土）
14　7.5Y5/1　　灰色砂質シルト　しまりややあり　粘性ややあり
15　10YR5/1　　褐灰色砂質シルト　しまりあり　粘性ややあり
　　7.5YR7/6　橙色砂質土ブロックを含む（Ⅲ層・島畑形成土）
16　2.5Y5/2　　暗灰黄色土　　しまりあり　粘性なし
　　10Y7/1　　灰白色粘土ブロックをわずかに含む　やや砂質（Ⅲ層・島畑形成土）
17　10Y5/1　　灰色土　　しまりなし　粘性ややあり　やや砂質（Ⅳ層・旧耕作土）
18　7.5YR6/2　灰褐色砂質土　しまりあり　粘性ややあり
　　10YR7/4　にぶい黄橙色砂質土ブロックを含む　（Ⅴ層・旧島畑形成土）
19　7.5YR4/3　褐色土　　しまりあり　粘性なし　7.5YR7/6　橙色砂質土ブロックを含む（A-SD2）
20　7.5YR4/3　褐色土　　しまりあり　粘性なし　7.5YR7/6　橙色砂質土ブロックを含む（A-SD25）
21　7.5YR4/3　褐色土　　しまりあり　粘性なし　7.5YR7/6　橙色砂質土ブロックを含む（A-SD26）
22　10YR3/3　　暗褐色土　　しまりあり　粘性ややあり　7.5YR7/6　橙色砂質土ブロックを含む（A-SD39）
23　7.5YR4/2　灰褐色砂質土　固くしまる　粘性あり（Ⅵ層・漸移層）
24　7.5YR7/1　明褐灰色砂質シルト　しまりややあり　粘性あり　7.5YR6/4　にぶい橙色土粒を含む（Ⅵ層・地山）

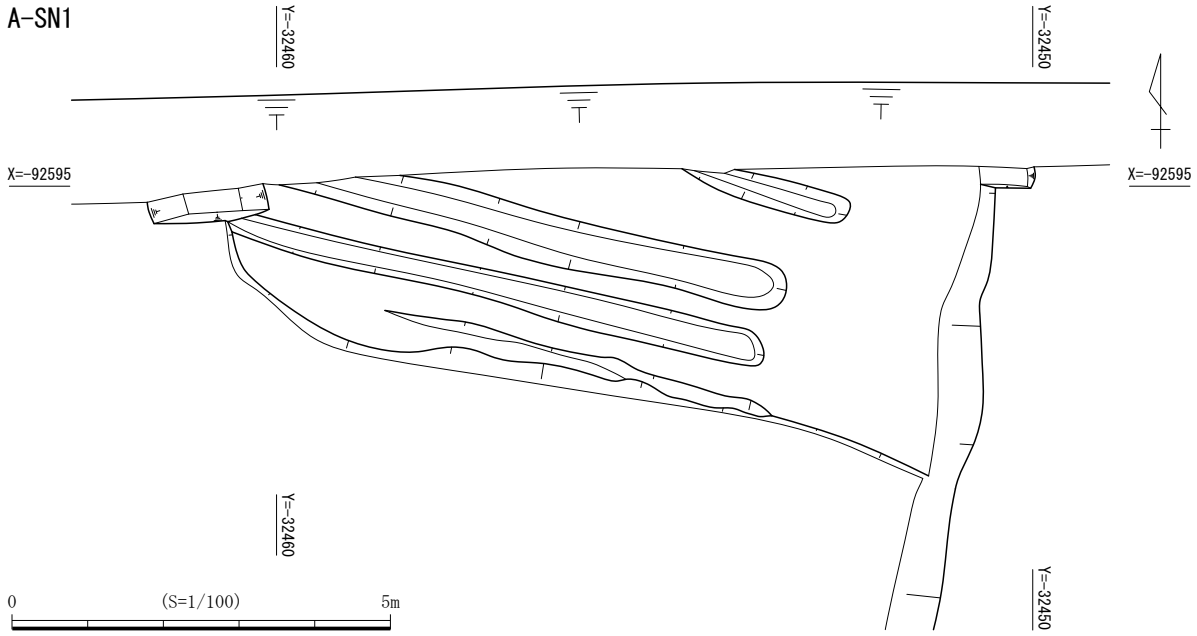
第10図　Ａ区　北壁土層断面図２

２．Ａ区の遺構（第１遺構面）

（１）畑遺構

A-SN1（第11図、図版２）

畑遺構を調査区北東部の島畑状盛土のＶ層上面、標高-0.25m付近で検出した。溝は東南東から西北西方向に４条あり、軸の方向はN-105°-Wが主体である。溝の幅は34～67cm、深さは３～10cm程度と浅い。溝の傾斜はほとんどない。基本層序のⅣ層が当時の耕作土と思われ、溝状部分の埋土の土色、土質ともこれと同じでやや砂質の灰色土である。遺物は近世陶磁器類などの小片が出土している。



第11図　A-SN1平面図

３．Ａ区の遺構（第２遺構面）

（１）溝

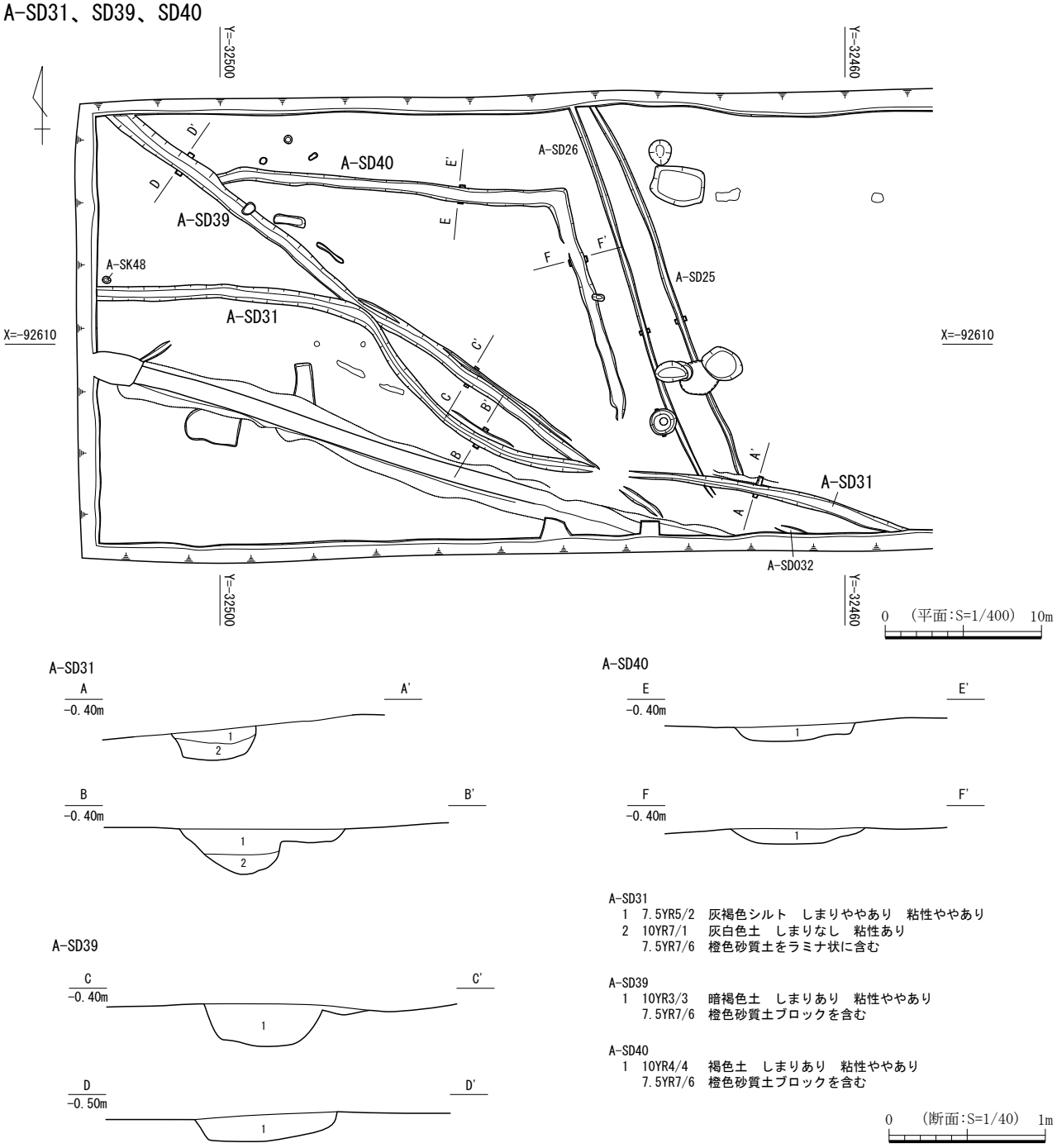
A-SD31（第12図、図版４）

Ａ区西部から中央部にかけて位置し、Ⅵ層上面で検出した西から南東へ延びる溝である。検出長55.71m、最大幅1.06m、深さ25cmを測り、西側、南側は調査区外へ延びている。調査区西壁より東へ8.0m地点までN-90°-Ｅ方向へ、その地点でN-140°-Ｅ方向へ屈曲し、その地点から5.5m地点でN-100°-Ｅ方向へ屈曲する。その後は南へ向けて緩やかに湾曲する。断面形は皿状を呈す。埋土は上から灰褐色シルト・灰白色土の２層である。２層からラミナを確認しており、流水があった形跡が観察できる。A-SD26、A-SD39より新しい。並行するA-SD52とは埋土の違いが明瞭でなかったため、新旧関係は不明である。遺物は常滑の広口壺、加工円板が出土した。

A-SD39（第12図、図版４）

Ａ区西部に位置し、Ⅵ層上面で検出した。調査区の北西隅から南東に向かって直線的に延びる溝である。検出長43.24m、幅1.30m、深さ15～25cmを測り、北側は調査区外へ延びており、南部は現代の水路によって壊されている。断面形は逆台形を呈す。埋土は暗褐色土の単層である。長軸はN-53°-Wの方角を示す。A-SD31、A-SK45より古く、A-SD40より新しい。遺物は出土したが小片のため器種の判別が不能である。

A-SD31、SD39、SD40



第12図 A-SD31、SD39、SD40平面図・断面図

A-SD40（第12図、図版４）

Ａ区西部から中央部にかけて位置し、Ⅵ層上面で検出した。検出長約36.51m、幅約1.14m、深さ約13cmを測り、西側はA-SD39が重複する。１ヶ所の屈曲部を確認しており、A-SD39との交点より東へ8.0m地点までN-95°-E方向へ、その地点でN-163°-E方向へ屈曲する。断面形は皿状を呈す。埋土は褐色土の単層である。A-SD39、A-SK44より古い。埋土からA-SD26、A-SD26と同時期の物と考えられる。南端は現代まで使用されていた道路盛土の影響を受けてか消滅している。A-SD39の西側では検出できなかった。遺物は出土しなかった。

（２）井戸

A-SE35（第13図、図版4）

Ａ区中央部に位置し、Ⅵ層上面で検出した。規模は長軸約172cm、短軸約165cm、深さ約65cmを測る。平面形は円形、断面形は２段の掘り込みを呈す。埋土は灰白色シルト、明オリーブ色シルト、青灰色土の３層である。検出面より深さ42cmの所で井戸の掘方と底部で曲物を検出した。この地点で湧水が激しくなったため掘削を中止し、調査終了後に重機による断ち割りを行い、検出面から深さ約65cmの所で曲物の底と砂層を確認した。A-SD26より新しい。曲物は樹種同定（第５章第１節３）の結果、ヒノキであることがわかった。遺物は掘方から灰釉陶器の椀が出土した。

（３）土坑

A-SK8（第13図、図版５）

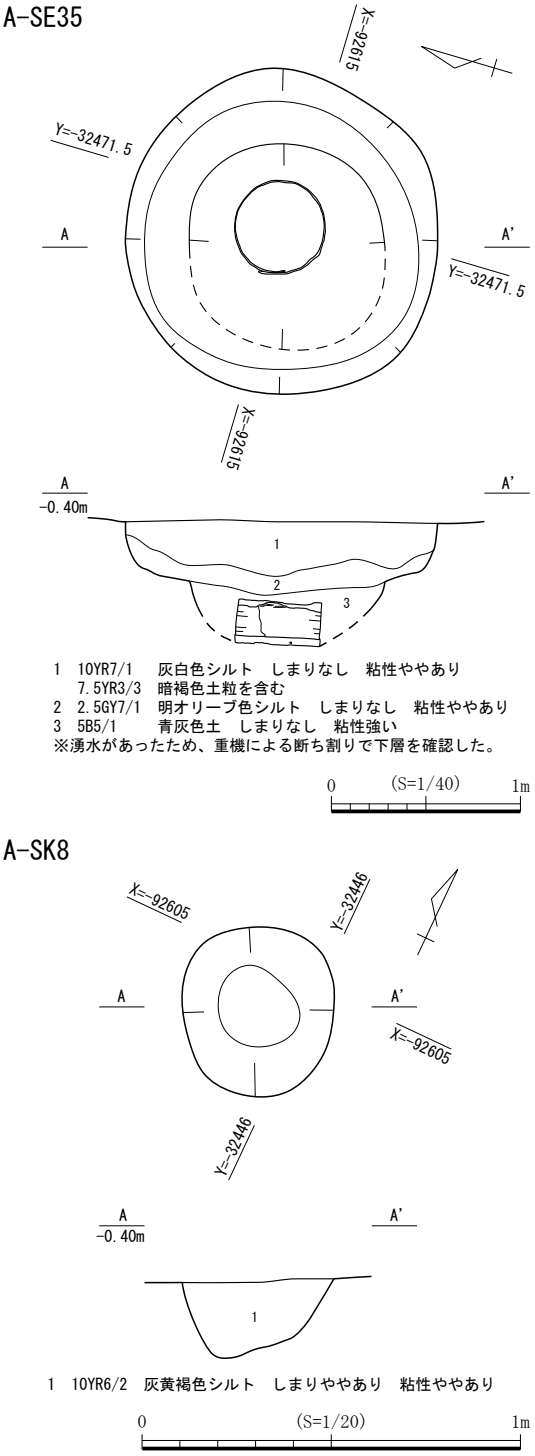
Ａ区東部に位置し、Ⅵ層上面で検出した。規模は長軸45cm、短軸40cm、深さ20cmを測る。平面形は円形、断面形は逆台形を呈し、底面形状は不整形である。埋土は灰黄褐色シルトの単層である。遺物は出土したが小片のため器種の判別が不能である。

A-SK10（第14図、図版５）

Ａ区北東部に位置し、Ⅵ層上面で検出した。規模は長軸約540cm、短軸163～250cm、深さ８～29cmを測る。平面形は不整形、断面形は２段の掘り込みを呈し、底面形状は不整形である。埋土は上から褐灰色土・褐灰色砂質シルトの２層からなる。A-SP9より古い。北辺は直線的であるが南側は不整形である。北東角は小土坑と重複するが新旧関係は不明である。遺物は山茶碗の碗が出土した。

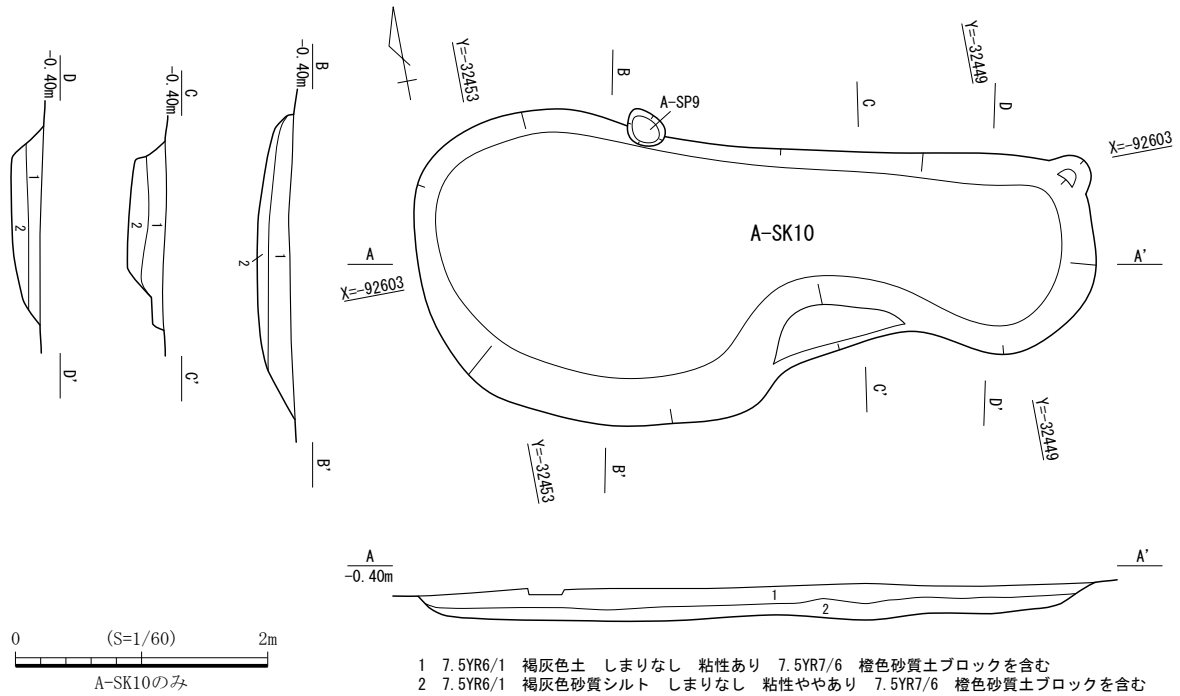
A-SK14（第14図、図版５）

Ａ区東部に位置し、Ⅵ層上面で検出した。規模は長軸232cm、短軸206cmを測る。深さは38cmを測る所で湧水があったため、掘削を中止した。平面形は円形、断面形は逆台形を呈す。埋土は上から灰褐色土・褐灰色砂質土・褐灰色土・暗褐色土の４層である。調査終了後に重機による断ち割りを行い、検出面から深さ約78cmの所で砂層を確認した。曲物等は確認できなかった。遺物は３層（粘土層）の上面で山茶碗の碗、伊勢型鍋、加工円板、曲物等の底板と思われる木製品が出土した。底板は樹種同定（第５章第１節３）の結果、ヒノキであることがわかった。



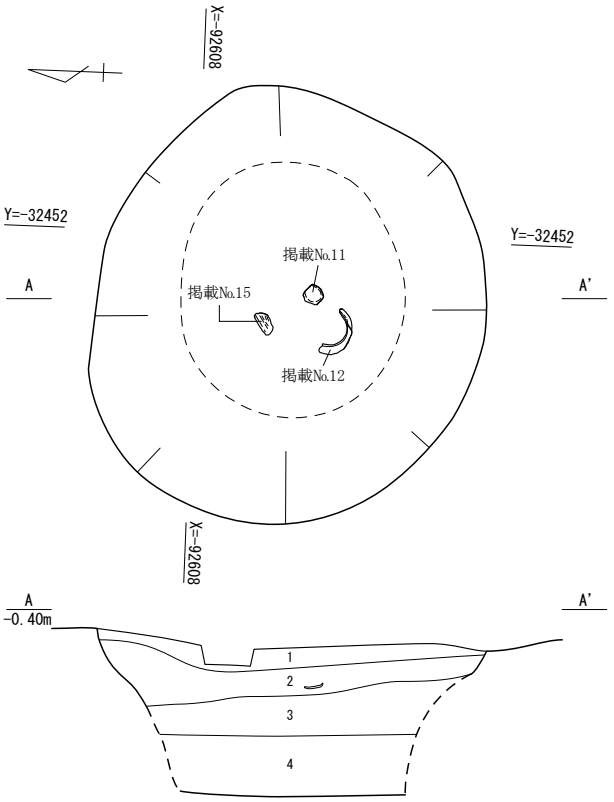
第13図　A-SE35・SK8平面図・断面図

A-SK10



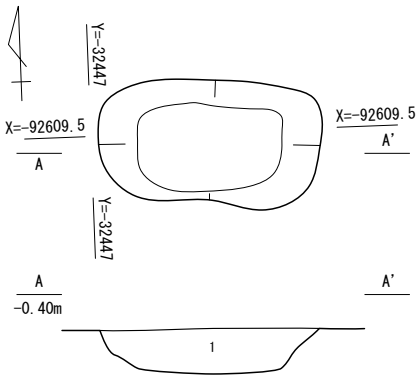
1 7.5YR6/1 褐灰色土 しまりなし 粘性あり 7.5YR7/6 橙色砂質土ブロックを含む
2 7.5YR6/1 褐灰色砂質シルト しまりなし 粘性ややあり 7.5YR7/6 橙色砂質土ブロックを含む

A-SK14



1 7.5YR6/2 灰褐色土 しまりややあり 粘性あり
7.5YR3/3 暗褐色土粒を含む
2 7.5YR6/1 褐灰色砂質土 しまりややあり 粘性なし
7.5YR7/6 橙色砂質土ブロックを含む
3 7.5YR5/1 褐灰色土 しまりなし 粘性あり
4 7.5YR3/3 暗褐色土 しまりあり 粘性ややあり
※湧水があったため、重機による断ち割りで下層を確認した。

A-SK15



1 7.5YR6/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性あり
7.5YR7/6 橙色砂質土ブロックを含む

0 (S=1/40) 1m

第14図 A-SK10、SK14、SK15平面図・断面図

A-SK15（第14図、図版５）

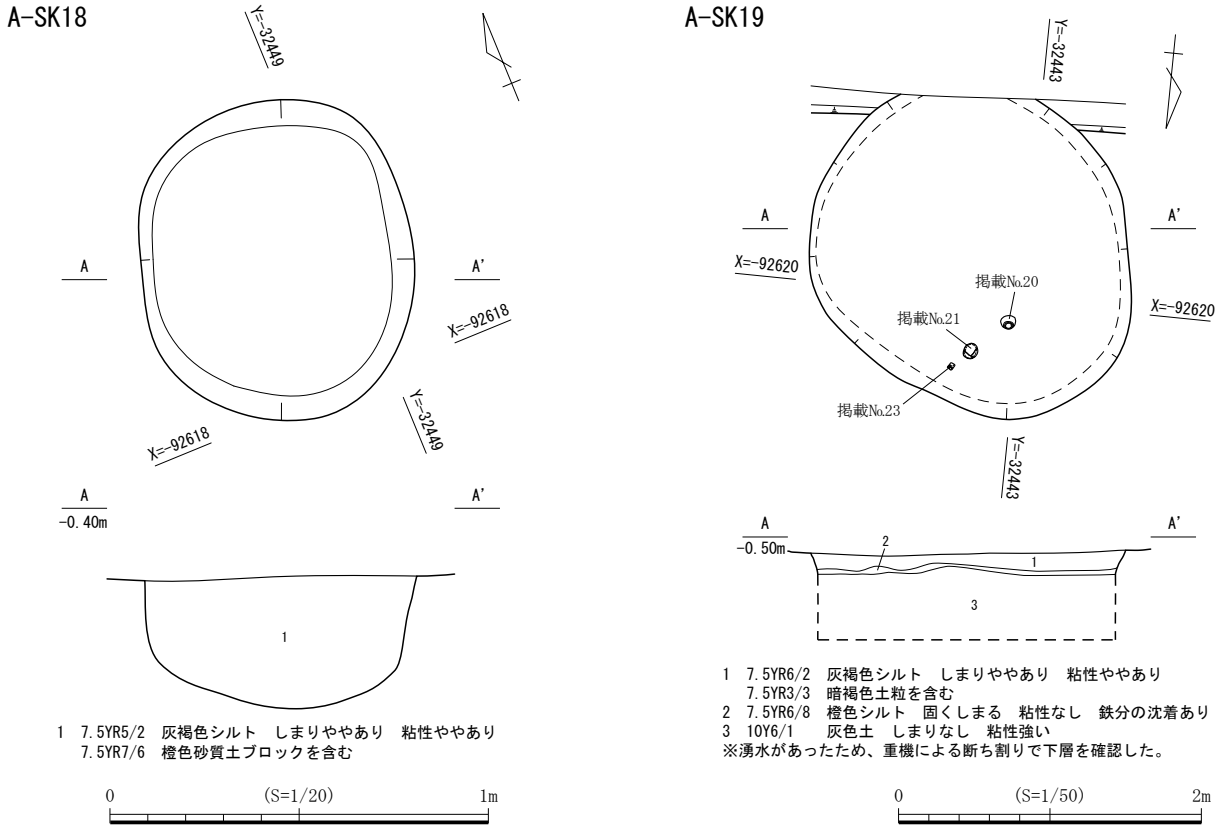
Ａ区東部に位置し、Ⅵ層上面で検出した。規模は長軸117cm、短軸63cm、深さ24cmを測る。平面形は方形、断面形は逆台形を呈し、底面形状は平坦である。埋土は褐灰色土の単層である。長軸はN-93°-Eの方角を示す。遺物は土師器等の小片が出土した。

A-SK18（第15図、図版６）

Ａ区南東部に位置し、Ⅵ層上面で検出した。規模は長軸85cm、短軸72cm、深さ35cmを測る。平面形は円形、断面形は半円形を呈し、底面形状は円形である。埋土は灰褐色シルトの単層である。遺物は須恵器、灰釉陶器等の小片が出土した。

A-SK19（第15図、図版５）

Ａ区南東部に位置し、Ⅵ層上面で検出した。規模は長軸343cm、短軸304cmを測る。検出面から20cmまで掘り下げたところで湧水があり、掘削を中止したため計測できなかった。南部は調査区外に延びるが、平面形は円形であると推定される。断面形は方形を呈す。埋土は上から灰褐色シルト・橙色シルト・灰色粘土の３層である。調査終了後に重機による断ち割りを行い、検出面から深さ約86cmの所で砂層を確認した。曲物等は確認できなかった。遺物は１層中より山茶碗が出土した。２層は鉄分の沈着層で、溜水があったと想定される。遺物は灰釉陶器の椀や輪花椀、山茶碗や土師器の椀、加工円板が出土した。



第15図　A-SK18、SK19平面図・断面図

A-SK20（第16図、図版６）

Ａ区南東部に位置し、Ⅵ層上面で検出した。規模は長軸67cm、短軸66cm、深さ約0～24cmを測る。平面形は円形、断面形は逆台形を呈し、底面形状は不整形である。埋土は上から褐灰色シルト・橙褐色砂質土ブロックを含む褐灰色シルト・暗褐色土粒を含む灰褐色シルトの３層である。遺物は灰釉陶器の椀が出土した。

A-SK23（第16図、図版６）

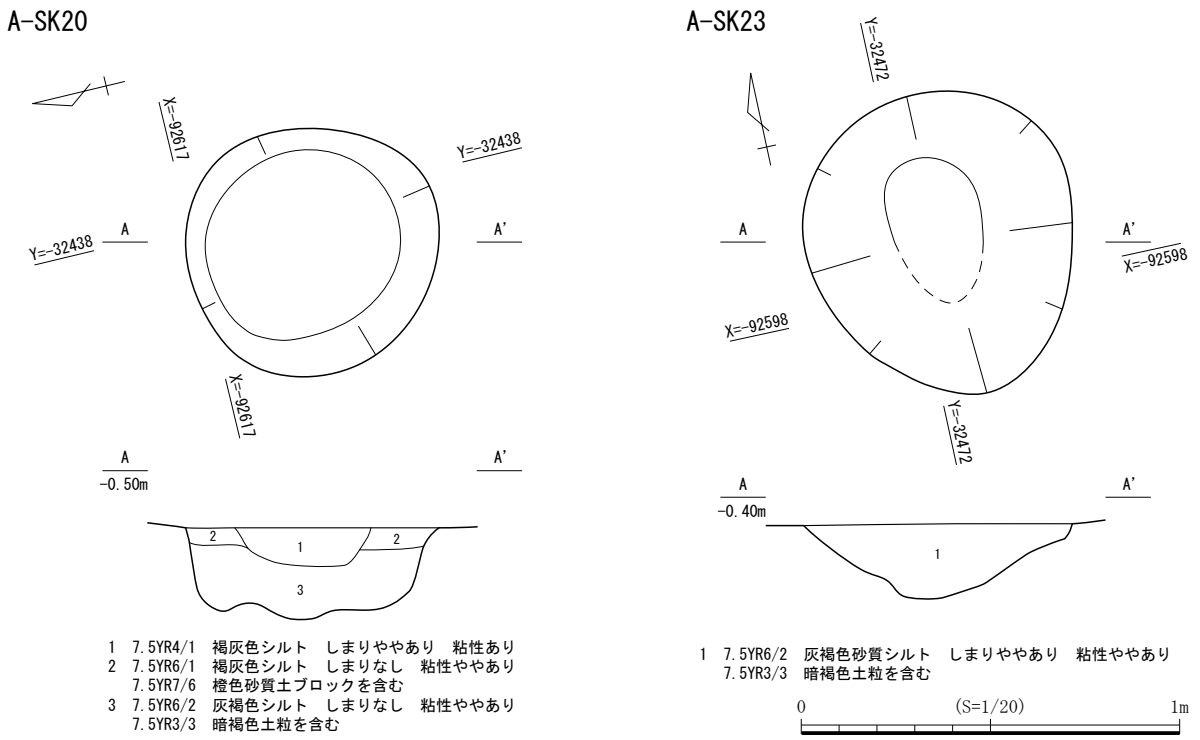
Ａ区北部に位置し、Ⅵ層上面で検出した。規模は長軸163cm、短軸143cm、深さ39cmを測る。平面形は円形、断面形は逆三角形を呈し、底面形状は平坦である。埋土は灰褐色砂質シルトの単層である。遺物は須恵器、灰釉陶器、土師器が比較的多く出土したが、ほとんどが小片で、図示できるものがなかった。

A-SK28（第17図、図版６）

Ａ区北東部に位置し、Ⅵ層上面で検出した。規模は長軸172cm、短軸153cm、深さ47cmを測る。平面形は円形、断面形は逆台形を呈し、底面形状はほぼ平坦である。埋土は上から褐灰色土・灰褐色砂質土の２層である。A-SK27より古い。遺物は土師器等の小片が出土した。

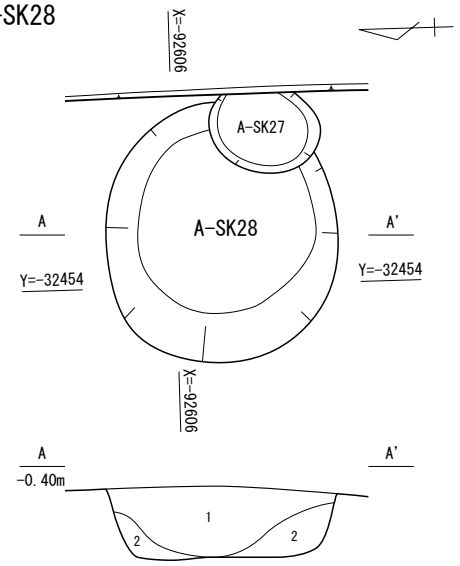
A-SK33（第17図、図版６）

Ａ区中央部に位置し、Ⅵ層上面で検出した。規模は長軸211cm、短軸133cm、深さ36cmを測る。平面形は楕円形、断面形は皿状を呈す。埋土は５層の堆積を確認した。A-SD26、A-SK34、A-SK42より新しい。遺物は灰釉陶器や山茶碗の碗が出土した。また小片であるが灰釉陶器の鉢も出土している。



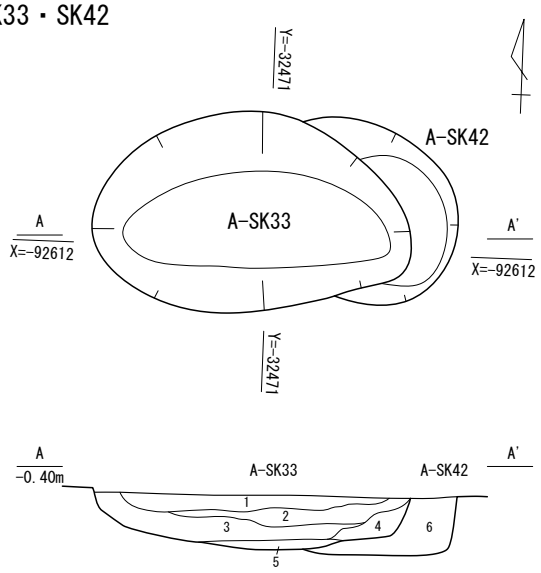
第16図　A-SK20、SK23平面図・断面図

A-SK28



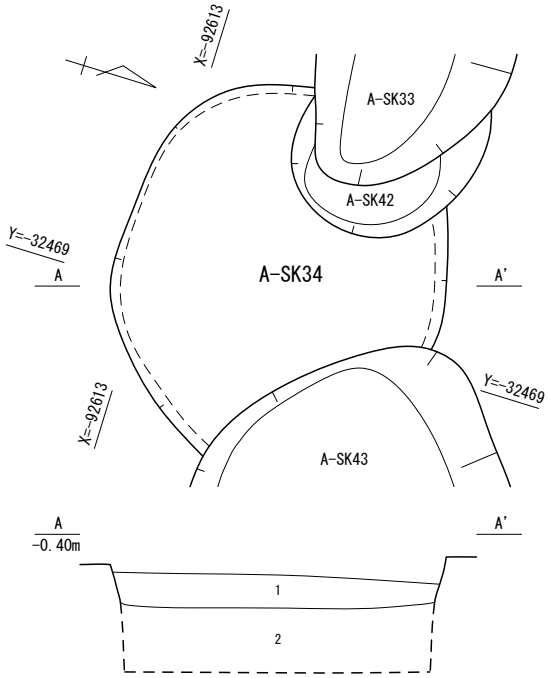
1　7.5YR6/1　褐灰色土　しまりややあり　粘性ややあり
　　7.5YR6/4　にぶい橙色土粒を含む
2　7.5YR6/2　灰褐色砂質土　しまりややあり　粘性ややあり
　　鉄分の沈着あり

A-SK33・SK42



A-SK33
1　7.5YR5/2　灰褐色シルト　しまりなし　粘性ややあり　炭化粒･焼土粒を含む
2　10YR7/1　灰白色土　しまりややあり　粘性ややあり　炭化粒･焼土粒を含む
　　鉄分の沈着あり
3　2.5GY7/1　明オリーブ色シルト　しまりなし　粘性あり
4　7.5YR5/1　褐灰色土　しまりなし　粘性あり　7.5YR3/3　暗褐色土粒を含む
5　N5/　　灰色砂質土　しまりなし　粘性あり　植物遺体を含む
A-SK42
6　7.5YR6/1　褐灰色シルト　しまりややあり　粘性なし
　　7.5YR3/3　暗褐色土粒を含む　鉄分の沈着あり

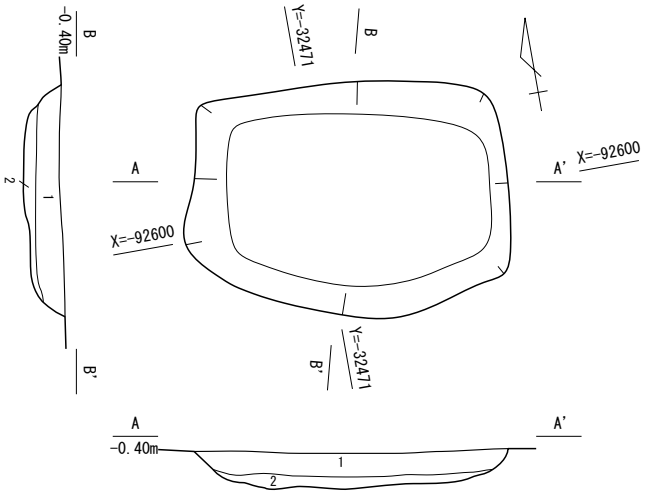
A-SK34



1　7.5YR5/2　灰褐色シルト　しまりなし　粘性ややあり　下部は鉄分の沈着あり
2　5B6/1　　青灰色砂質土　しまりなし　粘性あり　植物遺体を含む
※湧水があったため、重機による断ち割りで下層を確認した。

0　(S=1/50)　2m

A-SK41



1　10YR7/1　灰白色シルト　しまりややあり　粘性ややあり
　　7.5YR3/3　暗褐色土粒を含む
2　10Y6/1　　灰色土　しまりなし　粘性あり　植物遺体をわずかに含む

0　(S=1/80)　2m
A-SK41のみ

第17図　A-SK28、SK33、SK34、SK41、SK42平面図・断面図

A-SK34（第17図）

Ａ区南部東側に位置し、Ⅵ層上面で検出した。長軸255cm、短軸218cm、深さ73cmを測る。平面形は円形、断面形は皿状、底面形状は円形を呈す。埋土は上から灰褐色シルト・青灰色砂質土の２層である。重複したA-SK33、A-SK42、A-SK43より古く、A-SD25より新しい。遺物は灰釉陶器や山茶碗の碗、土師器の鍋、清郷型鍋が出土した。

A-SK41（第17図、図版６）

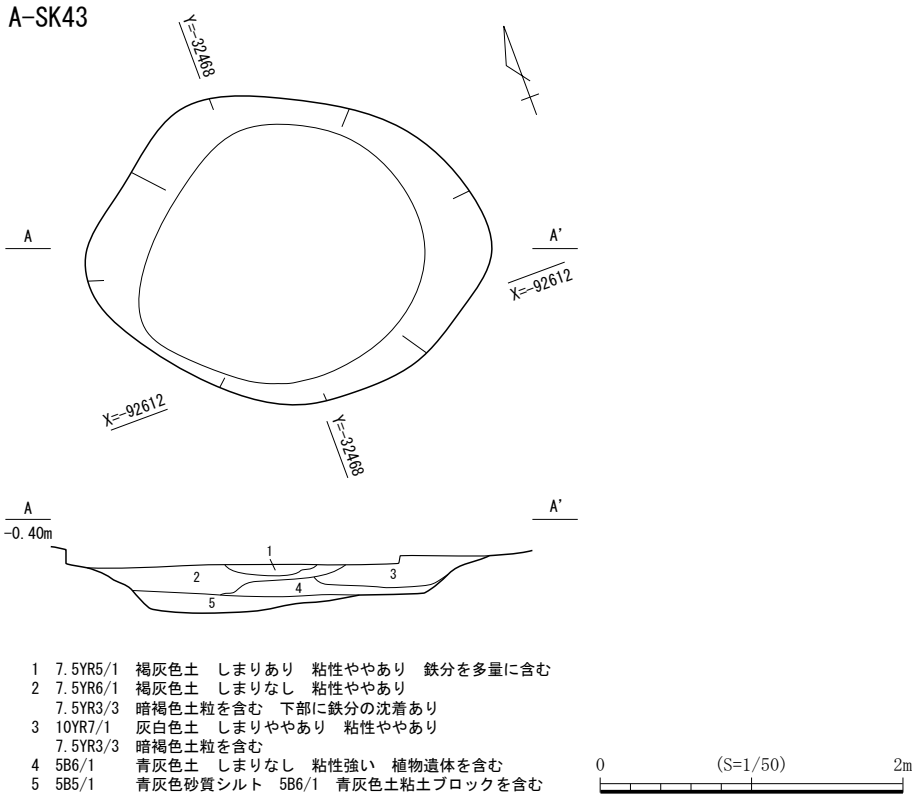
Ａ区北部に位置し、Ⅵ層上面で検出した。規模は長軸330cm、短軸248cm、深さ35～39cmを測る。平面形は不整形、断面形は皿状を呈し、底面形状は不整形である。北辺は直線的であるが南側は不整形である。埋土は上から灰白色シルト・灰色土の２層である。下層は粘質が強い。遺物は土師器の小皿、山茶碗の碗が出土した。

A-SK42（第17図）

Ａ区中央部に位置し、Ⅵ層上面で検出した。長軸130cm以上、短軸114cm以上、深さ37cmを測る。平面形は円形、断面形は皿状、底面形状は円形を呈す。埋土は褐灰色シルトの単層である。重複したA-SK33より古く、A-SK34より新しい。遺物は灰釉陶器や山茶碗の碗、土師器の鍋、清郷型鍋が出土した。

A-SK43（第18図、図版６）

Ａ区中央部に位置し、Ⅵ層上面で検出した。規模は長軸268cm、短軸203cm、深さ32cmを測る。平面形は不整形、断面形は逆台形を呈し、底面形状は円形である。埋土は５層の堆積である。A-SK34より新しい。遺物は山茶碗の碗が出土した。また碗を硯に転用したと思われる遺物も確認した。



第18図　A-SK43平面図・断面図

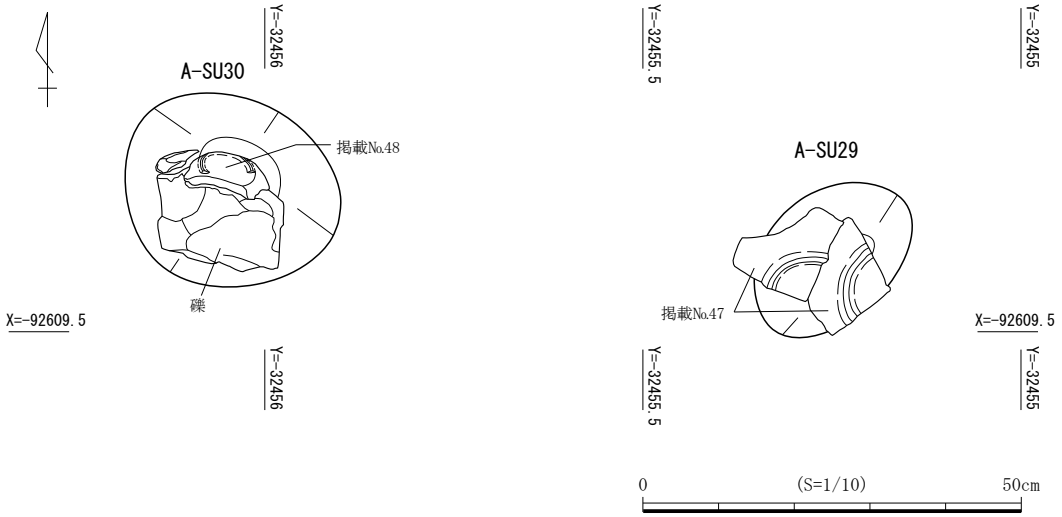
（４）土器集中

A-SU29（第19図、図版６）

Ａ区中央部よりやや東側に位置し、Ⅵ層上面で検出した。長さ24cm、幅17cm、深さ２cmを測る土器集積。平面形は楕円形、断面形は半円形、底面形状は円形を呈す。埋土は褐灰色土の単層である。A-SU30と隣り合って検出されており、遺構の中心の間隔が約80cmである。遺物は陶器の片口鉢が出土した。

A-SU30（第19図、図版６）

Ａ区北部中央部よりやや東側に位置し、Ⅵ層上面で検出した。長さ30cm、幅26cm、深さ５cmを測る土器集積。平面形は円形、断面形は半円形、底面形状は円形を呈す。埋土は暗褐色シルトの単層である。遺物は山茶碗の碗が出土した。

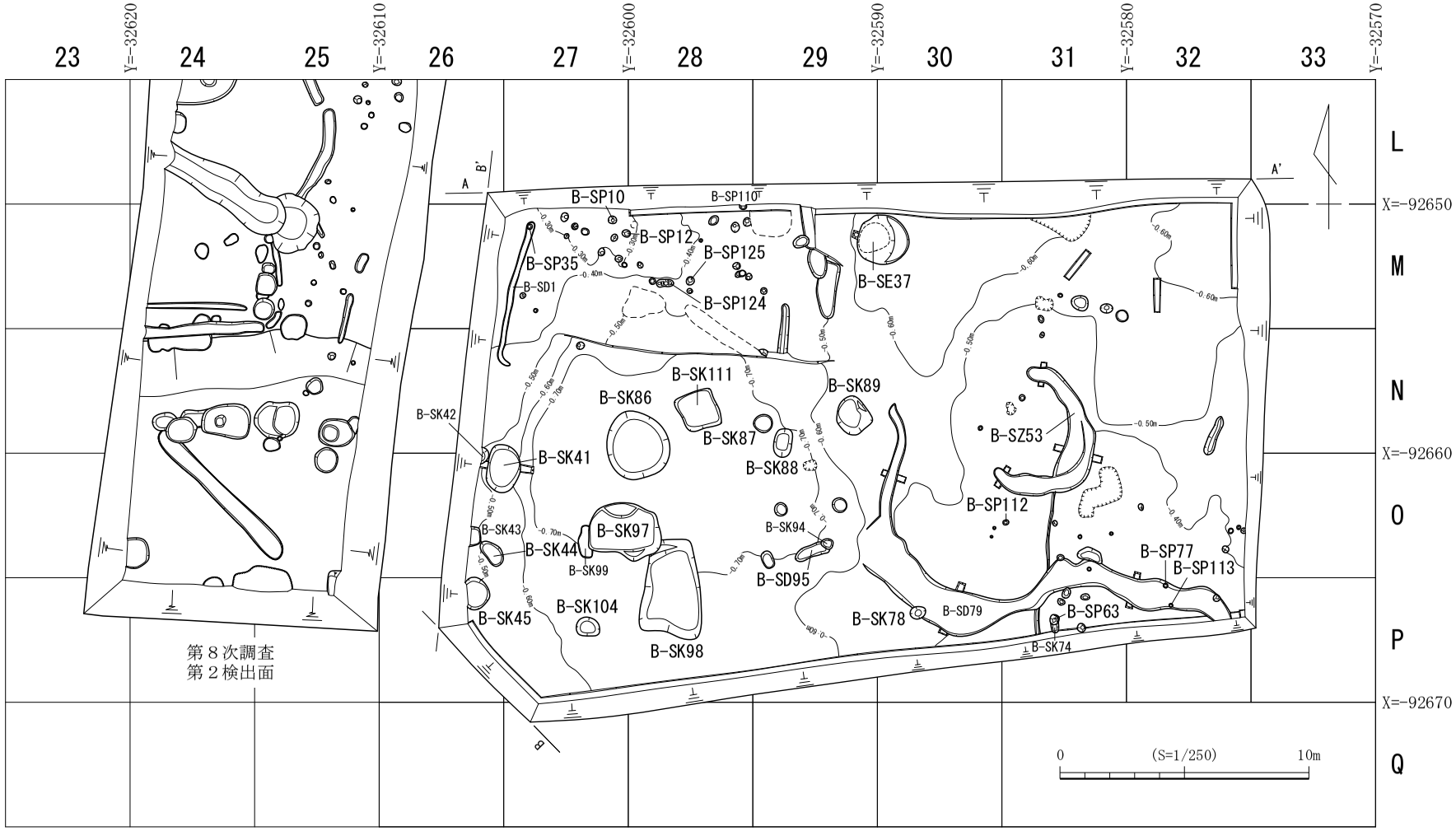


第19図　A-SU29・SU30遺物出土状況図

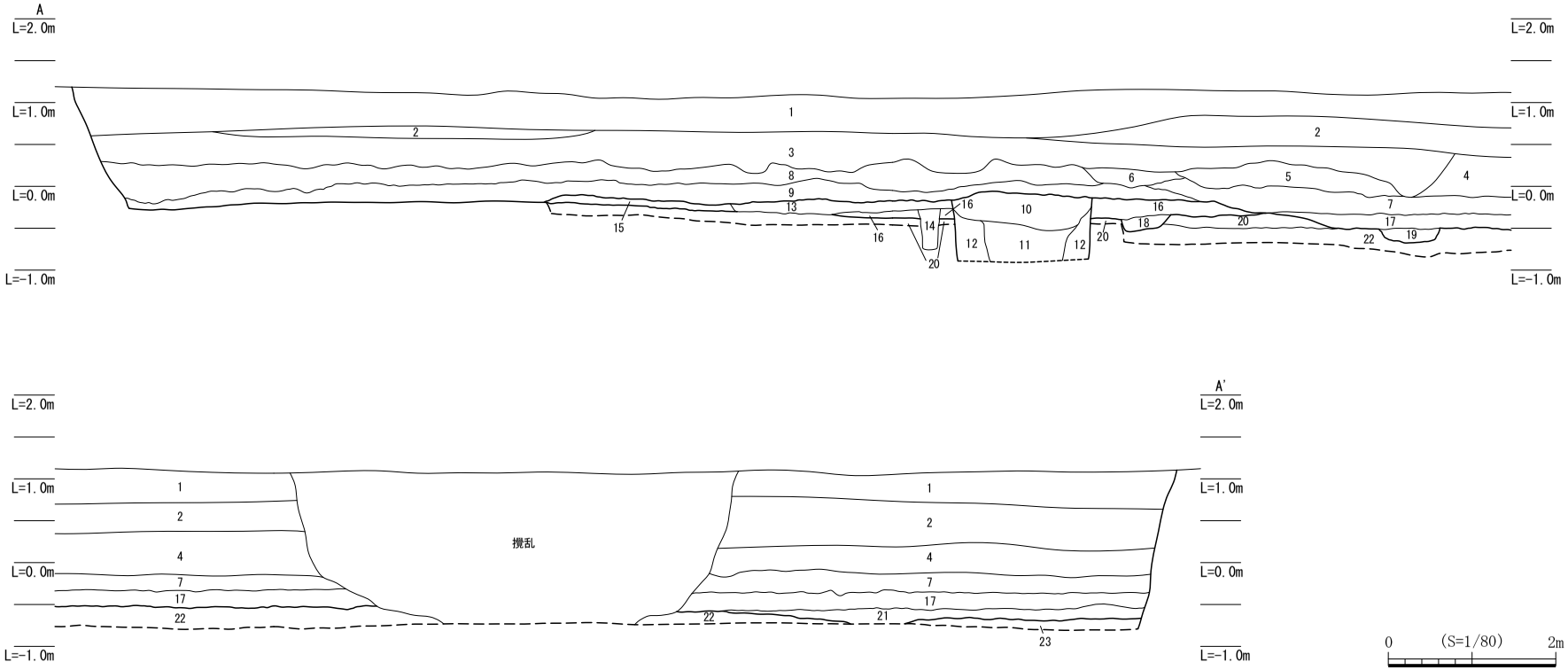
Ｂ区　第１遺構面（Ⅳ層上面）

第20図　Ｂ区　全体図（第１遺構面）

Ｂ区　第２遺構面（Ｖ層上面）

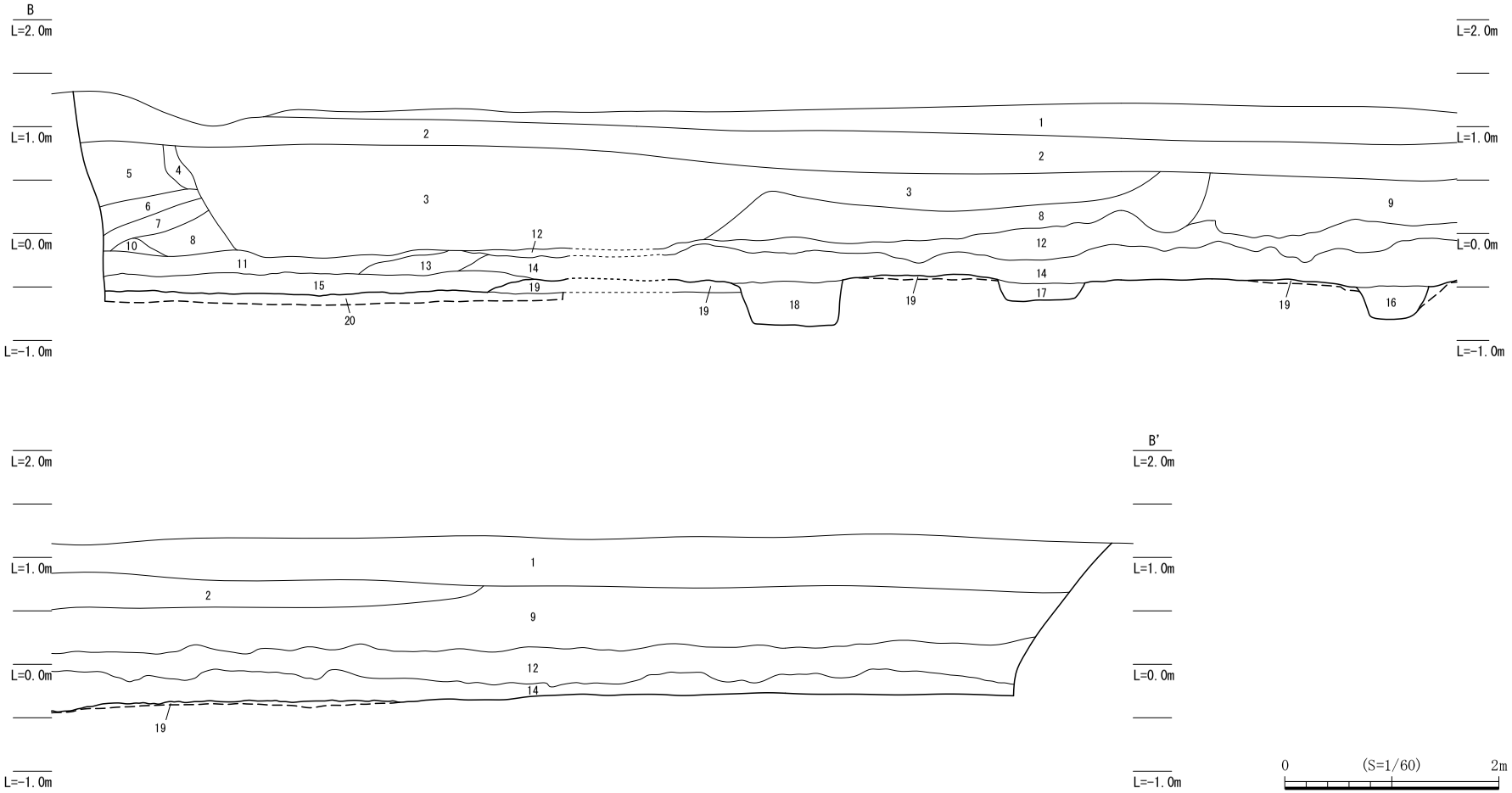


第21図　Ｂ区　全体図（第２遺構面）



1　7.5YR4/3　褐色砂質土　しまりあり　粘性なし　礫を含む　（Ⅰ層・盛土）
2　7.5YR5/4　にぶい褐色砂質土　固くしまる　粘性なし　礫を多く含む　（Ⅰ層・盛土）
3　N7/　灰白色土　固くしまる　粘性あり　（Ⅰ層・改良土）
4　10YR2/3　黒褐色土　固くしまる　粘性なし　礫を含む　（Ⅰ層・盛土）
5　5B6/1　青灰色シルト　しまりややあり　粘性ややあり
　2.5Y3/1　黒褐色土・有機物を含む　（Ⅰ層・撹乱土）
6　10Y6/1　灰色シルト　しまりややあり　粘性ややあり　炭化物をわずかに含む　（Ⅰ層・撹乱土）
7　N3/　暗灰色砂質シルト　しまりなし　粘性あり　5Y5/1　灰色シルトを下部に堆積する　（Ⅱa層・耕作土）
8　7.5Y3/1　オリーブ黒色砂質土　しまりなし　粘性ややあり　5BG6/1　青灰色土を含む　（Ⅱa層・耕作土）
9　7.5YR5/1　褐灰色土　しまりあり　粘性ややあり　7.5YR3/3　暗褐色土粒を多く含む　（Ⅲ層・島畑形成土）
10　10YR3/1　黒褐色土　しまりややあり　粘性ややあり　炭化物･焼土をわずかに含む　（B-SE24 1層）
11　2.5Y4/1　黄灰色土　しまりなし　粘性あり
　7.5YR5/4　にぶい褐色砂質土　しまりなし　粘性なし　2色の互層　（B-SE24 2層）
12　10YR3/1　黒褐色土と2.5Y8/4　淡黄色砂質土が混在する　しまりなし　粘性なし　（B-SE24 3層）
13　7.5YR4/1　褐灰色土　しまりややあり　粘性ややあり　炭化物･焼土を含む　（B-SX31）
14　7.5YR5/2　灰褐色土　しまりややあり　粘性ややあり　炭化物を含む　（B-SP110）
15　7.5YR4/1　褐灰色砂質土　しまりややあり　粘性ややあり　炭化物･焼土を含む　（Ⅳ層上部・島畑形成土）
16　2.5Y7/2　灰黄色砂質土　しまりややあり　粘性ややあり
　7.5YR3/3　暗褐色土粒をわずかに含む　（Ⅳ層下部・島畑形成土）
17　2.5Y6/1　黄灰色砂質シルト　しまりあり　粘性ややあり
　7.5YR3/3　暗褐色土粒をわずかに含む　（Ⅱb層・水田床土）
18　2.5Y6/1　黄灰色シルト　しまりややあり　粘性ややあり　2.5Y8/4　淡黄色土ブロックを含む　（B-SX115）
19　7.5YR6/2　灰褐色土　しまりあり　粘性ややあり　炭化物･焼土をわずかに含む　（遺構か）
20　10YR6/1　褐灰色砂質シルト　しまりややあり　粘性ややあり
　10YR6/8　明黄褐色砂質土ブロックを含む　（Ⅴ層・地山）
21　7.5YR4/2　灰褐色砂質土　固くしまる　粘性あり　（Ⅴ層・漸移層）
22　2.5Y5/1　黄灰色砂質シルト　しまりややあり　粘性ややあり　鉄分多く沈着する　砂質強い　（Ⅴ層・地山）
23　N4/　灰色シルト　しまりややあり　粘性あり　7.5YR3/3　暗褐色土粒を多く含む　（Ⅴ層・地山）

第22図　Ｂ区　北壁土層断面図



1　7.5YR4/3　褐色砂質土　しまりあり　粘性なし　礫を含む　（Ⅰ層・盛土）
2　7.5YR5/4　にぶい褐色砂質土　固くしまる　粘性なし　礫を多く含む　（Ⅰ層・盛土）
3　10YR6/4　にぶい黄橙色砂礫土　固くしまる　粘性なし　（Ⅰ層・盛土）
4　N8/　灰白色土　固くしまる　粘性あり　（Ⅰ層・改良土）
5　10YR4/4　褐色土　しまりあり　粘性なし　礫を含む　（Ⅰ層・盛土）
6　10YR3/2　黒褐色土　しまりあり　粘性ややあり　礫を含む　（Ⅰ層・盛土）
7　N7/　灰白色土　しまりあり　粘性ややあり　（Ⅰ層・盛土）
8　10YR2/3　黒褐色土　固くしまる　粘性なし　礫を含む　（Ⅰ層・盛土）
9　N7/　灰白色土　固くしまる　粘性あり　（Ⅰ層・改良土）
10　10YR6/4　にぶい黄橙色砂礫土　しまりあり　粘性なし　10YR3/2　黒褐色土ブロックを含む　（Ⅰ層・盛土）
11　N3/　暗灰色砂質シルト　しまりなし　粘性あり　5Y5/1　灰色シルトを下部に堆積する
上部は有機物を含む　（Ⅱa層・耕作土）
12　7.5Y3/1　オリーブ黒色砂質土　しまりなし　粘性ややあり　5BG6/1　青灰色土を含む　（Ⅱa層・耕作土）
13　2.5Y4/1　黄灰色砂質土　しまりややあり　粘性ややあり　7.5YR3/3　暗褐色土粒を含む　（Ⅲ層・島畑形成土）
14　7.5YR5/1　褐灰色土　しまりあり　粘性ややあり　7.5YR3/3　暗褐色土粒を多く含む　（Ⅲ層・島畑形成土）
15　2.5Y6/1　黄灰色砂質シルト　しまりあり　粘性ややあり
7.5YR3/3　暗褐色土粒をわずかに含む　上部は鉄分濃い　（Ⅱb層・水田床土）
16　7.5YR5/1　褐灰色シルト　しまりややあり　粘性ややあり　10YR6/8　明黄褐色砂質土ブロックを含む　（B-SK42）
17　7.5YR5/1　褐灰色シルト　しまりややあり　粘性ややあり　10YR6/8　明黄褐色砂質土ブロックを含む　（B-SK43）
18　5YR5/1　褐灰色土　しまりややあり　粘性ややあり
10YR6/8　明黄褐色砂質土ブロックを含む　鉄分をわずかに含む　（B-SK45 1層）
19　10YR6/1　褐灰色砂質シルト　しまりややあり　粘性ややあり　10YR6/8　明黄褐色砂質土ブロックを含む　（Ⅴ層・地山）
20　N4/　灰色シルト　しまりややあり　粘性あり　7.5YR3/3　暗褐色土粒を多く含む　やや砂質　（Ⅴ層・地山）

第23図　Ｂ区　西壁土層断面図

４．Ｂ区の遺構（第１遺構面）

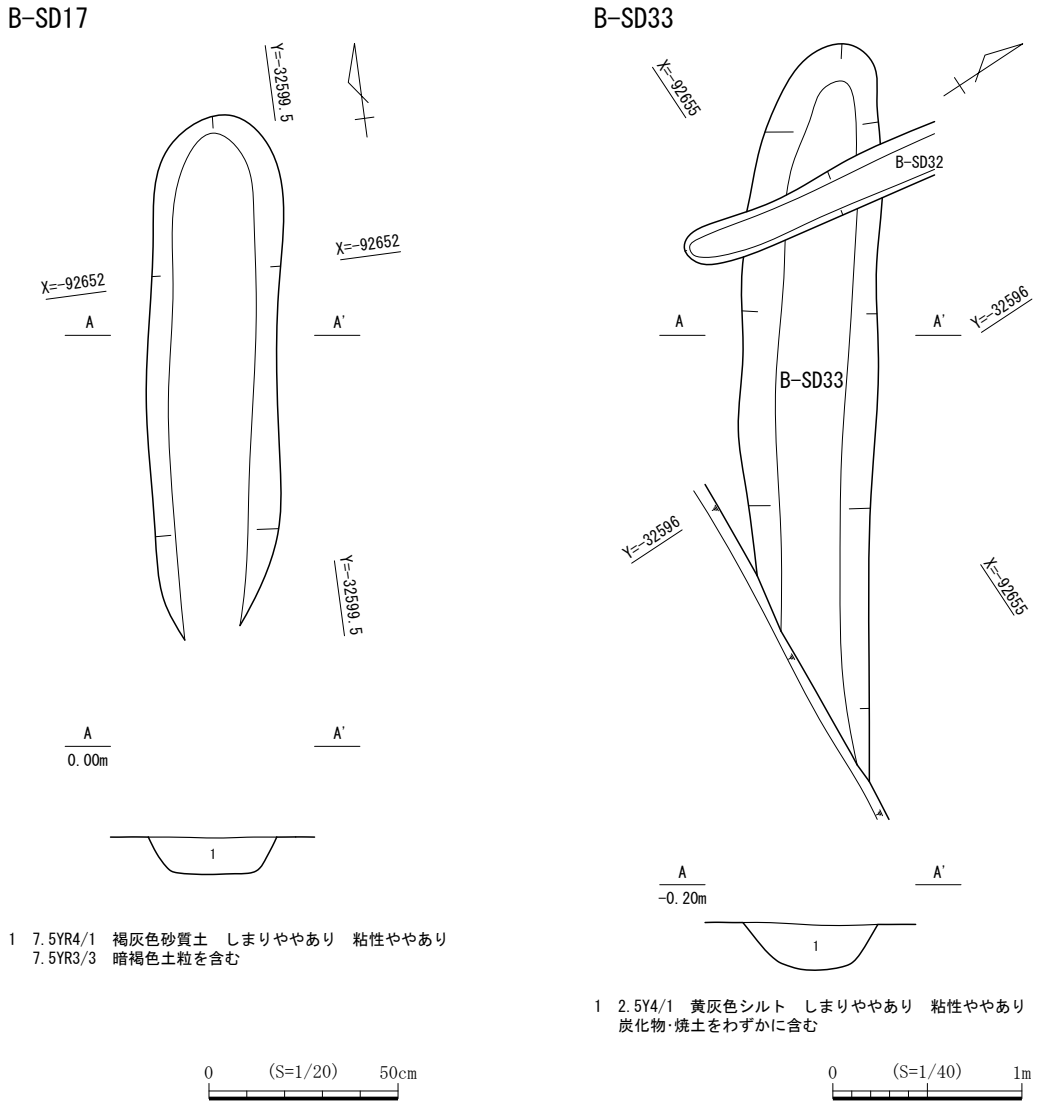
（１）溝

B-SD17（第24図、図版８）

Ｂ区北部に位置し、Ⅳ層上面で検出した。延長1.38ｍ、最大幅34cm、深さ10cmを測る。断面形は逆台形を呈す。埋土は褐灰色砂質土の単層である。長軸はＮ－８°－Ｅの方角を示す。B-SK18より新しい。遺物は常滑の片口鉢が出土した。

B-SD33（第24図、図版８）

Ｂ区北西部に位置し、Ⅳ層上面で検出した。検出長34cm、最大幅72cm、深さ20cmを測る。断面形は半円形を呈す。埋土は黄灰色シルトの単層である。長軸はＮ-55°-Ｗの方角を示す。B-SD32より古い。遺物は須恵器の甕、山茶碗の小皿が出土した。



第24図　B-SD17、SD33平面図・断面図

（２）井戸

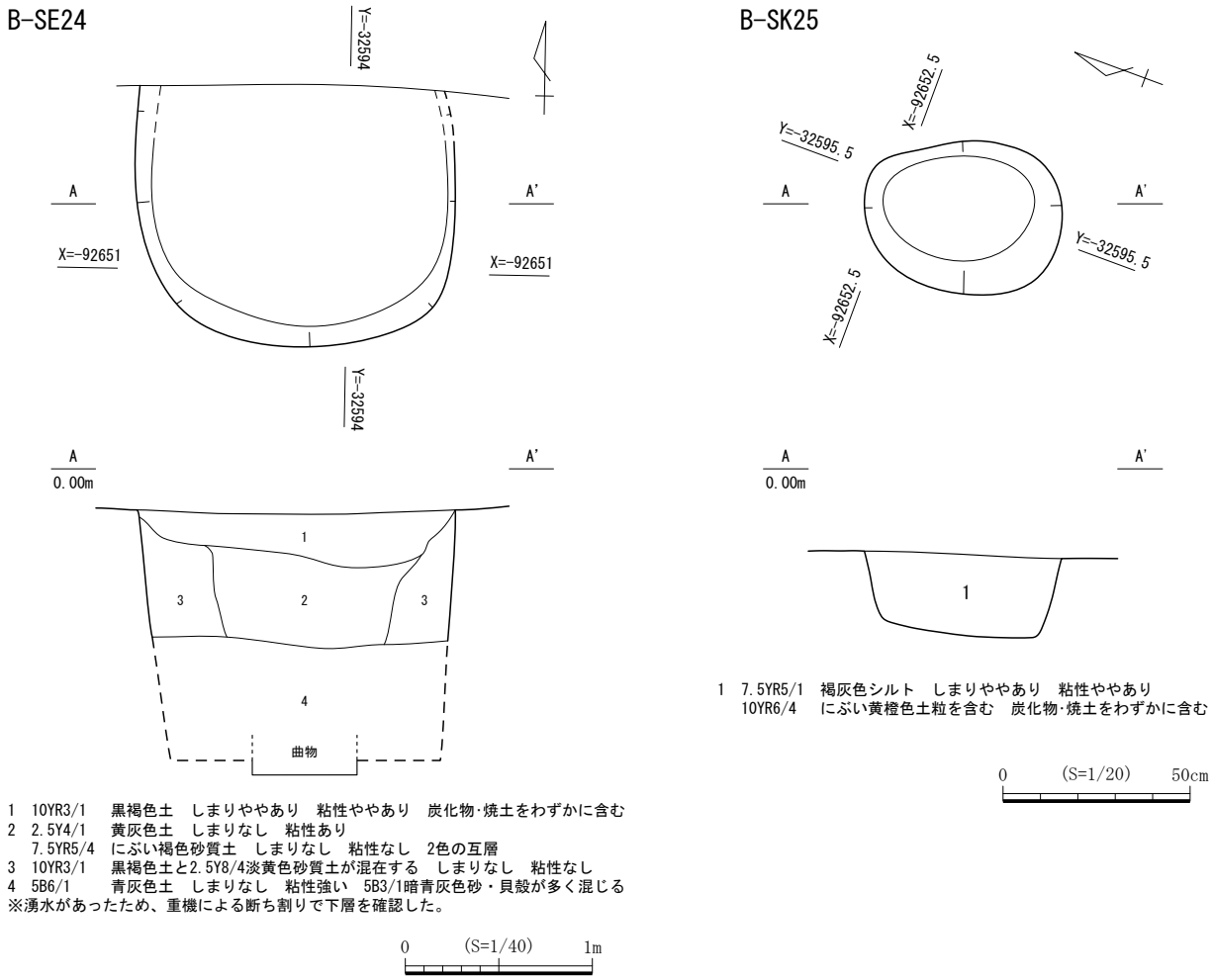
B-SE24（第25図、図版８）

Ｂ区北西部に位置し、Ⅳ層上面で検出した。北側は調査区外へ延びる。規模は長軸171cm、短軸140cmを測る。深さ70cmを掘り下げた所で湧水があったため、掘削を中止した。平面形は円形、断面形は箱形を呈する。埋土は上から黒褐色土・黄灰色土・ 黒褐色土と淡黄色砂質土の混在・青灰色土の４層である。B-SX31より新しい。遺物は灰釉陶器や山茶碗の碗、山茶碗の小皿、加工円板が出土した。調査終了後に重機による断ち割りを行い２、３層より下に貝殻が多く混じる層（第４層）を確認した。また検出面より130cmの所で曲物を確認した。

（３）土坑

B-SK25（第25図、図版８）

Ｂ区北西部に位置し、Ⅳ層上面で検出した。長軸52cm、短軸40cm、深さ22cmを測る。平面形は楕円形、断面形は半円形、底面形状は平坦を呈す。埋土は褐灰色シルトの単層である。B-SX31より新しい。遺物は山茶碗の碗が出土した。



1 10YR3/1 黒褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 炭化物･焼土をわずかに含む
2 2.5Y4/1 黄灰色土 しまりなし 粘性あり
7.5YR5/4 にぶい褐色砂質土 しまりなし 粘性なし 2色の互層
3 10YR3/1 黒褐色土と2.5Y8/4淡黄色砂質土が混在する しまりなし 粘性なし
4 5B6/1 青灰色土 しまりなし 粘性強い 5B3/1暗青灰色砂・貝殻が多く混じる
※湧水があったため、重機による断ち割りで下層を確認した。

0 (S=1/40) 1m

第25図 B-SE24・SK25平面図・断面図

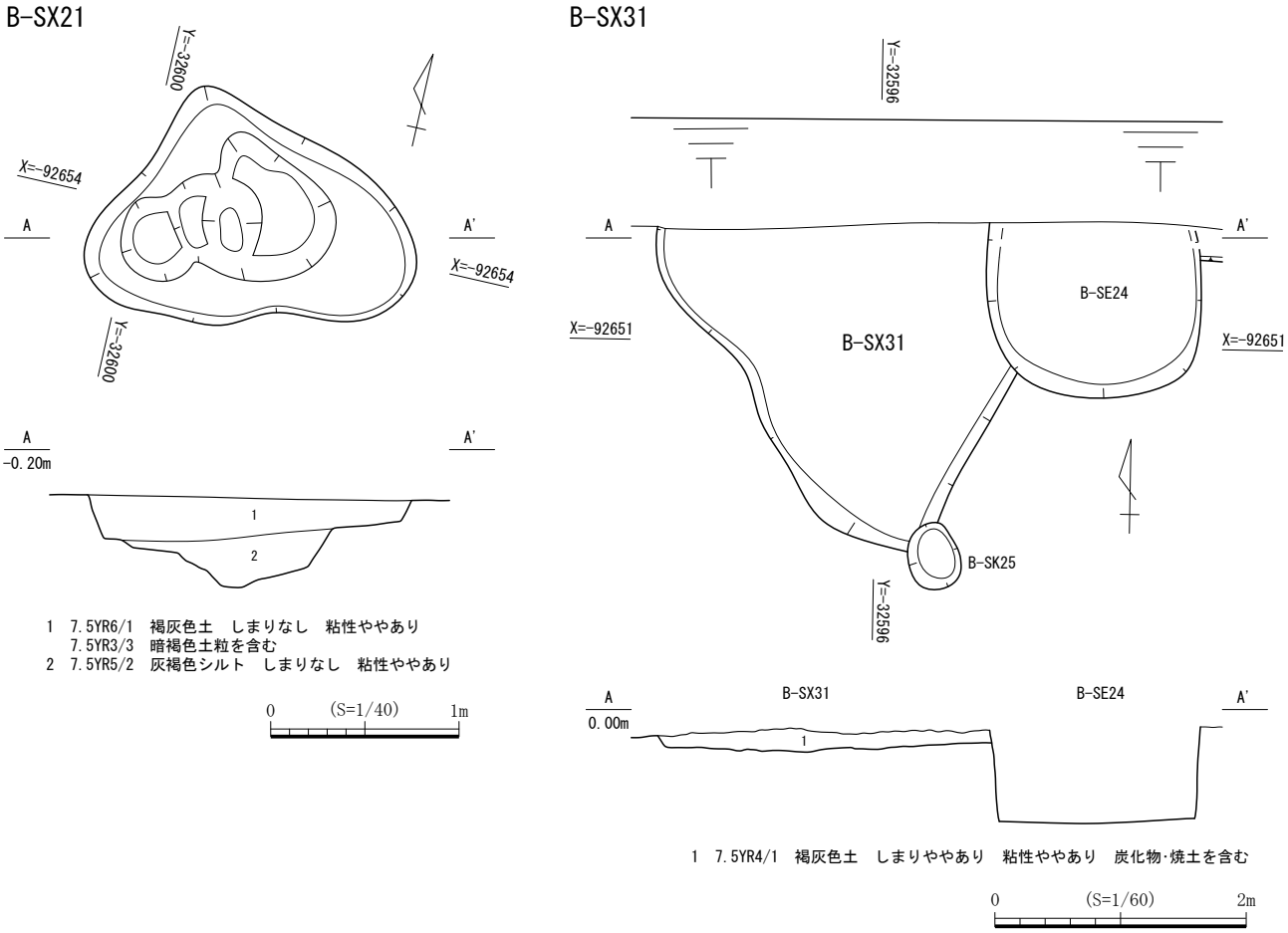
（４）不明遺構

B-SX21（第26図、図版８）

Ｂ区北西部に位置し、Ⅳ層上面で検出した。長軸152cm、短軸126cm、深さ46cmを測る。平面形は不整形、断面形は不整形、底面形状は不整形を呈す。埋土は上から褐灰色土・灰褐色シルトの２層である。遺物は山茶碗の碗、加工円板が出土した。

B-SX31（第26図、図版８）

Ｂ区北西部に位置し、Ⅳ層上面で検出した。検出長250cm、短軸225cm、深さ14cmを測り、北側は調査区外へ続いている。平面形は不整形、断面形は逆台形、底面形状は平坦を呈す。埋土は褐灰色土の単層である。底面からB-SP105～107、B-SP110を検出している。重複したB-SE24、B-SK25より古く、B-SD32より新しい。遺物は灰釉陶器や山茶碗の碗、山茶碗の小皿、清郷型鍋、加工円板が出土した。



第26図　B-SX21、SX31平面図・断面図

５．Ｂ区の遺構（第２遺構面）

（１）溝

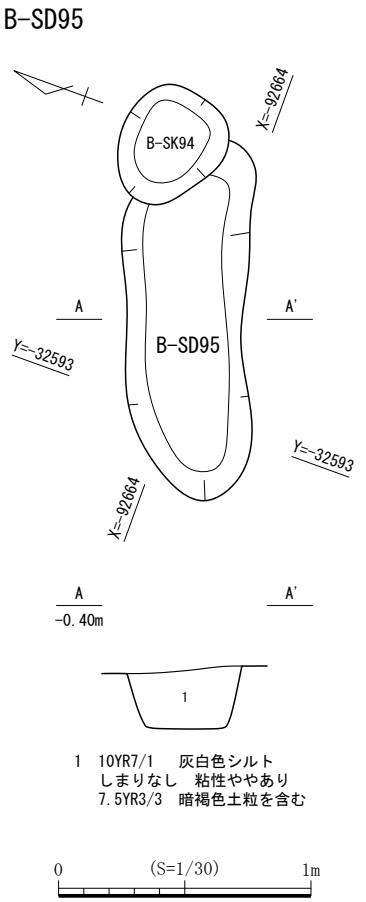
B-SD95（第27図、図版13）

Ｂ区南部に位置し、Ｖ層上面で検出した。検出長1.25m以上、最大幅46cm、深さ25cmを測り、東側はB-SK94が重複する。断面形は逆台形を呈す。埋土は灰白色シルトの単層である。長軸はN-67°-Eの方角を示す。遺物は須恵器の有台杯が出土した。

（２）井戸

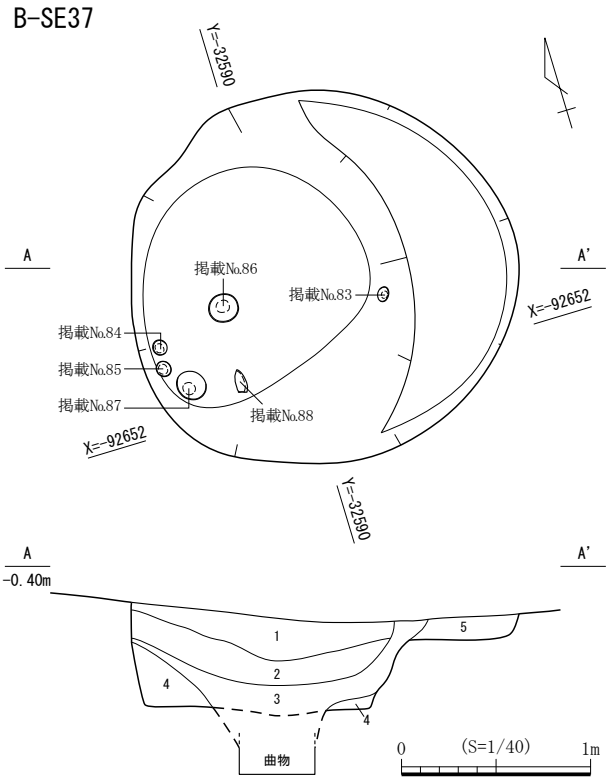
B-SE37（第28図、図版10）

Ｂ区北部中央に位置し、Ｖ層上面で検出した。規模は長軸206cm、短軸198cmを測る。深さ50cmを掘り下げた所で湧水があったため、掘削を中止した。平面形は円形、断面形は箱形を呈する。埋土は上から灰黄色シルト・黄灰色土・黒褐色土・褐灰色砂質シルト・褐灰色砂質土の５層である。遺物は山茶碗の碗や小皿の完形品が出土した。そのほか、伊勢型鍋も出土している。調査終了後に重機による断ち割りを行い、深さ約70cmの所で曲物を確認した。



1　10YR7/1　灰白色シルト
しまりなし　粘性ややあり
7.5YR3/3　暗褐色土粒を含む

第27図　B-SD95平面図・断面図



1　2.5Y7/2　灰黄色シルト　しまりややあり　粘性ややあり
2　2.5Y4/1　黄灰色土　しまりなし　粘性あり
7.5YR5/4　にぶい褐色砂質土ブロックを含む　2色の互層
3　2.5Y3/1　黒褐色土　しまりなし　粘性あり
2.5Y8/4　淡黄色砂質土ブロックを含む
4　7.5YR6/1　褐灰色砂質シルト　しまりなし　粘性ややあり
10YR6/8　明黄褐色砂質土ブロックを含む
5　7.5YR5/1　褐灰色砂質土　しまりややあり　粘性ややあり
10YR6/8　明黄褐色砂質土ブロックを含む
※湧水があったため、重機による断ち割りで下層を確認した。

第28図　B-SE37平面図（出土状況）・断面図

（３）土坑

B-SK41（第29図、図版10）

Ｂ区西部に位置し、Ｖ層上面で検出した。規模は長軸192cm、短軸132cm、深さ43cmを測る。平面形は楕円形、断面形は逆台形を呈し、底面形状は平坦である。埋土は３層である。堆積状況から井戸の可能性も考えられたため、調査終了後に重機を使用しての下層確認を行ったが、曲物等井戸跡を示すような形跡は確認できなかった。遺物は山茶碗の碗、陶器の椀が出土した。

B-SK44（第29図、図版10）

Ｂ区南西部に位置し、Ｖ層上面で検出した。西側は調査区外へ延びる。規模は長軸116cm、短軸65cm、深さ49cmを測る。平面形は楕円形、断面形は逆台形を呈し、底面形状は平坦である。埋土は上から褐灰色土・褐灰色砂質土・褐色砂質土の３層である。遺物は灰釉陶器の椀、山茶碗の小皿、加工円板、瓦が出土した。

B-SK45（第29図、図版10）

Ｂ区南西部に位置し、Ｖ層上面で検出した。規模は長軸130cm、短軸89cm、深さ51cmを測り、西側は調査区外へ延びる。平面形は円形、断面形は逆台形を呈し、底面形状は平坦である。埋土は上から褐灰色土・明褐色土の２層である。遺物は山茶碗の碗が出土した。

B-SK78（第29図、図版10）

Ｂ区南部に位置し、Ｖ層上面で検出した。長軸63cm、短軸49cm、深さ13cmを測る。平面形は楕円形、断面形は半円形、底面形状は円形を呈す。埋土は灰白色シルトの単層である。B-SD79より新しい。遺物は土師器の甕が出土した。

B-SK86（第30図、図版10・11）

Ｂ区西部に位置し、Ｖ層上面で検出した。規模は長軸275cm、短軸250cm、深さ61cmを測る。平面形は円形、断面形は逆台形を呈し、底面形状は平坦である。埋土は上から黒色砂質シルト・灰白色土・暗青灰色砂質土の３層である。埋土に底板や箍（たが）など、井戸に使用されていたと思われる木製品の残骸を含んでいる。湧水があったため重機を使用して下層確認を行ったが、３層より下は地山であると判断した。遺物は山茶碗の碗、山茶碗や土師器の小皿、常滑の広口壺、青磁の皿、加工円板が出土した。また鉄製の鏃も出土している。底板１点を樹種同定（第５章第１節３）した結果、ヒノキであることがわかった。他の遺構と比較して遺物の出土量が非常に多かった。

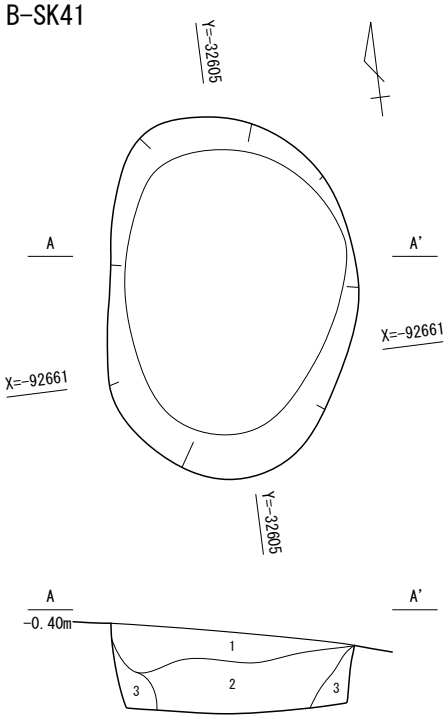
B-SK87（第30図、図版11）

Ｂ区中央部に位置し、Ｖ層上面で検出した。長軸76cm、短軸73cm、深さ７cmを測る。平面形は円形、断面形は半円形、底面形状は円形を呈す。埋土は褐灰色土の単層である。遺物は山茶碗の碗や小皿が出土した。

B-SK88（第3図、図版11）

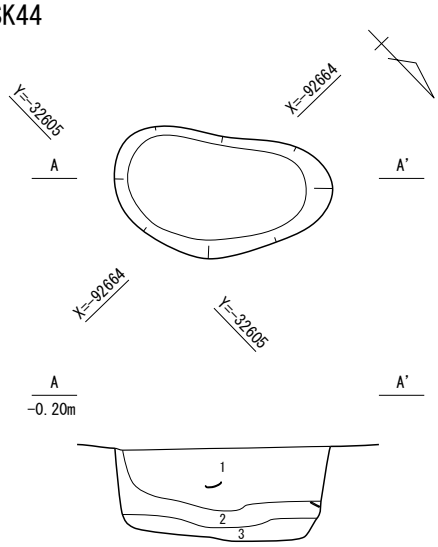
Ｂ区中央部に位置し、Ｖ層上面で検出した。規模は長軸115cm、短軸72cm、深さ26cmを測る。平面形は方形、断面形は皿状を呈し、底面形状は円形である。埋土は上から褐灰色シルト・暗灰黄色土・灰褐色土の３層である。遺物は山茶碗の碗、土師器や常滑の甕が出土した。

B-SK41



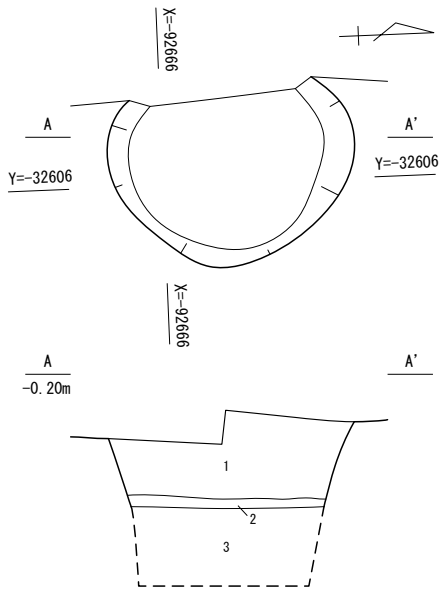
1　7.5YR5/1　褐灰色土　しまりややあり　粘性ややあり
　　10YR6/8　明黄褐色砂質土ブロックを含む　炭化物をわずかに含む
2　7.5YR5/1　褐灰色土　しまりなし　粘性あり
　　10YR6/8　明黄褐色砂質土ブロックを多量に含む
3　7.5YR5/2　灰褐色シルト　しまりなし　粘性あり　鉄分をわずかに含む

B-SK44



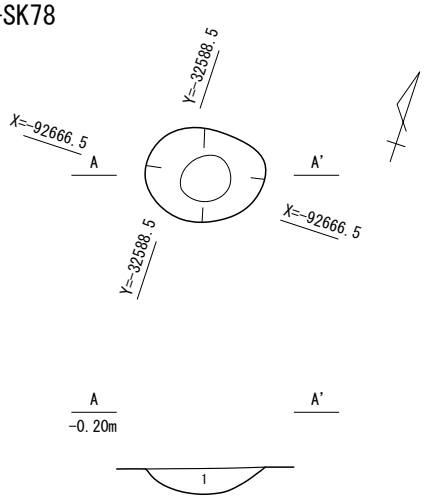
1　7.5YR5/1　褐灰色土　しまりややあり　粘性あり
　　10YR6/8　明黄褐色砂質土ブロックを含む
2　7.5YR6/1　褐灰色砂質土　しまりなし　粘性ややあり
　　7.5YR3/3　暗褐色土粒・5YR5/8　明褐色砂質土ブロックを含む
3　7.5YR4/4　褐色砂質土　しまりあり　粘性なし
　　10YR7/1　灰白色砂質粘土を含む　鉄分の沈着層

B-SK45



1　5YR5/1　褐灰色土　しまりややあり　粘性ややあり
　　10YR6/8　明黄褐色砂質土ブロックを含む　鉄分をわずかに含む
2　7.5YR5/8　明褐色土　固くしまる　粘性なし　鉄分の沈着層
3　N4/　灰色砂質シルト　しまりなし　粘性強い
※湧水があったため、重機による断ち割りで下層を確認した。

B-SK78

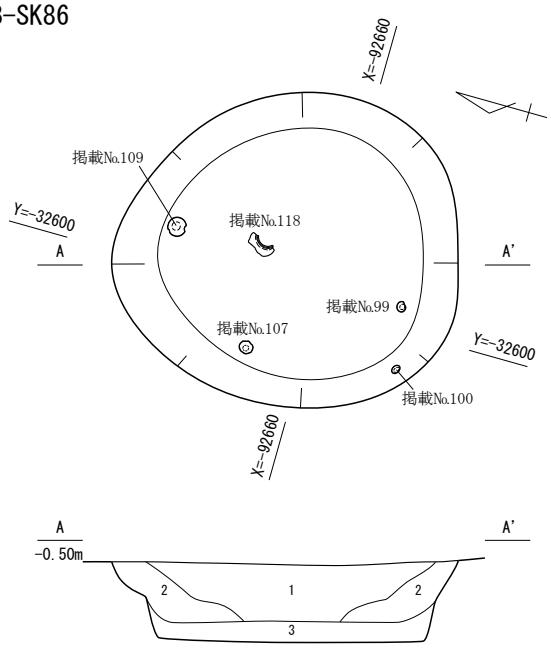


1　10YR7/1　灰白色シルト　しまりなし　粘性ややあり
　　炭化物･焼土を含む　底に炭化物が層状に沈着する

0　(S=1/40)　1m

第29図　B-SK41、SK44、SK45、SK78平面図・断面図

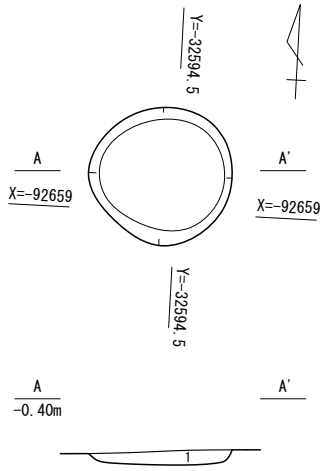
B-SK86



1　N1.5/　　黒色砂質シルト　しまりなし　粘性あり　焼土塊を含む
2　10YR7/1　灰白色土　しまりややあり　粘性あり
　　炭化物･焼土をわずかに含む
3　5BG3/1　　暗青灰色砂質土　しまりなし　粘性あり
　　N5/　　灰色砂が混じる
※湧水があったため、重機による断ち割りで下層を確認した。

0　(S=1/60)　2m

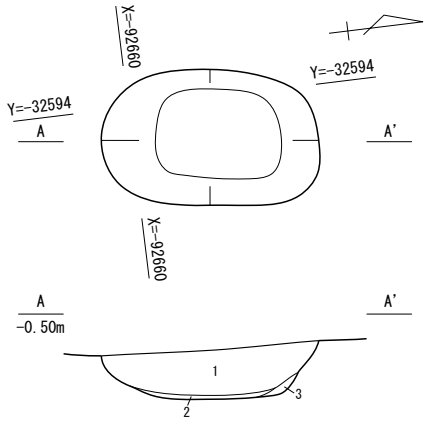
B-SK87



1　7.5YR6/1　褐灰色土　しまりなし　粘性ややあり
　　7.5YR3/3　暗褐色土粒を含む

0　(S=1/40)　1m

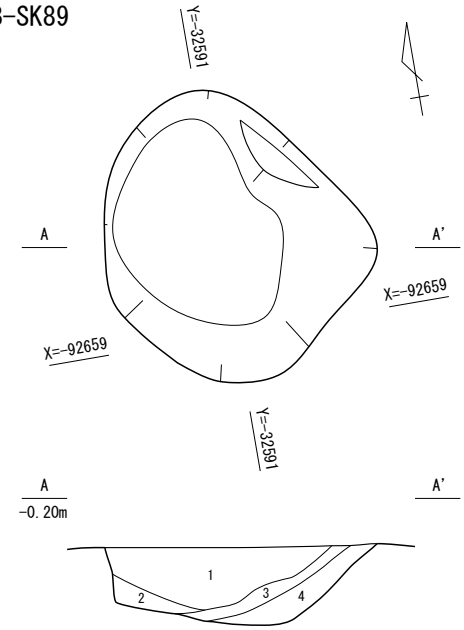
B-SK88



1　7.5YR5/1　褐灰色シルト　しまりややあり　粘性ややあり
　　10YR6/4　にぶい黄橙色土粒を含む
　　炭化物･焼土をわずかに含む　底に炭化物が層状に沈着する
2　2.5Y5/2　　暗灰黄色土　しまりなし　粘性ややあり
3　7.5YR5/2　灰褐色土　しまりなし　粘性ややあり

0　(S=1/40)　1m

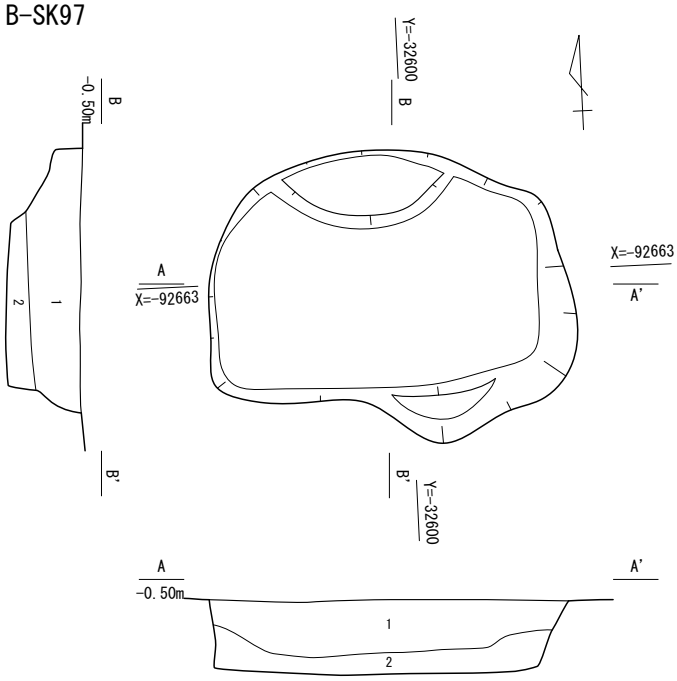
B-SK89



1　7.5YR5/2　灰褐色土　しまりややあり　粘性ややあり　10YR8/1　灰白色砂を含む
2　7.5YR6/1　褐灰色砂質土　しまりややあり　粘性ややあり
3　10YR7/1　　灰白色砂質土　しまりなし　粘性なし
4　7.5YR3/2　黒褐色土　しまりややあり　粘性ややあり
　　10YR6/8　　明黄褐色砂質土ブロックを含む

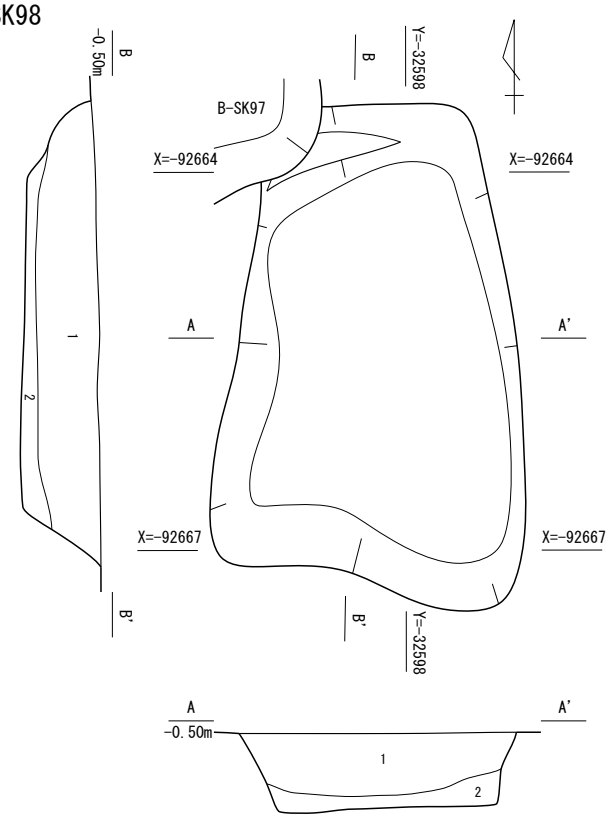
第30図　B-SK86～89平面図・断面図

B-SK97



1　7.5YR5/1　褐灰色シルト　しまりなし　粘性ややあり
　　10YR6/8　明黄褐色砂質土ブロックを含む　炭化物を含む　鉄分の沈着あり
2　2.5Y3/1　黒褐色土　しまりなし　粘性強い　2.5Y7/2　灰黄色粘土を含む

B-SK98



1　10YR7/1　灰白色シルト　しまりなし　粘性ややあり
　　7.5YR3/3　暗褐色土粒を含む
　　鉄分の沈着あり　下部は鉄分の沈着濃い
2　2.5Y6/2　灰黄色土　しまりなし　粘性強い　N5/　灰色砂が混じる

0　(S=1/60)　2m

第31図　B-SK97、SK98平面図・断面図

B-SK89（第30図、図版11）

Ｂ区中央部に位置し、Ｖ層上面で検出した。規模は長軸145cm、短軸127cm、深さ41cmを測る。平面形は不整形、断面形は２段の掘り込みを呈し、底面形状は不整形である。埋土は上から灰褐色土・褐灰色砂質土・灰白色砂質土・黒褐色土の４層である。遺物は灰釉陶器や山茶碗の碗、山茶碗や土師器の小皿が出土した。

B-SK97（第31図、図版11）

Ｂ区南西部に位置し、Ｖ層上面で検出した。規模は長軸283cm、短軸235cm、深さ59cmを測る。平面形は不整形、断面形は不整形を呈し、底面形状は平坦である。埋土は上から褐灰色シルト・黒褐色土の２層である。B-SK98とB-SK99より新しい。遺物は山茶碗の碗が出土した。

B-SK98（第31図、図版11）

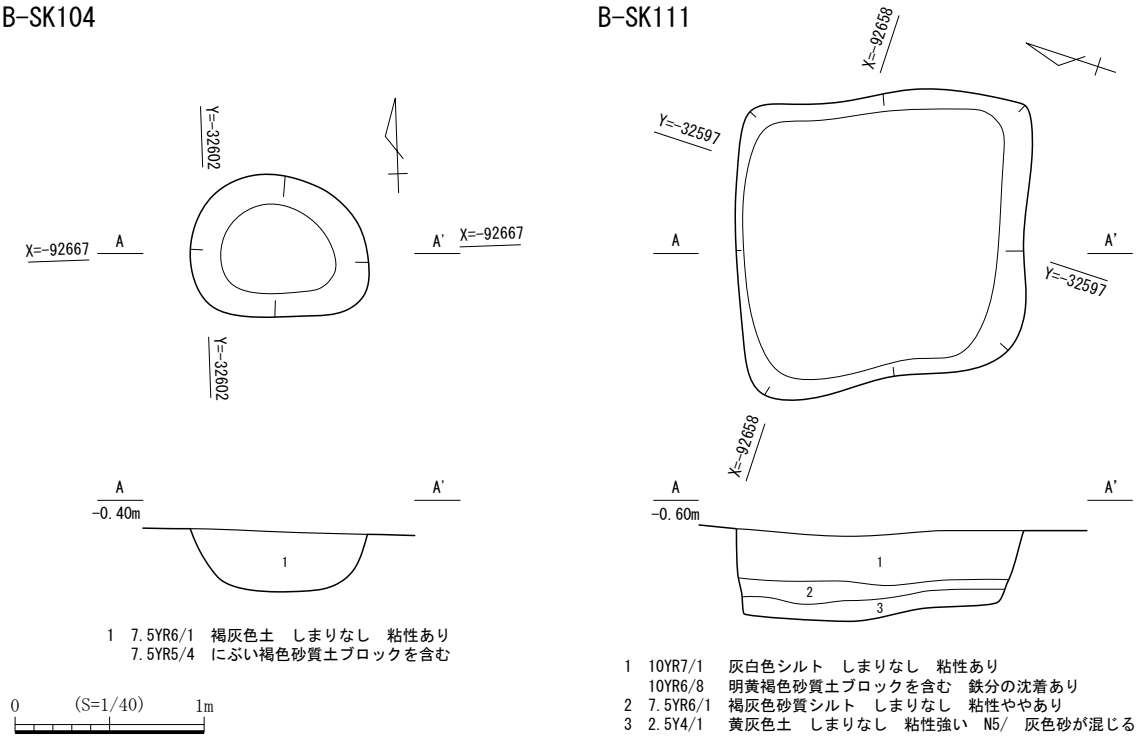
Ｂ区南西部に位置し、Ｖ層上面で検出した。規模は長軸399cm、短軸220cm、深さ63cmを測る。平面形は不整形、断面形は逆台形を呈し、底面形状は平坦である。埋土は上から灰白色シルト・灰黄色土の２層である。B-SK97より古い。遺物は須恵器の有台椀、山茶碗の碗が出土した。

B-SK104（第31図、図版12）

Ｂ区南西部に位置し、Ｖ層上面で検出した。長軸94cm、短軸75cm、深さ31cmを測る。平面形は円形、断面形は半円形、底面形状は円形を呈す。埋土は褐灰色土の単層である。遺物は山茶碗の碗が出土した。

B-SK111（第32図、図版12）

Ｂ区西部に位置し、Ｖ層上面で検出した。規模は長軸152cm、短軸150cm、深さ45cmを測る。平面形は方形、断面形は逆台形を呈し、底面形状は平坦である。埋土は上から灰白色シルト・褐灰色砂質シルト・黄灰色土の３層である。遺物は土師器等の小片が数点出土した。



第32図　B-SK104、SK111平面図・断面図

（４）柱穴・杭

B-SP10（第33図）

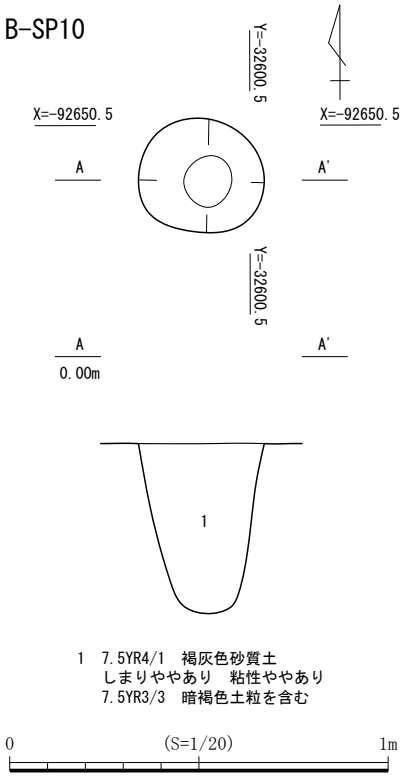
Ｂ区北西部に位置し、Ｖ層上面で検出した。長さ33cm、幅30cm、深さ44cmを測る。平面形は円形、断面形は半円形、底面形状は円形である。埋土は褐灰色砂質土の単層である。遺物は山茶碗の碗が出土している。

B-SP12（第34図、図版12）

Ｂ区北西部に位置し、Ｖ層上面で検出した。規模は長約33cm、短軸28cm、深さ22cmを測る。平面形は円形、断面形は逆台形を呈し、底面形状は円形である。埋土は褐灰色砂質土の単層である。ほぼ完形の山茶碗の碗が底面から出土した。その他、伊勢型鍋や土錘が出土した。

B-SP35（第34図、図版12）

Ｂ区北西部中央に位置し、Ｖ層上面、B-SD1の床面で検出した。規模は長軸22cm、短軸20cm、深さ16cmを測る。平面形は円形、断面形は半円形を呈する。埋土は褐灰色砂質土の単層である。完形の山茶碗の碗が底面から出土した。



第33図　B-SP10平面図・断面図

B-SP63（第34図、図版12）

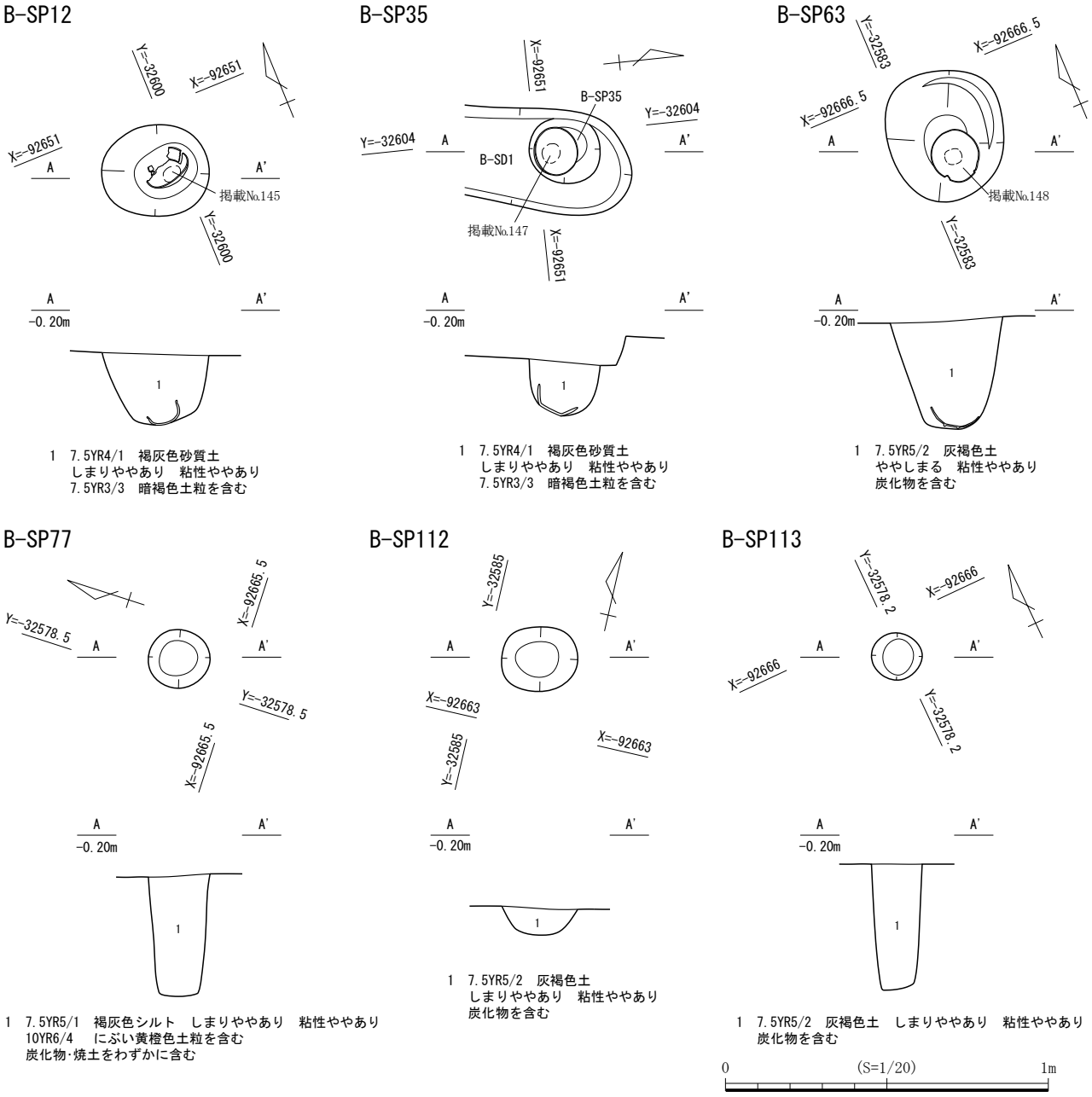
Ｂ区南東部に位置し、Ｖ層上面で検出した。規模は長軸40cm、短軸36cm、深さ21cmを測る。平面形は円形、断面形は逆台形を呈し、底面形状は平坦である。埋土は灰褐色土の単層である。ほぼ完形の山茶碗の碗が底面から出土した。

B-SP77（第34図、図版12）

Ｂ区南東部に位置し、Ｖ層上面で検出した。長さ19cm、幅18cm、深さ37cmを測る。平面形は円形、断面形は逆台形、底面形状は円形を呈す。埋土は褐灰色シルトの単層である。B-SD79より新しい。遺物は山茶碗の碗が出土した。

B-SP112（第34図、図版12）

Ｂ区中央よりやや東側に位置し、Ｖ層上面で検出した。長さ23cm、幅20cm、深さ７cmを測る。平面形は円形、断面形は逆台形、底面形状は円形を呈す。埋土は灰褐色土の単層である。遺物は須恵器の盤が出土した。



第34図　B-SP12、SP35、SP63、SP77、SP112、SP113平面図・断面図

B-SP113（第34図、図版12）

Ｂ区南東部に位置し、Ｖ層上面で検出した。長さ16cm、幅14cm、深さ39cmを測る。平面形は円形、断面形は逆台形、底面形状は円形を呈す。埋土は灰褐色土の単層である。B-SD79より新しい。遺物は山茶碗の小皿が出土した。

B-SP124（第35図、図版13）

Ｂ区北西部に位置し、Ｖ層下面で検出した。規模は長軸68cm、幅28cm、深さ32cmを測る。平面形は不整形、断面形は不整形を呈し、底面形状は円形である。埋土は上から褐灰色砂質土・褐灰色シルトの２層である。遺物は山茶碗の小片が出土した。

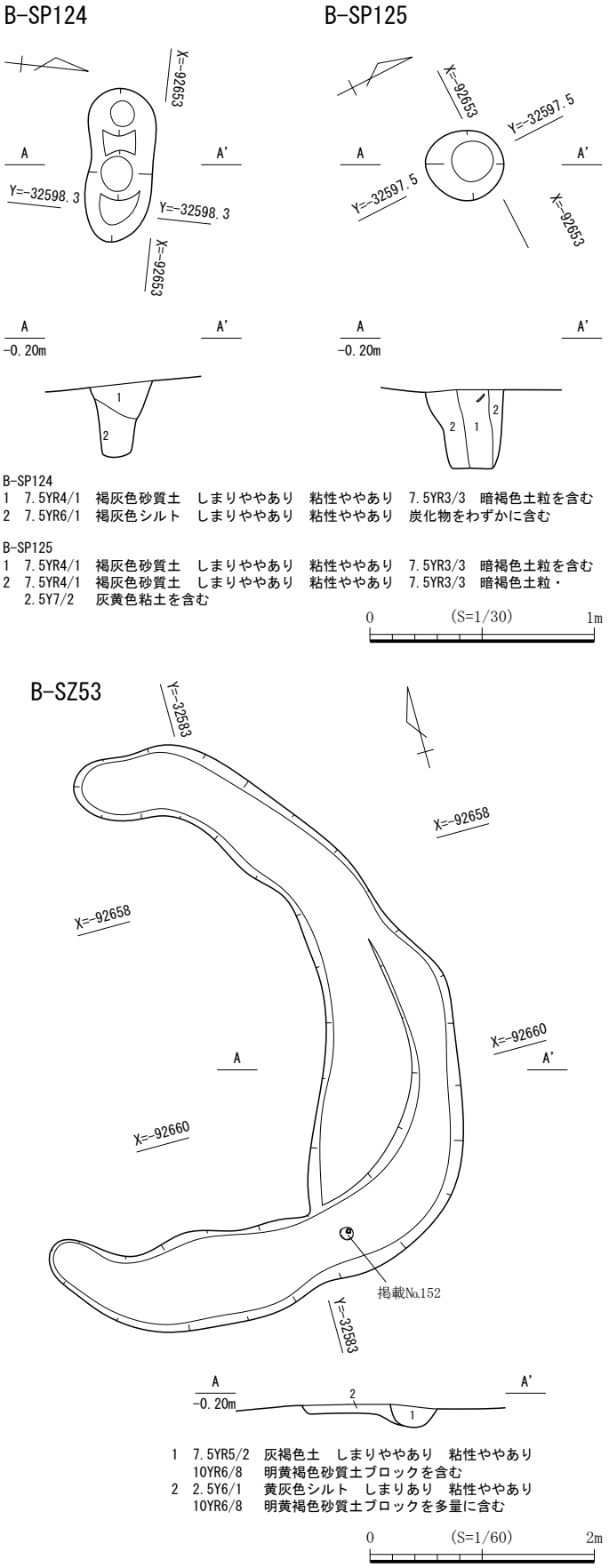
B-SP125（第35図、図版13）

Ｂ区北西部に位置し、Ｖ層上面で検出した。規模は長軸35cm、幅31cm、深さ35cmを測る。平面形は円形、断面形は逆台形を呈し、底面形状は平坦である。埋土は２種の褐灰色砂質土からなる２層である。１層は柱根の痕跡と考えられる。遺物は土師器や山茶碗等の小片が出土した。

（５）古　墳

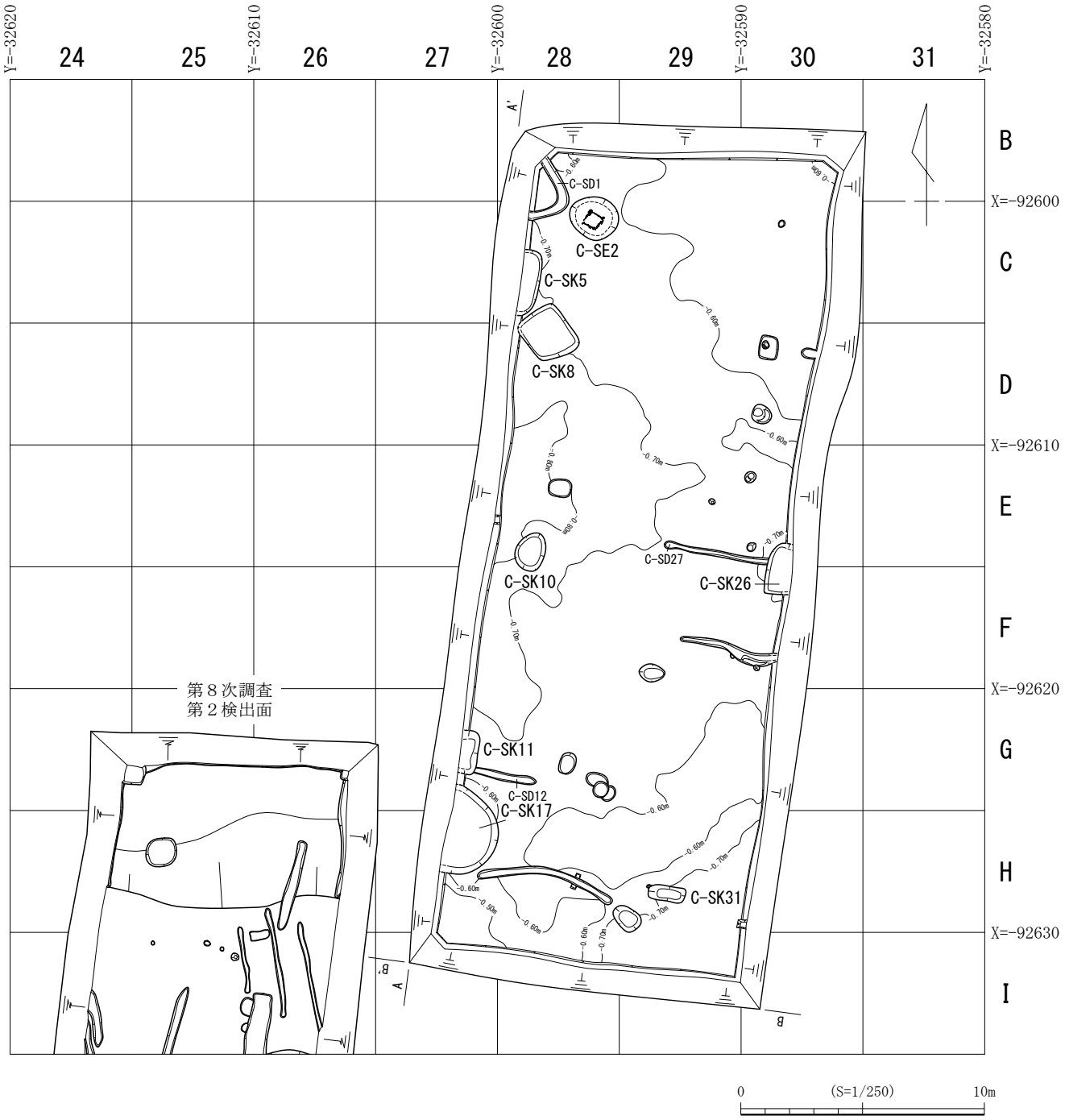
B-SZ53（第35図、図版13）

Ｂ区東部に位置し、Ｖ層上面で検出した。規模は延長8.65m、幅は0.57～1.34m、深さ19cmを測る。直径約4.2mの半円形に延びる溝状遺構で、断面形は半円形を呈す。埋土は灰褐色土と黄灰白シルトの２層である。遺物は須恵器の高杯が逆向きに立った状態で出土した。

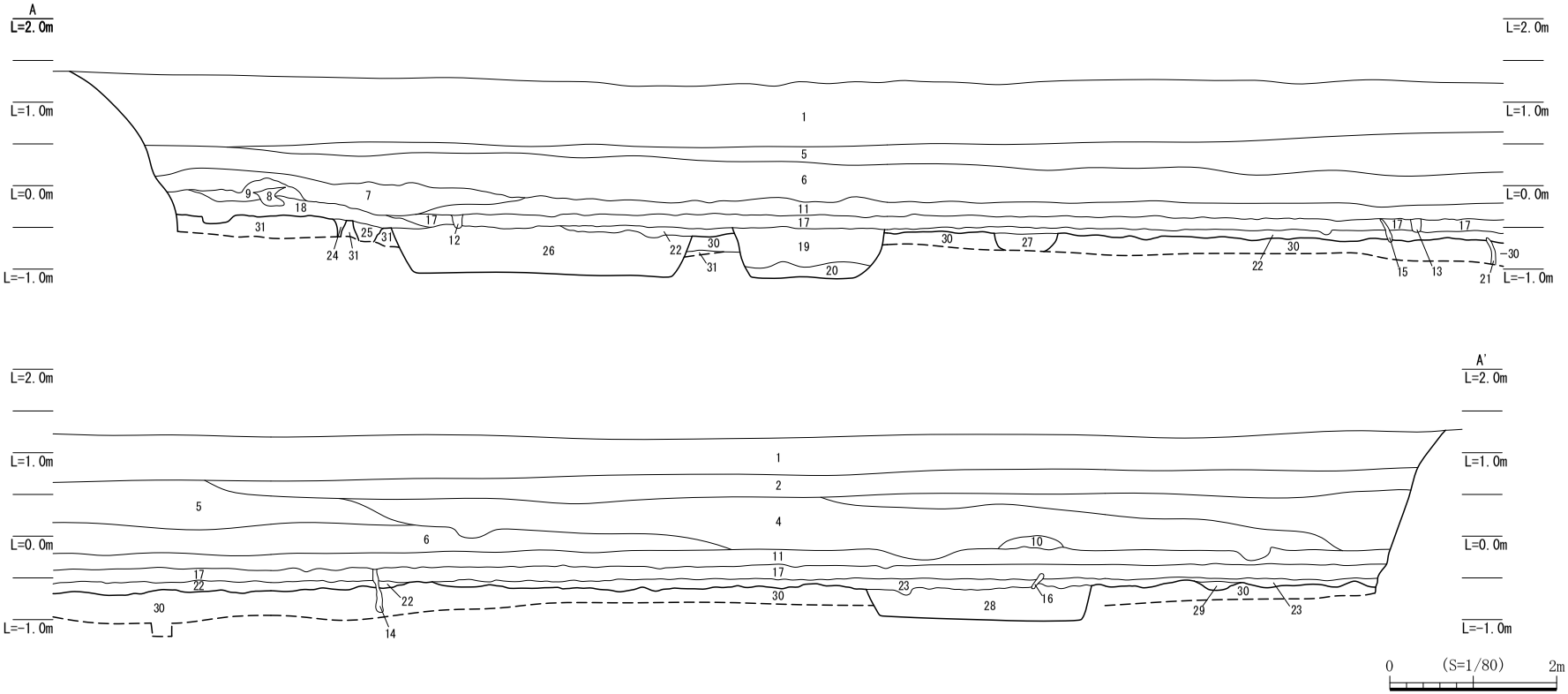


第35図　B-SP124、SP125、SZ53平面図・断面図

Ｃ区

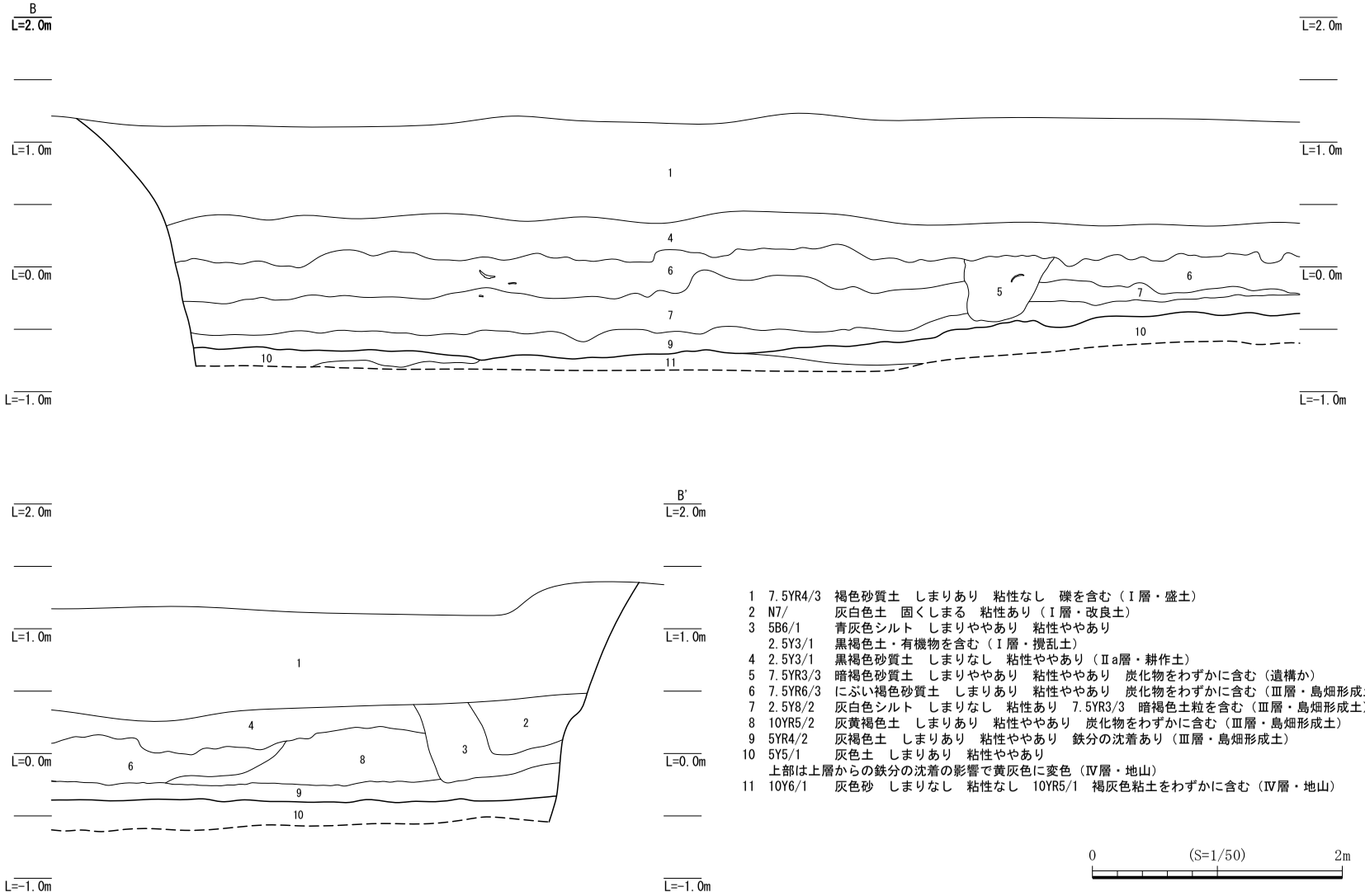


第36図　Ｃ区　全体図



1　7.5YR4/3　褐色砂質土　しまりあり　粘性なし　礫を含む　（Ⅰ層・盛土）
2　7.5YR5/4　にぶい褐色砂質土　固くしまる　粘性なし　礫を多く含む　（Ⅰ層・盛土）
3　10YR3/2　黒褐色土　しまりあり　粘性ややあり　礫を含む　（Ⅰ層・盛土）
4　10YR6/4　にぶい黄橙色砂礫土　固くしまる　粘性なし　（Ⅰ層・盛土）
5　10YR3/2　黒褐色土　固くしまる　粘性ややあり　礫を含む　（Ⅰ層・盛土）
6　N7/　灰白色土　固くしまる　粘性あり　（Ⅰ層・改良土）
7　5B6/1　青灰色シルト　しまりややあり　粘性ややあり
　2.5Y3/1　黒褐色土・有機物を含む（Ⅰ層・攪乱土）
8　10Y6/1　灰色シルト　しまりややあり　粘性ややあり　炭化物をわずかに含む　（Ⅰ層・攪乱土）
9　10YR5/2　灰黄褐色土　しまりあり　粘性ややあり　炭化物をわずかに含む　（Ⅰ層・攪乱土）
10　2.5Y3/1　黒褐色土　しまりなし　粘性あり　やや砂質　（Ⅰ層・攪乱土）
11　2.5Y3/1　黒褐色土　しまりなし　粘性あり　やや砂質　上部に有機物を含む層あり　（Ⅱa層・耕作土）
12　2.5Y4/1　黄灰色シルト　しまりなし　粘性なし　（根痕）
13　2.5Y4/1　黄灰色シルト　しまりなし　粘性なし　（根痕）
14　2.5Y4/1　黄灰色シルト　しまりなし　粘性なし　炭化物をわずかに含む　（根痕）
15　2.5Y4/1　黄灰色シルト　しまりなし　粘性なし　炭化物をわずかに含む　（根痕）
16　2.5Y4/1　黄灰色シルト　しまりなし　粘性なし　（根痕）
17　5Y5/2　灰オリーブ色粘質シルト　しまりあり　粘性ややあり　（Ⅱb層・床土）
18　5YR4/2　灰褐色土　しまりあり　粘性ややあり　鉄分の沈着あり　（Ⅲ層・島畑形成土）
19　10YR7/1　灰白色砂質シルト　しまりなし　粘性ややあり　（C-SK11 1層）
20　5Y5/1　灰色砂質シルト　しまりなし　粘性あり　（C-SK11 2層）
21　2.5Y4/1　黄灰色シルト　しまりなし　粘性なし　炭化物をわずかに含む　（根痕）
22　2.5Y6/2　灰黄色砂質シルト　しまりややあり　粘性ややあり　（漸移層）
23　2.5Y6/1　黄灰色砂質シルト　しまりややあり　粘性ややあり　（漸移層）
24　5YR4/2　灰褐色土　しまりあり　粘性ややあり　（根痕か）
25　5YR4/2　灰褐色土　しまりあり　粘性ややあり　（根痕か）
26　7.5YR6/2　灰褐色シルト　しまりなし　粘性ややあり　5YR4/4　にぶい赤褐色砂質土ブロックを含む　（C-SK17）
27　7.5YR6/1　褐灰色シルト　しまりややあり　粘性ややあり　（遺構か）
28　7.5YR6/1　褐灰色シルト　しまりややあり　粘性ややあり　7.5YR3/3　暗褐色土粒を含む　（C-SK5）
29　7.5YR6/1　褐灰色シルト　しまりややあり　粘性ややあり　7.5YR3/3　暗褐色土粒を含む　（C-SD1）
30　2.5Y6/1　黄灰色砂質シルト　しまりあり　粘性ややあり　鉄分を多く含む　（Ⅳ層・地山）
31　5Y5/1　灰色土　しまりあり　粘性ややあり
　上部は上層からの鉄分の沈着の影響で黄灰色に変色　（Ⅳ層・地山）

第37図　C区　西壁土層断面図



1　7.5YR4/3　褐色砂質土　しまりあり　粘性なし　礫を含む（Ⅰ層・盛土）
2　N7/　灰白色土　固くしまる　粘性あり（Ⅰ層・改良土）
3　5B6/1　青灰色シルト　しまりややあり　粘性ややあり
　2.5Y3/1　黒褐色土・有機物を含む（Ⅰ層・攪乱土）
4　2.5Y3/1　黒褐色砂質土　しまりなし　粘性ややあり（Ⅱa層・耕作土）
5　7.5YR3/3　暗褐色砂質土　しまりややあり　粘性ややあり　炭化物をわずかに含む（遺構か）
6　7.5YR6/3　にぶい褐色砂質土　しまりあり　粘性ややあり　炭化物をわずかに含む（Ⅲ層・島畑形成土）
7　2.5Y8/2　灰白色シルト　しまりなし　粘性あり　7.5YR3/3　暗褐色土粒を含む（Ⅲ層・島畑形成土）
8　10YR5/2　灰黄褐色土　しまりあり　粘性ややあり　炭化物をわずかに含む（Ⅲ層・島畑形成土）
9　5YR4/2　灰褐色土　しまりあり　粘性ややあり　鉄分の沈着あり（Ⅲ層・島畑形成土）
10　5Y5/1　灰色土　しまりあり　粘性ややあり
　上部は上層からの鉄分の沈着の影響で黄灰色に変色（Ⅳ層・地山）
11　10Y6/1　灰色砂　しまりなし　粘性なし　10YR5/1　褐灰色粘土をわずかに含む（Ⅳ層・地山）

0　(S=1/50)　2m

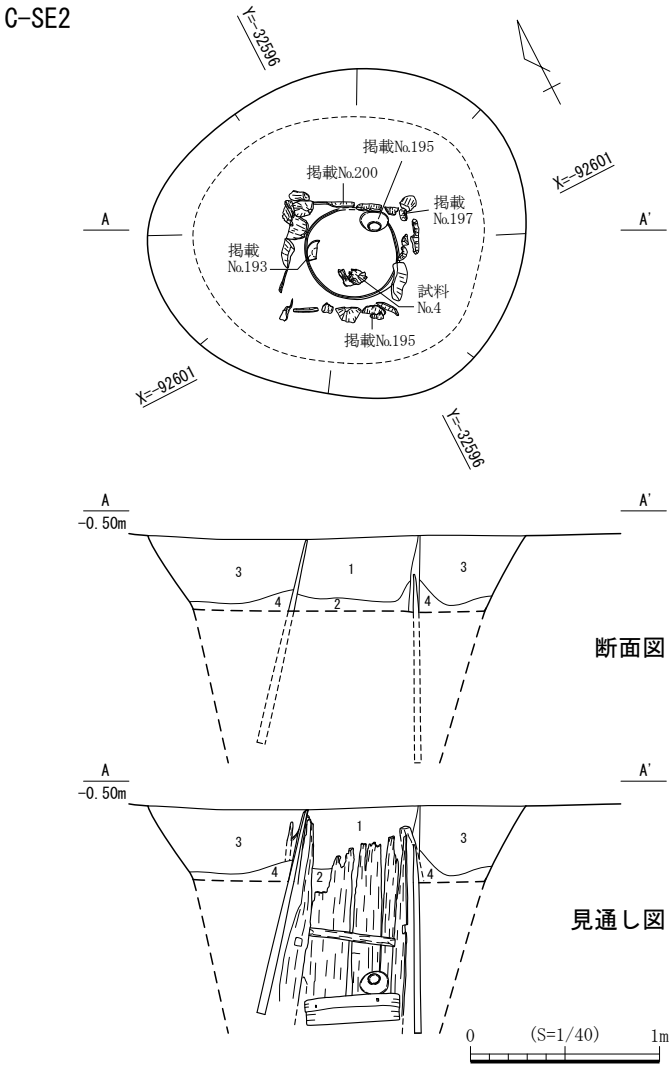
第38図　C区　南壁土層断面図

６．Ｃ区の遺構

（１）井戸

C-SE2（第39図、図版15）

Ｃ区北西部に位置し、Ⅳ層上面で検出した。掘方を含めた規模は長軸200cm、短軸174cmを測り、平面形は円形、断面形は箱形を呈する。井戸枠の平面形は方形で、やや歪みが生じるが両軸65cm、深さ120cmを測り、井戸枠の軸方向はN-62°-Wの方角を示す。埋土は掘方が灰褐色シルト（第３層）、褐灰色粘質シルト（第４層）の２層、井戸枠内は褐灰色砂質土、灰色粘質シルトの２層で、底部には曲物が残存する。深さ35cm掘り下げた所で湧水があったため掘削を中止し、以下は調査終了後に重機を使用して井戸枠の抜き取りを行った。遺物は掘方から須恵器の有台椀、井戸枠内から灰釉陶器の椀が出土した。深さ98cmの所で曲物を確認した。曲物内で須恵器の無台椀が出土した。他に、ヒョウタン仲間の果実の一部も確認している。数点ではあるが、井戸枠に使用されていた木材４点と曲物の樹種同定（第５章第１節２）を行ったところ、全てヒノキであることがわかった。



1　7.5YR6/1　褐灰色砂質土　しまりややあり　粘性ややあり　7.5YR3/3　暗褐色土粒を含む
2　5Y4/1　灰色粘質シルト　しまりなし　粘性強い
3　7.5YR6/2　灰褐色シルト　しまりなし　粘性ややあり　7.5YR3/3　暗褐色土粒を含む
4　5YR5/1　褐灰色粘質シルト　しまりなし　粘性ややあり

第39図　C-SE2平面図・断面図

（２）土坑

C-SK5（第40図、図版15）

Ｃ区北西部に位置し、Ⅳ層上面で検出した。規模は長軸273cm、検出した短軸77cm、深さ30cmを測り、西側は調査区外へ延びている。平面形は方形、断面形は逆台形を呈し、底面形状は平坦である。埋土は褐灰色シルトの単層である。遺物は出土しなかった。

C-SK8（第40図、図版16）

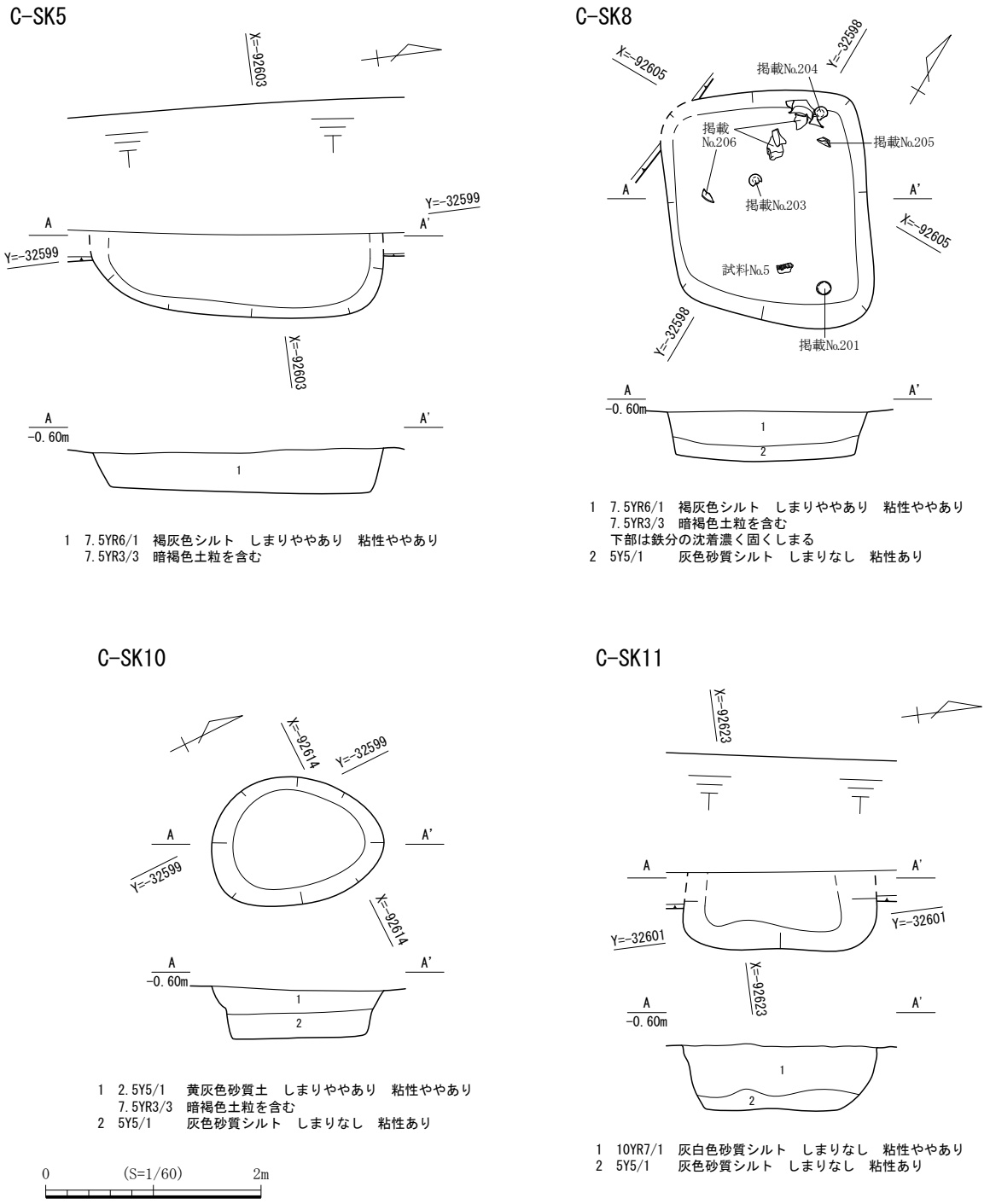
Ｃ区北西部に位置し、Ⅳ層上面で検出した。規模は長軸216cm、短軸185cm、深さ47cmを測る。平面形は方形、断面形は逆台形を呈し、底面形状は平坦である。埋土は上から褐灰色シルト・灰色砂質シルトの２層である。遺物はウマの歯（第５章第１節５）や須恵器の甕、蓋、杯蓋、有台椀、無台椀も出土している。

C-SK10（第40図、図版15）

Ｃ区中央部西側に位置し、Ⅳ層上面で検出した。規模は長軸160cm、短軸120cm、深さ47cmを測る。平面形は楕円形、断面形は逆台形を呈し、底面形状は平坦である。埋土は上から黄灰色砂質土・灰色砂質シルトの２層である。遺物は出土しなかった。

C-SK11（第40図、図版16）

Ｃ区南西部に位置し、Ⅳ層上面で検出した。規模は長軸180cm、検出した短軸72cm、深さ49cmを測り、西側は調査区外へ延びている。平面形は方形、断面形は逆台形を呈し、底面形状は平坦である。埋土は上から灰白色砂質シルト・灰色砂質シルトの２層である。C-SD12より新しい。遺物は出土しなかった。



第40図　C-SK5、SK8、SK10、SK11平面図・断面図

C-SK17（第41図、図版16）

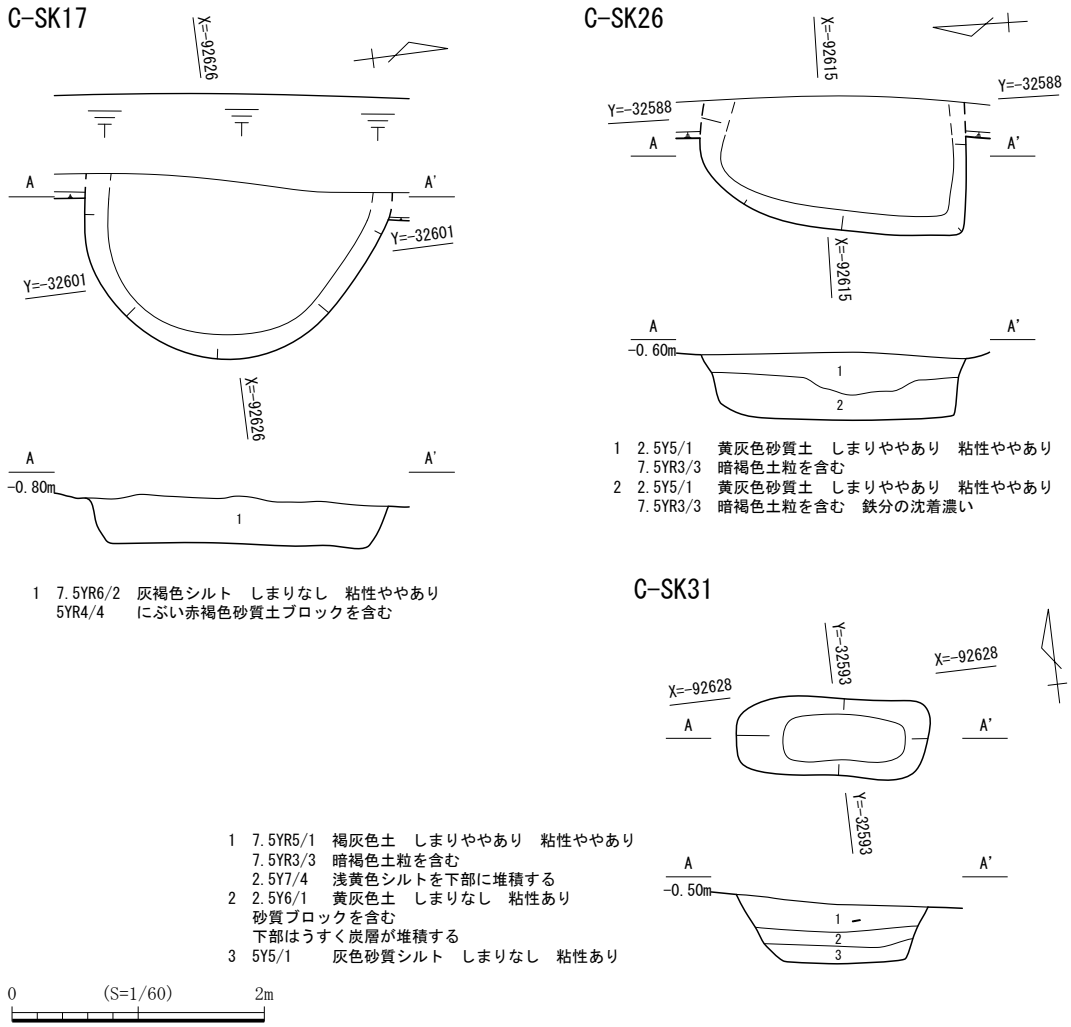
Ｃ区南西部に位置し、Ⅳ層上面で検出した。規模は長軸361cm、検出した短軸212cm、深さ35cmを測り、西側は調査区外へ延びる。平面形は円形、断面形は皿状を呈し、底面形状は平坦である。埋土は灰褐色シルトの単層である。遺物は出土しなかった。

C-SK26（第41図、図版16）

Ｃ区中央部東側に位置し、Ⅳ層上面で検出した。規模は長軸212cm、短軸109cm、深さ54cmを測り、東側は調査区外へ延びる。平面形は方形、断面形は逆台形を呈し、底面形状は平坦である。埋土は２種の黄灰色砂質土からなる２層である。C-SD27より新しい。遺物は山茶碗の碗が出土した。

C-SK31（第41図、図版16）

Ｃ区南部東側に位置し、Ⅳ層上面で検出した。規模は長軸152cm、短軸62cm、深さ48cmを測る。平面形は方形、断面形は逆台形を呈し、底面形状は平坦である。埋土は上から褐灰色土・黄灰色土・灰色砂質シルトの３層である。C-SP32より新しい。遺物は青磁の輪花碗、山茶碗の碗が出土した。また種実も出土しており、自然科学分析の結果、モモの核であることがわかった（第５章第１節２）。

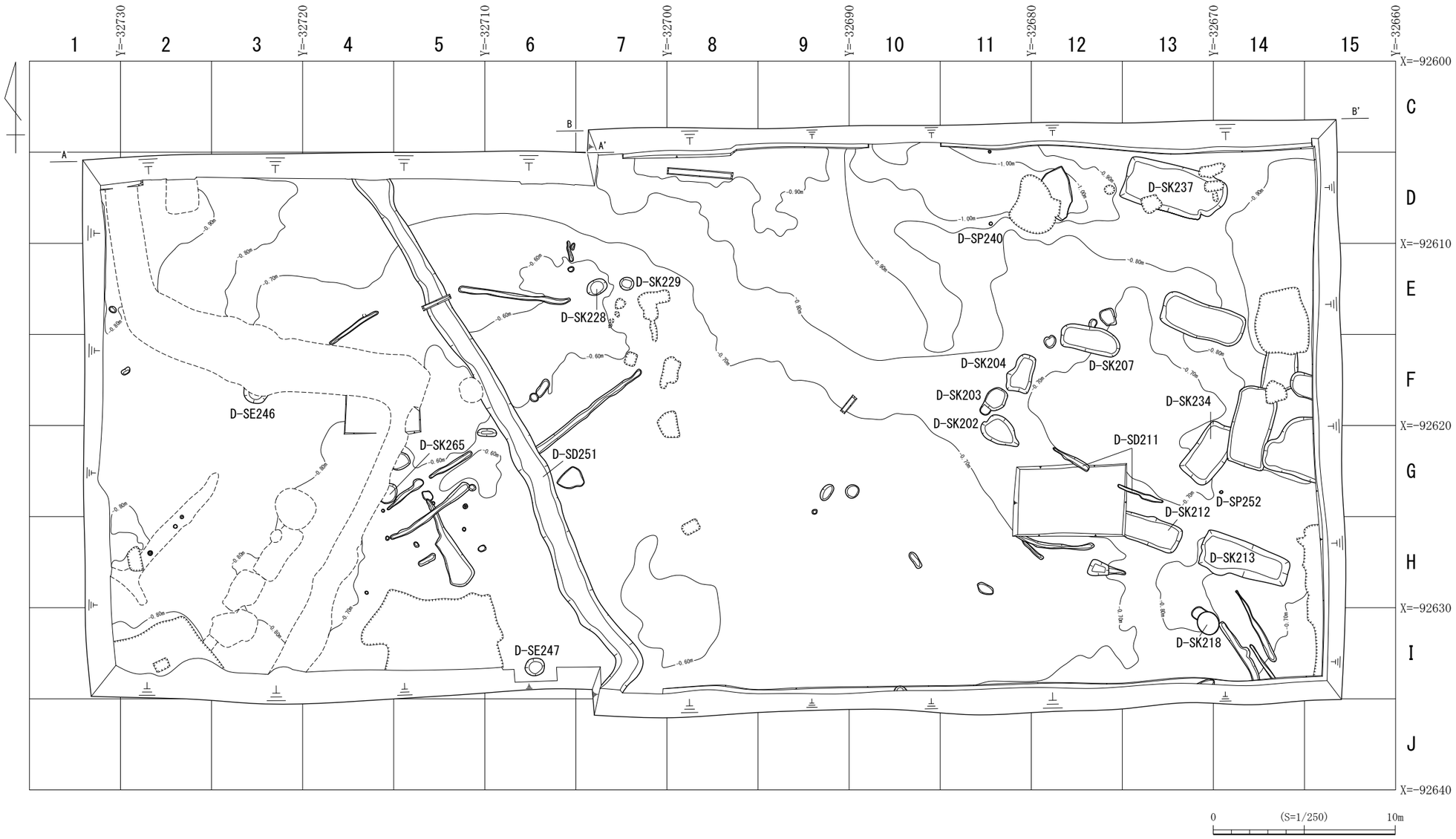


第41図　C-SK17、SK26、SK31平面図・断面図

D区（Ⅴ層上面）

第42図　Ｄ区　全体図（第１遺構面）

D区（Ⅵ層上面）

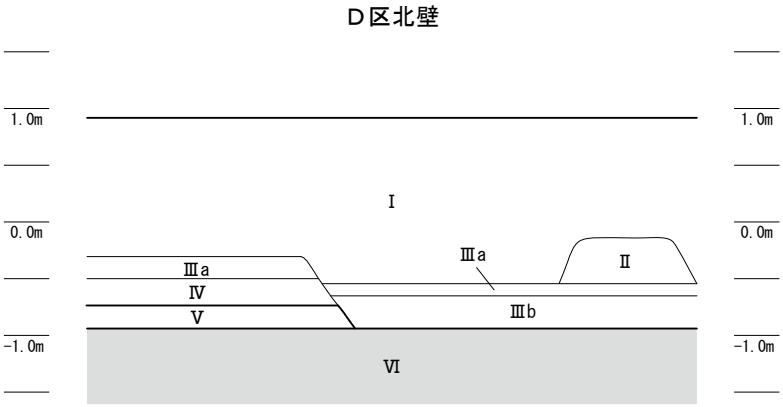


第43図　Ｄ区　全体図（第２遺構面）

第２節　第11次調査

１．基本土層（第 44 図）

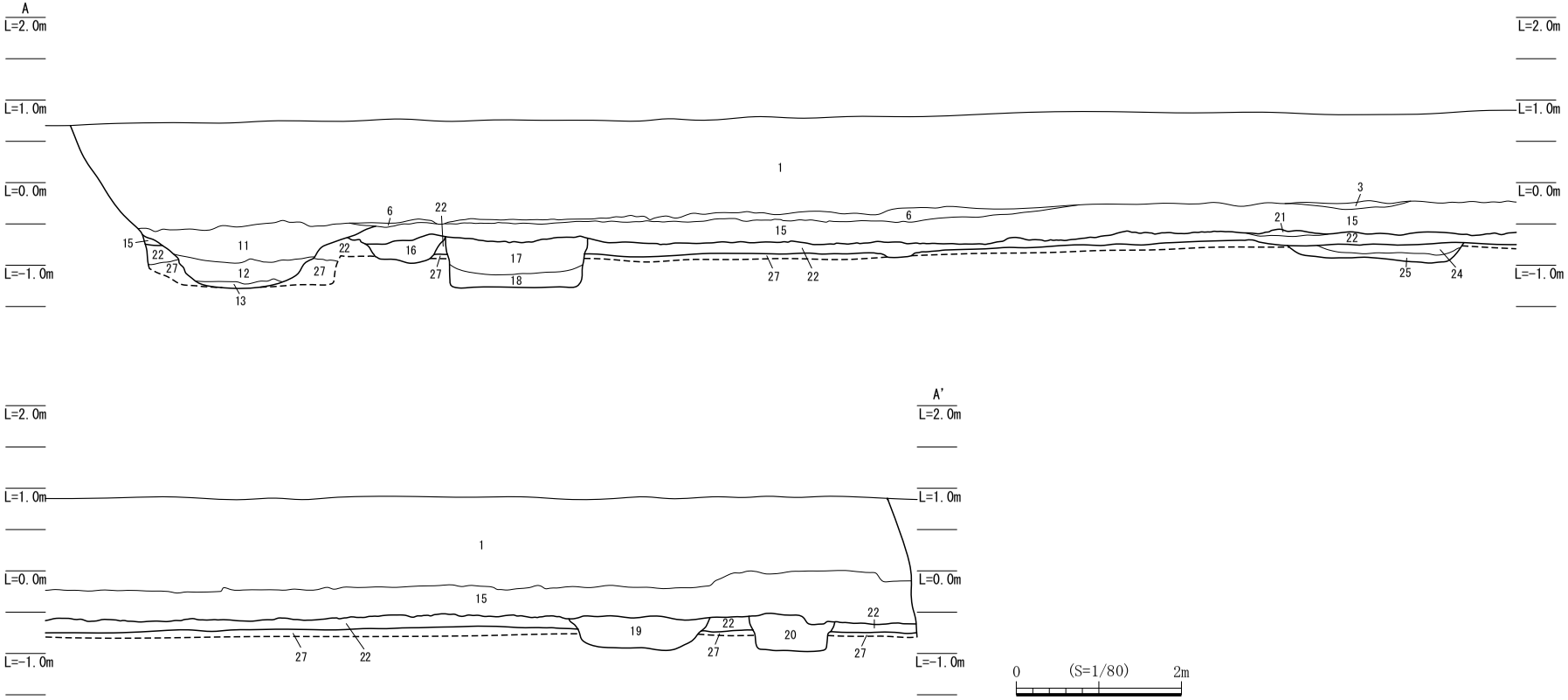
以下に記す層位は、各調査区の壁面において確認したものである。本調査区の報告の土層の表記については、全体の層位は、ローマ数字の大文字（例:Ⅰ層、Ⅱ層）を使用した。また調査区ごとに解釈を行った層は算用数字（例:１層、２層）を使用した。各調査区の基本層位は以下のとおりである。



	D区
現代の造成土	Ⅰ層
道路状盛土（近現代）	Ⅱ層
耕作土・水田耕作土（近現代）	Ⅲａ層
水田床土（近現代）	Ⅲｂ層
島畑形成土（中世）	Ⅳ層
島畑形成土（古代）	Ⅴ層
自然堆積層（地山）	Ⅵ層

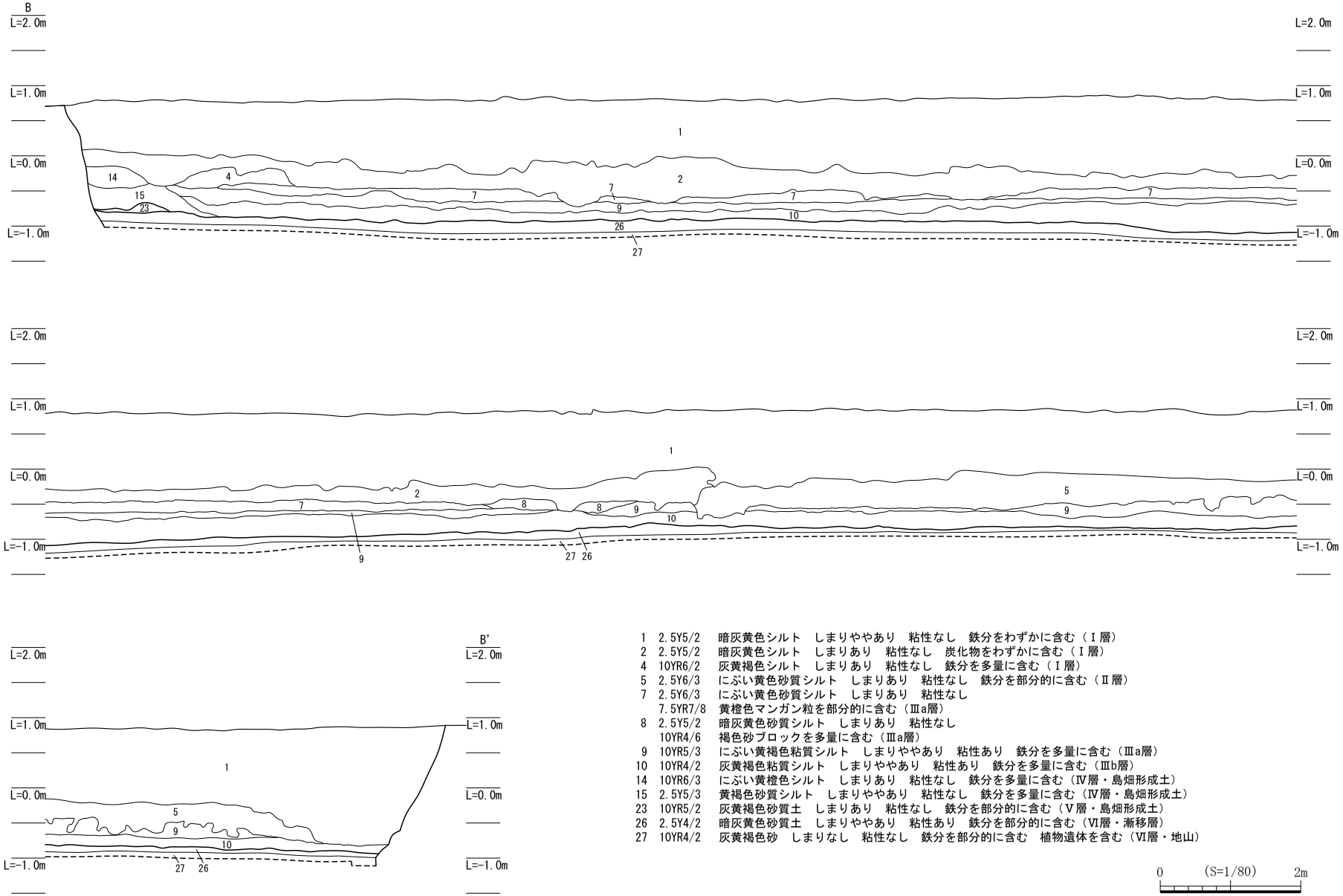
第44図　第11次調査　基本土層図

Ⅰ層は本事業による造成土である。全体にわたって礫や石灰を多く含むいわゆるガラ土で、現代の地盤改良に用いられた土が主体となっている。Ⅱ層は造成前まで存在していた現代の道路の盛土である。Ⅲa層（第45・46図６～９層）は黄色系シルトを主体としている。造成前まで使用されていた水田もしくは畑の耕作土である。Ⅲa層の下位に水田床土をなすⅢｂ層（第46図10層）が存在する。Ⅳ層（第45・46図14～15層）は、盛土された島畑形成土である。標高-0.5m付近で本層の上面を確認しており、室町時代以降と推定されるD-SD1が確認されている。このことより室町時代以前に盛土されたものと考えられる。Ⅴ層（第45・46図21～23層）は島畑形成土である。標高-0.75～-0.65m付近で本層の上面を確認し、ここを第１遺構面とした。全体的に鉄分を含む黄褐色系砂質土やほぼ同色のシルトからなる。Ⅵ層（第45・46図26～27層）は灰黄褐色砂からなり、自然堆積の地山層である。標高-1.0～-0.8m付近で本層の上面を確認しており、ここを第２遺構面とした。地山層自体に遺物は含まれていない。



1　2.5Y5/2　暗灰黄色シルト　しまりややあり　粘性なし　鉄分をわずかに含む（Ⅰ層）
2　2.5Y5/2　暗灰黄色シルト　しまりあり　粘性なし　炭化物をわずかに含む（Ⅰ層）
3　10YR4/3　にぶい黄褐色シルト　しまりあり　粘性ややあり
　7.5YR7/8 黄橙色マンガン粒・炭化物をわずかに含む（Ⅰ層）
6　10YR7/3　にぶい黄橙色シルト　しまりあり　粘性なし　鉄分を部分的に含む（Ⅲa層）
11　7.5YR6/1 褐灰色シルト　しまりなし　粘性なし
　7.5YR7/8 黄橙色マンガン粒・7.5R6/1　赤灰色炭化物をわずかに含む（D-SD1 1層）
12　10YR5/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　植物遺体を含む（D-SD1 2層）
13　10YR3/1　黒褐色粘土　しまりあり　粘性あり　木製品・植物遺体を含む（D-SD1 3層）
15　2.5Y5/3　黄褐色砂質シルト　しまりややあり　粘性なし　鉄分を多量に含む（Ⅳ層・島畑形成土）
16　7.5YR6/1 褐灰色砂質シルト　しまりなし　粘性なし　7.5YR7/6　橙色砂質土ブロックを多量に含む（D-SK253）
17　7.5YR5/2 灰褐色土　しまりややあり　粘性ややあり　7.5YR7/6　橙色砂質土ブロックをわずかに含む（D-SK2 1層）
18　7.5YR6/1 褐灰色粘土　しまりなし　粘性あり　7.5YR3/3　暗褐色土粒を含む（D-SK2 2層）
19　7.5YR6/1 褐灰色砂質シルト　しまりややあり　粘性なし
　7.5YR7/6 橙色砂質土ブロック・鉄分をわずかに含む（D-SK255）
20　7.5YR7/1 明褐灰色砂質シルト　しまりややあり　粘性なし
　7.5YR7/6 橙色砂質土ブロックをわずかに含む（D-SK254）
21　10YR5/4　にぶい黄褐色砂質土　しまりややあり　粘性なし　鉄分を多量に含む（Ⅴ層・島畑形成土）
22　2.5Y5/2　暗灰黄色砂質シルト　しまりあり　粘性ややあり　鉄分を多量に含む（Ⅴ層・島畑形成土）
24　10YR5/3　にぶい黄褐色シルト　しまりなし　粘性なし
　10YR5/6　黄褐色シルトブロックをわずかに含む（D-SD251 1層）
25　10YR5/2　灰黄褐色シルト　しまりややあり　粘性ややあり
　10YR6/2　灰黄褐色シルトブロックをわずかに含む（D-SD251 2層）
27　10YR4/2　灰黄褐色砂　しまりなし　粘性なし　鉄分を部分的に含む。植物遺体を含む（Ⅵ層・地山）

第45図　Ｄ区　北壁土層断面図１



1　2.5Y5/2　暗灰黄色シルト　しまりややあり　粘性なし　鉄分をわずかに含む（Ⅰ層）
2　2.5Y5/2　暗灰黄色シルト　しまりあり　粘性なし　炭化物をわずかに含む（Ⅰ層）
4　10YR6/2　灰黄褐色シルト　しまりあり　粘性なし　鉄分を多量に含む（Ⅰ層）
5　2.5Y6/3　にぶい黄色砂質シルト　しまりあり　粘性なし　鉄分を部分的に含む（Ⅱ層）
7　2.5Y6/3　にぶい黄色砂質シルト　しまりあり　粘性なし
　　7.5YR7/8　黄橙色マンガン粒を部分的に含む（Ⅲa層）
8　2.5Y5/2　暗灰黄色砂質シルト　しまりあり　粘性なし
　　10YR4/6　褐色砂ブロックを多量に含む（Ⅲa層）
9　10YR5/3　にぶい黄褐色粘質シルト　しまりややあり　粘性あり　鉄分を多量に含む（Ⅲa層）
10　10YR4/2　灰黄褐色粘質シルト　しまりややあり　粘性あり　鉄分を多量に含む（Ⅲb層）
14　10YR6/3　にぶい黄橙色シルト　しまりあり　粘性なし　鉄分を多量に含む（Ⅳ層・島畑形成土）
15　2.5Y5/3　黄褐色砂質シルト　しまりややあり　粘性なし　鉄分を多量に含む（Ⅳ層・島畑形成土）
23　10YR5/2　灰黄褐色砂質土　しまりあり　粘性なし　鉄分を部分的に含む（Ⅴ層・島畑形成土）
26　2.5Y4/2　暗灰黄色砂質土　しまりややあり　粘性あり　鉄分を部分的に含む（Ⅵ層・漸移層）
27　10YR4/2　灰黄褐色砂　しまりなし　粘性なし　鉄分を部分的に含む　植物遺体を含む（Ⅵ層・地山）

0　(S=1/80)　2m

第46図　Ｄ区　北壁土層断面図２

２．Ｄ区の遺構（第１遺構面）

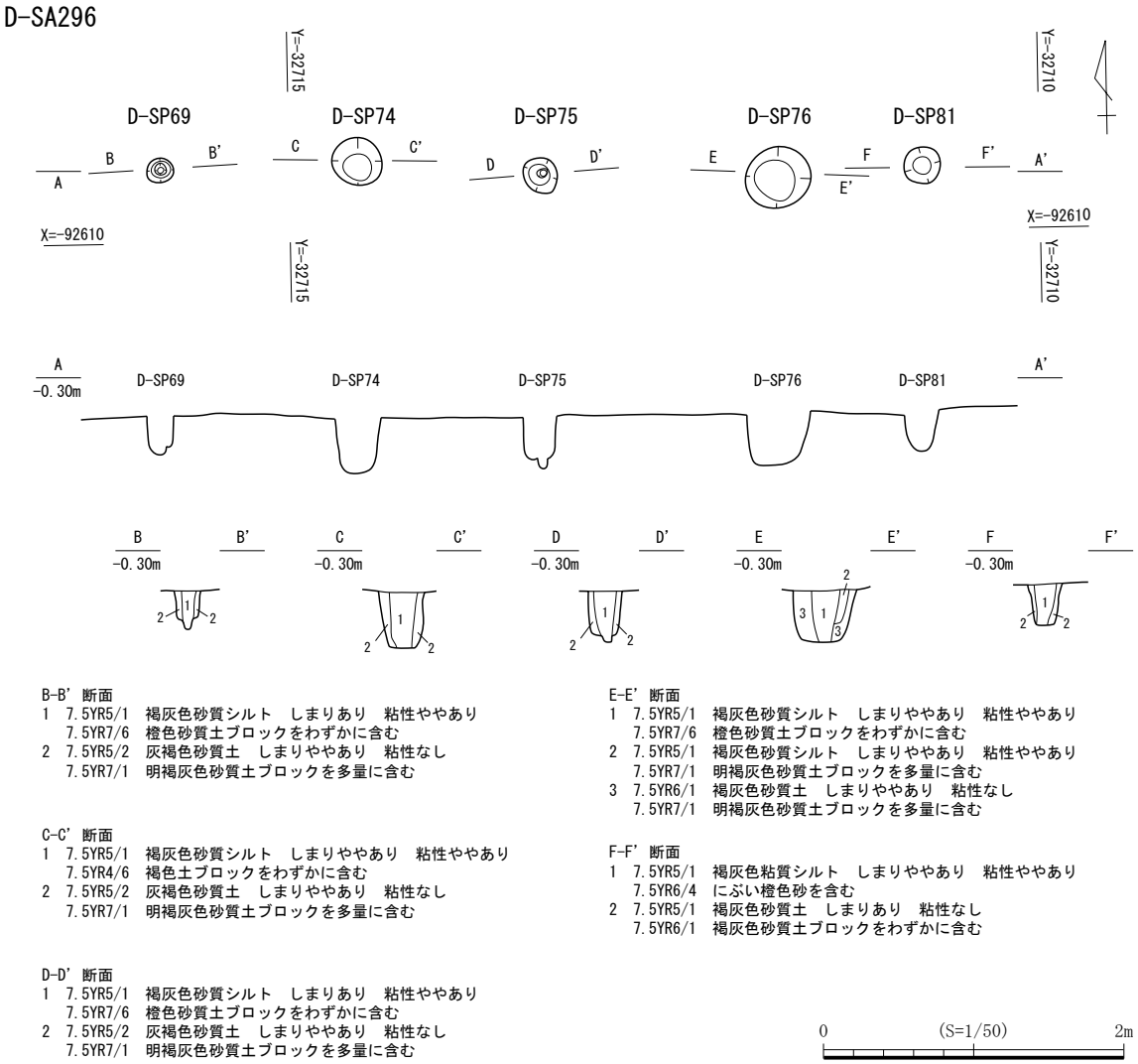
（１）柵

D-SA296（SP69、SP74～76、SP81）（第47図、図版19）

Ｄ区北部に位置し、Ｖ層上面で検出した。主軸はほぼ東西方向に一致する。確認された範囲では８基のピットで構成されている。ピットは直径18～34㎝、深さ14～37㎝の範囲に収まる。いずれにも柱痕と見られる堆積状況は確認できなかった。法量および埋土に共通性がみられることから一連の遺構と推定でき、東西方向に主軸を持つ柵であると考えた。遺物は大部分が小片のため器種の判別が不能である。

D-SA297（D-SP71、SP77、SP87）（第48図、図版19）

Ｄ区北部に位置し、D-SA296に沿うようにＶ層上面で検出した。確認されている範囲では３基のピットで構成されている。主軸はＥ－５°－Ｓ方向を示す。ピットは直径23～25㎝、深さ25～30㎝の範囲に収まる。いずれにも柱痕と見られる堆積状況は確認できなかった。法量および埋土に共通性がみられることから一連の遺構と推定でき、東西方向に主軸を持つ柵であると考えた。遺物はいずれも小片のため器種の判別が不能である。



B-B' 断面
1　7.5YR5/1　褐灰色砂質シルト　しまりあり　粘性ややあり
　　7.5YR7/6　橙色砂質土ブロックをわずかに含む
2　7.5YR5/2　灰褐色砂質土　しまりややあり　粘性なし
　　7.5YR7/1　明褐灰色砂質土ブロックを多量に含む

C-C' 断面
1　7.5YR5/1　褐灰色砂質シルト　しまりややあり　粘性ややあり
　　7.5YR4/6　褐色土ブロックをわずかに含む
2　7.5YR5/2　灰褐色砂質土　しまりややあり　粘性なし
　　7.5YR7/1　明褐灰色砂質土ブロックを多量に含む

D-D' 断面
1　7.5YR5/1　褐灰色砂質シルト　しまりあり　粘性ややあり
　　7.5YR7/6　橙色砂質土ブロックをわずかに含む
2　7.5YR5/2　灰褐色砂質土　しまりややあり　粘性なし
　　7.5YR7/1　明褐灰色砂質土ブロックを多量に含む

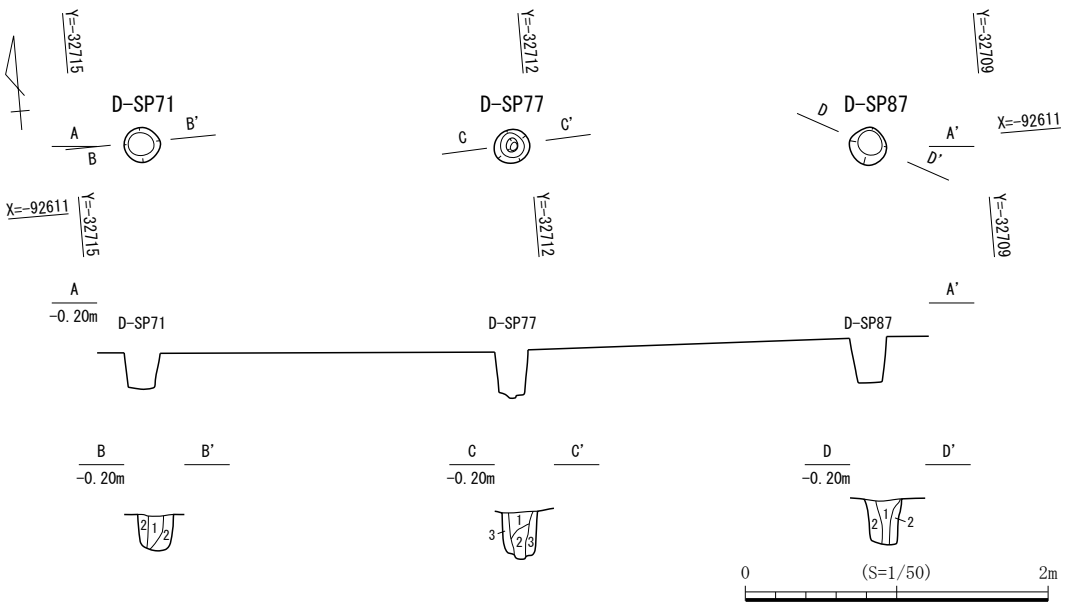
E-E' 断面
1　7.5YR5/1　褐灰色砂質シルト　しまりややあり　粘性ややあり
　　7.5YR7/6　橙色砂質土ブロックをわずかに含む
2　7.5YR5/1　褐灰色砂質シルト　しまりややあり　粘性ややあり
　　7.5YR7/1　明褐灰色砂質土ブロックを多量に含む
3　7.5YR6/1　褐灰色砂質土　しまりややあり　粘性なし
　　7.5YR7/1　明褐灰色砂質土ブロックを多量に含む

F-F' 断面
1　7.5YR5/1　褐灰色粘質シルト　しまりややあり　粘性ややあり
　　7.5YR6/4　にぶい橙色砂を含む
2　7.5YR5/1　褐灰色砂質土　しまりあり　粘性なし
　　7.5YR6/1　褐灰色砂質土ブロックをわずかに含む

0　(S=1/50)　2m

第47図　D-SA296平面図・断面図

D-SA297



B-B' 断面
1　7.5YR5/1　褐灰色砂質シルト　しまりややあり　粘性ややあり　7.5YR4/6　褐色土ブロックをわずかに含む
2　7.5YR6/1　褐灰色粘質シルト　しまりややあり　粘性ややあり　7.5YR7/6　橙色砂質土ブロックをわずかに含む

C-C' 断面
1　7.5YR6/1　褐灰色砂質シルト　しまりややあり　粘性ややあり　7.5YR7/6　橙色砂質土ブロックをわずかに含む
2　7.5YR5/1　褐灰色砂質土　しまりややあり　粘性なし　7.5YR6/4　にぶい橙色砂を含む
3　7.5YR6/2　灰褐色砂質土　しまりなし　粘性なし　7.5YR7/1　明褐灰色砂質土ブロックを多量に含む

D-D' 断面
1　7.5YR6/1　褐灰色砂質シルト　しまりややあり　粘性ややあり　7.5YR7/6　橙色砂質土ブロックをわずかに含む
2　7.5YR6/1　褐灰色砂質土　しまりなし　粘性なし　7.5YR6/4　にぶい橙色砂を含む

第48図　D-SA297平面図・断面図

（２）溝

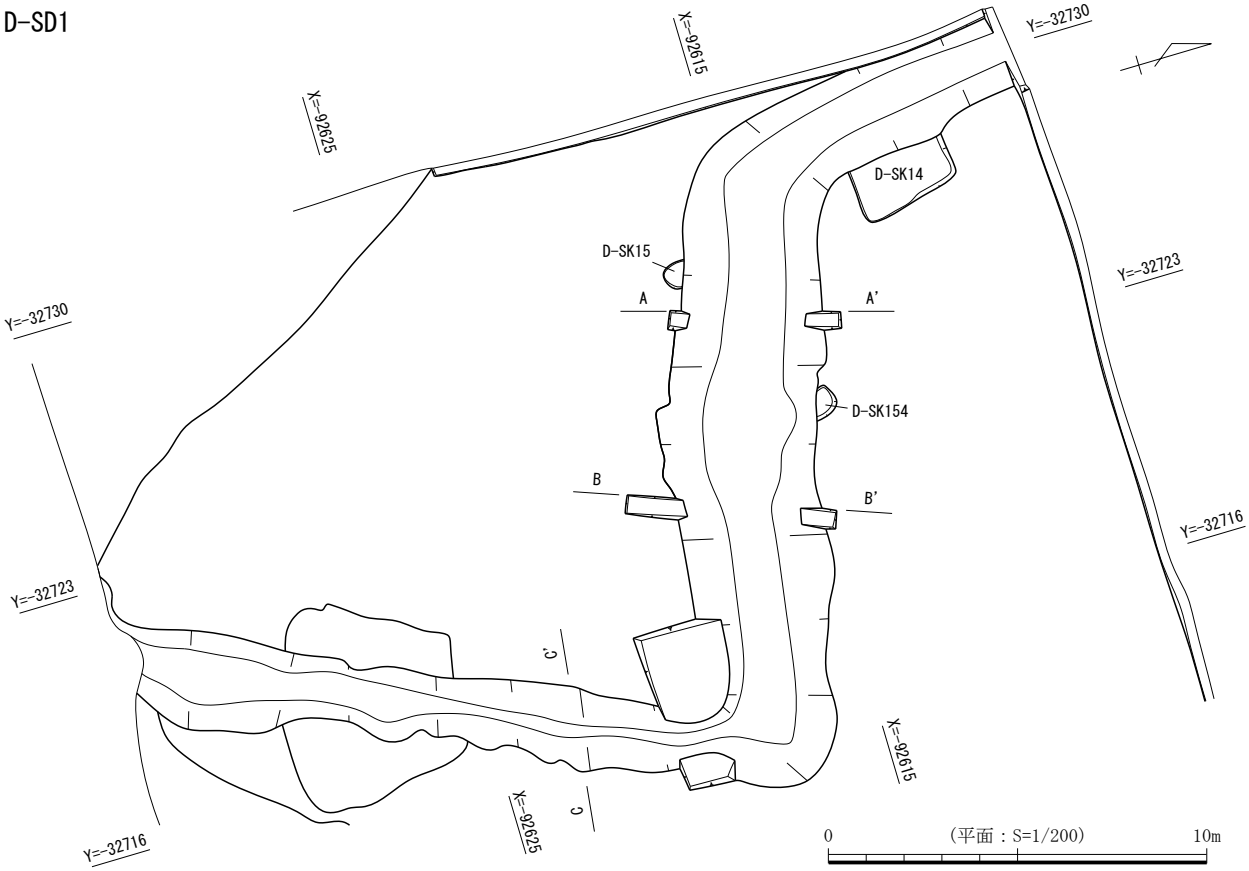
D-SD1（第49図、図版18）

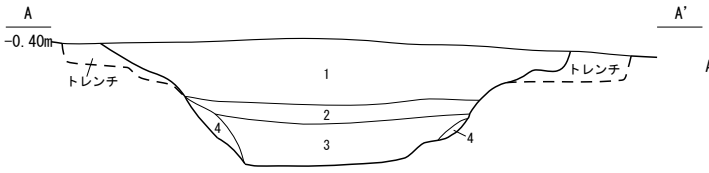
Ｄ区西部に位置し、Ｖ層上面で検出した。規模は検出長38.70m、幅1.80～4.00m、最大深さ90cmを測り、南北が調査区外へと延びている。今次調査では３ヶ所の屈曲部を確認しており、調査区北壁より南へ7.5m地点でN-102°-Ｅ方向へ、その地点から14.2m付近でＥ-96°-Ｓ方向へ、更に約17m進んだ調査区南壁で推定N-105°-W方向へ、それぞれ屈曲する。断面形は概ね扁平な逆台形を呈するが、２ヶ所目の屈曲直後から南進する約７mの区間のみ狭隘なＶ字形となる。一定方向への底面の傾斜やラミナである層位など、流水があった痕跡は認められない。

１層は固くしまった均質な褐灰色シルトで構成されており、廃絶の際に人為的に埋められた可能性がある。２層は褐灰色粘土からなり、３層は黒褐色粘土からなる。４層は褐灰色土である。底面は湧水があった砂層で、調査時の水位は60cm前後で安定していた。

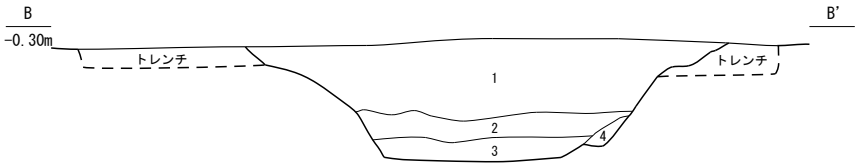
遺物は土師器、須恵器、灰釉陶器、山茶碗、陶器等が多く、わずかに青磁の小片等も出土した。２層の下位より漆椀、折敷、木匙等といった木製品類が出土した。３層の下位より曲物や折敷の底板等の木製品類が出土した。

D-SD1

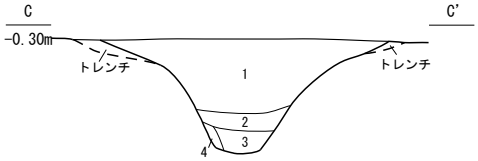




A-A' 断面
1 7.5YR6/1 褐灰色シルト 固くしまる 粘性なし
7.5YR7/8 黄橙色土マンガン粒・炭化物をわずかに含む
2 10YR5/1 褐灰色粘土 しまりあり 粘性あり 植物遺体を含む
3 10YR3/1 黒褐色粘土 しまりあり 粘性あり 木製品・植物遺体を含む
4 10YR4/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性ややあり
10YR6/2 灰黄褐色砂を含む 炭化物をわずかに含む



B-B' 断面
1 7.5YR6/1 褐灰色シルト 固くしまる 粘性なし 7.5YR7/8 黄橙色土マンガン粒・7.5R6/1 赤灰色炭化物をわずかに含む
2 10YR5/1 褐灰色粘土 しまりあり 粘性あり 植物遺体を含む
3 10YR3/1 黒褐色粘土 しまりあり 粘性あり 木製品・植物遺体を含む
4 10YR4/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性ややあり 10YR6/2 灰黄褐色砂を含む 7.5R6/1 赤灰色炭化物をわずかに含む

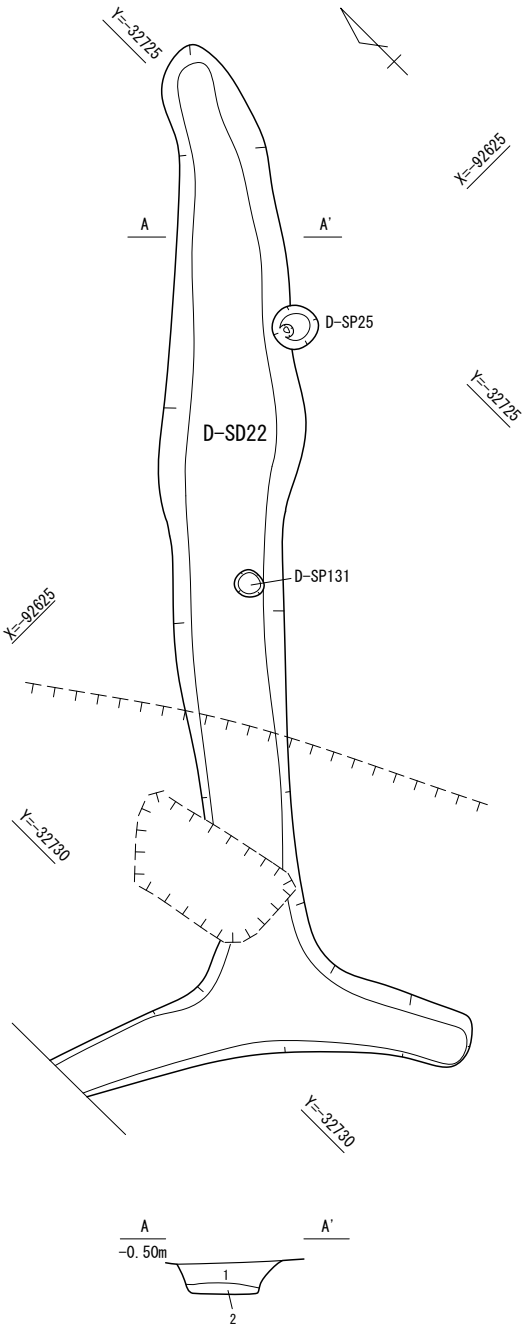


C-C' 断面
1 7.5YR6/1 褐灰色シルト 固くしまる 粘性なし
7.5YR7/8 黄橙色土マンガン粒・炭化物をわずかに含む
2 10YR5/1 褐灰色粘土 しまりあり 粘性あり 植物遺体を含む
3 10YR3/1 黒褐色粘土 しまりあり 粘性あり 木製品・植物遺体を含む
4 10YR4/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性ややあり
10YR6/2 灰黄褐色砂を含む 炭化物をわずかに含む

0 (断面：S=1/60) 2m

第49図 D-SD1平面図・断面図

D-SD22



1　7.5YR6/2　灰褐色土　しまりややあり　粘性ややあり
　鉄分をわずかに含む
2　7.5YR5/2　灰褐色砂質土　しまりなし　粘性なし
　7.5YR7/6　橙色砂質土ブロックをわずかに含む

0　(S=1/60)　2m

D-SD22（第50図、図版19）

Ｄ区東部に位置し、Ｖ層上面で検出した。規模は延長7.75ｍ、最大幅0.88ｍ、深さ21㎝を測り、南西端がＴ字状に二股に分かれる。断面形は皿形を呈す。埋土は上から灰褐色土・灰褐色砂質土の２層である。主軸方向はN-48°-Ｅの方角を示す。遺物は土錘が出土した。

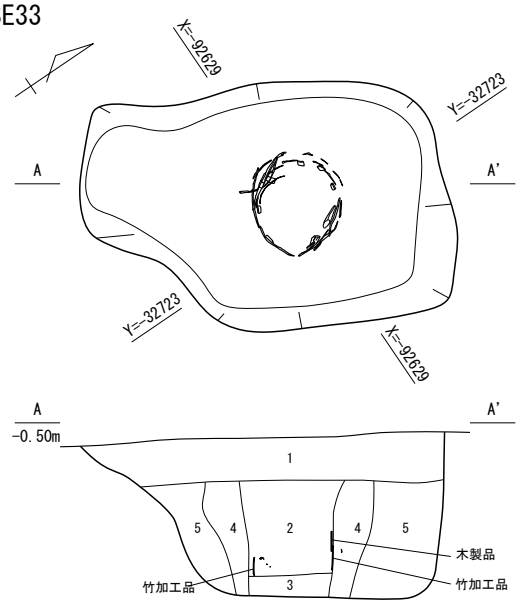
（３）井戸

D-SE33（第50図、図版19）

Ｄ区南西部に位置し、Ｖ層上面で検出した。規模は長軸243㎝、短軸98～162㎝、深さ96㎝を測る。平面形は不整方形、断面形は方形で平坦な底面を有している。底面の砂層へ食い込むように、竹と木材を利用した枠状の構造物が出土した。幅１～２㎝程度の割竹を正円形に組んだもので、竹の表皮面を円の外側に向けており、くさび形に加工した木材を枠の内側に複数本打ち込んでいる。

土坑の底面に設置していた結桶の箍（たが）およびくさびと見ら

D-SE33



1　7.5YR5/1　褐灰色土　しまりなし　粘性なし　10YR8/1　灰白色砂ブロックを含む
2　7.5YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり
　7.5YR6/2　灰褐色砂質土ブロックをわずかに含む　木製品を含む
3　7.5YR5/1　褐灰色砂質土　しまりなし　粘性なし
　7.5YR7/6　橙色砂質土ブロックをわずかに含む　7.5YR6/4　にぶい橙色土粒を含む
4　7.5YR2/1　黒色粘土　しまりあり　粘性あり
　7.5YR6/1　褐灰色砂質土ブロックをわずかに含む
5　7.5YR5/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり
　7.5YR6/2　灰褐色砂質土ブロックをわずかに含む
　10YR5/1　褐灰色シルトブロックを多量に含む

0　(S=1/50)　2m

第50図　D-SD22、SE33平面図・断面図

れ、井戸の廃絶時に側板を抜き取った残置物と考えられる。遺物は結桶の箍(たが)とくさび以外に、陶器内耳鍋、灰釉陶器椀、天目茶碗、直縁大皿、モモ種実等が出土している。

（４）土坑

D-SK2（第51図、図版20）

Ｄ区北西部に位置し、Ｖ層上面で検出した。規模は長軸169cm以上、短軸191cm、深さ50cmを測る。平面形は方形、断面形は皿状で平坦な底面形状である。埋土は上から灰褐色土と褐灰色粘土の２層である。遺物は土師器甕の小片が出土している。

D-SK3（第51図、図版19）

Ｄ区北西部に位置し、Ｖ層上層で検出した。規模は直径155cm、深さ60cmを測る。平面形は円形、断面形は方形で平坦な底面形状である。埋土は上から灰褐色土・褐灰色砂質土・褐灰色砂質シルトの３層である。遺物は土師器甕、陶丸、折敷の底板、モモ種実等が出土した。

D-SK4（第51図、図版20）

Ｄ区北西部に位置し、Ｖ層上面で検出した。規模は直径105cm、深さ52cmを測る。平面形は円形、断面形は方形で平坦な底面形状である。埋土は灰褐色土の単層である。遺物は陶丸等が出土した。

D-SK14（第51図、図版20）

Ｄ区西部に位置し、Ｖ層上面で検出した。規模は長軸266cm、短軸145cm以上、深さ56cmを測る。主軸方向はN-10°-Wの方角を示す。平面形は方形、断面形は方形で平坦な底面形状である。埋土は上から灰褐色土と褐灰色粘土の２層である。遺物は小片のため器種の判別は不能である。

D-SK32（第51図、図版20）

Ｄ区南西部に位置し、Ｖ層上面で検出した。規模は長軸224cm、短軸214cm、深さ105cmを測る。主軸方向はN-50°-Wの方角を示す。平面形は円形、断面形は方形で平坦な底面形状である。埋土は主に灰褐色シルトなどの３層である。遺物は、ほぼ完形の常滑の壺が３層より１点出土している。その他は山茶碗、陶製羽釜が出土。また、１層から青磁碗、２層から縁釉小皿、土錘等が出土した。

D-SK34（第52図、図版20）

Ｄ区西部に位置し、Ｖ層上面で検出した。規模は直径75cm、深さ72cmを測る。平面形は円形、断面形は半円形で平坦な底面形状である。埋土は上からにぶい橙色シルト・褐灰色粘土・黒褐色粘土の３層である。遺物は常滑の片口鉢が出土した。

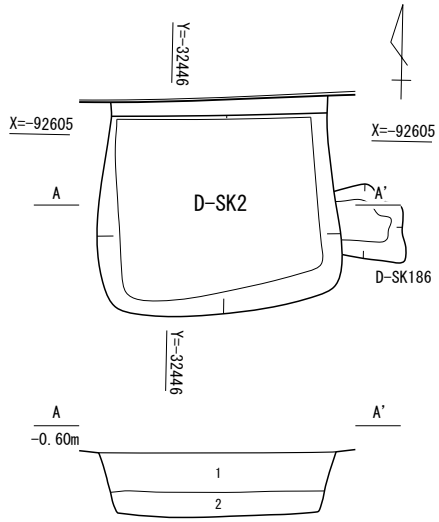
D-SK36（第52図、図版20）

Ｄ区南西部に位置し、Ｖ層上面で検出した。規模は長軸271cm、短軸154～185cm、深さ24cmを測る。平面形は不整形、断面形は皿状で平坦な底面形状である。埋土は灰褐色シルトの単層である。遺物は山茶碗と土師器羽釜が出土した。

D-SK40（第52図、図版20）

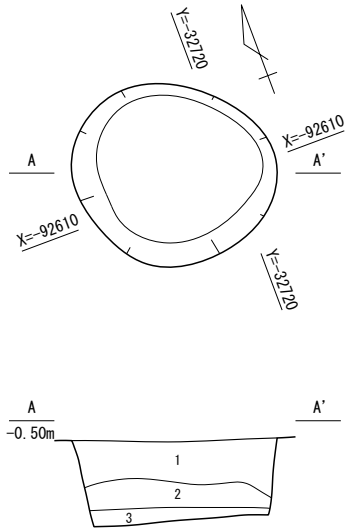
Ｄ区中央部に位置し、Ｖ層上面で検出した。規模は直径145cm、深さ103cmを測る。平面形は円形、断面形は方形で平坦な底面形状である。埋土は上から灰褐色シルト・灰褐色粘土・褐灰色粘質シルトの３層である。遺物は小片のため器種の判別が不能である。

D-SK2



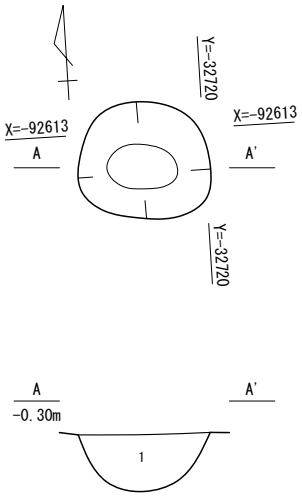
1　7.5YR5/2　灰褐色土　しまりややあり　粘性ややあり
　　7.5YR7/6　橙色砂質土ブロックをわずかに含む
2　7.5YR6/1　褐灰色粘土　しまりなし　粘性あり
　　7.5YR3/3　暗褐色土粒を含む

D-SK3



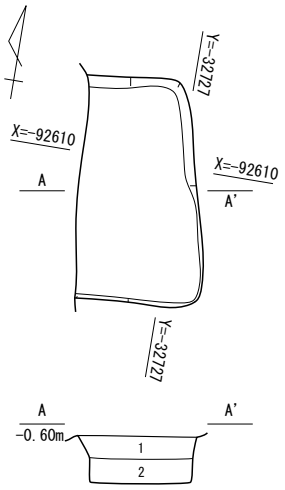
1　7.5YR5/2　灰褐色土　しまりなし　粘性なし
　　7.5YR7/6　橙色砂質土ブロックをわずかに含む
2　7.5YR4/1　褐灰色砂質土　しまりあり　粘性あり　植物遺体を含む
3　10YR6/1　褐灰色砂質シルト　しまりややあり　粘性ややあり

D-SK4



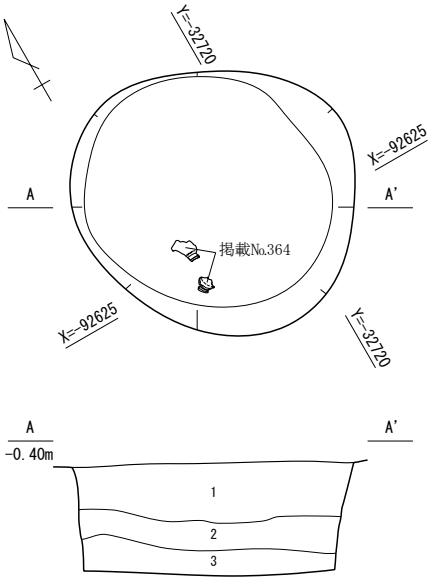
1　7.5YR5/2　灰褐色土　しまりややあり　粘性ややあり
　　7.5YR7/6　橙色砂質土ブロックをわずかに含む

D-SK14



1　7.5YR5/2　灰褐色土　しまりなし　粘性なし
　　10YR8/1　灰白色砂ブロックを含む
2　7.5YR5/1　褐灰色粘土　しまりややあり　粘性あり
　　7.5YR7/6　橙色砂質土ブロックをわずかに含む
　　植物遺体を含む

D-SK32



1　7.5YR4/2　灰褐色シルト　しまりなし　粘性なし
　　炭化物をわずかに含む
2　10YR5/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり
　　木片・炭化物をわずかに含む
3　2.5Y6/1　黄灰色粘土　しまりあり　粘性あり
　　7.5YR7/6　橙色砂質土ブロックをわずかに含む

0　(S=1/60)　2m

第51図　D-SK2～4、SK14、SK32平面図・断面図

D-SK41（第52図、図版20）

Ｄ区中央部に位置し、Ｖ層上面で検出した。規模は長軸78㎝、短軸58㎝、深さ25㎝を測る。平面形は楕円形、断面形は皿状で平坦な底面形状である。埋土は上からにぶい褐色シルトとにぶい橙色シルトの２層である。遺物は須恵器杯蓋が出土した。

D-SK42（第52図、図版20）

Ｄ区南西部に位置し、Ｖ層上面で検出した。規模は長軸226㎝、短軸219㎝、深さ68㎝を測る。平面形は円形、断面形は方形で平坦な底面形状である。埋土は上から灰褐色土・褐灰色シルトの２層である。遺物は小片のため器種の判別が不能である。

D-SK97（第52図、図版21）

Ｄ区西部に位置し、Ｖ層上面で検出した。規模は長軸142㎝、短軸105㎝、深さ約８㎝を測る。平面形は楕円形、断面形は皿状で平坦な底面形状である。埋土は灰褐色砂質シルトの単層である。遺物は須恵器甕が出土した。

D-SK99（第53図、図版21）

Ｄ区南西部に位置し、Ｖ層上面で検出した。規模は長軸176㎝、短軸146㎝、深さ74㎝を測る。平面形は円形、断面形は方形で平坦な底面形状である。埋土は上から灰褐色シルト・褐灰色粘土・褐灰色砂質土の３層である。遺物は出土していない。

D-SK103（第53図、図版21）

Ｄ区中央部に位置し、Ｖ層上面で検出した。規模は長軸81㎝、短軸40㎝、深さ32㎝を測る。平面形は楕円形、断面形は逆三角形で円形の底面形状である。埋土は褐灰色砂質シルトの単層である。遺物は山茶碗の小皿が出土した。

D-SK113（第53図、図版21）

Ｄ区西部に位置し、Ｖ層上面で検出した。規模は長軸54㎝、短軸40㎝、深さ26㎝を測る。平面形は楕円形、断面形は半円形で平坦な底面形状である。埋土は灰褐色シルトの単層である。遺物は須恵器杯蓋が出土した。

D-SK168（第53図、図版21）

Ｄ区中央部に位置し、Ｖ層上面で検出した。規模は長軸112㎝、短軸35㎝、深さ15㎝を測る。平面形は楕円形、断面形は半円形で円形の底面形状である。埋土は褐灰色砂質シルトの単層である。遺物は灰釉陶器椀が出土した

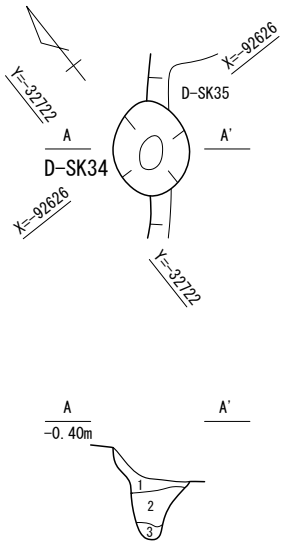
D-SK244（第53図、図版21）

Ｄ区西部に位置し、Ｖ層上面で検出した。規模は直径97㎝、深さ82㎝を測る。平面形は円形、断面形は方形で、底面形状は平坦である。埋土は上からにぶい黄褐色シルト・にぶい黄褐色粘質シルト・黒褐色粘土の３層である。遺物は須恵器有台杯、山茶碗の碗、山茶碗小皿が出土した。

D-SK245（第53図、図版21）

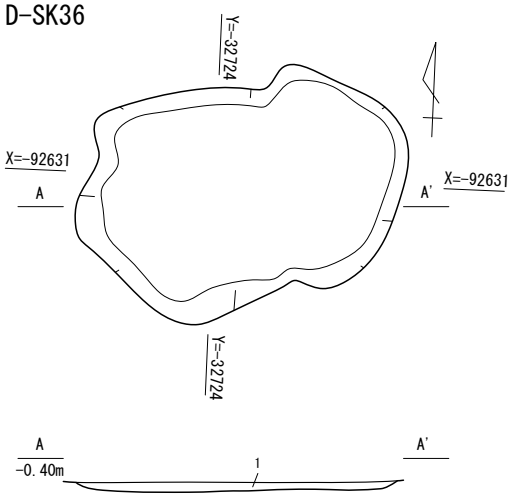
Ｄ区東部のＶ層上面で検出した。規模は長軸326㎝、短軸186～266㎝、深さ72㎝を測る。平面形は不整形、断面形が方形で平坦な底面を呈しており、底面から豊富な湧水が見られた。埋土は上から灰褐色砂質シルトと褐灰色粘質シルトの２層である。遺物は土師器甕、灰釉陶器、山茶碗、陶製羽釜、土錘等が出土した。

D-SK34



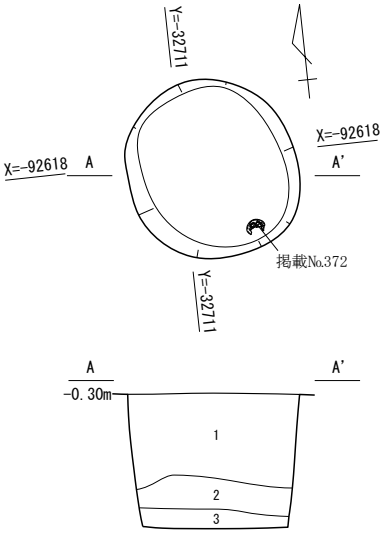
1　7.5YR6/4　にぶい橙色シルト　しまりなし　粘性なし
2　7.5YR5/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり
　植物遺体を含む　炭化物をわずかに含む
3　7.5YR3/1　黒褐色粘土　しまりあり　粘性あり
　炭化物をわずかに含む

D-SK36



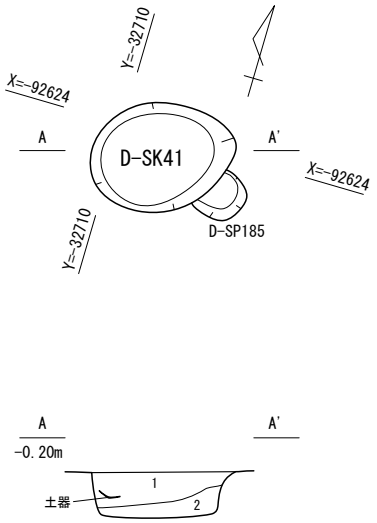
1　7.5YR5/2　灰褐色シルト　しまりややあり　粘性ややあり
　7.5YR7/6　橙色砂質土ブロックをわずかに含む

D-SK40



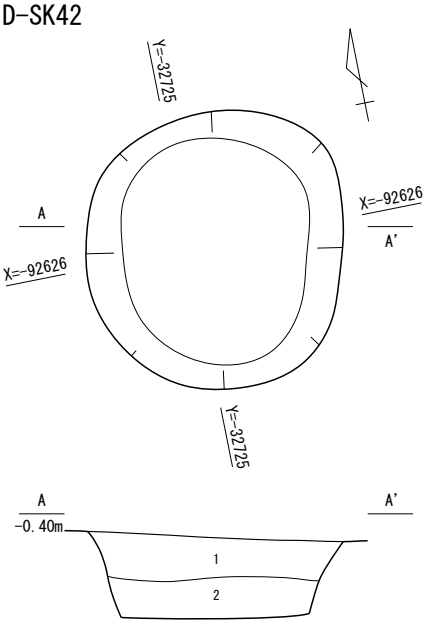
1　7.5YR5/2　灰褐色シルト　しまりなし　粘性なし
　7.5YR4/6　褐色土ブロック・7.5YR7/8黄橙色土マンガン粒・
　炭化物をわずかに含む
2　7.5YR4/2　灰褐色粘土　しまりあり　粘性あり
　10YR8/1　灰白色砂ブロック・植物遺体を含む
3　10YR5/1　褐灰色粘質シルト　しまりなし　粘性なし
　植物遺体を含む

D-SK41



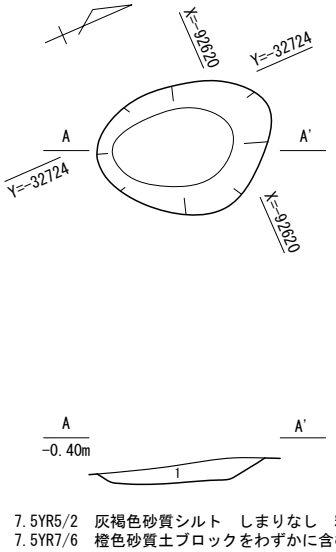
1　7.5YR5/3　にぶい褐色シルト　しまりなし　粘性なし
　炭化物を多量に含む
　7.5YR7/8　黄橙色土マンガン粒をわずかに含む
2　7.5YR6/4　にぶい橙色シルト　しまりなし　粘性なし
　炭化物をわずかに含む

D-SK42



1　7.5YR5/2　灰褐色土　しまりなし　粘性なし
2　7.5YR5/1　褐灰色シルト　しまりなし　粘性なし
　7.5YR6/4　にぶい橙色砂を含む

D-SK97



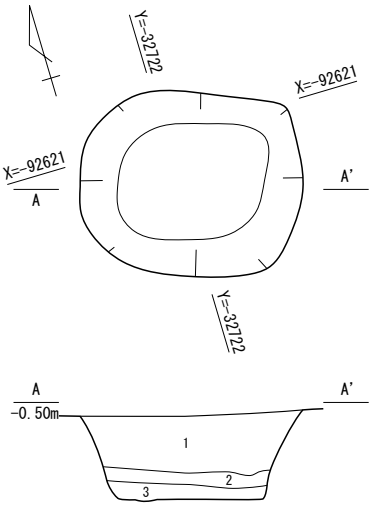
1　7.5YR5/2　灰褐色砂質シルト　しまりなし　粘性なし
　7.5YR7/6　橙色砂質土ブロックをわずかに含む

0　(S=1/40)　1m
D-SK41のみ

0　(S=1/60)　2m

第52図　D-SK34、SK36、SK40～42、SK97平面図・断面図

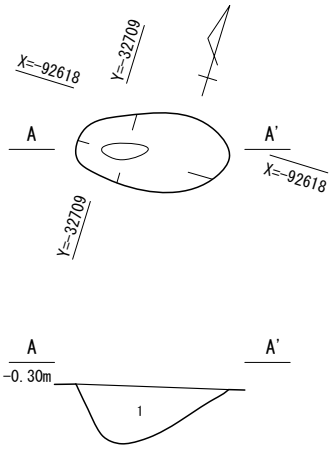
D-SK99



1　7.5YR5/2　灰褐色シルト　しまりなし　粘性なし
　7.5YR7/6　橙色砂質土ブロックをわずかに含む
2　7.5YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり
　植物遺体を含む
3　7.5YR5/1　褐灰色砂質土　しまりなし　粘性なし
　7.5YR4/1　褐灰色土ブロックを含む

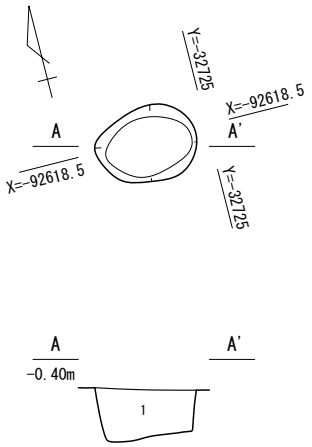
0　(S=1/60)　2m
D-SK99のみ

D-SK103



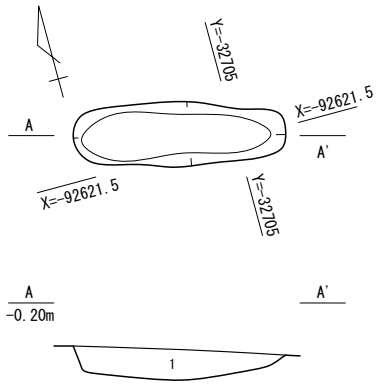
1　7.5YR5/1　褐灰色砂質シルト
　しまりあり　粘性ややあり
　7.5YR4/6　褐色土ブロックをわずかに含む

D-SK113



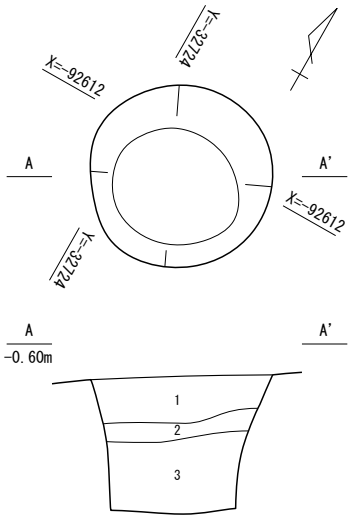
1　7.5YR5/2　灰褐色シルト　しまりなし　粘性なし
　7.5R6/1　赤灰色炭化物をわずかに含む

D-SK168



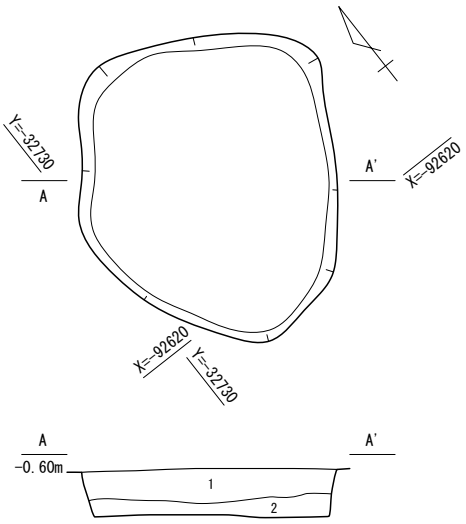
1　7.5YR5/1　褐灰色砂質シルト
　しまりあり　粘性ややあり
　7.5YR7/6　橙色砂質土ブロックをわずかに含む

D-SK244



1　10YR5/3　にぶい黄褐色シルト　しまりなし　粘性なし
　10YR5/6　黄褐色シルトブロック・炭化物をわずかに含む
2　10YR4/3　にぶい黄褐色粘質シルト
　しまりややあり　粘性あり　鉄分を多量に含む
3　10YR3/2　黒褐色粘土　しまりあり　粘性あり
　鉄分をわずかに含む　植物遺体を含む

D-SK245



1　7.5YR6/2　灰褐色砂質シルト　しまりあり　粘性ややあり
　7.5YR7/6　橙色砂質土ブロックを多量に含む
　10YR8/1　灰白色砂ブロックを含む　鉄分をわずかに含む
2　7.5YR4/1　褐灰色粘質シルト　しまりややあり　粘性あり
　7.5YR5/4　にぶい褐色シルトブロック・鉄分をわずかに含む
　植物遺体を含む

0　(S=1/40)　1m

0　(S=1/80)　2m
D-SK245のみ

第53図　D-SK99、SK103、SK113、SK168、SK244、SK245平面図・断面図

（５）柱穴・杭

D-SP189（第54図、図版21）

Ｄ区中央部に位置し、Ｖ層上面で検出した。規模は直径20㎝、深さ20㎝を測る。平面形は円形、断面形は半円形、平坦な底面を呈する。埋土は灰褐色粘質シルトの単層である。遺物は灰釉陶器の深椀が出土した。

３．Ｄ区の遺構（第２遺構面）

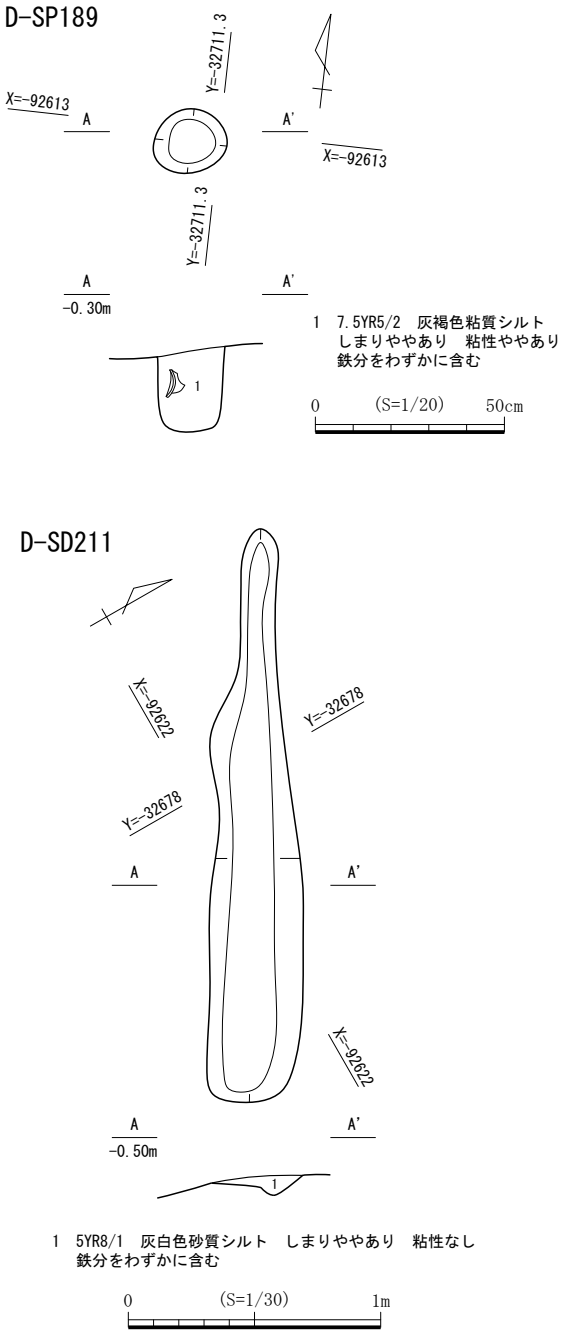
（１）溝

D-SD211（第54図、図版23）

Ｄ区東部に位置し、Ⅵ層上面で検出した。規模は延長6.75ｍ、最大幅0.33ｍ、深さ10㎝を測る。断面形は半円形を呈す。埋土は灰白色砂質シルトの単層である。主軸方向はＮ-121°-Ｅの方角を示す。遺物は出土していない。

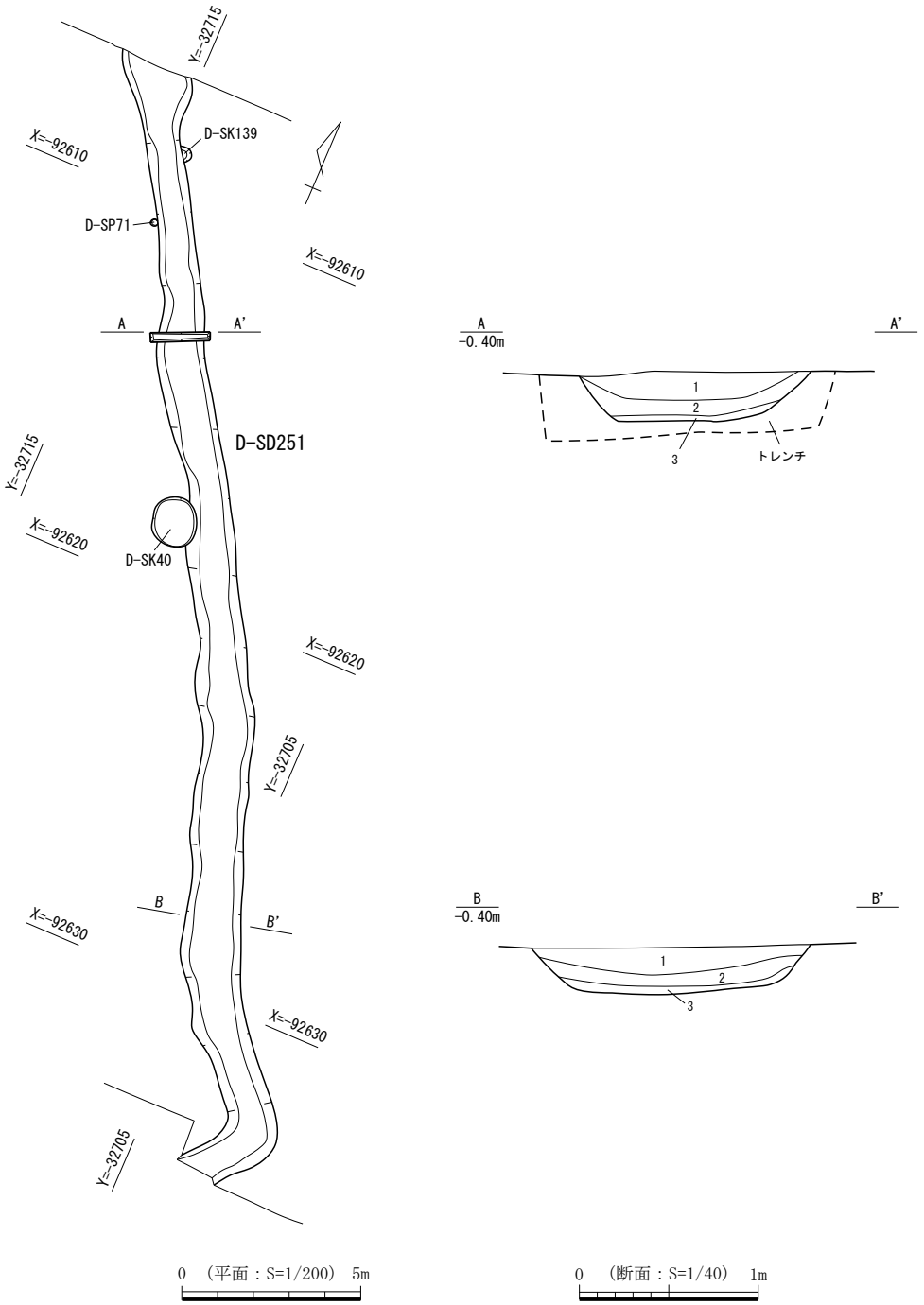
D-SD251（第55図、図版23）

Ｄ区中央部のⅥ層上面で検出した。規模は検出長3.20ｍを測り、南北は調査区外へ延びる。最大幅1.55ｍ、平均深さ25㎝を測る。断面形は逆台形を呈す。埋土は上からにぶい黄褐色シルト・灰黄褐色シルト・灰黄褐色砂質シルトの３層である。主軸は調査区北壁から南東方向へはＮ-27°-Ｗの方角を示し、北壁から約30ｍ地点でほぼ直角に南西方向へ屈曲して南壁へ至る。遺物は山茶碗の小片がわずかに出土したほか、１層から金属製の手斧が１点、２層から砥石が出土している。



第54図 D-SP189、SD211平面図・断面図

D-SD251



A-A' 断面
1 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト しまりなし 粘性なし 10YR5/6 黄褐色シルトブロックをわずかに含む
2 10YR5/2 灰黄褐色シルト しまりややあり 粘性ややあり 10YR6/2 灰黄褐色シルトブロックをわずかに含む
3 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト しまりなし 粘性なし 10YR5/6 黄褐色砂質土砂礫をわずかに含む

B-B' 断面
1 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト しまりなし 粘性なし 10YR5/6 黄褐色シルトブロックをわずかに含む
2 10YR5/2 灰黄褐色シルト しまりややあり 粘性ややあり 10YR6/2 灰黄褐色シルトブロックをわずかに含む
3 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト しまりなし 粘性なし 10YR5/6 黄褐色砂質土砂礫をわずかに含む

第55図 D-SD251平面図・断面図

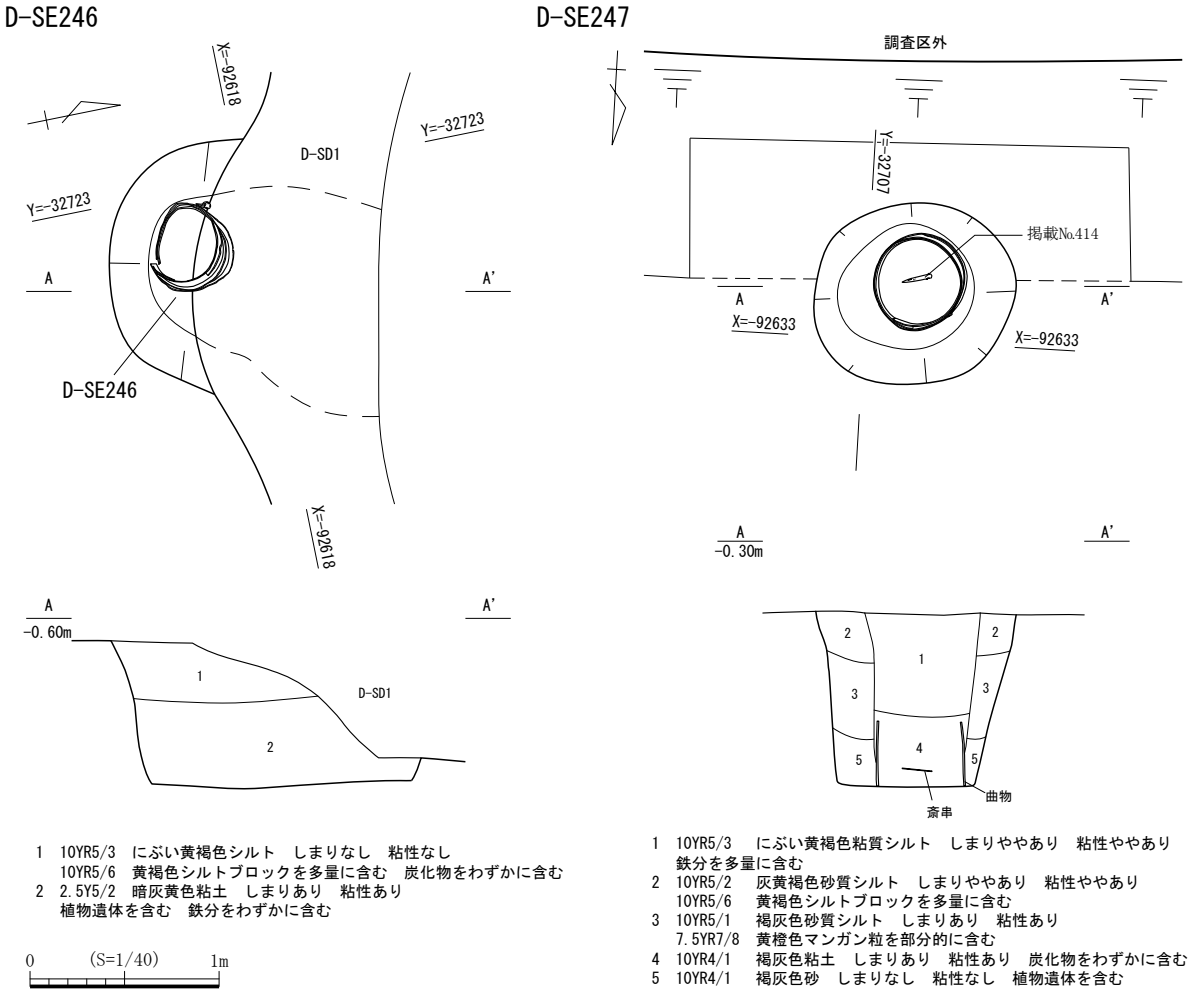
（２）井戸

D-SE246（第56図、図版23）

Ｄ区西部に位置し、Ⅵ層上面で検出した。規模は長軸推定145cm以上、短軸131cm、深さ114cmを測る。平面形は推定円形、断面形は方形、底面形状は平坦である。埋土は上からにぶい黄褐色シルト・暗灰黄色粘土の２層である。D-SD1により半分程度が消滅している。土坑の底部には、底を抜いた曲物が３段残存していた。遺物として掘方、曲物内の両方から山茶碗、古瀬戸等が出土している。また、曲物の底部にはさまって須恵器有台杯の破片が出土した。

D-SE247（第56図、図版23）

Ｄ区中央部に位置し、Ⅵ層上面で検出した。規模は直径105cm、深さ146cmを測る。平面形は円形、断面形は方形、底面形状は平坦となる。埋土は、掘方が灰黄褐色砂質シルト・褐灰色砂質シルト・褐灰色砂の３層、井戸枠内がにぶい黄褐色粘質シルト・褐灰色粘土の２層である。底面には底を抜いた曲物が１段残存している。遺物として、掘方からは灰釉陶器の小片がわずかに出土し、曲物内埋土からは斎串１点とヒョウタン仲間果実の表皮が出土した。



1　10YR5/3　にぶい黄褐色シルト　しまりなし　粘性なし
　　10YR5/6　黄褐色シルトブロックを多量に含む　炭化物をわずかに含む
2　2.5Y5/2　暗灰黄色粘土　しまりあり　粘性あり
　　植物遺体を含む　鉄分をわずかに含む

0　(S=1/40)　1m

1　10YR5/3　にぶい黄褐色粘質シルト　しまりややあり　粘性ややあり
　　鉄分を多量に含む
2　10YR5/2　灰黄褐色砂質シルト　しまりややあり　粘性ややあり
　　10YR5/6　黄褐色シルトブロックを多量に含む
3　10YR5/1　褐灰色砂質シルト　しまりあり　粘性あり
　　7.5YR7/8　黄橙色マンガン粒を部分的に含む
4　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　炭化物をわずかに含む
5　10YR4/1　褐灰色砂　しまりなし　粘性なし　植物遺体を含む

第56図　D-SE246、SE247平面図・断面図

（３）土坑

D-SK202（第57図、図版24）

Ｄ区東部のⅥ層上面で検出した。規模は長軸215cm、短軸60～149cm、深さ59cmを測る。平面形は不整円形、断面形が方形で平坦な底面を呈しており、湧水があった。埋土は上から灰白色砂質シルト・黄褐色粘質シルト・黒褐色粘土の３層である。遺物は出土していない。

D-SK203（第57図、図版24）

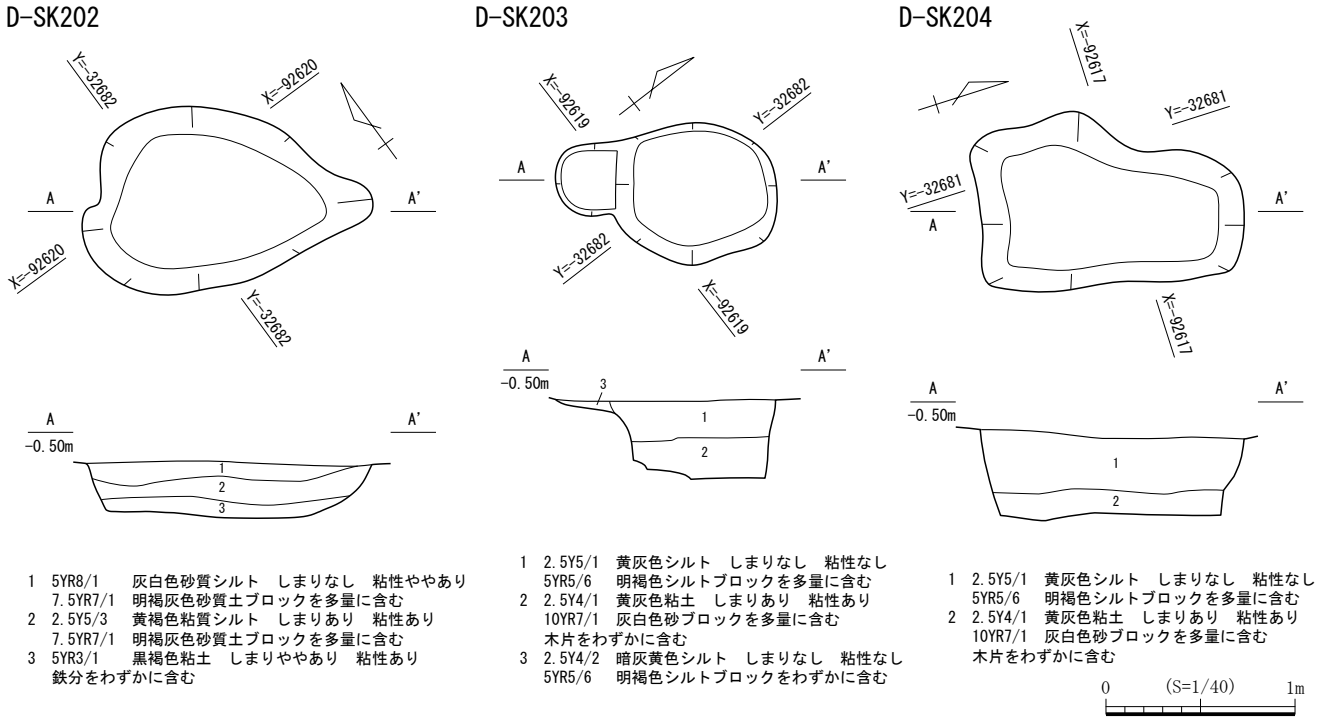
Ｄ区東部のⅥ層上面で検出した。規模は長軸175cm、短軸57～113cm、深さ70cmを測る。平面形は不整形、断面形が方形で平坦な底面を呈しており、湧水があった。埋土は上から黄灰色シルト・黄灰色粘土・暗灰黄色シルトの３層である。遺物は出土していない。

D-SK204（第57図、図版24）

Ｄ区東部のⅥ層上面で検出した。規模は長軸215cm、短軸101～140cm、深さ83cmを測る。平面形は不整方形、断面形が方形で平坦な底面を呈しており、湧水があった。埋土は上から黄灰色シルト・黄灰色粘土の２層である。遺物はくさび、串等の木製品が出土した。

D-SK207（第58図、図版24）

Ｄ区東部のⅥ層上面で検出した。規模は長軸332cm、短軸138cm、深さ53cmを測る。平面形は隅丸長方形、断面形が方形で平坦な底面を呈しており、湧水があった。主軸方向はN-72°-W方向を示す。埋土は暗灰黄色シルトの単層である。Ｄ区東部に集中して分布する大型土坑は、いずれも法量や長軸方向が似通っており同時期の遺構であることが考えられる。遺物は小片のため器種の判別が不能である。



第57図　D-SK202～204平面図・断面図

D-SK212（第58図、図版24）

Ｄ区東部のⅥ層上面で検出した。規模は長軸327cm、短軸153cm、深さ70cmを測る。平面形は隅丸長方形、断面形が方形で平坦な底面を呈しており、湧水があった。主軸方向はN-72°-W方向を示す。埋土は上から灰白色粘質シルト・灰白色粘土・黒褐色粘土の３層である。遺物は出土していない。

D-SK213（第58図、図版24）

Ｄ区東部のⅥ層上面で検出した。規模は長軸499cm、短軸161～214cm、深さ91cmを測る。平面形は隅丸長方形、断面形が方形で平坦な底面を呈しており、湧水があった。主軸方向はN-72°-W方向を示す。埋土は黄褐色シルトと黄灰色粘質シルトの２層である。遺物は加工円板が出土した。

D-SK218（第59図、図版24）

Ｄ区南東部に位置し、Ⅵ層上面で検出した。規模は長軸127cm、短軸119cm、深さ61cmを測る。平面形は円形、断面形は方形、底面形状は平坦となる。埋土は上から暗灰黄色シルト・黄灰色粘土・暗灰黄色粘土の３層からなる。遺物は出土していない。

D-SK228（第59図、図版25）

Ｄ区中央部に位置し、Ⅵ層上面で検出した。規模は長軸115cm、短軸81cm、深さ93cmを測る。平面形は楕円形、断面形は方形、底面形状は平坦となる。埋土は上から暗オリーブ褐色シルト・黄灰色粘土の２層からなる。遺物は山茶碗の碗と輪花碗が出土した。

D-SK229（第59図、図版25）

Ｄ区中央部に位置し、Ⅵ層上面で検出した。規模は長軸77cm、短軸71cm、深さ75cmを測る。平面形は円形、断面形は方形、底面形状は平坦となる。埋土は上から暗オリーブ褐色シルト・黄灰色粘土の２層である。遺物は１層から山茶碗小皿、白磁碗、２層から山茶碗の小皿等が出土した。

D-SK234（第59図、図版24）

Ｄ区東部のⅥ層上面で検出した。規模は長軸336cm、短軸189cm、深さ43cmを測る。平面形は隅丸長方形、断面形が方形で平坦な底面を呈しており、湧水があった。主軸方向はN-72°-W方向を示す。灰白色粘質シルトの単層である。遺物は小片のため器種の判別が不能である。

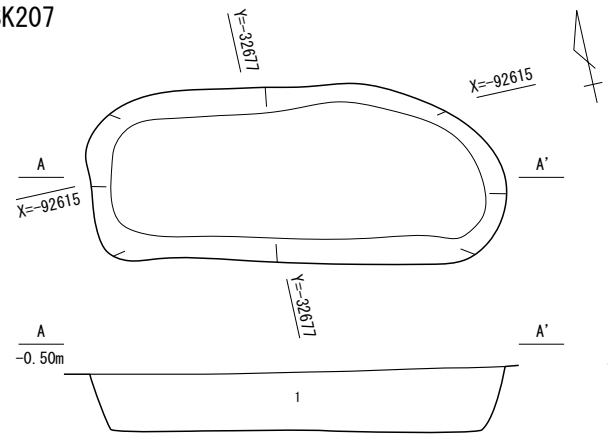
D-SK237（第60図、図版25）

Ｄ区北東部のⅥ層上面で検出した。規模は長軸561cm、短軸260cm、深さ65cmを測る。平面形は隅丸長方形、断面形が方形で平坦な底面を呈しており、湧水があった。主軸方向はN-35°-Ｅ方向を示す。埋土は上から灰白色粘質シルト・灰白色粘土・黒褐色粘土の３層である。遺物は山茶碗小皿、陶丸等が出土した。

D-SK265（第60図、図版25）

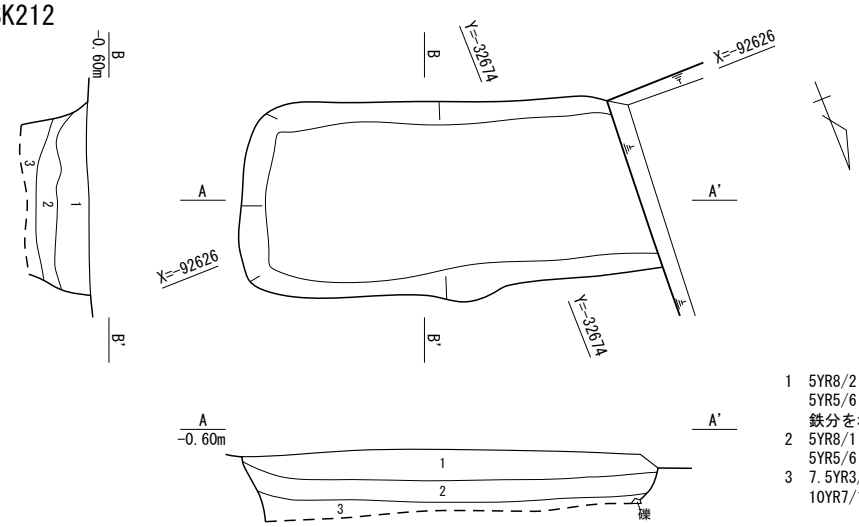
Ｄ区西部に位置し、Ⅵ層上面で検出した。規模は長軸推定116cm以上、短軸60cm、深さ79cmを測る。平面形は推定円形、断面形は方形、底面形状は平坦となる。埋土は上からにぶい黄褐色シルト・暗灰黄色粘土・黄灰色粘土の３層である。２層下位の一部に植物質繊維の堆積が見られた。D-SD1により半分程が失われている。遺物は土錘等が出土した。

D-SK207



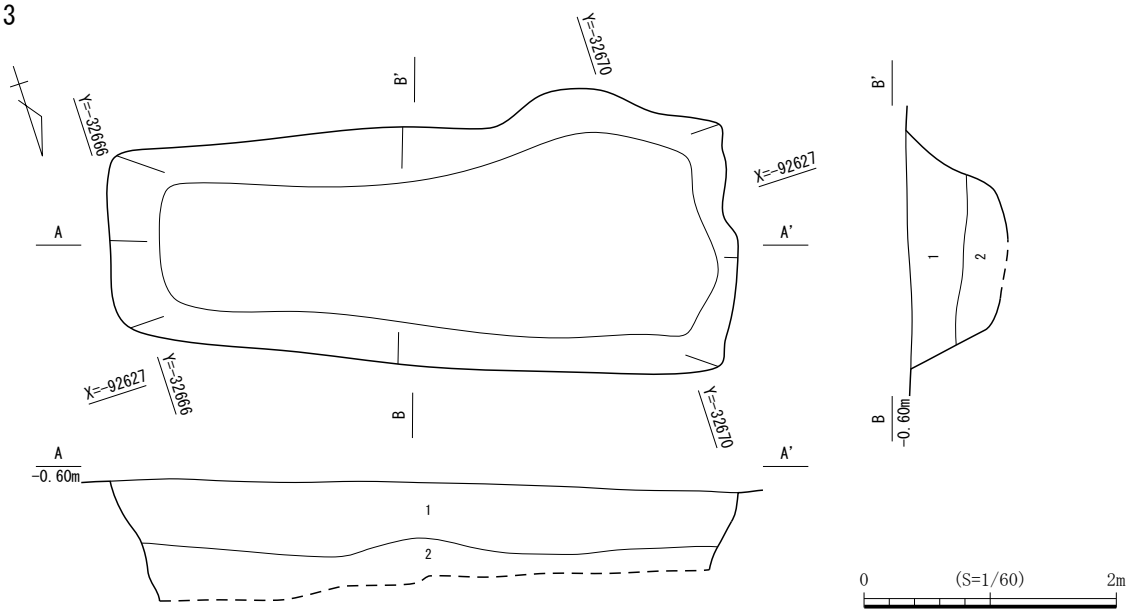
1　2.5Y5/2　暗灰黄色シルト　しまりなし　粘性なし
　　2.5Y5/1　黄灰色粘土ブロックを多量に含む
　　10YR5/1　褐灰色シルトブロックを多量に含む　鉄分をわずかに含む

D-SK212



1　5YR8/2　　灰白色粘質シルト　しまりあり　粘性あり
　　5YR5/6　　明褐色シルトブロックを多量に含む
　　鉄分をわずかに含む
2　5YR8/1　　灰白色粘土　しまりややあり　粘性あり
　　5YR5/6　　明褐色シルトブロックをわずかに含む
3　7.5YR3/1　黒褐色粘土　しまりややあり　粘性あり
　　10YR7/1　　灰白色砂ブロックを多量に含む

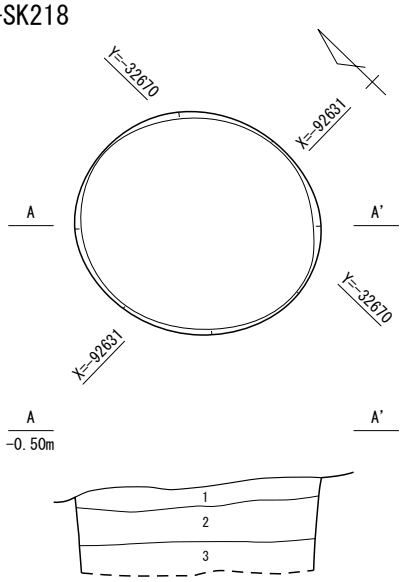
D-SK213



1　2.5Y5/3　黄褐色シルト　しまりなし　粘性なし　2.5Y4/2　暗灰黄色粘土ブロック・10YR7/1　灰白色砂ブロックを多量に含む
　　鉄分をわずかに含む
2　2.5Y5/1　黄灰色粘質シルト　しまりややあり　粘性ややあり　10YR7/1　灰白色砂ブロック・木片を多量に含む
　　2.5Y3/2　黒褐色粘土地山ブロックをわずかに含む

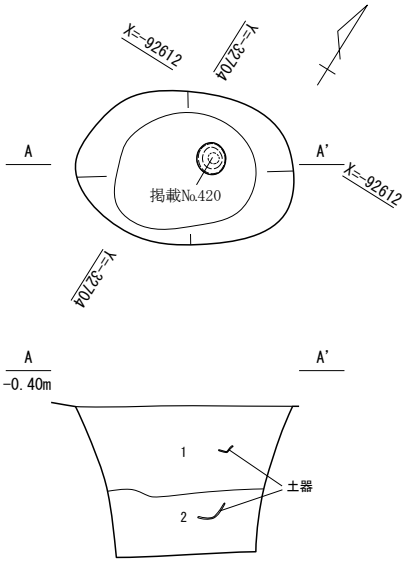
第58図　D-SK207、SK212、SK213平面図・断面図

D-SK218



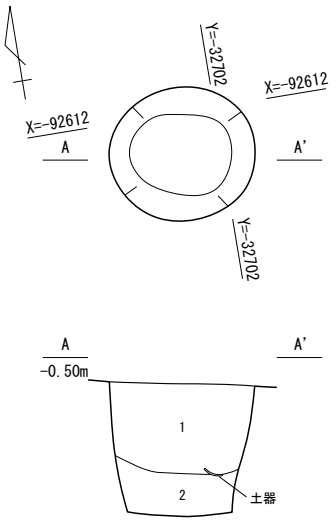
1　2.5Y5/2　暗灰黄色シルト　しまりなし　粘性なし
　　鉄分をわずかに含む
2　2.5Y5/1　黄灰色粘土　しまりあり　粘性あり
　　鉄分をわずかに含む
3　2.5Y4/2　暗灰黄色粘土　しまりあり　粘性あり
　　10YR8/1　灰白色砂ブロックを含む

D-SK228



1　2.5Y3/3　暗オリーブ褐色シルト　しまりなし　粘性なし
　　2.5Y5/6　黄褐色シルトブロックを層状に含む
　　炭化物・鉄分をわずかに含む
2　2.5Y4/1　黄灰色粘土　しまりあり　粘性あり
　　2.5Y5/6　黄褐色シルトブロック・
　　10YR6/1　褐灰色砂をわずかに含む

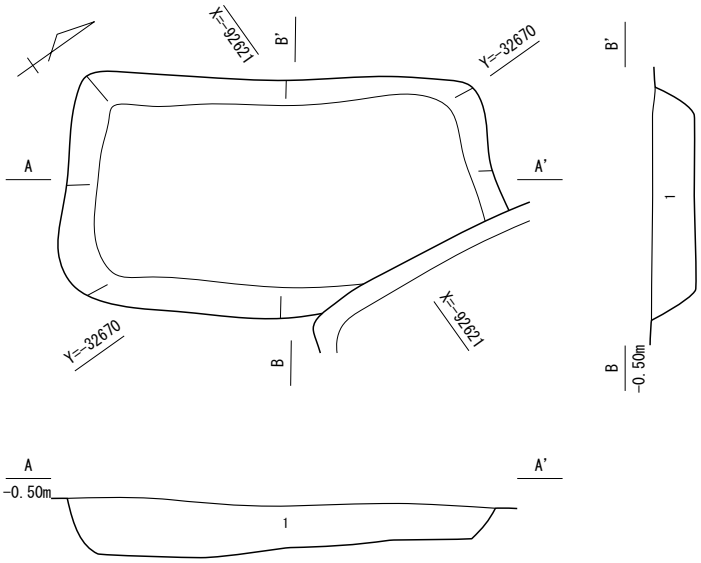
D-SK229



1　2.5Y3/3　暗オリーブ褐色シルト　しまりなし　粘性なし
　　2.5Y5/6　黄褐色シルトブロック・炭化物・
　　鉄分をわずかに含む
2　2.5Y4/1　黄灰色粘土　しまりあり　粘性あり
　　2.5Y5/6　黄褐色シルトブロック・
　　10YR6/1　褐灰色砂をわずかに含む

0　(S=1/40)　1m

D-SK234

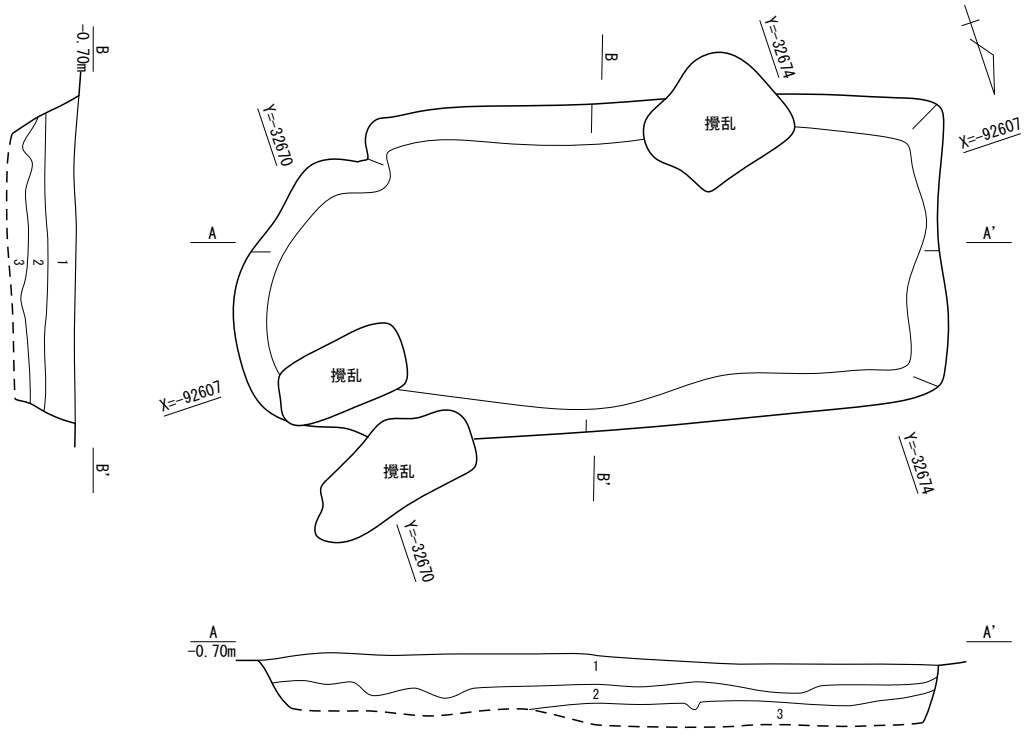


1　5YR8/2　　灰白色粘質シルト　しまりあり　粘性あり
　　7.5YR7/6　橙色砂質土ブロックを多量に含む
　　鉄分をわずかに含む

0　(S=1/60)　2m
D-SK234のみ

第59図　D-SK218、SK228、SK229、SK234平面図・断面図

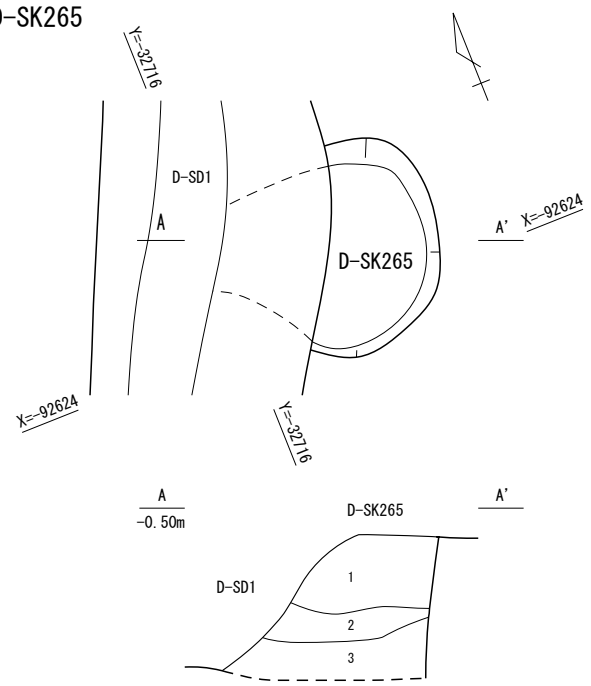
D-SK237



1　5YR8/2　　灰白色粘質シルト　しまりあり　粘性ややあり　7.5YR7/6　橙色砂質土ブロックを多量に含む 鉄分をわずかに含む
2　5YR8/1　　灰白色粘土　しまりややあり　粘性あり　5YR5/6　明褐色シルトブロックを多量に含む
3　7.5YR3/1　黒褐色粘土　しまりややあり　粘性あり　10YR8/1　灰白色砂ブロックを含む

0　(S=1/60)　2m

D-SK265



1　10YR4/3　にぶい黄褐色シルト　しまりなし　粘性なし　10YR5/6　黄褐色シルトブロックを多量に含む
2　2.5Y5/2　暗灰黄色粘土　しまりあり　粘性あり　木片・鉄分をわずかに含む
3　2.5Y4/1　黄灰色粘土　しまりあり　粘性あり　植物繊維多量・木片を多量に含む

0　(S=1/40)　1m

第60図　D-SK237、SK265平面図・断面図

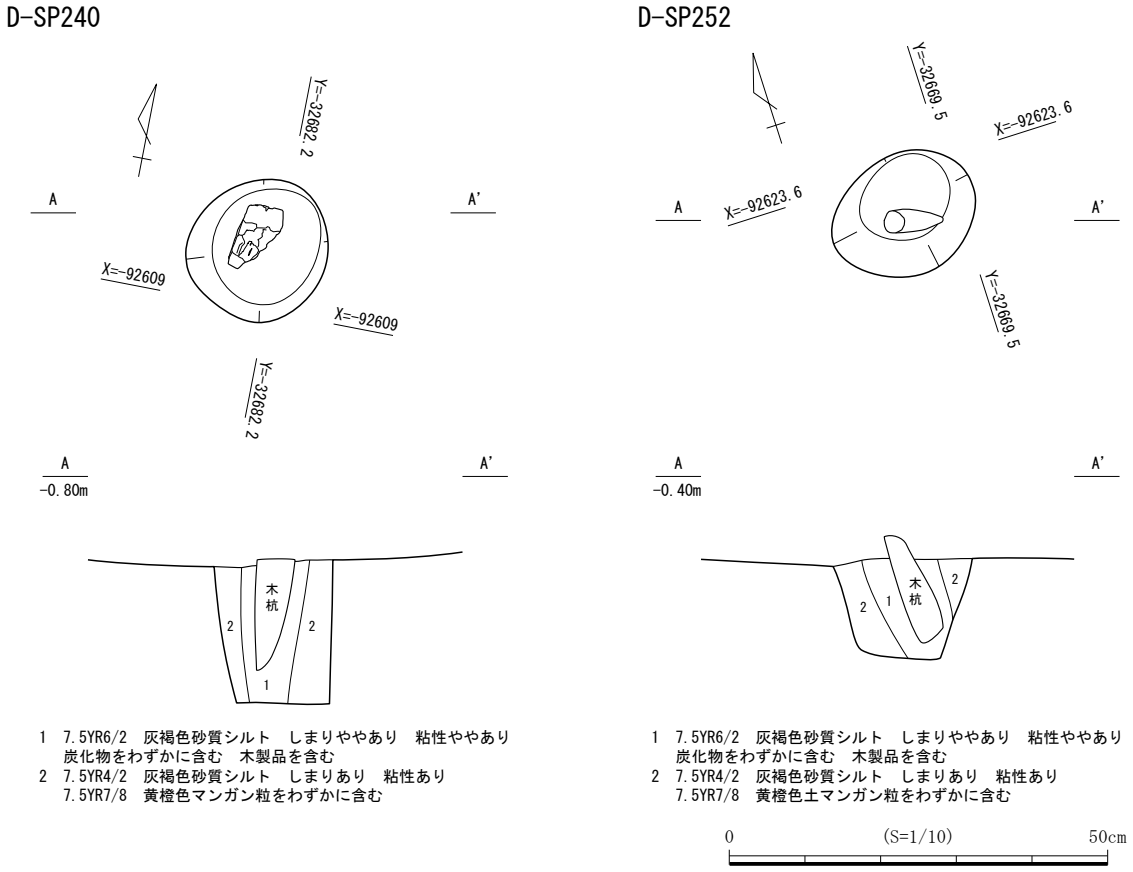
（４）柱穴・杭

D-SP240（第61図、図版25）

Ｄ区東部に位置し、Ⅵ層上面で検出した。規模は直径19cm、深さ24cmを測る。平面形は円形、断面形は半円形、平坦な底面を呈す。埋土はしまりの異なる灰褐色砂質シルトの２層である。杭が打ちこまれた状態で検出された。

D-SP252（第61図、図版25）

Ｄ区東部に位置し、Ⅵ層上面で検出した。規模は長軸20cm、短軸16cm、深さ26cmを測る。平面形は円形、断面形は半円形、平坦な底面を呈す。埋土はしまりの異なる灰褐色砂質シルトの２層である。杭が打ちこまれた状態で検出された。



第61図　D-SP240、SP252平面図・断面図

第４章　遺　物

第１節　第10次調査

１．Ａ区の遺物

A-SD31（第62図、図版26）

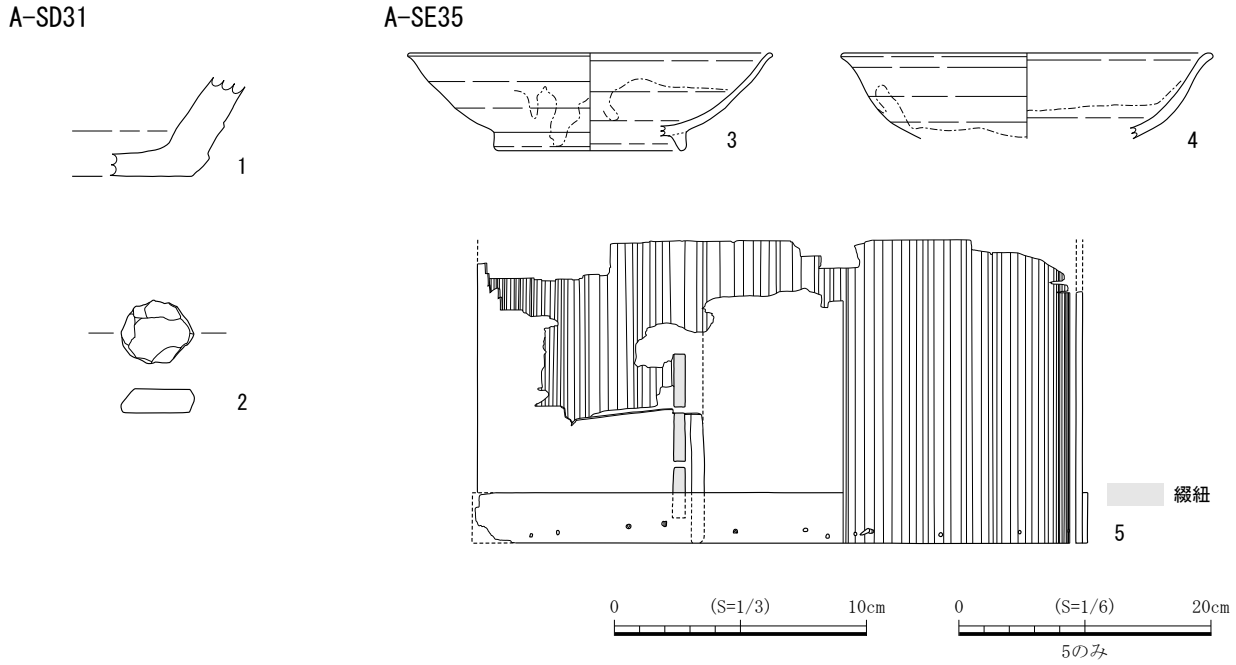
１は陶器の広口壺である。底部と胴部の境は明瞭で直線的に立ち上がる。外面はヘラナデとナデを施しているが、底部は不調整である。内外面は降灰がみられる。年代は12世紀から13世紀の常滑産のものと考えられる。

２は加工円板である。最大径が2.9cm、最小径が2.5cm、厚さが1.0cm、重さが8.7ｇである。表面はナデが施され、裏面は降灰がみられる。側面を打ち欠いている。陶器を加工したものと思われる。

A-SE35（第62図、図版26）

３・４は灰釉陶器の椀である。３は底部と体部の境は明瞭でなく緩やかに立ち上がる。体部はやや丸みを帯びながら広がり、口縁付近でわずかに外反する。口縁端部は丸く収まり、薄手の作りである。高台は外側に開く貼付高台である。内外面はロクロナデを施し、灰釉が施釉されている。O-53からH-72号窯式で、年代は10世紀から11世紀初頭のものと考えられる。４の体部は丸みを帯びながら広がり、口縁付近でやや外反する。口縁端部は丸く収まる。内外面はロクロナデを施し、灰釉が施釉されている。O-53号窯式で、年代は10世紀のものと考えられる。

５は木製品の曲物側板である。直径が48.0cm、高さが24.0cmである。内面に縦平行線のケビキ痕が残存する。0.9cm幅の綴紐で綴じ合わせる。下位には直径48.8cm、幅4.0cmの箍（たが）があり、同じく下位に直径0.2～0.5cmの釘孔が12ヶ所みられ、その内４ヶ所に木釘が残る。木釘径は0.5cm、長さ2.5cmである。木取りは板目で、樹種はヒノキである。



第62図　A-SD31、SE35遺物実測図

A-SK10（第63図、図版26）

６は山茶碗の碗である。底部と体部の境は明瞭でなく、緩やかに立ち上がる。高台は貼付高台で、内外にユビナデを施す。畳付に籾殻痕がみられる。内外面はロクロナデを施す。内面底部は摩耗が著しい。内面は降灰がみられる。尾張型第５型式で、年代は12世紀後半から13世紀前半のものと考えられる。

A-SK14（第63図、図版26）

７～11は山茶碗である。７・８は小皿である。７の内面底部中央は指圧痕によりやや凹む。底部と体部の境はあまり明瞭でなく緩やかに立ち上がる。体部はやや丸みを帯びながら直線的に開くように立ち上がり、口縁端部は丸く収まる。内外面はロクロナデを施し、口縁部は降灰がみられる。外面底部には板目状圧痕と回転糸切痕がみられる。８の底部と体部の境は明瞭でなく、緩やかに立ち上がる。口縁端部は丸く収まる。内外面はロクロナデを施し、外面底部には回転糸切痕がみられる。内面は一部降灰がみられる。胎土に直径約５㎜までの小石を含む。いずれも尾張型第５型式で、年代は12世紀後半から13世紀前半のものと考えられる。９～11は碗である。９の口縁端部は丸く収めつつ先端はやや窄まる。内外面はロクロナデを施す。胎土に直径約５㎜までの小石を含む。尾張型第４型式もしくは尾張型第５型式で、年代は12世紀から13世紀前半のものと考えられる。10の体部は丸みを帯び、口縁端部は丸く収まる。内外面にロクロナデを施す。やや薄手の作りか。尾張型第４型式で、年代は12世紀のものと考えられる。11の高台は貼付高台で、内外にユビナデを施し、籾殻痕がみられる。内外面はロクロナデを施し、外面底部は回転糸切痕がみられる。内面に降灰がみられる。胎土に直径約２～３㎜の小石を含む。尾張型第５型式で、年代は12世紀後半から13世紀前半のものと考えられる。

12は土師器の伊勢型鍋である。口縁は著しく外反し、口縁端部は内面に折り返され肥厚している。外面は口縁部にナデ、胴部から口縁部にユビオサエを施す。内面は胴部から口縁部にナデ、胴部にユビオサエを施し、粘土紐輪積痕がみられる。内外面にススが付着している。胎土に直径約３㎜の小石を含む。年代は12世紀から13世紀のものと考えられる。

13・14は加工円板である。13は最大径が3.0㎝、最小径が2.6㎝、厚さが1.0㎝、重さが9.2ｇである。表面は貼付高台の痕跡がみられ、高台貼付時のユビナデが施される。裏面はロクロナデが施される。側面は打ち欠きを施し、さらに削って丸くした痕跡がみられる。山茶碗の底部を加工したものと思われる。14は最大径が2.9㎝、最小径が2.7㎝、厚さが1.5㎝、重さが9.4ｇである。表面は貼付高台が残り、内側にユビナデ、外側にロクロナデが施される。裏面はロクロナデが施される。側面は打ち欠きを施し、さらに削って丸くした痕跡がみられる。使用された土器は、尾張型第５型式もしくは尾張型第６型式のものと思われる。

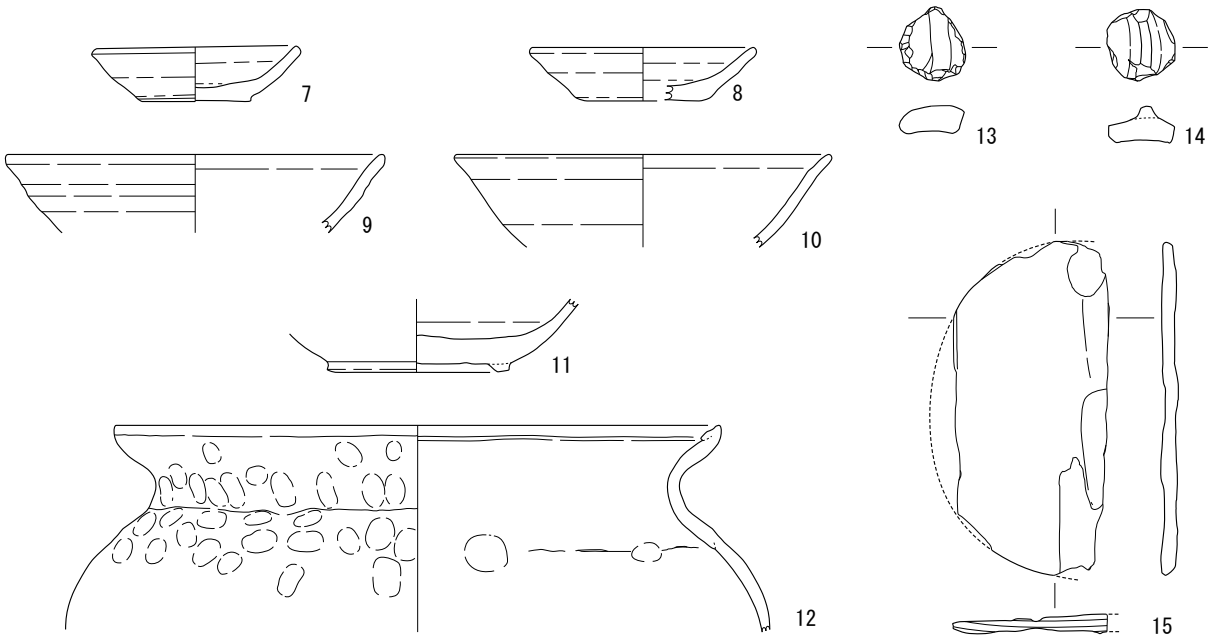
15は加工板である。残存長が13.2㎝、幅が6.1㎝、厚さが0.8㎝である。左右は欠損している。表面は全体的に風化している。外周がケズリ加工され丸く調整されている。全体的に平たく加工してあり、曲物の底板の可能性がある。木取りは板目で、樹種はヒノキである。

A-SK19（第63図、図版26）

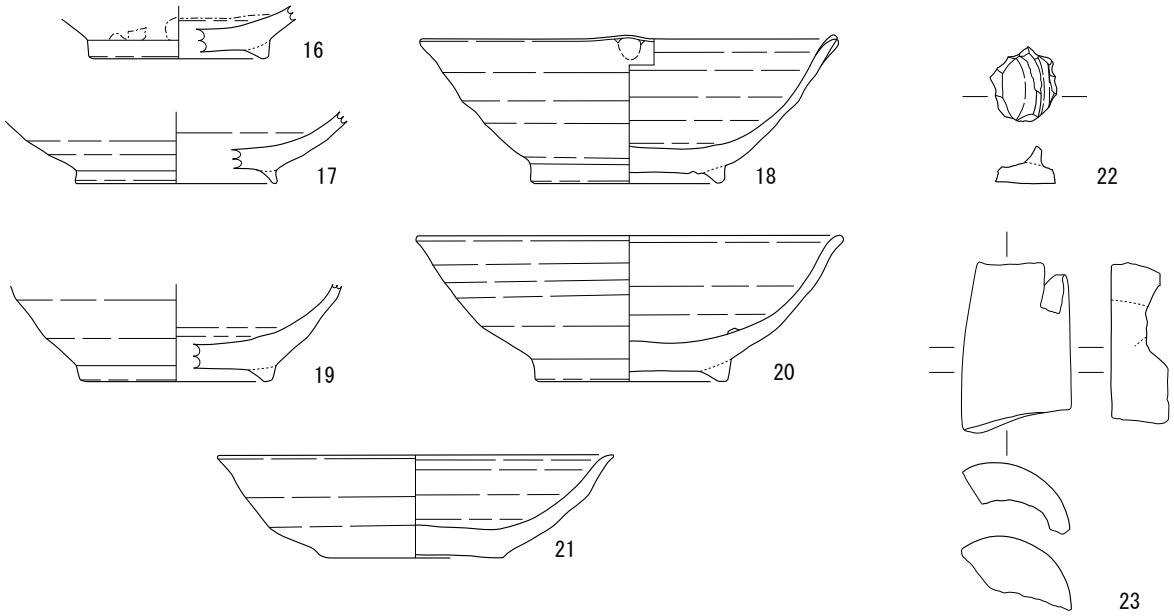
16～18は灰釉陶器である。16・17は椀である。16は底部と体部の境は明瞭でなく、緩やかに立ち上がる。高台は貼付高台で、内外にユビナデを施す。内外面はロクロナデを施し、外面底部は回転糸切痕がみられる。内面底部は摩耗が著しく、一部重ね焼痕がみられる。内外面に灰釉が施釉されている。17は底部と体

A-SK10

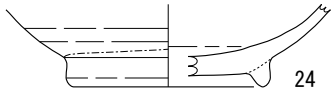
A-SK14

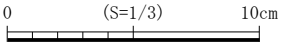


A-SK19



A-SK20





第63図　A-SK10、SK14、SK19遺物実測図

部の境はあまり明瞭でなく緩やかに立ち上がる。高台は貼付高台で内外にユビナデを施す。内外面はロクロナデを施し、外面底部は回転糸切痕がみられる。内面は降灰し付着物がある。16・17はH-72号窯式で、年代は10世紀後半から11世紀初頭のものと考えられる。18は輪花椀である。底部と体部の境は明瞭で、緩やかに立ち上がる。体部はやや丸みを帯びながら広がり、口縁付近でわずかに外反する。口縁端部は丸く収まる。断面形状が三角の貼付高台で、内外にユビナデを施す。内外面はロクロナデを施し、外面底部は回転糸切痕がみられる。外面口縁部はユビオサエを施す。輪花が１ヶ所みられる。百代寺窯式か。年代は11世紀のものと考えられる。

19・20は山茶碗の碗である。19は底部と体部の境は明瞭でなく、緩やかに立ち上がる。高台は貼付高台で、内外にユビナデを施す。内外面はロクロナデ、外面底部は回転糸切痕がみられる。内面底部には使用痕がみられ、その中央にはススが付着している。20は底部と体部の境は明瞭でなく緩やかに立ち上がる。胴部はやや丸みを帯びながら立ち上がり、口縁端部は丸く収まる。高台は貼付高台で、内外にユビナデを施す。内外面はロクロナデを施し、外面底部は回転糸切痕をナデ消している。内面底部には重ね焼痕がみられる。中央は降灰しておらず、摩耗が著しい。内外面に降灰がみられる。いずれも尾張型第３型式で、年代は11世紀後半から12世紀初頭のものと考えられる。

21は土師器の椀である。底部と体部の境はあまり明瞭ではなく緩やかに立ち上がる。体部はやや丸みを帯びながら広がり、口縁付近でわずかに外反する。口縁端部は丸く収まる。内外面はロクロナデを施し、外面底部には回転糸切痕がみられる。年代は12世紀末のものと考えられる。

22は加工円板である。最大径が3.0㎝、最小径が2.7㎝、厚さが1.5㎝、重さが9.7ｇである。表面は貼付高台が残り、内外にユビナデが施される。裏面はロクロナデが施される。側面は打ち欠きが施される。貼付高台の痕跡がわずかに残る。灰釉陶器を加工したものと思われる。使用された土器はO-53号窯式のものと思われる。

23は土師器で器形、年代ともに不明である。残存する長さが6.8㎝、幅が4.4㎝、厚さが1.4㎝である。残存部の形状は円柱状で内部に孔が開いており、羽口のように見えるが孔は貫通していない。外面は丁寧なナデ、内面はユビオサエを施す。破片のため用途は不明である。

A-SK20（第63図、図版26）

24は灰釉陶器の椀である。底部と体部の境がやや明瞭でなく、緩やかに立ち上がる。高台は貼付高台で、内外にユビナデを施す。籾殻痕はなく、摩耗が著しい。内外面はロクロナデを施し、外面底部は回転糸切痕がみられる。内面底部には重ね焼痕がみられる。外面には灰釉が施釉され、内面は降灰がみられる。O-53号窯式で、年代は10世紀のものと考えられる。

A-SK33（第64図、図版27）

25・26は灰釉陶器である。25は椀である。体部はやや丸みを帯びながら広がり、口縁付近でわずかに外反する。口縁端部は丸く収まる。内外面はロクロナデを施す。外面体部の一部に、焼成時重ならなかった部分が火を受けて変色している。内面は降灰がみられる。O-53からH-72号窯式で、年代は10世紀から11世紀初頭のものと考えられる。26は鉢である。口縁端部は丸く収まる。内外面はロクロナデを施す。写真のみの掲載である。

27～30は山茶碗の碗である。27の体部はやや丸みを帯びながら広がり、口縁端部はやや尖っている。

内外面はロクロナデを施し、降灰がみられる。28の口縁端部は丸く収まる。内外面はロクロナデを施す。内面は降灰がみられる。29の体部はやや丸みを帯びながら広がり、口縁付近でやや外反する。口縁端部はやや尖っている。内外面はロクロナデを施し、降灰がみられる。27～29は、尾張型第４型式もしくは尾張型第５型式で、年代は12世紀から13世紀前半のものと考えられる。30の底部と体部の境は明瞭でなく緩やかに立ち上がる。腰部はやや丸みを帯びながら立ち上がり、そこから口縁部まで直線的に広がる。口縁端部は丸く収まる。高台は外側に開いた貼付高台で、内外にユビナデを施し、籾殻痕がみられる。内外面はロクロナデを施し、外面底部は回転糸切痕がみられる。内面底部中央に使用痕があり、やや摩耗している。内外面口縁部は降灰がみられる。尾張型第５型式で、年代は12世紀後半から13世紀前半のものと考えられる。

A-SK34（第64図、図版27）

31～33は土師器である。31・32は清郷型鍋である。31の胴部はやや丸みを帯びながら広がり、口縁部は「く」の字に折れ、肥厚する。口縁端部を斜め上方に引き出し、ヨコナデにより面取りする。外面胴部はナデを施し、胴部から口縁部にかけて粘土紐輪積痕がみられる。内面胴部は板ナデを施し、ススが付着している。胎土に直径約５㎜までの小石を含む。年代は10世紀のものと考えられる。32の胴部はやや丸みを帯びながら直線的に立ち上がり、口縁部は「く」の字に折れ、肥厚する。口縁端部を斜め上方に引き出し、ヨコナデにより面取りする。外面胴部はナデとユビオサエ、内面は板ナデを施す。内外面にススが付着している。胎土に直径約５㎜までの小石を多く含む。詳細な年代は不明だが、共伴する遺物から10世紀のものと考えられる。33は鍋である。口縁はやや丸みを帯びながら広がり、口縁端部は内湾する。内外面はヨコナデを施し、内面にススが付着している。詳細な年代は不明だが、共伴する遺物から12世紀以前のものと考えられる。

34は灰釉陶器の椀である。体部は直線的だがやや丸みを帯びて立ち上がり、口縁端部は丸く収まる。内外面はロクロナデを施す。百代寺窯式で、年代は11世紀のものと考えられる。

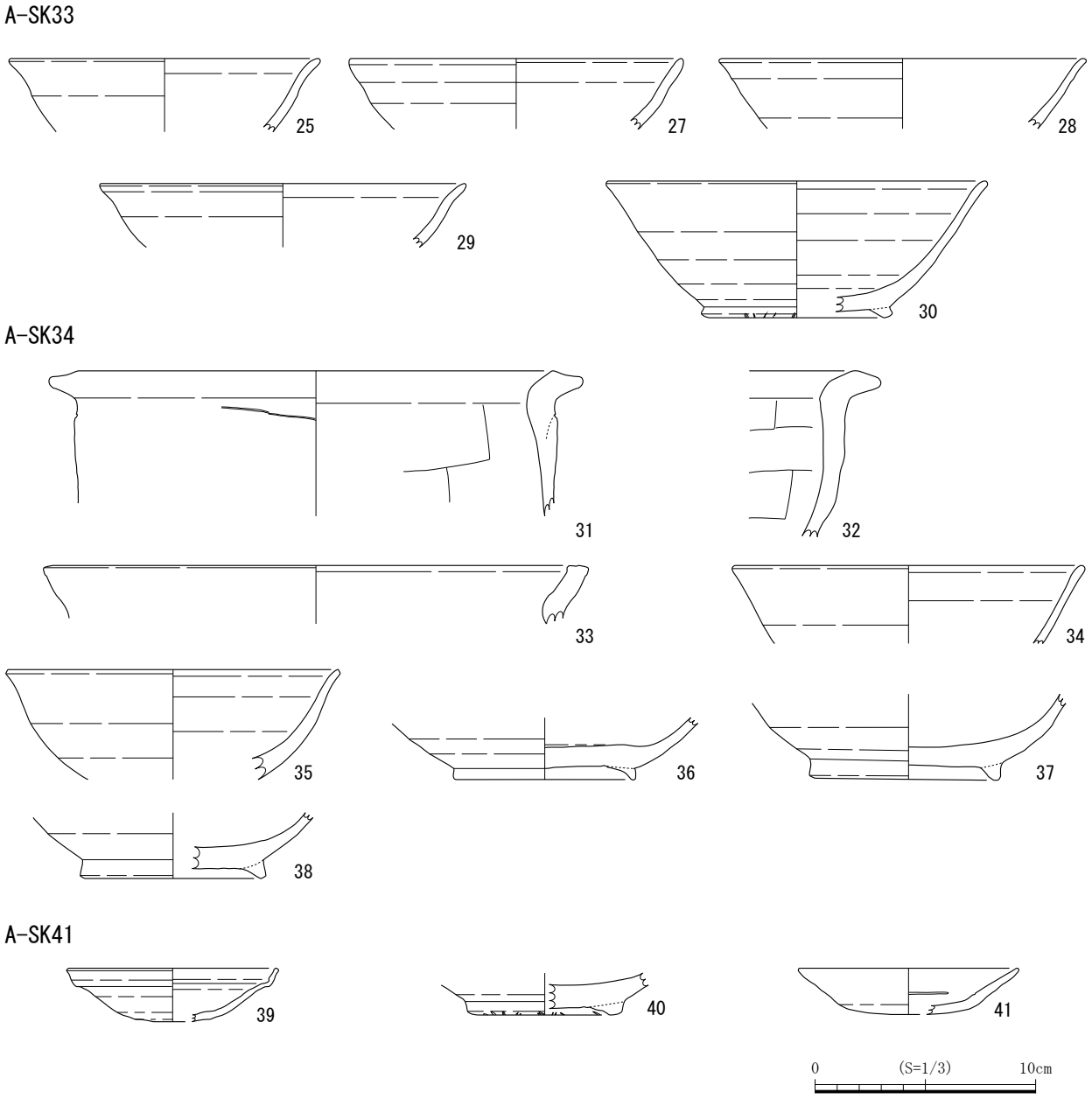
35～37は山茶碗の碗である。35の体部はやや丸みを帯びながら広がり、口縁付近でわずかに外反する。口縁端部は丸く収まる。内外面はロクロナデを施す。内面は降灰がみられる。尾張型第４型式もしくは尾張型第５型式で、年代は12世紀から13世紀前半のものと考えられる。周囲からの混入が考えられる。36の底部と体部の境は強いナデによる凹みがあり、その後、緩やかに立ち上がる。高台は貼付高台で、内外にユビナデを施す。内外面はロクロナデを施し、外面底部は回転糸切痕がみられる。内面底部にはススが付着し、やや摩耗している。中央はロクロナデ後、ナデとユビオサエをした痕跡があり凹凸している。内面は降灰がみられる。37は底部と体部の境は明瞭でなく緩やかに立ち上がる。高台は貼付高台で、内外にユビナデを施す。内外面はロクロナデを施し、外面底部は回転糸切後、ナデが施される。内面底部に炭化物の付着が著しい。内面は降灰がみられる。36・37は、尾張型第３型式で、年代は11世紀後半から12世紀初頭のものと考えられる。

38は灰釉陶器もしくは山茶碗で、底部と体部の境は明瞭でなく緩やかに立ち上がる。高台は外側に開いた貼付高台で、内外にユビナデを施す。内外面はロクロナデを施し、外面底部は回転糸切後、ナデが施される。内面底部にはススが付着し、著しく摩耗している。山茶碗とすれば尾張型第３型式で、年代は11世紀後半から12世紀初頭のものと考えられる。

A-SK41（第64図、図版27）

39・40は山茶碗の碗である。39の体部はやや丸みを帯びながら広がり、口縁付近で屈曲し、そこから直線的に立ち上がる。口縁端部はやや内湾する。内外面はロクロナデを施し、外面底部に糸切痕がみられる。東濃型生田２号窯式で、年代は15世紀後半のものと考えられる。後世の混入の可能性が考えられる。40は底部と体部の境は明瞭でなく緩やかに立ち上がる。断面形状が潰れた方形の貼付高台で、内外にユビナデを施し、籾殻痕がみられる。内外面はロクロナデを施し、外面底部は回転糸切痕がみられる。東濃型谷迫間２号窯式で、年代は12世紀のものと考えられる。

41は土師器の小皿である。底部と胴部の境は明瞭でなく緩やかに立ち上がる。体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は丸く収まる。内外面はヨコナデを施し、外面底部から胴部にかけてナデを施す。内面胴部には溝があり、ナデによって石が動いた痕と思われる。詳細な年代は不明である。



第64図　A-SK33、SK34、SK42遺物実測図

A-SK42（第65図、図版27）

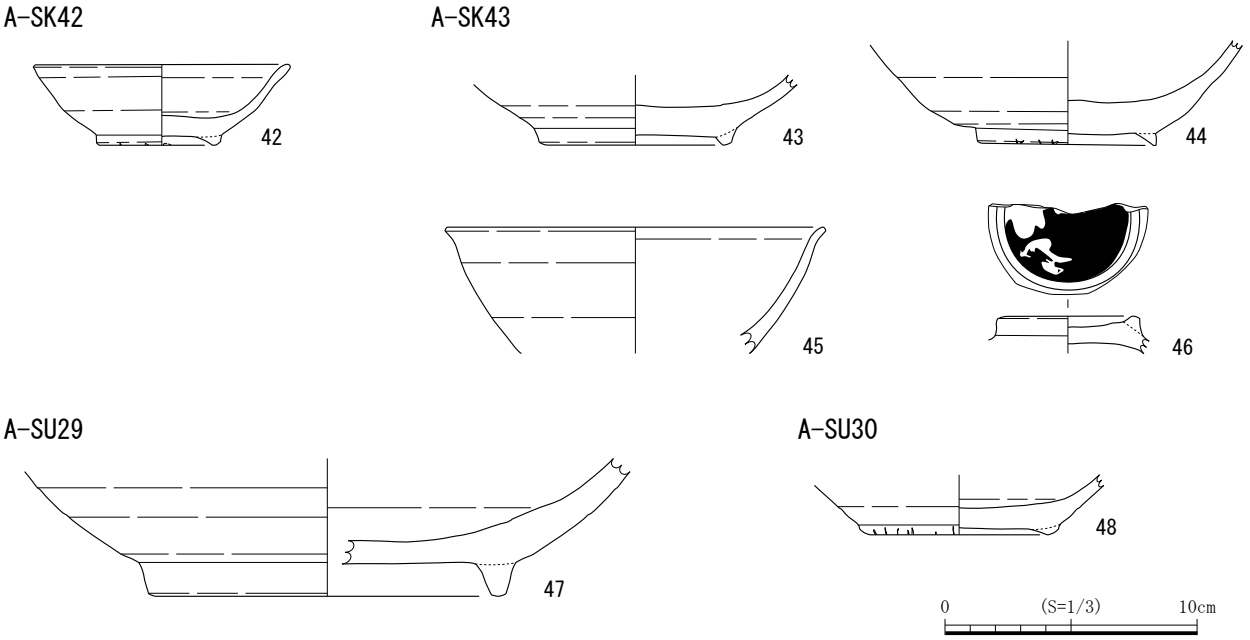
42は山茶碗の小碗で、底部と体部の境は明瞭でなく緩やかに立ち上がる。体部はやや丸みを帯びながら広がり、口縁端部は丸く収まる。高台は貼付高台で、籾殻痕がみられる。内外面はロクロナデを施し、外面底部には回転糸切痕がみられる。内面底部は著しく摩耗している。内面は降灰がみられる。尾張型第４型式前半頃で、年代は12世紀のものと考えられる。

A-SK43（第65図、図版27）

43～46は山茶碗である。43～45は碗である。43は底部と体部の境は明瞭でなく緩やかに立ち上がる。高台は貼付高台で、内外にユビナデを施し、籾殻痕がみられる。内外面はロクロナデを施し、外面底部は、回転糸切痕がみられる。内面底部には使用痕が見られ、ススが付着している。内面は降灰がみられる。44は底部と体部の境は明瞭で緩やかに立ち上がる。高台は貼付高台で、内外にユビナデを施し、籾殻痕がみられる。内外面はロクロナデ、外面底部は回転糸切痕がみられる。内面底部はユビナデを施し、底部と体部の境は強いナデによる凹みがある。また、重ね焼痕がみられる。内外面と高台に一部降灰がみられる。43・44は尾張型第５型式で、年代は12世紀後半から13世紀前半のものと考えられる。45の体部はやや丸みを帯びながら広がり、口縁付近でやや外反する。口縁端部は丸く収まる。内外面はロクロナデを施し、降灰している。尾張型第４型式で、年代は12世紀のものと考えられる。46の高台は貼付高台で、内外にユビナデを施す。籾殻痕はなく、畳付の摩耗が著しい。内外面はロクロナデを施し、外面底部は回転糸切痕がみられる。また、墨痕が残り転用硯と考えられる。尾張型第５型式で、年代は12世紀後半から13世紀前半のものと考えられる。

A-SU29（第65図、図版27）

47は陶器の片口鉢である。底部と胴部の境は明瞭でなく、緩やかに立ち上がる。高台は貼付高台で、内外にユビナデを施す。外面はロクロナデと回転ケズリを施し、底部は貼付時のユビナデより中央にかけて



第65図　A-SK42、SK43、SU29、SU30遺物実測図

は不調整である。内面はロクロナデを施し、底部には使用痕があり摩耗が著しい。外面は降灰がみられる。尾張型第３型式の片口鉢Ｉ類で、年代は11世紀後半から12世紀初頭のものと考えられる。

A-SU30（第65図、図版27）

48は山茶碗の碗である。底部と体部の境はやや明瞭で緩やかに立ち上がる。高台は貼付高台で、内外にユビナデを施す。一部欠損しているが籾殻痕がみられる。内外面はロクロナデを施し、外面底部は回転糸切痕がみられる。尾張型第５型式で、年代は12世紀後半から13世紀前半のものと考えられる。

包含層（Ⅳ層）（図版27）

49は陶器の擂鉢である。外面はロクロナデ、内面は擂目を施す。擂目は残存部で10本確認出来る。内外面に錆釉が施釉されている。写真のみの掲載である。

50は磁器の碗である。口縁付近はやや外反し、口縁端部は丸く収まる。内外面はロクロナデ、呉須絵が施される。写真のみの掲載である。

包含層（Ｖ層）（第66図、図版27）

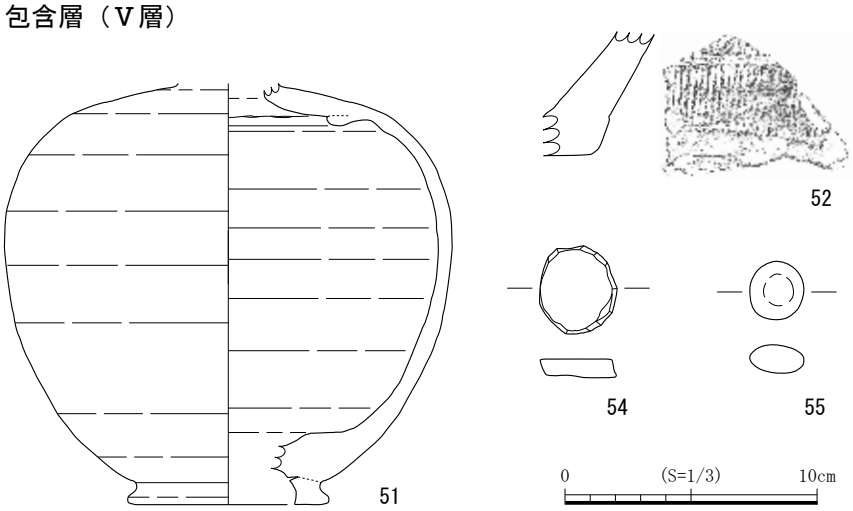
51は須恵器の瓶である。胴部は丸くやや肩を張る形状で、肩部から頸部にかけて接合して整形している。高台は貼付高台で、断面形状は潰れた方形である。高台の畳付と高台内部に自然釉が流れた痕跡がみられる。外面はロクロナデを施し、降灰がみられる。内面はナデを施し、肩部に粘土紐輪積痕がみられる。O-10号窯式で、年代は８世紀後半のものと考えられる。

52は陶器の擂鉢の底部である。平底か。外面はタタキとナデを施し、粘土紐輪積痕がみられる。内面はナデを施し、降灰がみられる。

53は磁器の碗である。内外面はロクロナデを施し、透明釉が施釉される。また、外面は腰部より底部にかけてケズリを施す。写真のみの掲載である。

54は加工円板である。最大径が3.5cm、最小径が3.1cm、厚さが0.8cm、重さが12.0ｇである。側面を打ち欠いた後に削って丸くした痕跡がみられる。表裏面に鉄釉が施釉されている。陶器を加工したものと思われる。使用された土器の年代は、戦国末期のものと考えられる。

55は碁石である。最大径が2.3cm、最小径が2.1cm、厚さが1.1cm、重さが8.2ｇである。包含層のため年代は不明である。



第66図　Ａ区　包含層遺物実測図

２．Ｂ区の遺物（第１遺構面）

B-SD17（第67図、図版28）

56は陶器の片口鉢である。底部と胴部の境はやや明瞭でなく緩やかに立ち上がる。高台は貼付高台で、内外にユビナデを施す。断面形状は三角形である。外面はケズリ、底部はナデが施される。内面はロクロナデを施し、粘土紐輪積痕が見られ、底部は使用により摩耗している。尾張型第５型式の片口鉢Ｉ類で、年代は12世紀後半から13世紀前半のものと考えられる。

57は青磁の碗である。内面はヘラによる刻劃文、外面はケズリが施される。内外面に青磁釉が施釉される。写真のみの掲載である。

B-SD33（第67図、図版28）

58は須恵器の甕である。頸部は短く垂直に立ち上がり、口縁端部はやや尖っている。内外面はヨコナデを施し、外面の一部にタタキを施す。年代は不明である。

59は山茶碗の小皿である。底部と体部の境はやや明瞭で緩やかに立ち上がる。体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は丸く収まる。内外面はロクロナデを施し、外面底部に回転糸切痕がみられる。内面は降灰がみられる。尾張型第５型式で、年代は12世紀後半から13世紀前半のものと考えられる。

B-SE24（第67図、図版28）

60・61は灰釉陶器の椀である。60は底部と体部の境は明瞭でなく緩やかに立ち上がる。高台はやや外側に開く貼付高台で、内外にユビナデを施す。三日月高台である。内外面はロクロナデを施し、外面底部はヘラ切りを施す。内面底部には使用痕か。内面は降灰がみられる。O-53号窯式で、年代は10世紀のものと考えられる。61は底部と体部の境はやや明瞭で、緩やかに立ち上がる。高台は貼付高台で、断面形状は三角形である。内外にユビナデを施す。内外面はロクロナデを施し、外面底部に回転糸切痕がみられる。内面は降灰がみられる。百代寺窯式で、年代は11世紀のものと考えられる。

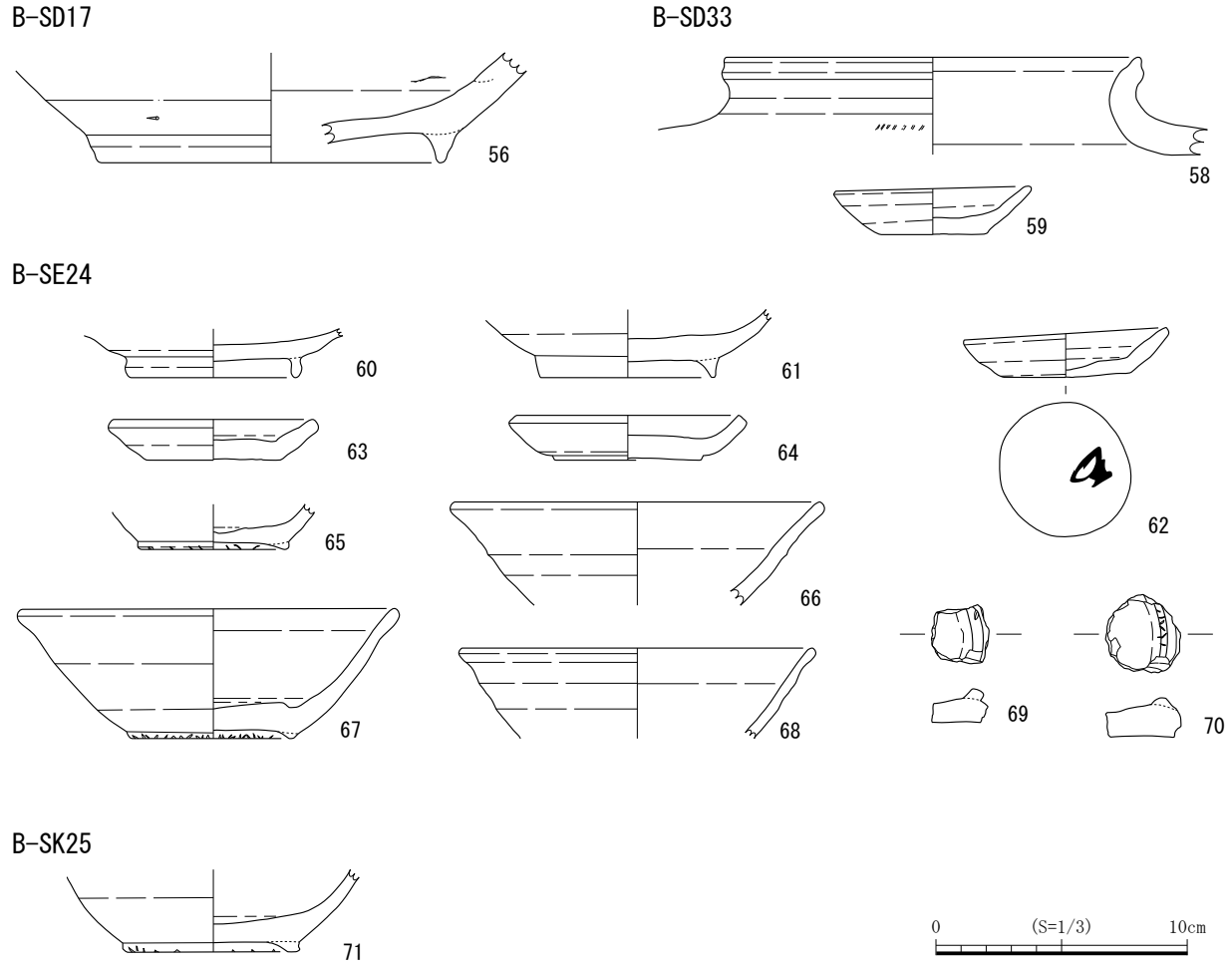
62～67は山茶碗である。62～64は小皿である。62の内面底部中央は凹凸し、底部と体部の境が明瞭で緩やかに立ち上がる。体部は直線的に開くように立ち上がり、口縁端部は丸く収まる。内外面はロクロナデを施し、外面底部は、糸切後ナデを施し、板目状圧痕がみられる。また、判読不明であるが、墨書がみられる。内面底部はユビナデを施す。内面は降灰がみられる。胎土に直径約５㎜までの小石を含む。63の底部と体部の境は明瞭で緩やかに立ち上がる。体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は丸く収まる。器高が低く扁平している。内外面はロクロナデを施し、外面底部に回転糸切痕がみられる。内面は降灰がみられる。胎土に直径約３㎜の小石を含む。いずれも尾張型第６型式で、年代は13世紀前半のものと考えられる。64は底部と体部の境はやや明瞭で緩やかに立ち上がる。体部はやや丸みを帯びながら広がり、口縁端部は面取りされる。器高が低く扁平している。内外面はロクロナデを施し、外面底部には回転糸切痕と板目状圧痕がみられる。内面底部はユビナデを施す。内外面は降灰がみられる。胎土に直径約５㎜までの小石を含む。尾張型第７型式で、年代は13世紀中頃のものと考えられる。65～68は碗である。65の内面底部中央はやや凹み、底部と体部の境は明瞭で緩やかに立ち上がる。高台はやや外側に開く貼付高台で、内外にユビナデを施し、籾殻痕がみられる。内外面はロクロナデ、外面底部は板目状圧痕がみられる。内面底部はユビナデを施す。66の体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は丸く収まる。内外面はロクロナデを施す。胎土に直径約２～３㎜の小石を多く含む。67の底部と体部の境は明瞭で、体部はやや丸みを帯びな

がら広がり、口縁付近でわずかに外反する。口縁端部は丸く収まる。高台は貼付高台で、内外にユビナデを施し、籾殻痕がみられる。内外面はロクロナデを施し、外面底部は回転糸切痕がみられる。内面は降灰がみられる。胎土に３㎜の小石を含む。65～67は、尾張型第６型式で、年代は13世紀前半のものと考えられる。68の体部は直線的に立ち上がり、口縁付近でやや外反する。口縁端部はやや尖っている。内外面はロクロナデを施す。東濃型窯洞１号窯式で、年代は12世紀後半から13世紀初頭のものと考えられる。

69・70は加工円板である。69は最大径が2.3㎝、最小径が2.3㎝、厚さが1.4㎝、重さが7.7ｇである。70は最大径が3.1㎝、最小径が3.0㎝、厚さが1.6㎝、重さが14.9ｇである。共に表面は貼付高台が残り、内外にユビナデが施される。籾殻痕もみられる。裏面はロクロナデを施し、著しく摩耗している。側面は打ち欠きを施し、さらに削って丸くした痕跡がみられる。共に山茶碗を加工したものと思われる。

B-SK25（第67図、図版28）

71は山茶碗の碗である。底部と体部の境はあまり明瞭ではなく、緩やかに立ち上がる。高台は貼付高台で、内外にユビナデを施し、籾殻痕がみられる。断面形状は方形である。内外面はロクロナデを施し、外面底部は回転糸切痕がみられる。尾張型第５型式で、年代は12世紀後半から13世紀前半のものと考えられる。



第67図　B-SD17、SD33、SE24、SK25遺物実測図

B-SX21（第68図、図版28）

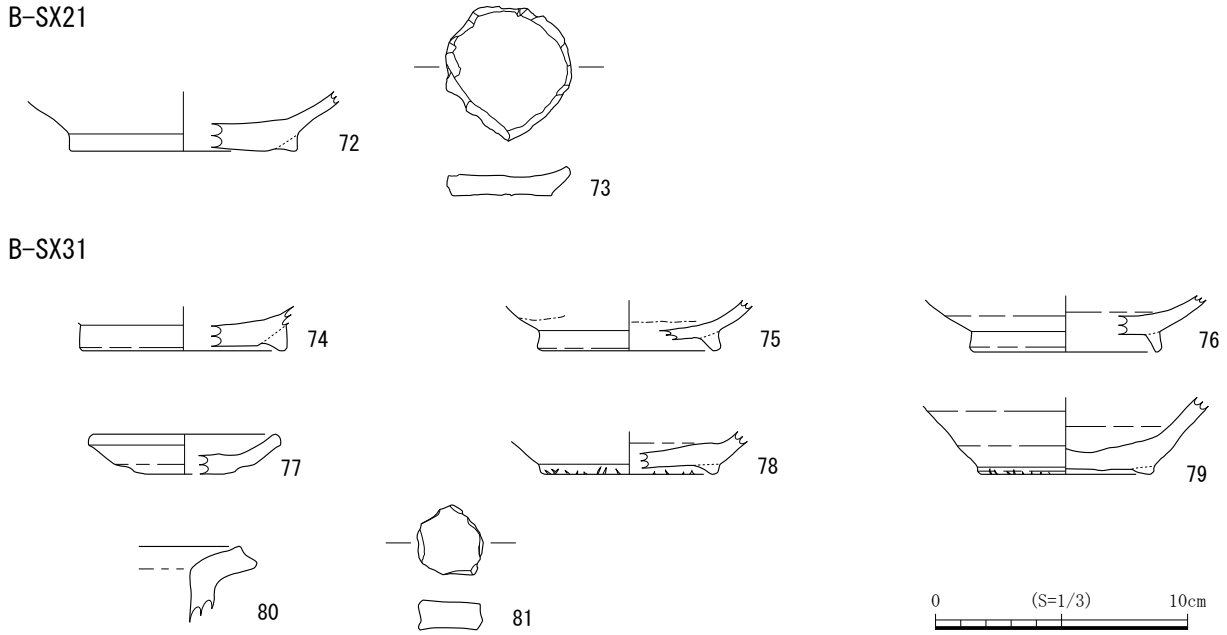
72は山茶碗の碗である。底部と体部の境はやや明瞭で、緩やかに立ち上がる。高台は貼付高台で、内外にユビナデを施す。底部の外側に付けられており、断面形状は三角形である。内外面はロクロナデを施し、外面底部は回転糸切痕がみられる。内面は使用による摩耗が見られ、ススが付着し、降灰がみられる。尾張型第３型式で、年代は11世紀後半から12世紀初頭のものと考えられる。

73は加工円板である。最大径が5.3cm、最小径が4.9cm、厚さが1.1cm、重さが25.1ｇである。表面はロクロナデを施し、裏面はロクロナデと回転糸切痕がみられる。側面は打ち欠きを施し、さらに削って丸くした痕跡がみられる。山茶碗を底部に沿って加工したものと思われる。使用された土器は尾張型第５型式のものと思われる。

B-SX31（第68図、図版28）

74～76は灰釉陶器の椀である。74の高台は垂直に立ち、貼付高台で、断面形状は三角形である。外面底部には回転糸切痕がみられる。内外面はロクロナデを施す。内面は降灰がみられ、底部は使用による摩耗が著しい。75は底部と体部の境は明瞭でなく緩やかに立ち上がる。高台はやや外側に開く貼付高台で、内外にユビナデを施し、断面形状は方形である。内外面はロクロナデを施し、灰釉が施釉されている。外面底部はユビナデを施す。内面底部は使用により著しく摩耗している。76は底部と体部の境は明瞭でなく緩やかに立ち上がる。高台はやや外側に開く貼付高台で、内外にユビナデを施し、断面形状は方形である。内外面はロクロナデを施し、外面底部はユビナデを施す。内面底部は使用により著しく摩耗している。いずれもＯ-53号窯式で、年代は10世紀のものと考えられる。

77～79は山茶碗である。77は小皿である。底部と体部の境は明瞭でなく緩やかに立ち上がる。口縁端部は丸く収まる。内外面はロクロナデを施し、外面底部には回転糸切痕がみられる。内面底部はユビナデを施す。尾張型第６型式で、年代は13世紀前半のものと考えられる。78・79は碗である。78の底部と体部の境は明瞭で緩やかに立ち上がる。高台は貼付高台で、内外にユビナデを施し、籾殻痕がみられる。内外



第68図　B-SX21、SK31遺物実測図

面はロクロナデ、外面底部は、糸切後ナデを施し、板目状圧痕がみられる。内面底部はユビナデを施す。胎土に直径約１㎜の小石を含む。79の底部と体部の境は明瞭で緩やかに立ち上がる。高台は貼付高台で、内外にユビナデを施し、籾殻痕がみられる。断面形状は潰れた方形である。内外面はロクロナデを施し、外面底部は回転糸切痕がみられる。内面は降灰がみられ、内面底部はユビナデを施し、重ね焼痕がみられる。胎土に直径約１～２㎜の小石を含む。いずれも尾張型第６型式で、年代は13世紀前半のものと考えられる。

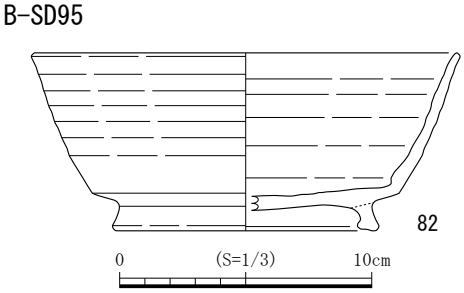
80は土師器の清郷型鍋である。口縁部は「く」の字に折れ、肥厚する。口縁端部を斜め上方に引き出し、ヨコナデにより面取りする。外面はユビオサエとナデを施し、内面は板ナデを施す。胎土に直径８㎜までの小石を含む。

81は加工円板である。最大径が2.8㎝、最小径が2.6㎝、厚さが1.2㎝、重さが10.5ｇである。表面は降灰がみられ、裏面はナデを施し、側面は打ち欠きを施す。陶器を加工したものと思われる。

３．Ｂ区の遺物（第２遺構面）

B-SD95（第69図、図版29）

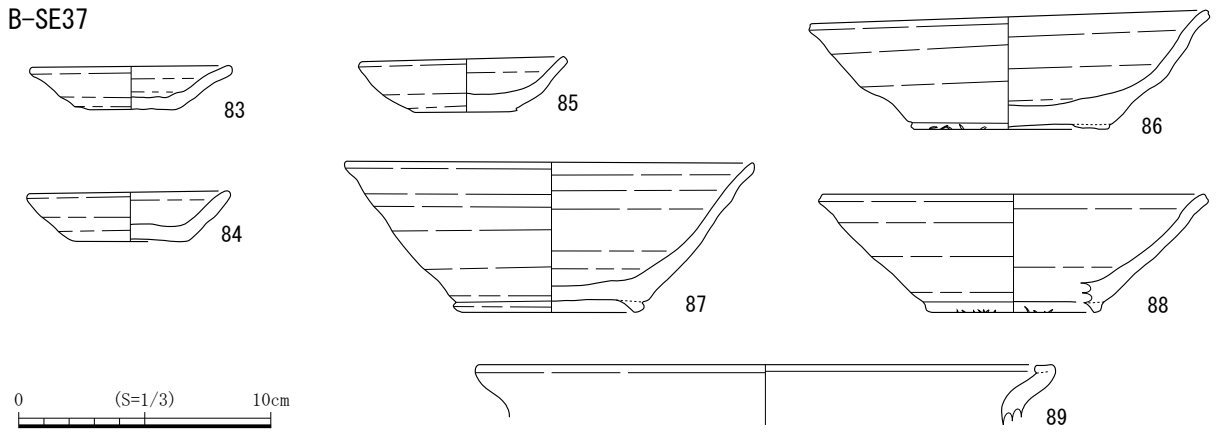
82は須恵器の有台杯である。底部と胴部の境は明瞭で、直線的に立ち上がる。口縁端部は丸く収まる。高台は貼付高台で、高台径が広く、畳付はやや外反している。内外面はロクロナデを施す。内面は降灰がみられる。O-10号窯式で、年代は８世紀後半のものと考えられる。



第69図　B-SD95遺物実測図

B-SE37（第70図、図版29）

83～88は山茶碗である。83～85は小皿である。83の内面底部中央は凸凹し、底部と体部の境はやや明瞭で緩やかに立ち上がる。体部は直線的に立ち上がり、口縁付近でわずかに外反する。口縁端部は丸く収まる。口縁部はわずかに歪んでいる。内外面はロクロナデを施し、降灰がみられる。外面底部には回転糸切痕と板目状圧痕がみられる。84の底部から体部の境は明瞭でなく、緩やかに立ち上がる。体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は丸く収まる。内外面はロクロナデを施し、降灰がみられる。外面底部には回転糸切痕がみられる。85の底部から体部の境はやや明瞭で緩やかに立ち上がる。体部は丸みを帯びながら広がり、口縁端部は丸く収まる。内外面はロクロナデを施し、降灰がみられる。外面底部は回転糸切後、ナデが施される。83～85は尾張型第５型式で、年代は12世紀後半から13世紀前半のものと考えられる。86・87は碗である。86の底部と体部の境は明瞭でなく、緩やかに立ち上がる。体部はやや丸みを帯びながら広がり、口縁付近でわずかに外反する。口縁部は丸く収まり、わずかに歪んでいる。高台は貼付高台で、内外にユビナデを施す。断面形状は潰れた方形で、籾殻痕がみられる。内外面はロクロナデを施し、外面底部に回転糸切痕がみられる。内面は降灰がみられる。87の底部と体部の境は明瞭で緩やかに立ち上がる。体部はやや丸みを帯びながら広がり、口縁付近でやや外反する。口縁端部は丸く収まる。高台はやや外側に開く貼付高台で、内外にユビナデを施し、籾殻痕がみられる。内外面はロクロナデを施し、外面底部に回転糸切痕がみられる。内面底部はユビナデを施す。胎土に直径約３～４㎜の小石を含む。86・87は尾張型第５型式で、12世紀後半から13世紀前半のものと考えられる。88は、底部から体部の境は明瞭でなく緩



第70図　B-SE37遺物実測図

やかに立ち上がる。体部はやや丸みを帯びながら広がり、口縁端部は丸く収まる。高台は貼付高台で、籾殻痕がみられる。内外面はロクロナデを施し、降灰がみられる。尾張型第６型式で、年代は13世紀前半のものと考えられる。

89は土師器の伊勢型鍋である。口縁はやや外反し、口縁端部は内側に折り返され、肥厚している。内外面はナデを施し、外面にはススが付着している。年代は12世紀頃のものと考えられる。

B-SK41（第71図、図版29）

90は灰釉陶器の椀である。底部と体部の境は明瞭でなく、緩やかに立ち上がる。高台は貼付高台で、内外にユビナデを施す。断面形状は三角形で、摩耗が著しい。内外面はロクロナデを施す。外面底部に回転糸切痕がみられるがナデ消しされている。内面は灰釉が施釉されている。百代寺窯式で、年代は11世紀頃のものと考えられる。

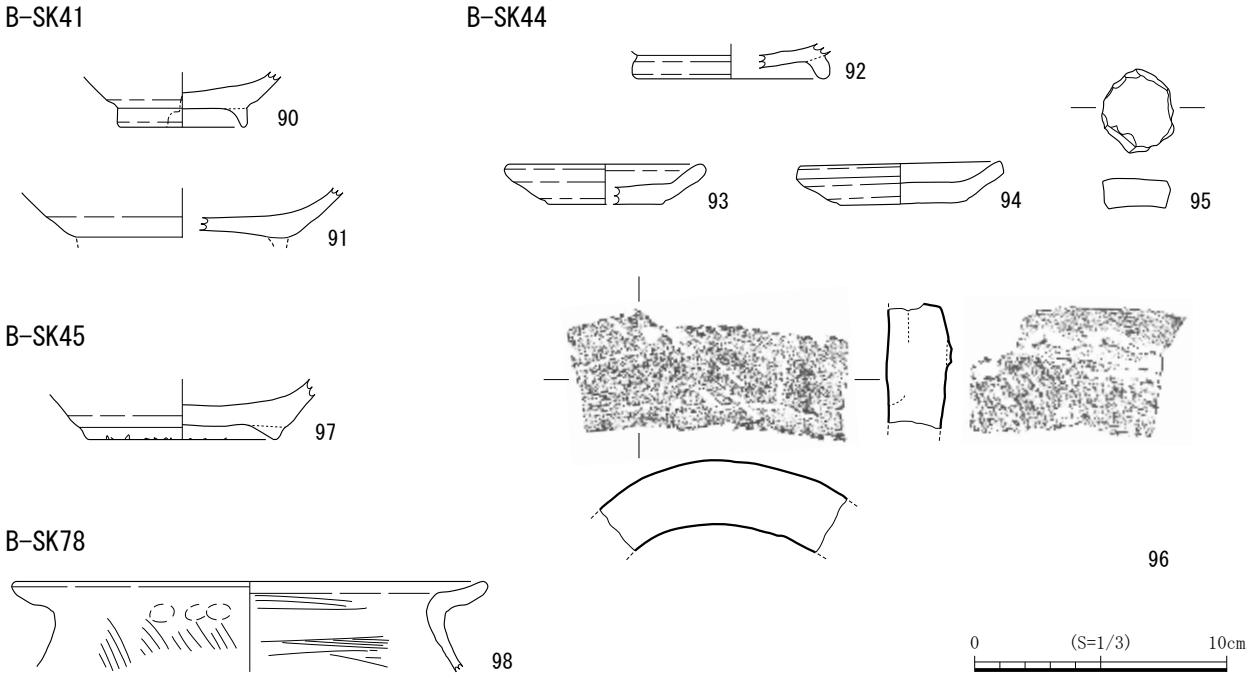
91は山茶碗の碗である。底部から体部の境は明瞭でなく、緩やかに立ち上がる。内外面はロクロナデを施し、外面底部には貼付高台が剥がれた痕と回転糸切痕がみられる。内面底部は使用により摩耗している。内面は降灰がみられる。胎土に直径約３㎜の小石を含む。尾張型第５型式で、年代は12世紀後半から13世紀前半のものと考えられる。

B-SK44（第71図、図版29）

92は灰釉陶器の椀である。高台はやや外側に開く貼付高台で、内外にユビナデを施す。断面形状は畳付がやや丸みを帯びた方形である。外面底部に回転糸切痕がみられる。内面はロクロナデを施す。H-72号窯式で、年代は10世紀後半から11世紀初頭のものと考えられる。

93・94は山茶碗の小皿である。93の底部と体部の境は明瞭で、緩やかに立ち上がる。体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は丸く収まる。内外面はロクロナデを施し、降灰がみられる。外面底部に回転糸切痕がみられる。尾張型第６型式で、年代は13世紀前半のものと考えられる。94の底部と体部の境は明瞭でなく、緩やかに立ち上がる。体部はやや直線的に広がり、口縁端部は面取りされる。内外面はロクロナデを施し、外面底部には回転糸切痕がみられる。胎土に直径約７㎜の小石を含む。尾張型第７型式で、年代は13世紀中頃のものと考えられる。

95は加工円板である。最大径が3.3㎝、最小径が2.8㎝、厚さが1.1㎝、重さが14.3ｇである。表裏面にナデを施し、側面に打ち欠きを施す。陶器を加工したものと思われる。



第71図　B-SK41、SK44、SK45、SK78遺物実測図

96は丸瓦である。凸面はケズリを施し、降灰がみられる。凹面はコビキ痕、布目痕がみられナデ消している。また、ケズリ、ヨコナデを施す。軒丸瓦の可能性がある。

B-SK45（第71図、図版29）

97は山茶碗の碗である。底部と体部の境は明瞭でなく、緩やかに立ち上がる。高台は貼付高台で、内外にユビナデを施され、籾殻痕がみられる。内外面はロクロナデを施し、外面底部は回転糸切痕がみられ、内面底部はユビナデを施す。胎土に直径約８㎜の小石を含む。尾張型第５型式で、年代は12世紀後半から13世紀前半のものと考えられる。

B-SK78（第71図、図版29）

98は土師器の甕である。口縁は著しく外反し、「く」の字状になり、口縁端部は丸く収まる。外面はナデ、ユビオサエ、ナナメハケを施す。内面はナデ、ヨコハケを施す。胎土に直径約1㎜までの小石を多く含む。

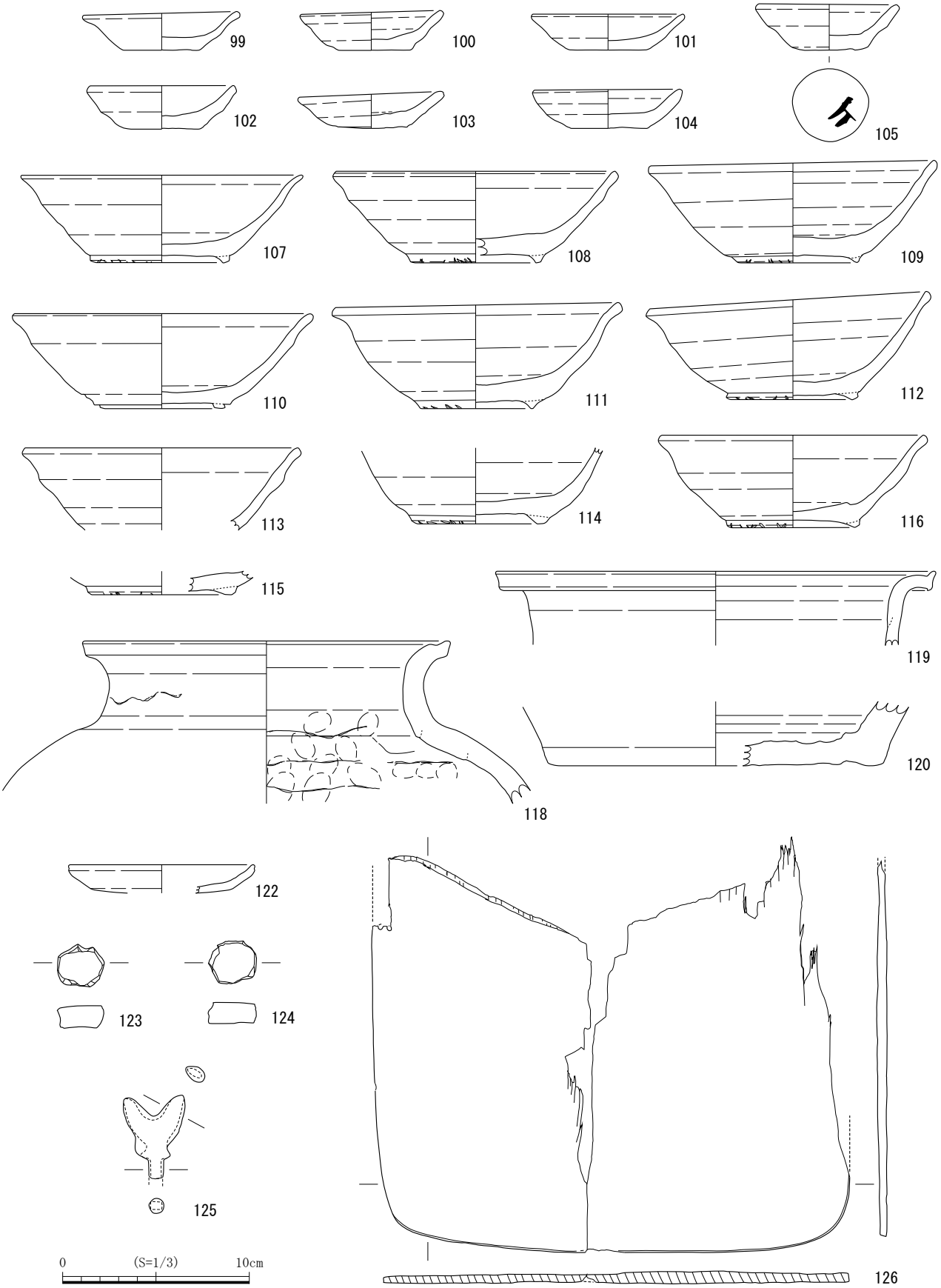
B-SK86（第72図、図版30）

99～116は山茶碗である。99～106は小皿である。99の底部と体部の境は明瞭でなく、緩やかに立ち上がる。体部はやや丸みを帯びながら広がり、口縁付近でわずかに外反する。口縁端部は丸く収まる。内外面はロクロナデを施し、外面底部には回転糸切痕がみられる。内面底部には指圧痕が残る。内面は降灰がみられ、胎土に直径約２㎜の小石を含む。100の底部と体部の境は明瞭でなく、緩やかに立ち上がる。体部はやや丸みを帯びながら広がり、口縁端部は丸く収まる。内外面はロクロナデを施し、外面底部には回転糸切痕と板目状圧痕がみられる。内面底部には指圧痕が残る。101の底部と体部の境は明瞭でなく、緩やかに立ち上がる。体部はやや直線的に立ち上がり、口縁端部は丸く収まる。内外面はロクロナデを施し、外面底部は回転糸切後、ナデを施し、板目状圧痕がみられる。102の底部と体部の境は明瞭でなく、緩やかに立ち上がる。体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は丸く収まる。内外面はロクロナデを施し、外面

底部には回転糸切痕と板目状圧痕がみられる。内面全体に漆が付着している。胎土に直径約６～７㎜の小石を含む。103の底部と体部の境はやや明瞭で、緩やかに立ち上がる。体部はやや直線的に立ち上がり、口縁端部は丸く収まる。内外面はロクロナデを施し、降灰がみられる。外面底部は回転糸切後、ナデが施され、一部に重ね焼のハガレ痕がみられる。104の底部と体部の境は明瞭でなく、緩やかに立ち上がる。体部はやや丸みを帯びながら広がり、口縁端部は丸く収まる。口縁部はわずかに歪んでいる。内外面はロクロナデを施し、降灰がみられる。外面底部には回転糸切痕がみられる。胎土に直径約５㎜までの小石を含む。105の底部と体部の境はやや明瞭で緩やかに立ち上がる。体部はやや直線的に立ち上がり、口縁端部は丸く収まる。内外面はロクロナデを施し、降灰がみられる。外面底部には回転糸切痕がみられ、「上」と思われる墨書がみられる。胎土に直径約５㎜までの小石を含む。106は底部と体部の境はやや明瞭で緩やかに立ち上がる。内外面はロクロナデを施し、外面底部は回転糸切痕がみられる。内面は漆と考えられる付着物がある。写真のみの掲載である。99～106はいずれも尾張型第５型式で、年代は12世紀後半から13世紀前半のものと考えられる。

107～116は碗である。107の底部と体部の境は明瞭で、緩やかに立ち上がる。体部は丸みを帯びながら広がり、口縁付近でわずかに外反する。口縁端部は丸く収まる。高台は貼付高台で、大部分が欠損しているが籾殻痕がみられる。内外面はロクロナデを施し、外面底部には回転糸切痕がみられる。108の底部と体部の境は明瞭でなく、緩やかに立ち上がる。体部はやや丸みを帯びながら広がり、口縁付近でわずかに外反する。口縁端部はやや凹んでいる。高台は貼付高台で、籾殻痕がみられる。内外面はロクロナデを施し、降灰がみられる。外面にススが付着している。内面は使用により摩耗している。109の底部と体部の境は明瞭で、緩やかに立ち上がる。体部は丸みを帯びながら広がり、口縁端部は丸く収まる。高台は貼付高台で、内外にユビナデを施し、籾殻痕がみられる。内外面はロクロナデを施し、降灰がみられる。外面底部は回転糸切痕がみられる。胎土に直径５㎜までの小石を含む。110は底部と体部の境はやや明瞭で、緩やかに立ち上がる。体部は丸みを帯びながら広がり、口縁付近でわずかに外反する。口縁端部は丸く収まる。高台は貼付高台で、大部分が欠損しているが籾殻痕がみられる。内外面はロクロナデを施し、降灰がみられる。外面底部には回転糸切痕がみられる。111の底部と体部の境は明瞭でなく、緩やかに立ち上がる。体部はやや丸みを帯びながら広がり、口縁付近で外反する。口縁端部は面取りされる。高台は貼付高台で、内外にユビナデを施す。断面形状は方形で、籾殻痕がみられる。内外面はロクロナデを施し、外面底部には回転糸切痕がみられる。胎土に直径約２～３㎜の小石を含む。112の底部と体部の境はやや明瞭で、緩やかに立ち上がる。体部は丸みを帯びながら広がり、口縁付近でわずかに外反する。口縁端部は面取りされる。高台は貼付高台で、内外にユビナデを施す。断面形状は潰れた方形で、籾殻痕がみられる。内外面はロクロナデを施し、降灰がみられる。外面底部には回転糸切痕がみられる。113の体部はやや丸みを帯びながら広がり、口縁付近でわずかに外反する。口縁端部はやや尖っている。内外面はロクロナデを施す。胎土に直径約２～３㎜の小石を含む。114は底部と体部の境はやや明瞭で、緩やかに立ち上がる。体部は丸みを帯びながら広がる。高台は貼付高台で、内外にユビナデを施す。断面形状は方形で、籾殻痕がみられる。内外面はロクロナデを施し、外面底部は回転糸切痕がみられる。内面にススが付着している。107～114はいずれも尾張型第５型式で、年代は12世紀後半から13世紀前半のものと考えられる。115の高台は貼付高台で、内外にユビナデを施す。断面形状は潰れた方形で、籾殻痕がみられる。内外面はロクロ

B-SK86



第72図　B-SK86遺物実測図

ナデを施す。尾張型第５型式もしくは尾張型第６型式で、年代は12世紀後半から13世紀前半のものと考えられる。116の底部と体部の境は明瞭で丸みを帯びながら広がり、口縁端部はやや尖っている。高台は貼付高台で、内外にユビナデを施し、籾殻痕がみられる。内外面はロクロナデを施し、外面底部には回転糸切痕がみられる。内面は降灰がみられ、ススが付着している。尾張型第６型式で、年代は13世紀前半のものと考えられる。

117は灰釉陶器か山茶碗の碗である。口縁端部はやや尖っている。内外面はロクロナデを施し、降灰がみられる。写真のみの掲載である。

118～120は陶器である。118・119は広口壺である。118の肩部は丸みを帯び、口縁は外反する。口縁端部は丸く収まる。外面はナデ、頸部から胴部にかけてユビオサエを施し、粘土紐輪積痕がみられる。内面はナデ、胴部はナデとユビオサエを施し、粘土紐輪積痕がみられる。内外面は降灰がみられる。常滑４型式で、年代は12世紀末から13世紀初頭のものと考えられる。119の頸部は垂直に立ち上がり、口縁は著しく外反する。口縁端部は上に摘み出される。内外面はヨコナデを施す。内面は降灰がみられる。常滑５型式で、年代は13世紀初頭のものと考えられる。120は広口瓶である。底部と胴部の境は明瞭で、緩やかに立ち上がる。胴部はやや直線的に立ち上がる。外面はケズリ、底部はナデを施す。内面はロクロナデとユビナデを施す。年代は12世紀から13世紀のものと考えられる。

121は青磁の皿である。内面はロクロナデを施し、底部にはヘラで画線がつけられ、幅広の櫛先によるジグザグ状の点綴文が施される。外面はケズリが施される。内外面に青磁釉が施釉されるが、外面底部には釉がない。同安窯系青磁皿Ｉ類と考えられる。写真のみの掲載である。

122は土師器の小皿である。底部と体部の境は明瞭でなく、緩やかに立ち上がる。体部は直線的に立ち上がり、口縁端部はやや尖っている。内外面はヨコナデ、底部はナデを施す。外面に付着物がある。詳細な年代は不明だが、共伴する遺物から12世紀から13世紀頃のものと考えられる。

123･124は加工円板である。123は、最大径が2.5㎝、最小径が2.3㎝、厚さが1.2㎝、重さが8.6ｇである。表面は降灰がみられ、裏面はナデが施される。側面は打ち欠きを施している。124は、最大径が2.6㎝、最小径が2.3㎝、厚さが1.1㎝、重さが8.6ｇである。表裏面はナデを施し、側面は打ち欠きを施す。いずれも陶器を加工したものと思われる。

125は鉄製の雁股鏃の鏃身部である。長さが4.5㎝、幅が3.3㎝、厚さが0.9㎝、重さが12ｇである。鏃身部が二股に分かれている。

126は木製の加工板である。残存長が22.2㎝、幅が24.9㎝、厚さが0.7㎝である。表裏面が摩滅し、中央部分が欠損している。図の左上端、周縁部に２ヶ所穿孔がみられる。折敷の底板の可能性がある。木取りは柾目で、樹種はヒノキである。

B-SK87（第73図、図版29）

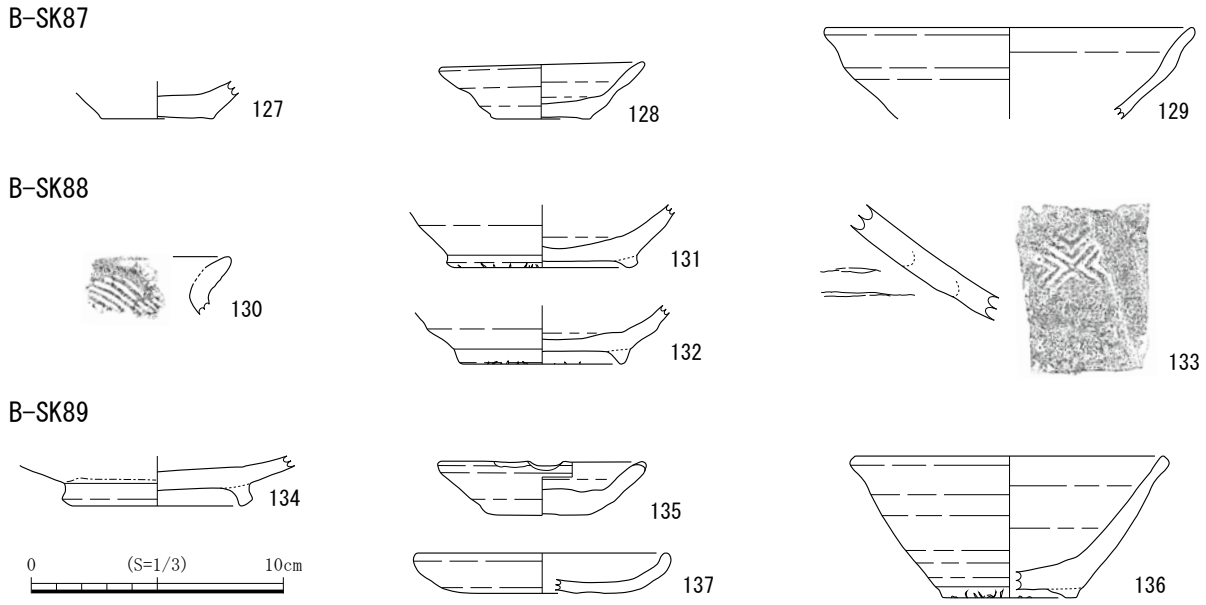
127～129は山茶碗である。127・128は小皿である。127は底部と体部の境は明瞭でなく、緩やかに立ち上がる。内外面はロクロナデ、外面底部はナデを施す。内面は降灰がみられる。128の底部と体部の境は明瞭で、緩やかに立ち上がる。体部は直線的に立ち上がり、口縁端部はやや尖っている。内外面はロクロナデを施し、外面底部には回転糸切痕がみられる。内面は降灰がみられる。いずれも尾張型第５型式で、年代は12世紀後半から13世紀前半のものと考えられる。129は碗である。体部はやや丸みを帯びながら広がり、口縁付近でやや外反する。口縁端部は丸く収まる。内外面はロクロナデを施し、降灰がみられる。尾張型第４型式で、年代は12世紀のものと考えられる。

B-SK88（第73図、図版29）

130は土師器の甕である。口縁は著しく外反し、口縁端部は丸く収まる。外面はナデ、ナナメハケを施す。内面はナデ、ヨコハケを施すが一部剥離している。内外面は全体的に摩耗している。胎土に直径約２㎜の小石を含む。

131・132は山茶碗の碗である。131は底部と体部の境は明瞭でなく、緩やかに立ち上がる。高台は貼付高台で、内外にユビナデを施す。断面形状は方形で、籾殻痕がみられる。内外面はロクロナデを施し、外面底部には回転糸切痕がみられる。内面は降灰がみられる。胎土に直径約５㎜までの小石を含む。尾張型第５型式で、年代は12世紀後半から13世紀前半のものと考えられる。132は底部と体部の境はやや明瞭で、緩やかに立ち上がる。高台は貼付高台で、内外にユビナデを施し、籾殻痕がみられる。内外面はロクロナデを施し、外面底部には回転糸切痕がみられる。内面は降灰がみられる。東濃型窯洞１号窯式で、年代は12世紀後半から13世紀初頭のものと考えられる。

133は陶器の甕である。外面はナデと押印文を施す。押印文は上下左右に山形文を組み合わせている。内面はヘラナデを施し、粘土紐輪積痕がみられる。内外面は降灰がみられる。常滑７型式で、年代は13世紀から14世紀前半のものと考えられる。



第73図　B-SK87～89遺物実測図

B-SK89（第73図、図版29）

134は灰釉陶器の椀である。底部と体部の境はやや明瞭で、緩やかに立ち上がる。高台はやや外側に開く貼付高台で、断面形状は方形である。籾殻痕はなく、摩耗が著しい。内外面はロクロナデを施し、外面底部はナデを施す。内面底部には重ね焼痕がみられる。内外面は灰釉が施釉されている。O-53号窯式で、年代は10世紀のものと考えられる。

135・136は山茶碗である。135は小皿で、底部と体部の境は明瞭で、緩やかに立ち上がる。体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は丸く収まる。内外面はロクロナデを施し、降灰がみられる。外面底部には回転糸切痕がみられる。136は碗で、底部と体部の境は明瞭でなく、緩やかに立ち上がる。体部は直線的に立ち上がり、口縁付近でやや外反する。口縁端部は面取りされる。高台は貼付高台で、内外にユビナデを施す。断面形状は潰れた方形で、籾殻痕がみられる。内外面はロクロナデを施し、外面底部は回転糸切痕がみられる。胎土に直径約２～３㎜の小石を含む。いずれも尾張型第６型式で、年代は13世紀前半のものと考えられる。

137は土師器の小皿である。底部と体部の境は明瞭でなく、緩やかに立ち上がる。体部はやや丸みを帯びながら広がり、口縁端部は丸く収まる。内外面は、口縁から体部はヨコナデ、底部はナデを施す。外面底部はスス、内面底部は付着物がみられる。

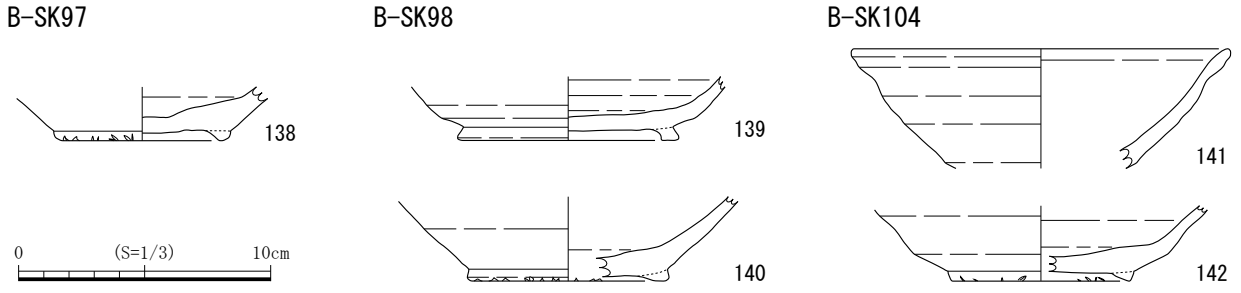
B-SK97（第74図、図版31）

138は山茶碗の碗である。底部と体部の境は明瞭でなく、緩やかに立ち上がる。高台はやや外側に開く貼付高台で、内外にユビナデを施す。断面形状は潰れた方形で、籾殻痕がみられる。内外面はロクロナデを施し、外面底部は回転糸切痕がみられる。胎土に直径２～３㎜の小石を含む。尾張型第５型式で、年代は12世紀後半から13世紀前半のものと考えられる。

B-SK98（第74図、図版31）

139は須恵器の有台椀である。底部と体部の境は明瞭でなく、緩やかに立ち上がる。高台はやや外側に開く貼付高台で、内外にユビナデを施す。断面形状は畳付が丸い方形で、摩耗が著しい。外面はロクロナデとケズリを施し、外面底部はヘラ切り後、ナデが施される。内面はロクロナデを施す。O-10号窯式で、年代は８世紀後半のものと考えられる。

140は山茶碗の碗である。底部と体部の境は明瞭で、緩やかに立ち上がる。高台は貼付高台で、内外にユビナデを施す。断面形状は潰れた方形で、籾殻痕がみられる。内外面はロクロナデを施し、外面底部には回転糸切痕がみられる。内面はススが付着している。尾張型第５型式で、年代は12世紀後半から13世紀前半のものと考えられる。



第74図　B-SK97、SK98、SK104遺物実測図

B-SK104（第74図、図版31）

141･142は山茶碗の碗である。141の体部はやや丸みを帯びながら広がり、口縁付近でわずかに外反する。口縁端部は丸く収まる。内外面はロクロナデを施し､降灰がみられる。142は底部と体部の境はやや明瞭で、緩やかに立ち上がる。高台は貼付高台で、断面形状は潰れた三角形である。籾殻痕がみられる。内外面はロクロナデ、外面底部はナデを施す。胎土に直径１～２㎜の小石を含む。いずれも尾張型第５型式で、12世紀後半から13世紀前半のものと考えられる。

B-SP10（第75図、図版31）

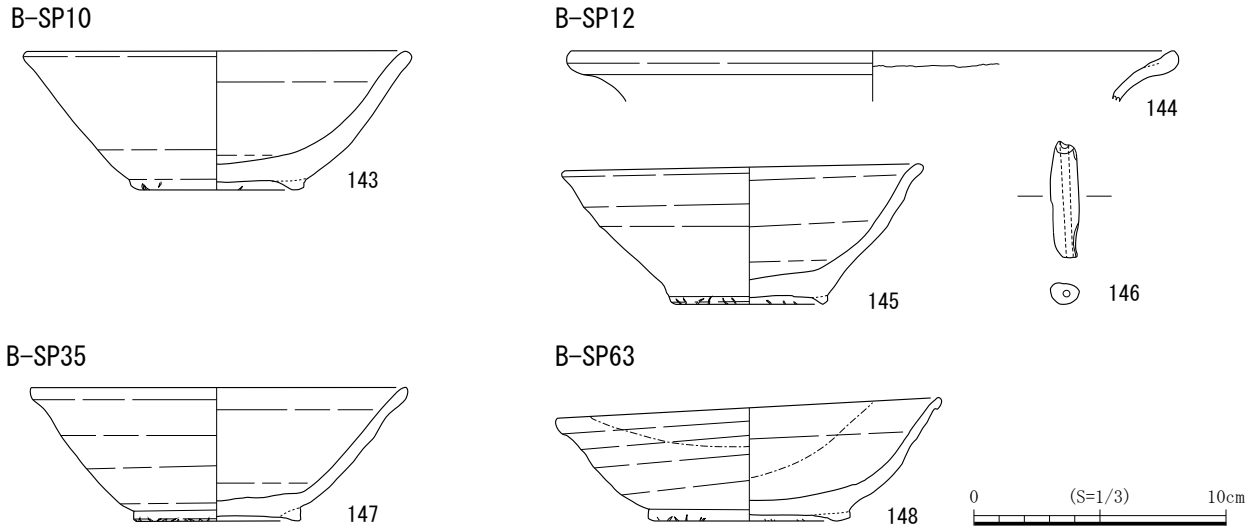
143は山茶碗の碗である。底部と体部の境は明瞭でなく、緩やかに立ち上がる。体部はやや丸みを帯びながら広がり、口縁端部は丸く収まる。高台は貼付高台で、内外にユビナデを施す。断面形状は潰れた方形で、籾殻痕がみられる。内外面はロクロナデを施し、外面底部は回転糸切後、ナデが施される。内外面にススが付着し、内面は降灰がみられる。胎土に直径約３㎜の小石を含む。尾張型第５型式で、年代は12世紀後半から13世紀前半のものと考えられる。

B-SP12（第75図、図版31）

144は土師器の伊勢型鍋である。口縁はやや外反し口縁端部は内側に折り返され肥厚している。内外面はナデを施す。外面にススが付着している。胎土に２㎜までの小石、金雲母を微量に含む。年代は12世紀から13世紀のものと考えられる。

145は山茶碗の碗である。底部と体部の境は明瞭で緩やかに立ち上がる。体部は直線的に立ち上がり、口縁付近で強いナデによりわずかに外反する。口縁端部は丸く収まる。口縁部はわずかに歪んでいる。高台は貼付高台で、内外にユビナデを施す。断面形状は、潰れた方形で、籾殻痕がみられる。内外面はロクロナデを施し、外面底部は回転糸切痕と板目状圧痕がみられる。内面は降灰がみられる。胎土に直径５㎜までの小石を含む。尾張型第５型式で、年代は12世紀後半から13世紀前半のものと考えられる。

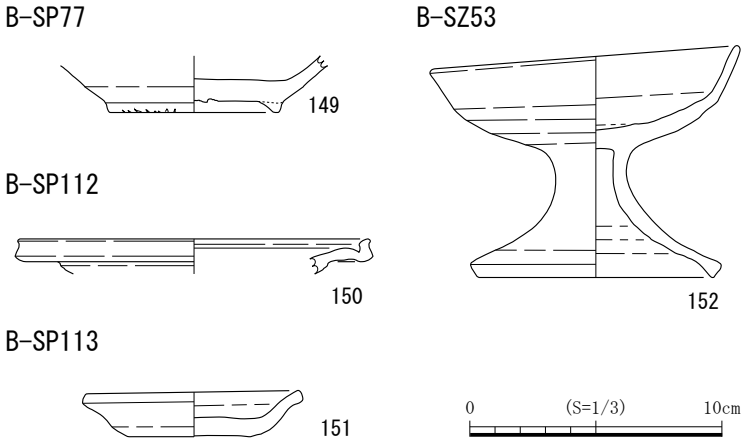
146は土錘である。残存長が4.7㎝、幅が1.2㎝、厚さが0.9㎝、孔径が0.3㎝、重さが4.7ｇである。外面はナデにより調整される。



第75図　B-SP12、SP35、SP63遺物実測図

B-SP35（第75図、図版31）

147は山茶碗の碗である。底部と体部の境は明瞭で緩やかに立ち上がる。体部はやや丸みを帯びながら広がり、口縁付近で直線的に立ち上がる。口縁端部は尖っている。高台はやや外側に開く貼付高台で、内外にユビナデを施す。断面形状は潰れた三角形で、籾殻痕がみられる。内外面はロクロナデを施し、外面底部は回転糸切後、ナデが施される。内面底部は指圧痕が残る。内面には重ね焼痕が見られ、焼成時の籾殻痕が残る。胎土に直径約５㎜までの小石を含む。尾張型第６型式で、年代は13世紀前半のものと考えられる。



第76図　B-SP77、SP112、SP113、SZ53遺物実測図

B-SP63（第75図、図版31）

148は山茶碗の碗である。底部と体部の境は明瞭でなく、丸みを帯びながら広がり、口縁付近でわずかに外反する。口縁端部はやや尖っている。高台は貼付高台で、内外にユビナデを施す。断面形状は潰れた方形で、籾殻痕がみられる。内外面はロクロナデを施し、灰釉が漬け掛けで施釉されている。外面底部には回転糸切痕がみられる。胎土に直径約５㎜までの小石を含む。尾張型第４型式で、年代は12世紀のものと考えられる。

B-SP77（第76図、図版31）

149は山茶碗の碗である。底部から体部の境は明瞭で緩やかに立ち上がる。高台は垂直に立つ貼付高台で、内外にユビナデを施す。断面形状は方形で、籾殻痕がみられる。内外面はロクロナデを施し、外面底部は回転糸切痕がみられる。内面は降灰がみられる。尾張型第６型式で、年代は13世紀前半のものと考えられる。

B-SP112（第76図、図版31）

150は須恵器の盤である。口縁は著しく屈曲し、口縁端部はやや外反する。内外面はロクロナデを施す。Ｏ-10号窯式で、年代は８世紀後半のものと考えられる。

B-SP113（第76図、図版31）

151は山茶碗の小皿である。底部と体部の境はやや明瞭で、緩やかに立ち上がる。体部は丸みを帯びながら広がり、口縁付近でわずかに外反する。口縁端部は丸く収まる。内外面はロクロナデを施し、外面底部には回転糸切痕がみられる。内面底部はユビナデを施す。内面は降灰がみられる。尾張型第６型式で、年代は13世紀前半のものと考えられる。

B-SZ53（第76図、図版61）

152は須恵器の高杯である。脚端部は面取りされ、裾部は緩やかに開く。杯部はやや丸みを帯びながら広がり、口縁端部は丸く収まる。杯部が歪んでいる。内外面はロクロナデとケズリを施す。Ｉ-17号窯式で、年代は７世紀後半のものと考えられる。

壁面（第77図、図版31）

153は須恵器の壺である。口縁は外反し、口縁端部はやや尖る。内外面はヨコナデを施す。口縁直下の頸部に波状文を施す。小片のため詳細な年代は不明だが、６世紀頃のものと考えられる。

水田耕作土（Ⅱ層）（第77図、図版31）

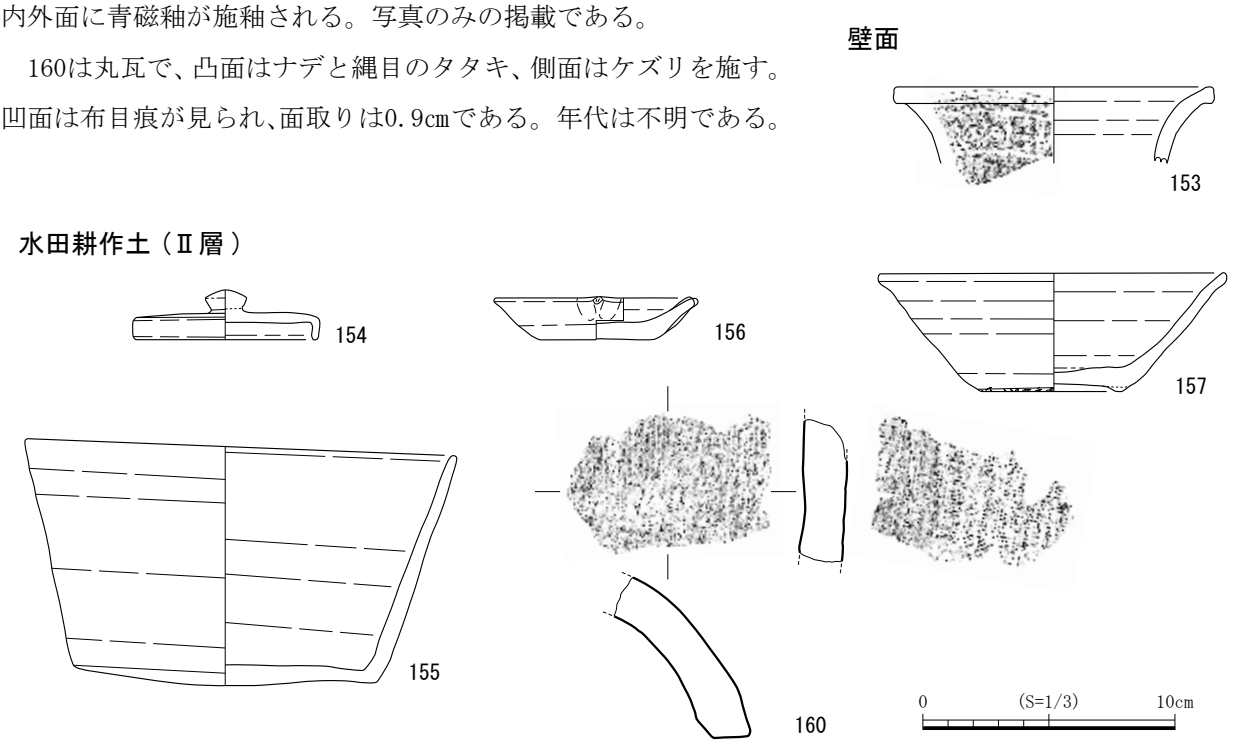
154・155は須恵器である。154は蓋である。外面はロクロナデとケズリ、摘みはナデを施す。内面はロクロナデを施す。天井部から口縁部にかけて平たく仕上げられ、摘みは直径1.6㎝の宝珠形で、三彩小壺に似た大きさと形状をもつ。O-10号窯式で、年代は８世紀後半のものと考えられる。155は無台杯である。底部と胴部の境は明瞭で、直線的に立ち上がる。口縁端部は丸く収まる。内外面はロクロナデ、外面底部はケズリを施す。C－２号窯式で、年代は８世紀前半のものと考えられる。

156・157は山茶碗である。156は輪花の小皿か。底部と体部の境は明瞭でなく、緩やかに立ち上がる。体部は直線的に立ち上がり、口縁付近でやや外反する。口縁端部は丸く収まる。内外面はロクロナデを施し、外面底部は回転糸切後、ナデが施される。内面底部は指圧痕が残る。内面は降灰がみられる。尾張型第５型式で、年代は12世紀後半から13世紀前半のものと考えられる。157は碗である。底部と体部の境は明瞭で、緩やかに立ち上がる。体部はやや丸みを帯びながら広がり、口縁付近でわずかに外反する。口縁端部はやや尖っている。高台は貼付高台で、内外にユビナデを施す。大部分が欠損しているが籾殻痕がみられる。内外面はロクロナデを施し、降灰がみられる。外面底部は回転糸切痕がみられる。内面底部中央はユビナデによりやや凹む。尾張型第６型式で、年代は13世紀前半のものと考えられる。

158は白磁の大皿である。口縁部が厚く、口縁端部は丸く収まる。内面から外面口縁部にかけてロクロナデ、外面口縁部から体部にかけてはケズリを施す。内外面に透明釉が施釉される。写真のみの掲載である。

159は青磁の碗である。口縁端部は丸く収まる。内面はロクロナデ、外面はロクロナデとケズリを施す。内外面に青磁釉が施釉される。写真のみの掲載である。

160は丸瓦で、凸面はナデと縄目のタタキ、側面はケズリを施す。凹面は布目痕が見られ、面取りは0.9㎝である。年代は不明である。



第77図　Ｂ区　遺構外出土遺物実測図１

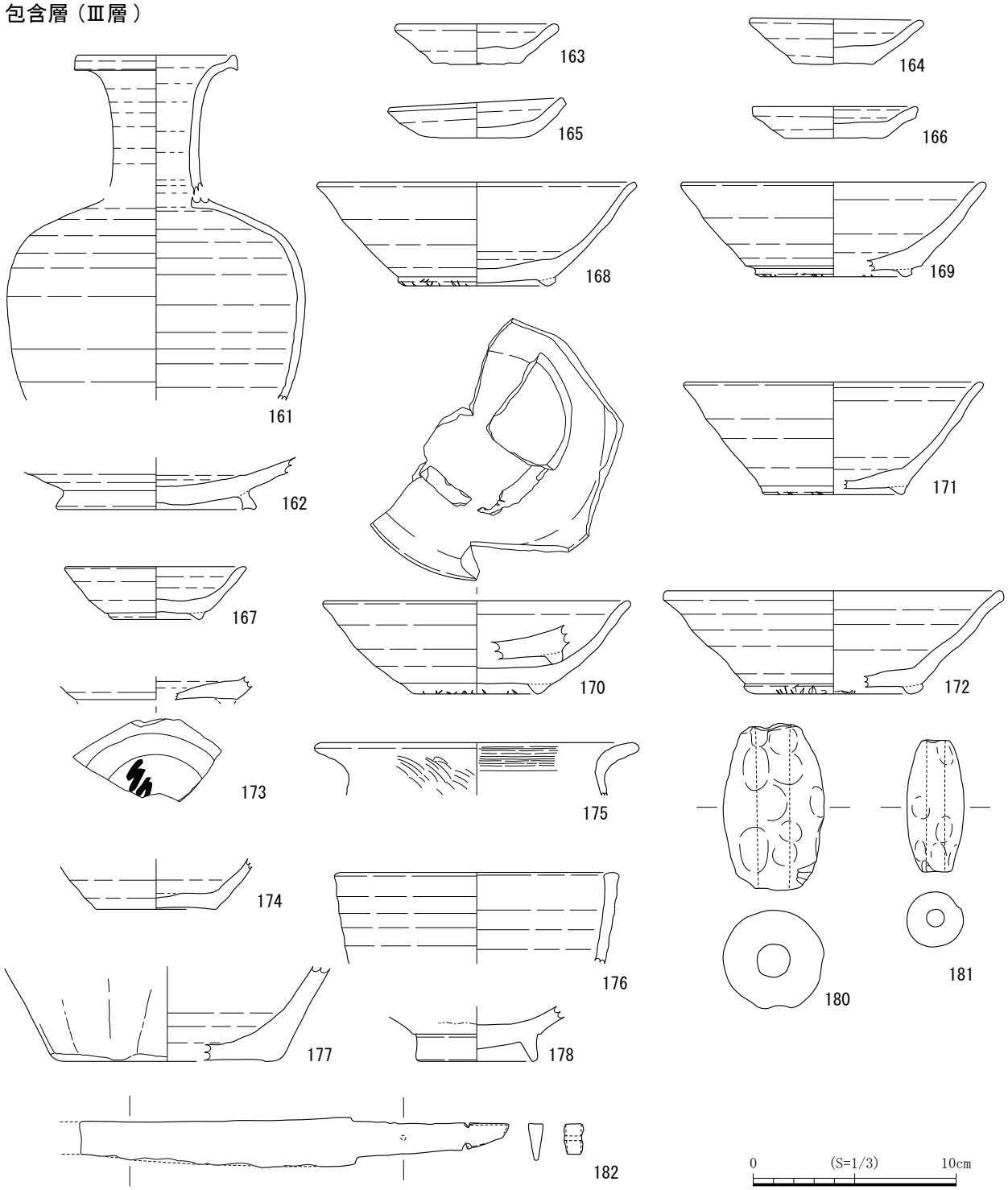
包含層（Ⅲ層）（第78図、図版32）

161・162は須恵器である。161は長頸瓶である。胴部は丸みを帯び、肩部はやや張る。頸部は垂直に立ち、口縁部は大きく外反する。口縁端部は上に摘み上げ、やや尖る。内外面はロクロナデを施し、外面胴部はケズリを施す。二段構造で、小ぶりのタイプと思われる。O-10号窯式で、年代は８世紀後半から８世紀末のものと考えられる。162は有台盤である。高台は畳付が突出しやや外側に開く貼付高台で、断面形状は方形である。内外面はロクロナデを施し、外面底部は回転ヘラ切りを施す。内面底部は使用により摩耗している。O-10号窯式で、年代は８世紀後半のものと考えられる。

163～174は山茶碗である。163～166は小皿である。163の底部と体部の境は明瞭で、やや丸みを帯びながら広がり、口縁端部は丸く収まる。内外面はロクロナデを施し、外面底部は回転糸切後、ナデが施される。内面底部はユビナデを施す。164の底部と体部の境は明瞭でなく、緩やかに立ち上がる。体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は丸く収まる。内外面はロクロナデを施し降灰がみられる。外面底部は回転糸切後、ナデが施される。いずれも尾張型第５型式で、年代は12世紀後半から13世紀前半のものと考えられる。165の底部と体部の境は明瞭でなく、緩やかに立ち上がる。体部はやや丸みを帯びながら広がり、口縁端部は面取りされる。内外面はロクロナデを施し、外面底部には回転糸切痕がみられる。胎土に直径約２～３㎜の小石を含む。尾張型第６型式で、年代は13世紀前半のものと考えられる。166の底部と体部の境はやや明瞭で、緩やかに立ち上がる。体部は直線的に立ち上がり、口縁付近でやや外反する。口縁端部は面取りされる。器高が低く扁平している。内外面はロクロナデを施し、外面底部には回転糸切痕と板目状圧痕がみられる。内面底部はユビナデを施す。尾張型第７型式で、年代は13世紀中頃のものと考えられる。167は小碗である。底部と体部の境は明瞭でなく、緩やかに立ち上がる。体部はやや丸みを帯びながら広がり、口縁端部は丸く収まる。高台は貼付高台で、断面形状は方形である。籾殻痕がみられる。内外面はロクロナデを施し、外面底部は回転糸切後、ナデが施される。尾張型第４型式で、年代は12世紀のものと考えられる。168～174は碗である。168の底部から体部の境は明瞭で、緩やかに立ち上がる。体部はやや丸みを帯びながら広がり、口縁付近でわずかに外反する。口縁端部は丸く収まる。高台は貼付高台で、内外にユビナデを施す。断面形状は方形で、籾殻痕がみられる。内外面はロクロナデを施し、降灰がみられる。外面底部には回転糸切痕がみられる。169の底部と体部の境は明瞭でなく、緩やかに立ち上がる。体部はやや丸みを帯びながら広がり、口縁付近でわずかに外反する。口縁端部は丸く収まる。高台は貼付高台で、内外にユビナデを施す。断面形状は方形で、籾殻痕がみられる。内外面はロクロナデを施し、外面底部には回転糸切痕がみられる。胎土に直径約５㎜の小石を含む。170の底部と体部の境は明瞭で、緩やかに立ち上がる。体部はやや丸みを帯びながら広がり、口縁付近でわずかに外反する。口縁端部は丸く収まる。高台は貼付高台で、内外にユビナデを施し、籾殻痕がみられる。内外面はロクロナデを施し、外面底部には回転糸切痕がみられる。内面底部には重ね焼をした時の底部が残り、降灰がみられる。内外面は降灰している。168～170は尾張型第５型式で、12世紀後半から13世紀前半のものと考えられる。171の内面底部中央はやや凹み、底部から体部の境は明瞭で、緩やかに立ち上がる。体部はやや丸みを帯びながら広がり、口縁付近でやや外反する。口縁端部は丸く収まる。高台は貼付高台で、内外にユビナデを施し、籾殻痕がみられる。内外面はロクロナデを施し降灰がみられる。外面底部に回転糸切痕がみられる。内面底部はユビナデを施す。172の底部から体部の境は明瞭で、緩やかに立ち上がる。体部はやや丸みを帯び

ながら広がり、口縁付近でわずかに外反する。口縁端部は丸く収まる。高台は貼付高台で、内外にユビナデを施す。断面形状は潰れた方形で、籾殻痕がみられる。内外面はロクロナデを施し、外面底部には回転糸切痕がみられる。内面底部にユビナデを施す。171・172は尾張型第６型式で、年代は13世紀前半のものと考えられる。173の高台は貼付高台で、剥がれている。内外面はロクロナデを施し、外面底部には回転糸切痕が施され、また墨書がみられるが判読は難しい。174は底部と体部の境はやや明瞭で、緩やかに立ち上がる。体部はやや丸みを帯びながら広がる。内外面はロクロナデを施し、外面底部に回転糸切痕がみ

包含層（Ⅲ層）



第78図　Ｂ区　遺構外出土遺物実測図２

られる。内面底部は指圧痕が残る。内面には付着物があり、降灰がみられる。胎土に直径約５㎜までの小石を含む。173・174は尾張型第７型式で、年代は13世紀中頃のものと考えられる。

175は土師器の甕である。口縁は外反し、口縁端部は丸く収まる。外面はヨコナデとナナメハケを施す。内面はナデとヨコハケを施す。内外面は全体的に摩耗している。胎土に直径約１㎜の小石を含む。

176・177は近世陶器である。176は灰釉片口と考えられる。口縁は垂直に立ち、口縁端部は丸く収まる。内外面はロクロナデを施されている。年代は江戸時代のものと考えられる。177は壺である。底部と胴部の境は明瞭でなく、緩やかに立ち上がる。胴部は直線的に立ち上がる。外面はヘラナデ、外面底部はナデを施し、籾殻痕がみられる。内面はナデを施す。また内面は摩耗し、降灰がみられる。年代は不明である。

178は白磁の碗である。底部と体部の境は明瞭でなく、緩やかに立ち上がる。高台は削出高台で、断面形状は三角形である。内外面はロクロナデを施し、透明釉が施釉されている。外面底部は露胎している。年代は12世紀中頃のものと考えられる。

179は青磁の皿である。底部と体部の境は明瞭でなく、緩やかに立ち上がる。外面はケズリを施し、内面はヘラによる刻劃文が施される。内外面に青磁釉が施釉されるが、外面底部には釉がない。龍泉窯系青磁皿Ⅰ類と考えられる。写真のみの掲載である。

180・181は土錘である。180は外面はナデ、ユビオサエを施す。工具による凹みがある。孔内には棒などを抜いたときに付いた擦痕がみられる。181は外面はナデ、ユビオサエを施し、端が一部欠損している。孔内には棒などを抜いたときに付いた擦痕がみられる。

182は刀子である。残存長21.2㎝で茎部は長さ7.7㎝である。幅は最大2.4㎝、茎部が1.5㎝、刃部が1.8㎝である。厚さは刃部が0.7㎝、茎部が0.9㎝、重さが58.3ｇである。茎部に目釘孔が１ヶ所あるが、サビで埋まっている。刃先が欠損している。

包含層（Ⅳ層）（第79図、図版32）

183は弥生土器の壺である。口縁は外反し、口縁端部は丸く収まる。内外面はナデを施す。内面にはススが付着している。胎土に直径約５㎜の小石を多く含む。詳細な年代は不明だが、弥生中期のものと考えられる。

184・185は須恵器である。184は鉢である。胴部は直線的に立ち上がり、口縁は内湾する。口縁端部は丸く収まる。内外面はロクロナデを施す。Ｃ−２からＯ−10号窯式で、年代は８世紀のものと考えられる。185は高盤である。内外面はロクロナデを施し、降灰がみられる。Ｏ−10号窯式からK−14号窯式で、年代は８世紀後半から９世紀のものと考えられる。

186は灰釉陶器である。器種、年代共に不明である。底部から胴部への立ち上がりは直線的である。胴部は直線的に広がるように立ち上がる。内外面はロクロナデ、外面底部はナデを施す。外面は灰釉が施釉されている。内面は降灰がみられる。

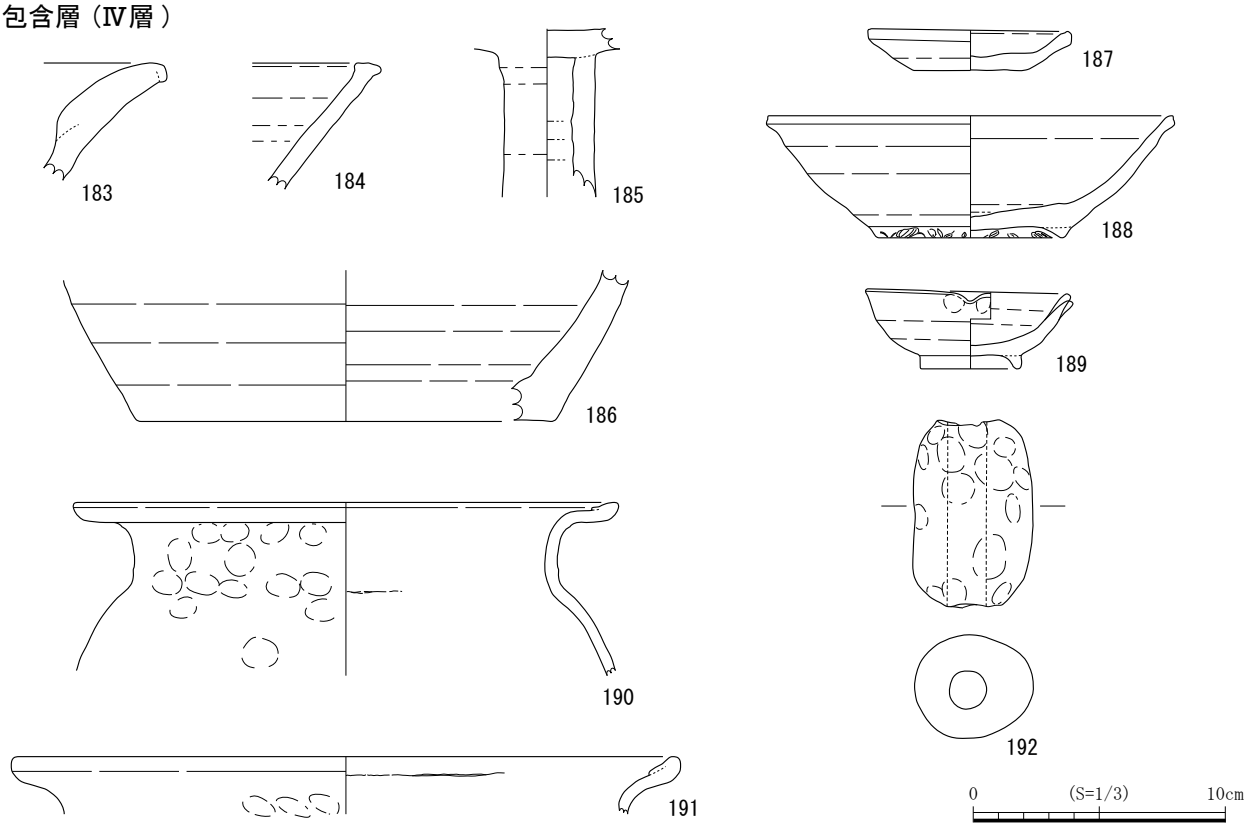
187～189は山茶碗である。187は小皿である。底部と体部の境はやや明瞭で、緩やかに立ち上がる。体部は直線的に立ち上がり、口縁付近でわずかに外反する。口縁部は直線的に立ち上がり、口縁端部は面取りされる。内外面はロクロナデを施し、底部には回転糸切痕がみられる。内面底部中央はユビナデにより凹む。188は碗である。底部と体部の境は明瞭で、緩やかに立ち上がる。体部は丸みを帯びながら広がり、口縁付近でわずかに外反する。口縁端部は面取りされる。高台は貼付高台で、内外にユビナデを施す。断

面形状は潰れた方形で、籾殻痕がみられる。内外面はロクロナデを施し、外面底部には回転糸切痕と板目状圧痕がみられる。内面底部中央はユビナデによりやや凹む。内面は降灰がみられる。いずれも尾張型第６型式で、年代は13世紀前半のものと考えられる。189は片口小碗である。底部と体部の境は明瞭でなく、緩やかに立ち上がる。体部はやや丸みを帯びながら広がり、口縁付近でわずかに外反する。口縁端部は丸く収まる。高台はやや外側に開く貼付高台で、断面形状は三角形である。籾殻痕はなく、摩耗している。内外面はロクロナデを施し、降灰がみられる。外面底部はユビナデを施す。内面は摩耗している。胎土に直径約５㎜の小石を含む。尾張型第３型式で、年代は11世紀後半から12世紀初頭のものと考えられる。

190・191は土師器の伊勢型鍋である。190の胴部は丸みを帯び、口縁は外反する。口縁端部は内側に折り返され肥厚している。外面はナデとユビオサエを施し、摩耗している。内面はナデを施し、胴部に粘土紐輪積痕がみられる。胎土に直径約１㎜の小石を含む。年代は12世紀から13世紀のものと考えられる。191の口縁は外反し、口縁端部は内側に折り返され肥厚している。外面はナデとユビオサエを施し、ススが付着している。内面はナデを施す。胎土に直径約１㎜の小石を含む。詳細な年代は不明だが、共伴する遺物から12世紀から13世紀のものと考えられる。

192は土錘である。長さが7.4㎝、幅が4.7㎝、厚さが4.1㎝、孔径が1.5㎝、重さが155.3ｇである。外面はナデ、ユビオサエを施す。孔内は棒などを抜いたときに付いた擦痕がみられる。胎土に直径約３㎜の小石を含む。

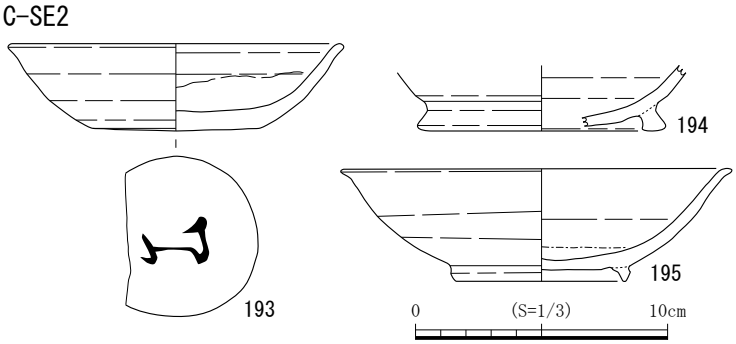
包含層（Ⅳ層）



第79図　Ｂ区　遺構外出土遺物実測図３

４．Ｃ区の遺物

C-SE2（第80・81図、図版33）



第80図　C-SE2遺物実測図１

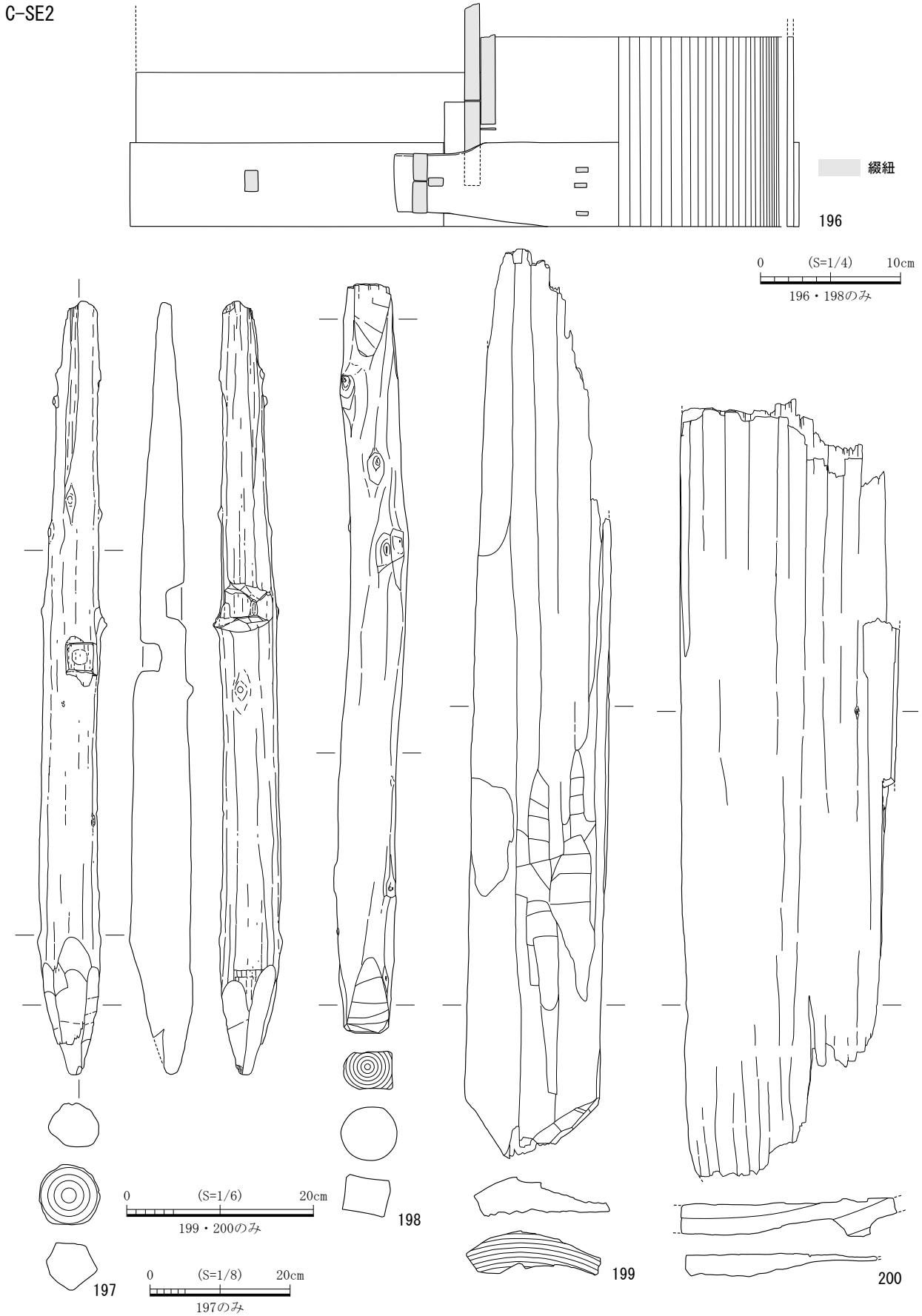
193・194は須恵器である。193は無台椀である。底部と体部の境は明瞭でなく、緩やかに立ち上がる。体部はやや丸みを帯びながら広がり、口縁付近でわずかに外反する。口縁端部は丸く収まる。内外面はロクロナデを施す。外面底部には回転糸切痕が施され、判読不明な墨書がみられる。また内面には付着物があり、降灰がみられる。194は有台椀である。底部と体部の境は明瞭でなく、緩やかに立ち上がる。体部は丸みを帯びながら広がる。高台は高台径が広く、やや外側に開く貼付高台で、内外にユビナデを施す。断面形状は方形である。内外面はロクロナデを施し、外面底部はケズリを施す。ともにＯ-10号窯式で、年代は８世紀後半のものと考えられる。

195は灰釉陶器の椀である。底部と体部の境はやや明瞭で、緩やかに立ち上がる。体部はやや丸みを帯びながら広がり、口縁付近でわずかに外反する。口縁端部は丸く収まる。高台は貼付高台で、内外にユビナデを施す。断面形状は三角形で、籾殻痕はなく、わずかに摩耗している。内外面はロクロナデを施し、外面底部は回転ヘラ切りを施す。内面体部は灰釉がハケ塗りされる。胎土に直径約５㎜までの小石を含む。Ｋ-90号窯式で、年代は９世紀後半から10世紀初頭のものと考えられる。

196～200は木製品で、196は曲物側板である。直径が47.0㎝、残存高が13.5㎝である。1.1㎝幅の綴紐で綴じられ、内面に縦平行線のケビキ痕が残存する。下位には直径47.8㎝、幅6.0㎝の箍（たが）があり、1.0㎝幅の綴紐が残る。木取りは板目で樹種はヒノキである。197～200は井戸枠部材である。197は長さが110.6㎝、最大幅が9.0㎝、厚さが9.0㎝である。中央付近に表裏１ヶ所ずつ方形のくぼみがあり、下端は６方向から削って尖らせている。木取りは芯持丸木で、樹種はヒノキである。198は長さが53.5㎝、厚さは上が2.7㎝、中が3.8㎝、下が2.5㎝である。丸木の両端をそれぞれ先端に向かって削っており、断面形状は方形となる。木取りは芯持丸木で樹種はヒノキである。199は残存長が97.5㎝、幅が14.6㎝、厚さが4.1㎝である。断面形状は三角形である。上端と下先端部は欠損しているが、下端部右側はケズリ加工が残る。表面右側は加工され、左右側縁と裏面は割取りのままである。木取りは板目で樹種はヒノキである。200は残存長が83.5㎝、最大幅が23.5㎝、厚さが3.7～0.4㎝である。上下端は欠損している。表面の左上方と右中央の一部は平滑で、裏面は木の表面部分で節が一部残る。木取りは板目で、樹種はヒノキである。

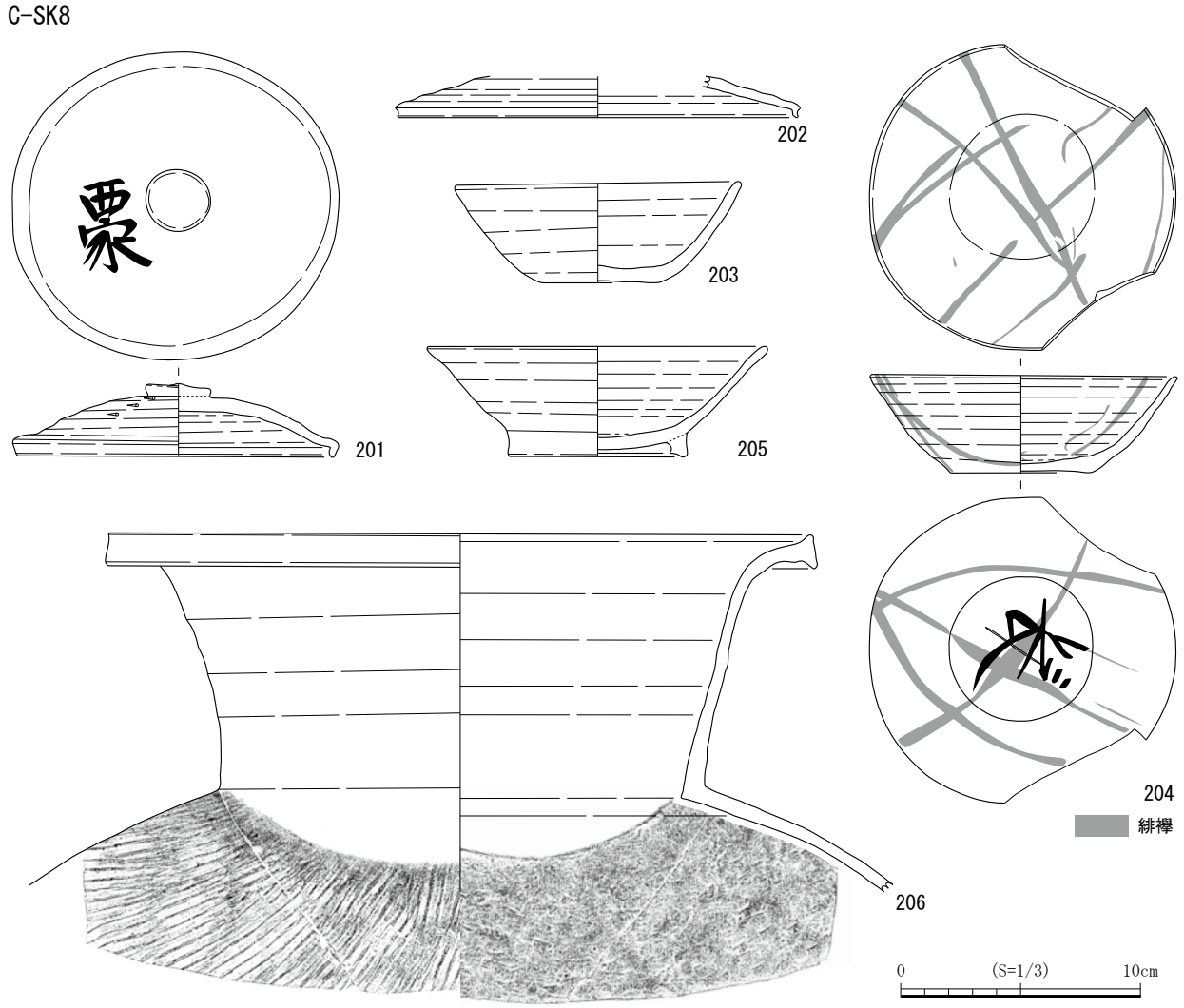
C-SK8（第82図、図版34）

201～205は須恵器である。201は杯蓋である。内面はロクロナデ、外面は天井部にケズリ、口縁部にロクロナデを施す。天井部から口縁部にかけてやや丸みをもって仕上げられている。天井部には扁平な摘みがあり、摘径は2.7㎝である。外面上部には墨書が見られ、「西家」と思われる文字が書かれている。202は蓋である。口縁端部はわずかに外反する。内面はロクロナデを施す。外面はロクロナデとケズリを施す。天井部から口縁部にかけて平たく仕上げられ、摘み部分は欠損している。外面は降灰がみられる。203・204は無台椀である。203の底部と体部の境はやや明瞭で緩やかに立ち上がる。体部はやや丸みを帯びなが



第81図　C-SE2遺物実測図２

ら広がり、口縁端部は丸く収まる。内外面はロクロナデを施し、外面底部には回転糸切痕と使用痕がみられ、ススが付着している。204の底部と体部の境はやや明瞭で、緩やかに立ち上がる。体部は丸みを帯びながら広がり、口縁端部は丸く収まる。内外面はロクロナデを施し、外面底部に回転糸切痕がみられ、「一」と線刻される。窯印か。内外面ともに緋襷が施される。また外面底部には墨書が見られ、「長」と思われる文字が書かれている。205は有台椀である。底部と胴部の境はやや明瞭で、緩やかに立ち上がる。やや丸みを帯びながら広がり、口縁付近でわずかに外反する。口縁端部は丸く収まる。高台は貼付高台で、畳付がやや斜めであり、断面形状は方形である。内外面はロクロナデを施し、外面底部はケズリを施す。外面は降灰がみられる。201～205はO-10号窯式で、年代は８世紀後半のものと考えられる。206は甕である。肩部は丸みを帯び、頸部はやや直線的に広がり、口縁付近で大きく外反する。口縁端部はやや尖る。外面はヨコナデを施し、胴部にタタキを施す。内面はヨコナデを施す。全体的に薄手な造りである。C-２号窯式で、年代は８世紀前半のものと考えられる。



第82図　C-SK8遺物実測図

C-SK26（第83図、図版34）

207～210は山茶碗の碗である。207の高台は貼付高台で、断面形状は方形である。内外面はロクロナデを施し、外面底部は回転糸切後、ナデが施される。尾張型第３型式で、年代は11世紀後半から12世紀初頭のものと考えられる。208の高台は貼付高台で、断面形状は潰れた方形である。籾殻痕がみられる。内外面はロクロナデを施し、外面底部には回転糸切痕がみられる。内面は一部降灰がみられる。209は底部と体部の境はやや明瞭である。高台は貼付高台で、大部分は欠損している。内外面はロクロナデを施し、外面底部には回転糸切痕がみられる。内面は重ね焼痕がみられる。210の口縁部はわずかに外反し、端部は丸く収まる。内外面はロクロナデを施し、内面は降灰がみられる。208～210は尾張型第５型式で、年代は12世紀後半から13世紀前半のものと考えられる。

C-SK31（第83図、図版34）

211は山茶碗の碗である。口縁部はわずかに外反し、端部は丸く収まる。内外面はロクロナデを施す。尾張型第６型式で、年代は13世紀前半のものと考えられる。

212は青磁の輪花碗である。体部は直線的に広がり、口縁端部は丸く収まる。内面から外面口縁部にかけてロクロナデ、外面は口縁部から体部にかけてケズリを施す。また、内面にはヘラによる刻劃文が施される。輪花が１ヶ所残る。龍泉窯系青磁碗Ⅰ類と考えられる。

水田耕作土（Ⅱ層）（第84図、図版34）

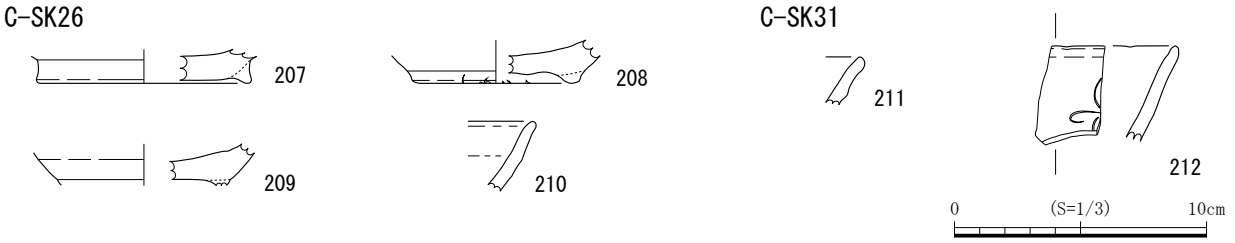
213は須恵器の長頸瓶である。内外面はロクロナデを施す。内面は降灰がみられる。小片のため詳細は不明である。O-10号窯式で、年代は８世紀後半のものと考えられる。

214は灰釉陶器の椀である。体部は丸みを帯びながら広がり、口縁端部は丸く収まる。内外面はロクロナデを施し、灰釉が施釉されている。O-53号窯式で、年代は10世紀のものと考えられる。

包含層（Ⅲ層）（第84図、図版34）

215は須恵器の甕である。底部から胴部は直線的に立ち上がり、胴部は直線的に広がる。外面はタタキがみられ、底部はナデを施す。内面はタテナデ、底部はナデを施す。O-10号窯式で、年代は８世紀後半のものと考えられる。

216～219は灰釉陶器である。216は皿である。底部と体部の境は明瞭でなく、緩やかに立ち上がる。体部はやや丸みを帯びながら広がり、口縁付近でわずかに外反する。口縁端部は丸く収まる。高台は外側に開く貼付高台で、断面形状は方形である。内外面はロクロナデを施し、灰釉が施釉されている。また、外面のはケズリを施す。内面底部には使用による摩耗がみられる。O-53号窯式で、年代は10世紀のものと考えられる。217・218は椀である。217の体部は丸みを帯びながら広がり、口縁付近でやや外反する。口縁端部は丸く収まる。内外面はロクロナデを施し、灰釉が漬け掛けで施釉される。O-53号窯式で、年代

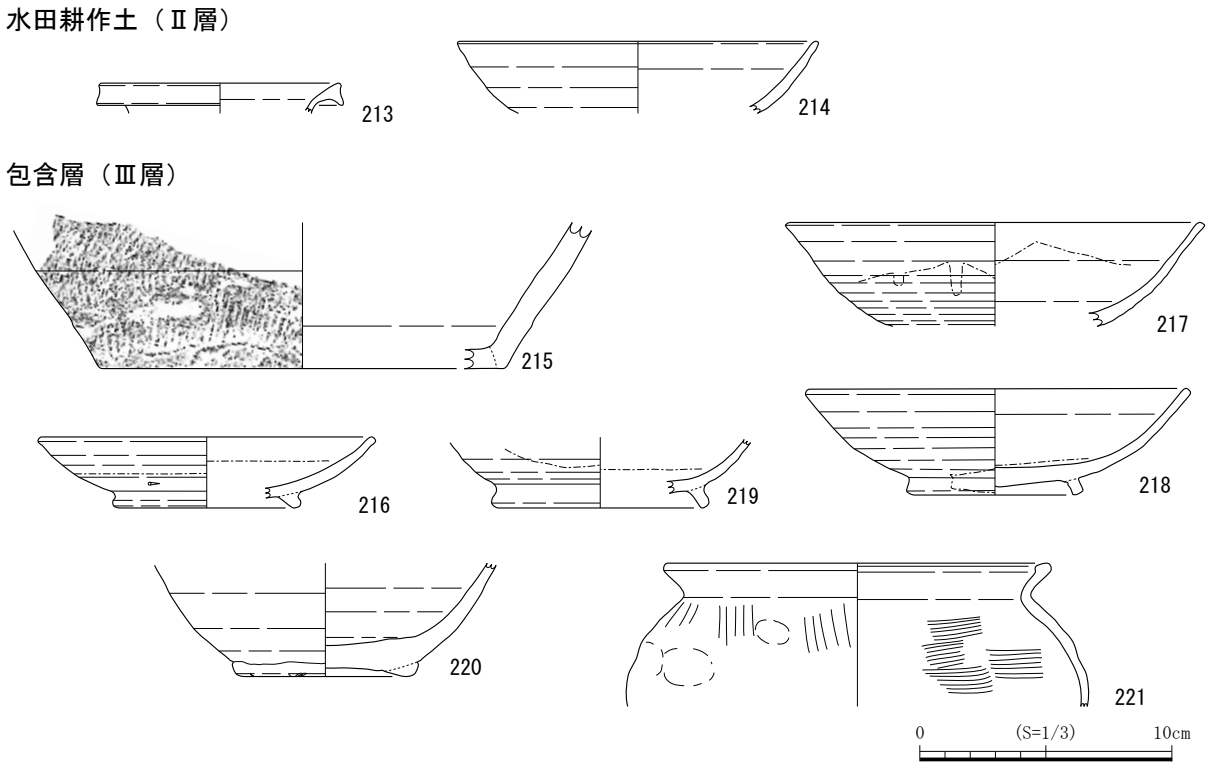


第83図　C-SK26、SK31遺物実測図

は10世紀のものと考えられる。218の底部と体部の境は明瞭でなく、緩やかに立ち上がる。体部は丸みを帯びながら広がり、口縁端部は丸く収まる。高台はやや外側に開く貼付高台で、内外にユビナデを施す。断面形状は方形で、畳付は摩耗が著しい。内外面はロクロナデを施し、灰釉がハケ塗りで施釉されている。外面底部はヘラ切り後ナデを施す。内面底部には使用による摩耗と重ね焼痕がみられる。K-90号窯式で、年代は９世紀後半から10世紀初頭のものと考えられる。219は深椀である。底部と体部の境は明瞭でなく、緩やかに立ち上がる。高台は外側に開く貼付高台で、断面形状は方形である。畳付に籾殻痕はなく、摩耗が著しい。内外面はロクロナデを施し、灰釉が施釉されている。O-53号窯式で、年代は10世紀のものと考えられる。

220は山茶碗の碗である。底部と体部の境は明瞭で、緩やかに立ち上がる。体部は丸みを帯びながら広がる。高台は貼付高台で、断面形状は潰れた方形である。籾殻痕がみられる。内外面はロクロナデを施し、外面底部には回転糸切痕がみられる。胎土に直径約２～３㎜の小石を含む。尾張型第５型式で、年代は12世紀後半から13世紀前半のものと考えられる。

221は土師器の伊勢型鍋である。胴部は丸みを帯び、口縁付近で著しく外反する。口縁端部は内湾する。外面は、口縁部から胴部にかけてヨコナデを施し、胴部はナデとタテハケ、ユビオサエを施す。内面は、口縁部から胴部にかけてヨコナデを施し、胴部はヨコハケを施す。内面は摩耗し、ススが付着している。



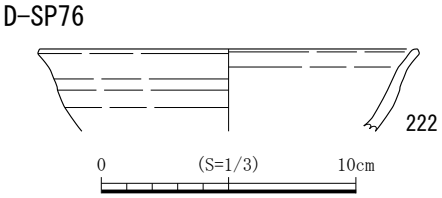
第84図　Ｃ区　遺構外出土遺物実測図

第２節　第11次調査

１．D区の遺物（第１遺構面）

D-SP76（第85図、図版36）

222は山茶碗の碗である。口縁部は外反し、端部は丸く収まる。内外面ともにロクロナデが施される。内面は摩耗がみられる。尾張型第５型式で、年代は12世紀後半から13世紀前半のものと考えられる。



第85図　D-SP76遺物実測図

D-SD1（第86～89・91～92図、図版35～39）

223～231は須恵器である。223～228は杯蓋である。223の内面はロクロナデが施される。外面体部はケズリで調整され、摘み部分にロクロナデが施される。224は内外面にロクロナデが施され、外面に降灰がみられる。225は口縁部の返しは直立し、体部は丸みをもつ。内外面にロクロナデが施される。226の口縁は直立し、端部が丸く収まる。体部は丸みをもつ。内面はロクロナデが施される。外面体部はケズリで調整され、体部から口縁部にかけてロクロナデが施される。いずれもC－２号窯式で、年代は８世紀前半のものと考えられる。227の内面はロクロナデが施される。外面体部はケズリで調整され、摘み部分にロクロナデが施される。228の口縁は直立し、端部は丸く収まる。体部は直線的に立ち上がる。内外面にロクロナデが施され、降灰がみられる。K-90号窯式で、年代は９世紀後半のものと考えられる。229・230は有台杯である。229の高台は貼付高台で、外反しており、断面形状がつぶれた方形である。内面はロクロナデが施される。外面は体部にロクロナデ、高台から底部にかけてヨコナデが、底部にケズリが施される。内外面に摩耗がみられる。年代は７世紀末のものと考えられる。230は高台が直立した貼付高台で、断面形状は方形である。内外面にロクロナデ、外面底部にケズリが施される。O-10号窯式で、年代は８世紀後半のものと考えられる。231は短頸瓶である。体部はやや丸みをもちながら立ち上がり、粘土紐輪積痕がみられる。高台は貼付高台である。内面はロクロナデが施され、外面は胴部にケズリとロクロナデ、底部にユビナデが施される。O-10号窯式で、年代は８世紀後半のものと考えられる。

232～234は灰釉陶器の椀である。232はやや薄手の作りで、体部は丸みをもちながら立ち上がる。高台は貼付高台で、やや内湾しており、内外にユビナデを施す。断面形状は三角形である。内外面はロクロナデが施され、外面底部に回転糸切痕がみられる。内外面の体部下半まで灰釉が漬け掛けされた痕跡がみられる。内面底部に摩耗がみられる。233は体部に丸みをもつ。高台は貼付高台で、内外にユビナデを施す。断面形状は方形である。内外面はロクロナデが施され、外面底部に回転糸切痕がみられる。内面に摩耗がみられる。いずれもH-72号窯式で、年代は10世紀後半から11世紀初めのものと考えられる。234は高台が直立した貼付高台で、内外にユビナデを施す。断面形状は方形である。内外面はロクロナデが施され、外面底部はケズリ後ナデ調整されている。内外面に灰釉が施釉される。内外面に摩耗がみられる。O-53号窯式で、年代は10世紀のものと考えられる。

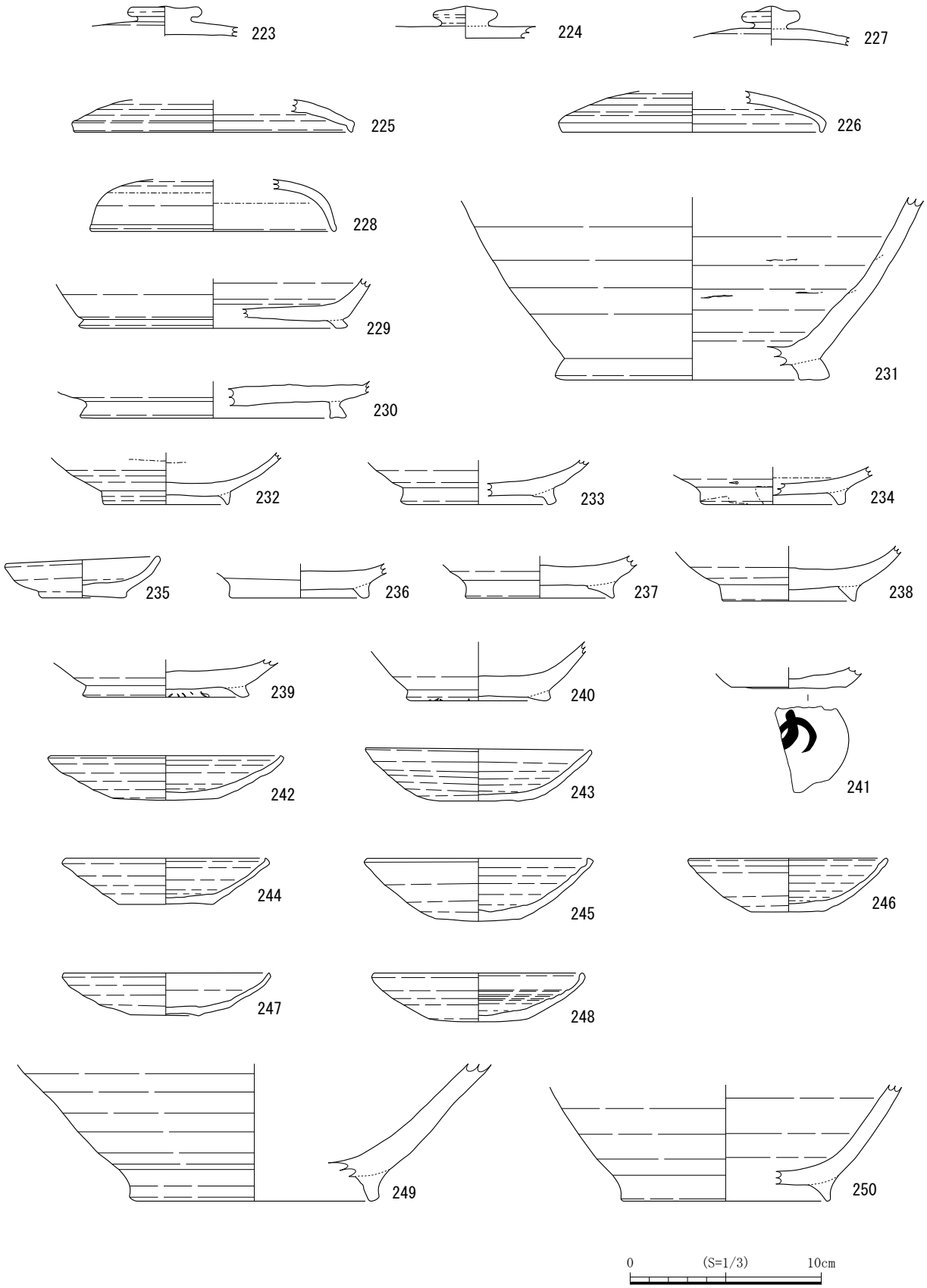
235～248は山茶碗である。235は小皿である。体部はやや丸みをもち、体部中程で緩やかに屈曲して立ち上がり、口縁端部は丸く収まる。内外面はロクロナデが施され、外面底部に回転糸切痕がみられる。胎土に約１㎜の小石を含む。尾張型第５型式で、年代は12世紀後半から13世紀前半のものと考えられる。236～248は碗である。236の体部は丸みをもつ。高台は貼付高台で、端部は丸く収まり、内外にユビナデ

を施す。内外面はロクロナデが施される。内面に重ね焼痕と降灰が、外面底部に回転糸切痕がみられる。内面が摩耗している。東濃型第３型式で､年代は11世紀後半のものと考えられる。237の高台は貼付高台で、内外にユビナデを施す。断面形状は三角形である。内外面はロクロナデが施され、外面底部に回転糸切痕がみられる。内面底部には摩耗がみられる。胎土に約５㎜の小石を含む。238の体部は丸みをもつ。高台は貼付高台で、内外にユビナデを施す。断面形状は三角形である。内外面はロクロナデが施され、外面底部に回転糸切痕、内面に降灰がみられる。いずれも尾張型第３型式で、年代は11世紀後半から12世紀初頭のものと考えられる。239の高台は貼付高台で、内外にユビナデを施す。断面形状は三角形で、籾殻痕がみられる。内外面はロクロナデが施され、外面底部に回転糸切痕がみられる。内面底部に摩耗がみられ、内面体部には降灰がみられる。東濃型谷迫間２号窯式で、年代は12世紀後半のものと考えられる。240の体部は丸みをもちながら立ち上がる。高台は貼付高台で、内外にユビナデを施す。断面形状は方形で、籾殻痕がみられる。内外面はロクロナデが施され、外面底部に回転糸切痕がみられる。内面に降灰がみられる。胎土に約１㎜の小石を含む。尾張型第５型式で、年代は12世紀後半から13世紀前半のものと考えられる。241は外面底部に判読不明な墨書がある。内面はロクロナデとユビナデが施される。外面はロクロナデが施され、底部に回転糸切痕と板目状圧痕がみられる。貼付高台が剥がれた可能性がある。尾張型第５型式もしくは第６型式で、年代は12世紀後半から13世紀前半のものと考えられる。242は口縁端部を丸く収める。体部は緩やかに大きく開いて立ち上がる。内外面はロクロナデが施され、外面底部に回転糸切痕がみられる。東濃型脇之島３号窯式で、年代は15世紀前半のものと考えられる。243は口縁端部が丸く細くすぼまる。体部は開くように立ち上がる。内外面はロクロナデが施され、外面底部に回転糸切痕がみられる。244は口縁端部が内側につままれ、面取りされる。体部は直線的に立ち上がる。内外面はロクロナデが施され、外面底部に回転糸切痕がみられる。245は体部が丸みをもちながら立ち上がり、口縁端部で面取りする。端部内側にややつまみ出される。内面はロクロナデによる稜が顕著で、体部と底部には明確な稜がある。外面は体部にロクロナデが施され、底部に回転糸切痕がみられる。246は口縁端部を丸く収める。体部はやや丸みをもつ。内面はロクロナデが施され、稜は顕著である。外面は体部にロクロナデが施され、底部に回転糸切痕がみられる。247は体部が丸みをもちながら立ち上がり、口縁端部は面取りされる。内外面ともにロクロナデが施され、外面底部に回転糸切痕がみられる。248は体部が丸みをもちながら立ち上がり口縁で屈曲する。口縁端部は丸く収まる。内外面はロクロナデが施され、外面底部に回転糸切痕がみられる。いずれも東濃型生田２号窯式で、15世紀後半のものと考えられる。

249・250は陶器の片口鉢である。249の体部はやや丸みをもち、高台は直立した貼付高台で、内外にユビナデを施す。断面形状は三角形である。内外面はロクロナデが施される。外面の体部下方にはケズリが施され、内面は体部から底部にかけて摩耗が著しい。尾張型第４型式で、年代は12世紀中頃のものと考えられる。250の体部は丸みをもちながら立ち上がる。高台は貼付高台で、内外にユビナデを施す。断面形状は三角形である。内外面はロクロナデが施され、外面体部にケズリ、底部に回転糸切り後ナデがみられる。尾張型第５型式で、年代は12世紀後半から13世紀前半のものと考えられる。

251～284は瀬戸産の陶器である。251～253は縁釉小皿である。251は口縁端部を丸く収める。体部はやや内湾するように立ち上がる。内外面はロクロナデが施され、外面底部に回転糸切痕がみられる。252は口縁端部を丸く収める。体部は開くように立ち上がる。内外面はロクロナデが施される。内面は口縁部か

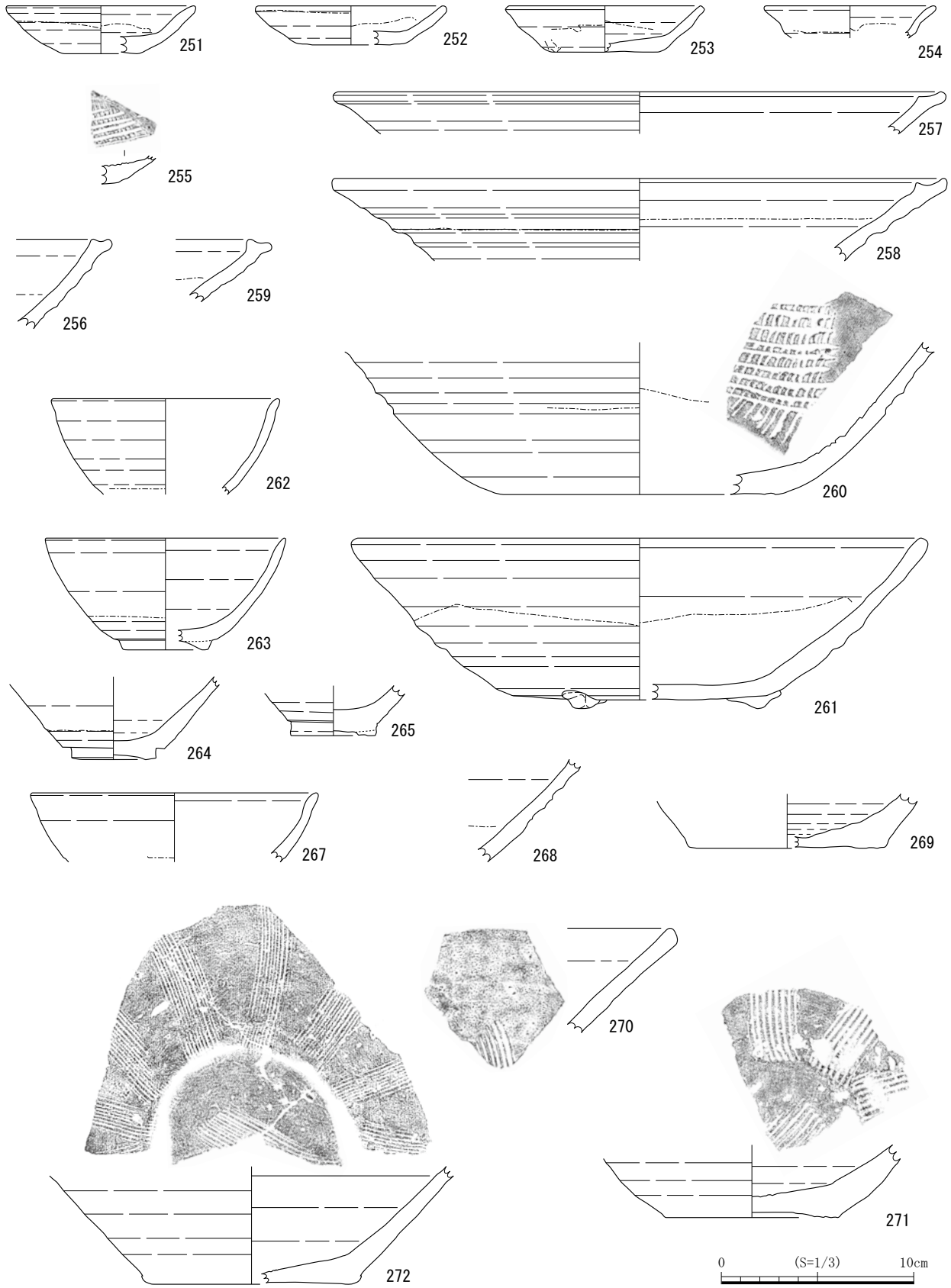
D-SD1



第86図　D-SD1遺物実測図１

ら体部にかけて、外面は口縁部に鉄釉が施される。いずれも古瀬戸後期様式Ⅳ期新で、年代は15世紀後半のものと考えられる。253は口縁端部を丸く収める。体部は真っ直ぐ立ち上がる。内外面はロクロナデが施され、外面底部に回転糸切痕がみられる。内外面の口縁部に灰釉が施釉される。古瀬戸後期様式で、年代は14世紀後半から15世紀後半のものと考えられる。254は小皿である。口縁はやや外反し端部を丸く収める。内外面はロクロナデが施され、口縁部に鉄釉が施釉される。年代は、近世のものと考えられる。255は卸皿の底部である。底部から体部にむけて器壁が薄くなり、体部は直線的に立ち上がる。内外面はロクロナデが施される。内面体部から底部にかけて４条一組の卸目が施される。外面底部に回転糸切痕がみられる。古瀬戸後期様式で、年代は14世紀後半から15世紀後半のものと考えられる。256～260は卸目付大皿である。256の口縁は外反しており、端部は丸く収まる。体部はやや丸みをもつ。内外面ともにロクロナデが施され、灰釉が施釉される。古瀬戸後期様式Ⅱ期で、年代は13世紀後半から14世紀初めのものと考えられる。257の口縁は外反しており、端部は丸く収まる。内外面にロクロナデが施され、灰釉が施釉される。一部摩耗により、釉の剥がれがある。258の口縁はやや立ち上がり、端部は丸く収まる。内外面ともにロクロナデが施され、灰釉が施釉される。いずれも古瀬戸後期様式Ⅳ期新で、年代は15世紀後半のものと考えられる。259の口縁はやや外反しており、端部は丸く収まる。体部は直線的である。内外面ともにロクロナデが施され、灰釉が施釉される。古瀬戸後期様式Ⅳ期古で、年代は15世紀中頃のものと考えられる。260の体部は丸みをもちながら立ち上がる。内面はロクロナデが施され、体部に８条一組の卸目がみられる。外面は体部にロクロナデとケズリが施され、ススが付着している。底部はケズリ調整され、籾跡痕がみられる。内外面の体部に灰釉が施釉される。古瀬戸後期様式Ⅳ期で、年代は14世紀後半から15世紀後半のものと考えられる。261は直縁大皿である。口縁端部は丸く収まる。体部は直線的に立ち上がる。脚部は一脚だけ残っており、三脚だったと思われる。内外面はロクロナデが施され、口縁部から体部にかけて灰釉が漬け掛けされている。外面の体部下方から底部にかけてケズリが施され、底部は回転糸切痕がみられる。古瀬戸後期様式Ⅳ期新で、年代は15世紀後半のものと考えられる。262～266は天目茶碗である。262の口縁は、わずかに外反しており、端部は丸く収まる。体部は丸みをもちながら立ち上がる。内外面にロクロナデが施され、鉄釉が施釉される。263は口縁端部を丸く収める。体部は丸みをもちながら立ち上がる。高台は貼付高台である。内面と外面上半部にロクロナデが施される。外面体部下半から底部にかけてケズリが施され、露胎している。内面と体部上半に鉄釉が施される。いずれも古瀬戸後期様式Ⅳ期新で､年代は15世紀後半のものと考えられる。264の体部は直線的に立ち上がる。高台は削り出し高台で、中央部に凹みがみられる。内面と外面上半部にロクロナデが施される。外面下半はケズリが施され、底部にかけて露胎している。内外面に鉄釉が施釉される。古瀬戸後期様式Ⅳ期で、年代は15世紀中頃から後半のものと考えられる。265の体部は直線的に立ち上がる。高台は貼付高台である。内面はロクロナデが施される。外面は体部にケズリが施され、底部に回転糸切り後ナデがみられる。内面は鉄釉が施釉され、外面は露胎している。古瀬戸中期様式Ⅳ期で、年代は13世紀中頃のものと考えられる。266は内面と外面上半部ともにロクロナデが施され、鉄釉が施釉される。外面下半はケズリが施され、露胎している。写真のみの掲載である。267は平碗である。口縁はやや外反しており、端部は丸く収まる。内外面にロクロナデが施され、外面にスス付着がみられる。内外面に灰釉が施釉される。古瀬戸後期様式Ⅳ期新で、年代は15世紀後半のものと考えられる。268は盤類の体部である。内面はロクロナデが施される。外面はロクロナ

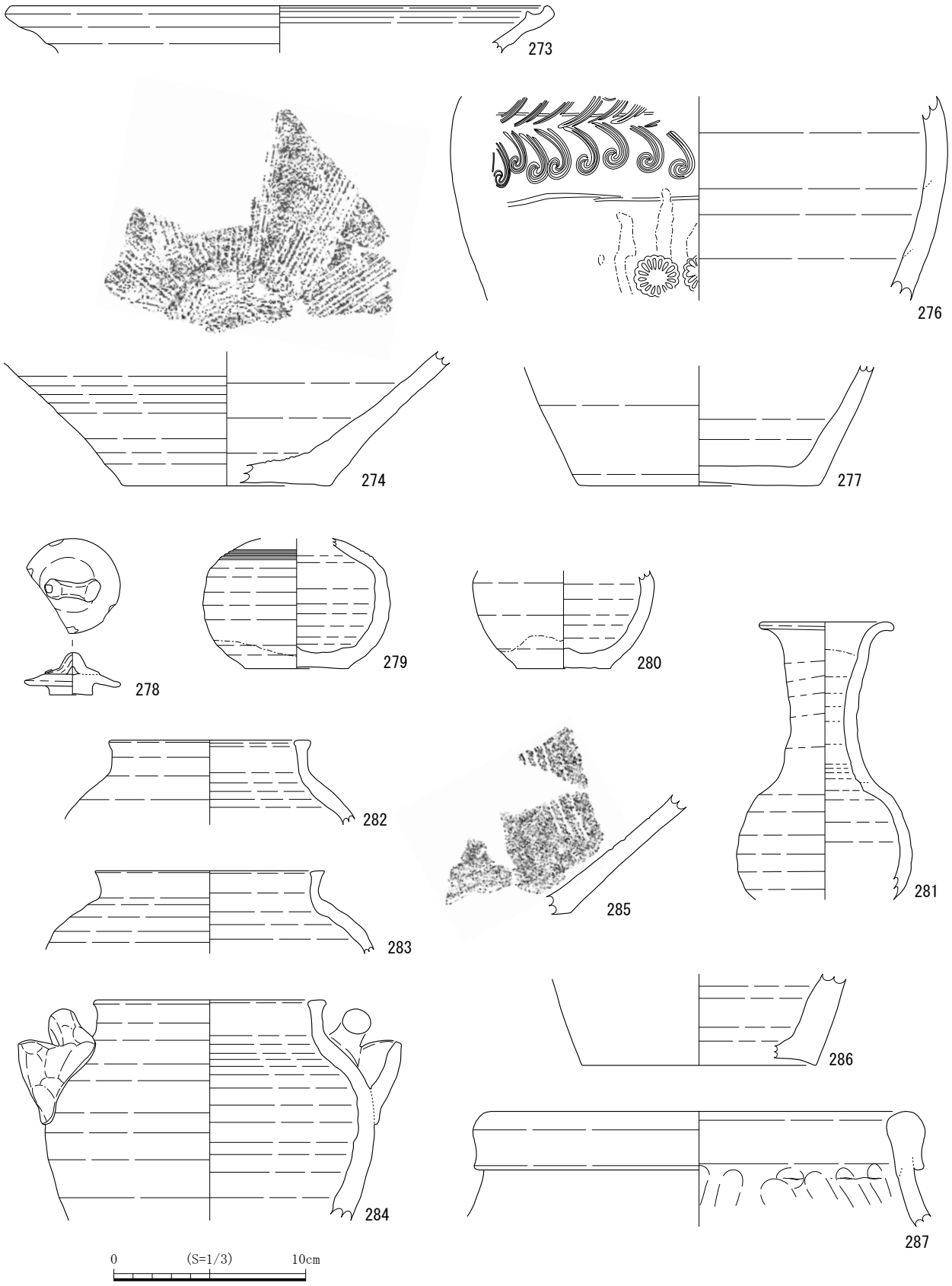
D-SD1



第87図　D-SD1遺物実測図２

デとケズリが施される。内外面に灰釉が施釉される。古瀬戸後期様式Ⅳ期で年代は15世紀中頃から後半のものと考えられる。269は内耳鍋の底部である。体部は真っ直ぐ立ち上がる。内外面はロクロナデが施され、外面底部に回転糸切痕がみられる。古瀬戸後期様式Ⅳ期で、年代は15世紀中頃から後半のものと考えられる。270～275は擂鉢である。270の体部は直線的だがやや外反気味に立ち上がる。口縁端部は面取りされる。内外面はロクロナデが施され、錆釉が施釉される。内面に８条一組の擂目がみられる。271の体部は丸みをもちながら立ち上がる。内外面はロクロナデが施され、錆釉が施釉される。内面に８条一組の擂目がみられ、使用による摩耗がみられる。外面底部に回転糸切痕がみられる。272の体部は直線的に立ち上がる。内外面はロクロナデが施され、錆釉が施釉される。内面の胴部と底部に12条の擂目がみられ、使用による摩耗がみられる。外面底部に回転糸切痕がみられる。いずれも古瀬戸後期様式Ⅳ期で、年代は15世紀中頃から後半のものと考えられる。273の口縁は、内側に折り曲げられ、端部は丸く収まる。内外面はロクロナデが施され､錆釉が施釉される。古瀬戸後期様式Ⅳ期新で､年代は15世紀後半のものと考えられる。274の体部はやや外反するように立ち上がる。底部に砂粒の付着がみられる。内外面はロクロナデが施され、錆釉が施釉される。内面に８条一組の擂目がみられ、使用による摩耗がみられる。外面底部に回転糸切痕がみられる。年代の詳細は不明だが近世のものと考えられる。275は、内外面ともにロクロナデが施され、錆釉が施釉される。古瀬戸後期様式で年代は14世紀後半から15世紀後半のものと考えられる。写真のみの掲載である。276は広口壺で、内面はヨコナデが施され、内外面に鉄釉が施釉される。外面の文様は二段構成で上段に蕨手文、下段に印花文を施す。上段と下段の文様帯は弱い沈線でくぎられる。古瀬戸中期様式Ⅲ期で年代は14世紀前半のものと考えられる。277は祖母懐茶壺である。胴部は直線的に立ち上がる。内外面はロクロナデが施される。内面底部にはユビナデが、外面底部にケズリ後ナデが施される。古瀬戸後期様式で、年代は14世紀後半から15世紀後半のものと考えられる。278は合子の蓋である。口縁端部は丸く収まる。摘み部分はナデとユビオサエが施され、付着物がみられる。表裏面はともにロクロナデが施され、底部に回転糸切痕がみられる。口縁部と天井部に鉄釉が施釉され、裏面は露胎している。古瀬戸後期様式で、年代は14世紀後半から15世紀後半のものと考えられる。279、280は上部が欠損するが片口小瓶である。279は底部から肩部にむかって丸みをもちながら立ち上がる。内外面はロクロナデが施される。外面は肩部に沈線が４条、底部に回転糸切痕がみられる。外面に鉄釉が施釉されるが、釉薬がとんでいる。内面に鉄分の付着がみられる。古瀬戸後期様式で、年代は14世紀後半から15世紀後半のものと考えられる。280の体部は丸みをもちながら立ち上がる。内外面にロクロナデが施され、外面底部に回転糸切痕がみられる。古瀬戸後期様式Ⅳ期で、年代は15世紀中頃から後半のものと考えられる。281は花瓶である。口縁は大きく外反し、端部は丸く収まる。頸部は反るように立ち上がり、胴部は下膨れ状で丸みをもつ。頸部と胴部の境に接合痕がみられる。内外面にロクロナデが施され、鉄釉が施釉される。古瀬戸中期様式Ⅲ・Ⅳ期で、年代は14世紀前半から中頃のものと考えられる。282・283は土瓶もしくは甕である。282の口縁は直立し、端部は平らに調整される。内外面にロクロナデが施され、錆釉が施釉されている。胎土に約２～３㎜の小石を含む。古瀬戸後期様式Ⅳ期で、年代は15世紀中頃から後半のものと考えられる。283の口縁は直立し、端部は平らに調整される。内外面はロクロナデが施され、錆釉が施釉される。古瀬戸後期様式Ⅳ期で、年代は15世紀中頃から後半のものと考えられる。284は土瓶もしくは釜である。口縁は直立しており、端部は平らに調整される。体部は丸みをもつ。内外面はロクロナデが施され、耳にナデとユビオ

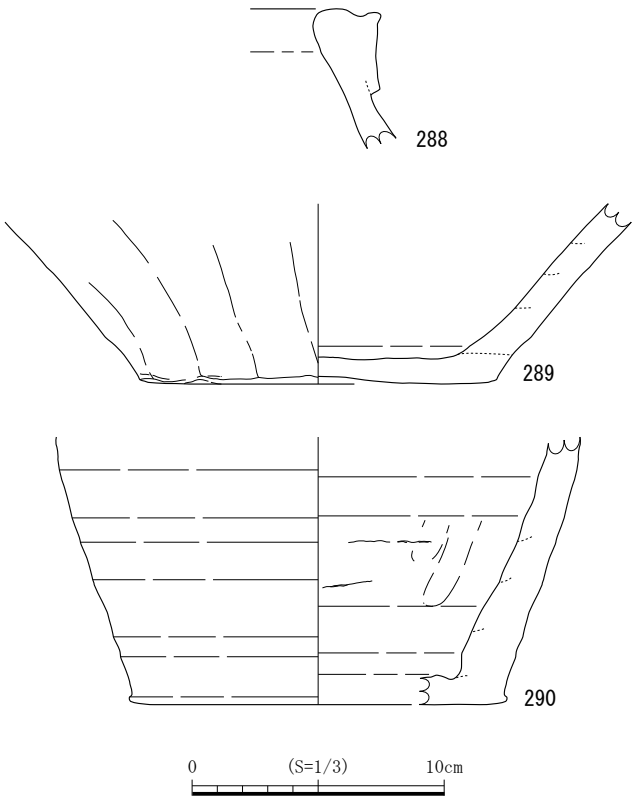
D-SD1



第88図　D-SD1遺物実測図３

サエが施される。古瀬戸後期様式Ⅳ期新で、年代は15世紀後半のものと考えられる。

285～289は常滑産の陶器である。285は片口鉢である。内外面にナデが施され、外面は被熱している。内面に６条一組の擂目がみられ、使用による摩耗がみられる。焼成はやや不良である。常滑11型式で、年代は16世紀前半のものと考えられる。286は壺で、胴部はほぼ直立している。内外面はヨコナデ、外面底部にナデが施される。外面に降灰がみられる。年代の詳細は不明だが中世でも15世紀ごろのものと考えられる。287は広口壺である。口縁は玉縁を呈する。内外面はヨコナデ、頸部にユビナデが施される。常滑９型式または10型式で、年代の詳細は不明だが、15世紀のものと考えられる。288、289は甕である。288の内外面はヨコナデが施される。289の体部は開くように立ち上がる。内面はナデが施される。外面は胴部にヘラナデが施され、底部は不調整である。外面底部が被熱を受けている。いずれも常滑10型式で、年代は15世紀後半のものと考えられる。



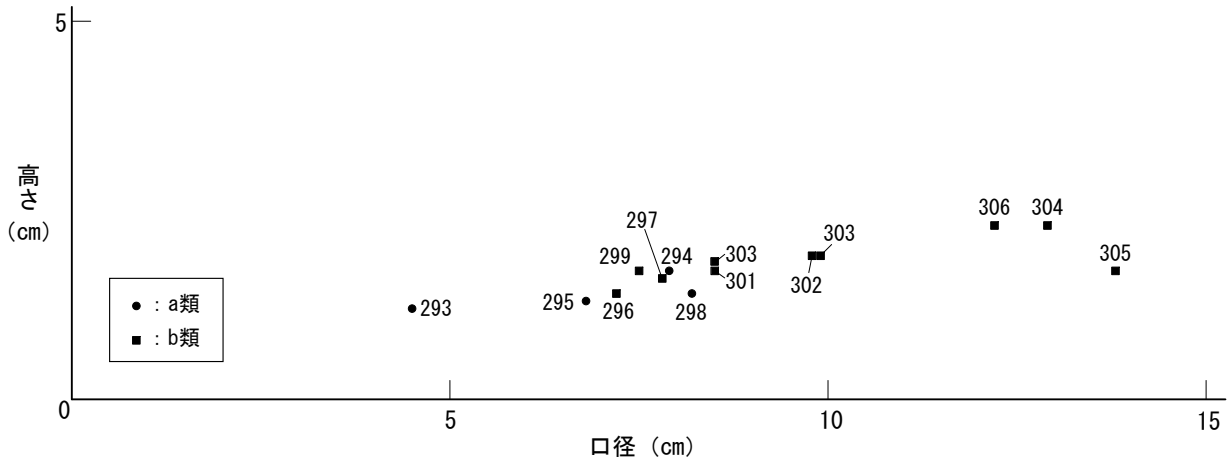
第89図　D-SD1遺物実測図４

290は猿投産の壺である。体部はやや開きつつも直線的に立ち上がる。内外面および底部外面に至るまで灰釉が施釉される。内外面はナデ、底部にケズリが施される。年代は12世紀のものと考えられる。

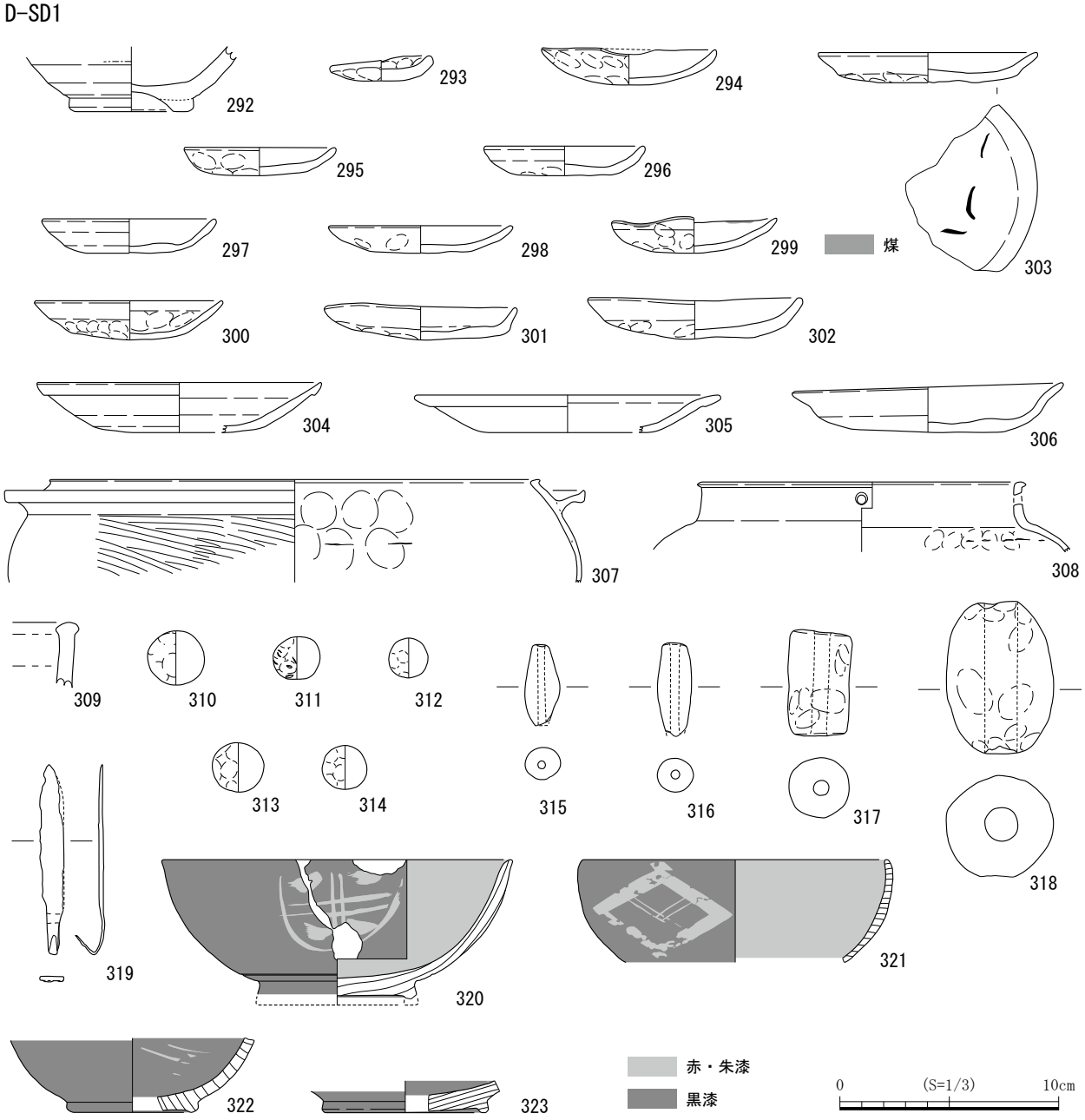
291は青磁の碗で、龍泉窯のものである内面はロクロナデ、外面はケズリを施し、内外面ともに青磁釉が施釉される。写真のみの掲載である。

292は産地不詳の碗で、底部から体部である。体部は丸みをもちながら立ち上がり、高台は貼付高台である。内外面ともにロクロナデが施され、外面の体部から底部にかけてケズリが施される。内面と外面の一部に灰釉が施釉された痕跡がみられ、外面底部から体部にかけて露胎である。胎土は瀬戸に近いが詳細な器形は不明である。特注品の可能性も考えられ、年代は不明であるが、他の陶器碗に近いものであろう。

293～308は土師器である。293～306は皿である。法量から小皿と中皿に分けられ、小皿はさらに２種に細分される。また整形手法からみると、口縁部近くまでユビオサエを顕著に残すもの（ａ類）と、外面上部にヨコナデが明瞭に残るもの（ｂ類）がある。中皿はｂ類のみである（第90図）。307は羽釜である。口縁は内湾し、端部が外に折り返されている。鍔は少し上を向いている。内面はヨコナデとユビオサエが施され、粘土紐輪積痕がみられる。外面は口縁部にヨコナデ、体部にナナメとヨコのハケが施される。内外面ともにスス付着がみられる。年代は14世紀末から15世紀中頃である。308は釜である。口縁は真っ直ぐ立ち上がり、端部が外に折り返されている。頸部に穿孔がみられる。内面は口縁部から頸部にかけてヨコナデ、頸部から肩部にかけてヨコナデとユビオサエが施され、粘土紐輪積痕がみられる。外面はヨコナ



第90図　土師器皿　法量分布図



第91図　D-SD1遺物実測図５

デが施され、スス付着がみられる。

309は瓦質土器の香炉もしくは火鉢の口縁である。体部は直立し、内外面にロクロナデが施される。年代の詳細は不明だが、15世紀ごろのものと考えてよいだろう。

310～314は陶丸である。310はナデとユビオサエが施され、降灰がみられる。311はナデとユビオサエが施され、籾殻痕がみられる。312～314はナデとユビオサエが施される。

315～318は土錘である。315は残存長が3.8㎝、最大径が1.6㎝で、孔径が0.3㎝、重さが7.2gである。胎土に約１㎜の小石を含む。孔内に棒などを抜いたときについた擦痕がみられ、外面にナデとユビオサエが施される。316は残存長が4.3㎝、最大径が1.6㎝で、孔径が0.4㎝、重さが8.5gである。孔内に棒などを抜いたときについた擦痕がみられ、外面にナデが施される。317は長さが4.9㎝、最大径が2.8㎝で、孔径が0.7㎝、重さが48.8gである。孔内に棒などを抜いたときについた擦痕がみられ、外面にナデとユビオサエが施される。318は長さが6.9㎝、最大径が4.9㎝で、孔径が1.5㎝、重さが151.9gである。孔内に棒などを抜いたときについた擦痕がみられ、外面にナデとユビオサエが施される。

319は青銅製で、長さ8.7㎝、幅1.1㎝である。先端部が大きく曲げられている。用途不明である。

320～335は木製品である。320～323は漆器で、すべて椀である。320の口縁はやや外反し、端部は丸く収まる。体部は丸みをもちながら立ち上がる。高台の断面形状は方形である。内面に赤漆を塗る。外面は黒漆を塗り、体部に朱漆で文様を描く。321の体部は丸みをもちながら立ち上がり、口縁端部は丸く収まる。内面に赤漆を塗る。外面には黒漆が塗られ、体部に朱漆で井桁文が描かれている。322の体部は丸みをもちながら立ち上がる。高台の断面形状は方形である。内外面ともに黒漆を塗り、内面に朱漆で文様を描くが、詳細は不明である。323の内外面ともに黒漆が塗られ、内面には赤漆がかかっていた痕跡もみられる。外面に摩耗がみられる。

324～327は串状木製品である。用途は不明。木片を小割りにしたのち、面を整えるためのケズリが施され棒状にしている。削りは粗雑である。324は上部を欠損している。残存長は14.8㎝である。下端部にむかって、ナナメ一方向に削って先を尖らせる。325は上部を欠損している。残存長は13.5㎝である。下端部は先端のみ短く削って尖らせる。側面はケズリが施される。326は上部を欠損している。残存長は12.8㎝である。下端部にむかって、細く尖るようにケズリが施される。327は両端を欠損している。残存長は10.1㎝である。本品のみ幅と厚みは一定である。

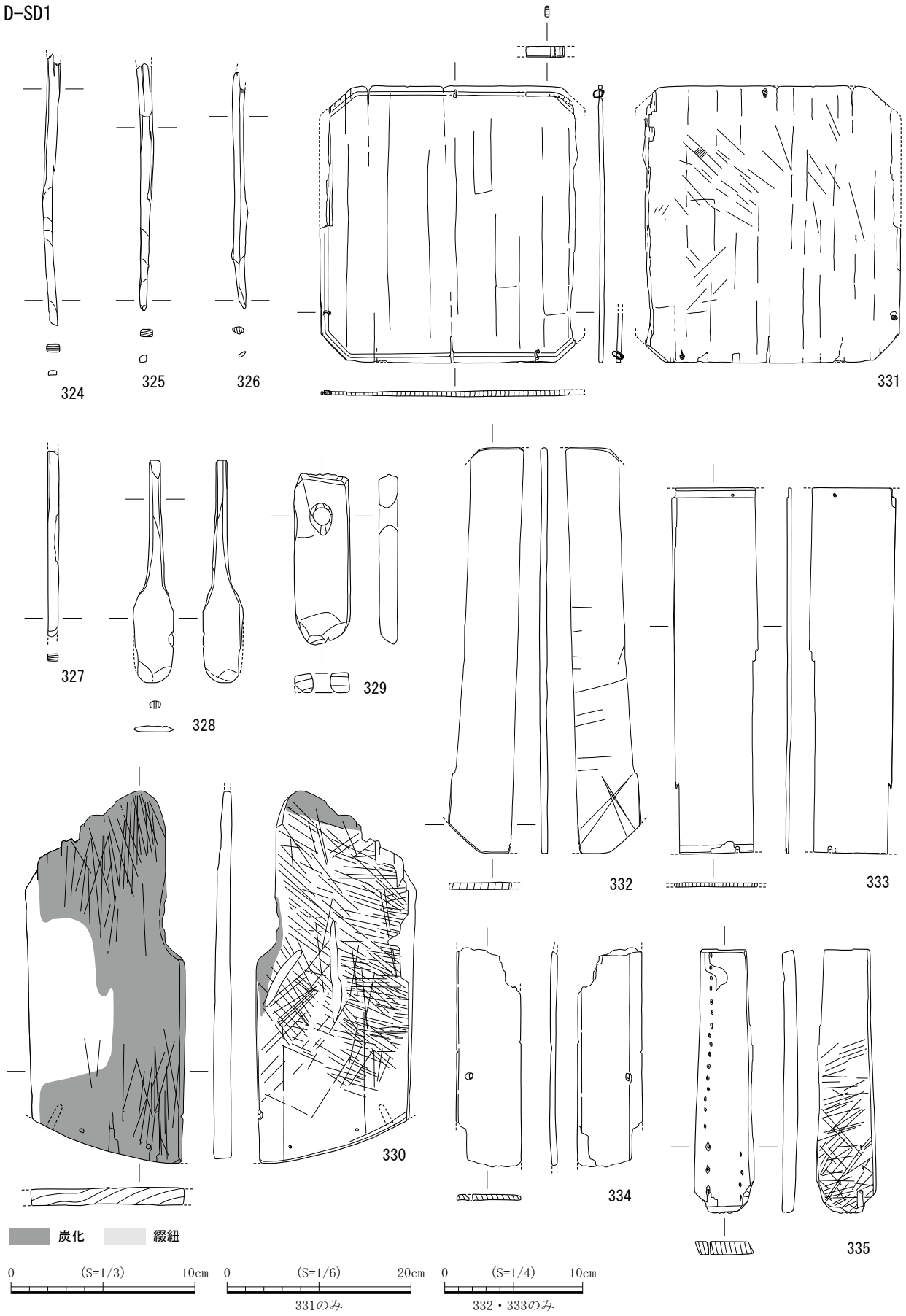
328は匙形木製品である。長さ12.1㎝で、小さな細板を削って作ったものである。身の先端を半円形にする。先端に摩耗がみられる。頸部より幅を狭めて、まっすぐな細い柄となるが、身と同程度の長さである。

329は用途不明木製品である。長さ9.3㎝、幅3.0㎝である。裏表ともにケズリが施されている。上端部は切り目を入れて折り取っており、両面から彫り込んだ直径1.8㎝程度の孔がみられる。

330は曲物の底板である。復元径37㎝ほどであるが、大きく破損しており、最大長20.0㎝ほどが残存している。裏表ともに刃物痕が多くみられる。片側の表面は焦げが著しく、側面は欠損部のみ焦げがみられる。側面に釘孔がみられるほか、表面の縁寄りに小孔がある。２次使用の可能性がある。

331～333は折敷である。331は長さ30㎝の方形のもので、ほぼ三辺が残る。四隅は切り落として加工されている。表面の縁に、側板の痕跡がみられる。現状で３ヶ所の結合孔と綴紐が確認できる。裏面には刃

D-SD1

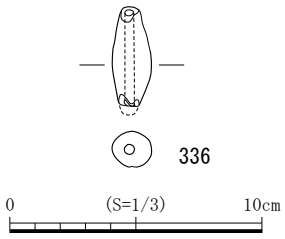


第92図　D-SD1遺物実測図６

物痕がみられる。332は底板で、長さ29.5cmである。両端は切り落として、加工されている。裏面には刃物痕がみられる。333は底板である。両端の長さ26.5cmである。表面の縁に、側板の痕跡がみられる。縁にそれぞれ結合孔と思われる直径２mmの穿孔が確認できる。

334、335は用途不明の木製品である。334は残存長11.9cm、幅3.5cmの薄い板材である。一方の端に約５mmの孔を1ヶ所穿つ。335は長さ14.4cm、残存幅3.3cmの板材である。表面に左側19ヶ所、右側４ヶ所の23ヶ所に直径５mm以下の孔がほぼ直線的にみられ、そのうち３ヶ所のみ穿たれている。裏面に刃物痕がみられる。２次使用の可能性がある。

D-SD22



第93図　D-SD22遺物実測図

D-SD22（第93図、図版39）

336は土錘で、残存長が3.9cm、最大径が1.6cmで、孔径が0.4cm、重さが7.1ｇである。孔内に棒などを抜いたときについた擦痕がみられ、外面にナデが施され、摩耗がみられる。

D-SE33（第94図、図版39）

337は灰釉陶器の椀である。高台は貼付高台でやや内湾しており、断面形状は三日月形である。内外面ともにロクロナデが施される。高台部から底部にかけてユビナデが施される。内面や高台部分に摩耗がみられる。O-53号窯式で、年代は10世紀のものと考えられる。

338～340は陶器である。338は内耳鍋か。口縁端部上面は内側に傾いている。体部は丸みをもちながら立ち上がる。内外面ともにロクロナデが施される。外面のスス付着が著しい。古瀬戸後期様式Ⅳ期新で、年代は15世紀のものと考えられる。339は天目茶碗である。口縁端部は丸く収まり、内外面にロクロナデが施され、鉄釉が施釉されている。古瀬戸後期様式Ⅰ期で、年代は14世紀後半のものと考えられる。340は直縁大皿である。口縁は直線的に開き、端部は面取りされる。内外面にロクロナデが施され、錆釉が施釉される。古瀬戸後期様式Ⅳ期で、年代は15世紀のものと考えられる。

341～354は木製のくさびである。長さは12.1cm～16.6cm、幅は0.8cm～5.2cmである。上端部は切断、下端部は両面または片面のみにケズリを施し、尖らせる。341は半分に割り取られている。354は両面に刃物痕がみられる。

D-SK2（第95図、図版40）

355は土師器の甕の口縁である。口縁は外反している。内面はナデとヨコハケが施される。外面はナデとナナメハケが施される。

356は土錘で、残存長が3.8cm、最大径が1.4cmで、孔径が0.4cm、重さが6.3ｇである。外面にナデとユビオサエが施される。

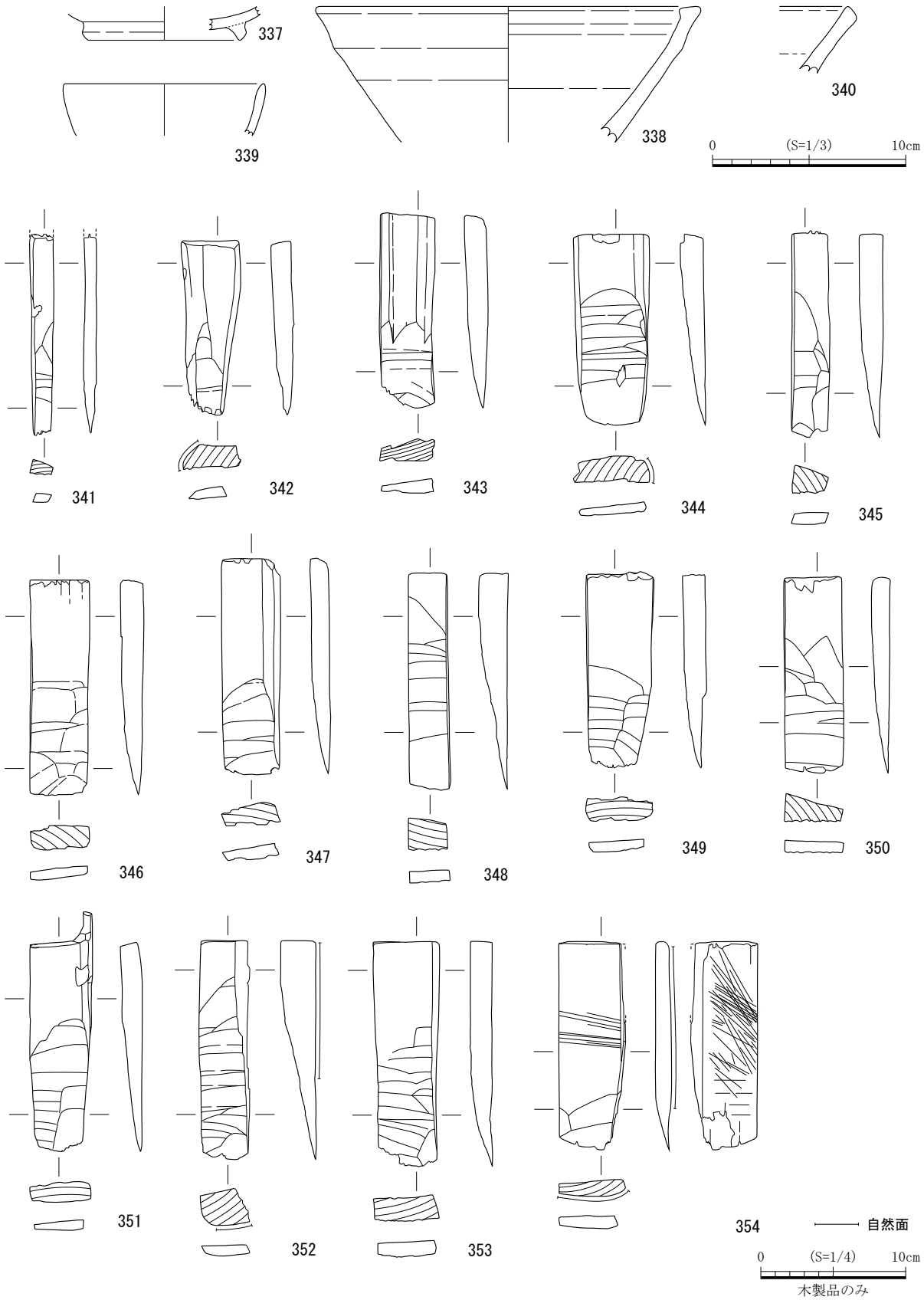
D-SK3（第95図、図版40）

357は土師器の甕である。頸部から口縁にむかって開くように立ち上がる。内外面ともに口縁部にヨコナデが施される。内面頸部にヨコハケが、外面頸部にナナメハケが施される。年代は小片のため不明である。

358は陶器の陶丸である。ナデとユビオサエが施される。

359は木製品の折敷の底板で長さ26.5cmである。木取りは柾目である。両端は加工がみられる。結合孔

D-SE33



第94図　D-SE33遺物実測図

は２つ１組で２ヶ所あり、綴紐も残存している。

D-SK4（第95図、図版40）

360は陶器の陶丸である。ナデとユビオサエが施される。

D-SK32（第95図、図版40）

361は山茶碗の碗である。口縁端部はやや内湾しており、面取りされる。体部は直線的である。内外面にロクロナデが施される。東濃型生田２号窯式で、年代は15世紀後半のものであると考えられる。

362～365は陶器である。362･363は縁釉小皿である。362の口縁はやや外反し、端部は丸く収まっている。体部は直線的に立ち上がる。内外面にロクロナデが施され、口縁部に鉄釉が施釉されている。古瀬戸後期様式で、年代は14世紀後半から15世紀後半のものと考えられる。363は底部に回転糸切痕がみられ、釉が付着している。内外面ともにロクロナデが施される。内面の一部に釉だれの痕跡がみられる。古瀬戸後期様式で、年代は14世紀後半から15世紀後半のものと考えられる。

364は玉縁壺である。口縁端部は玉縁状に収める。胴部下半は直線的に立ち上がり、胴部上半から肩部にかけて丸みをもち、頸部は真っ直ぐ立ち上がる。内面は肩部から胴部にかけてユビオサエが施され、口縁部にヨコナデが施される。外面は肩部から胴部にかけて横方向のヘラナデが施され、肩部にヘラ描き記号文がみられる。胴部にススが付着している。底部にゲタ痕がみられる。口縁部は滑らかに摩耗している。常滑10型式で、年代は15世紀後半のものと考えられる。

365は手付鍋か羽釜の把手と思われる。内外面にロクロナデ、鉄釉が施される。年代は小片のため詳細は不明だが近世のものと思われる。

366は青磁の碗である。体部は丸みをもちながら立ち上がる。高台は削り出し高台であり、露胎しているが一部釉が付着している。内面はロクロナデが施され、外面は連弁文が施される。龍泉窯系青磁碗Ⅱ類と考えられる。

367は土錘で、残存長が7.8㎝、最大径が4.8㎝、孔径が1.5㎝、重さが164.4ｇである。胎土に約１～２㎜の小石を含んでいる。孔内に棒などを抜いたときについた擦痕がみられる。外面にナデとユビオサエが施され、端部には２ヶ所の窪みがみられる。

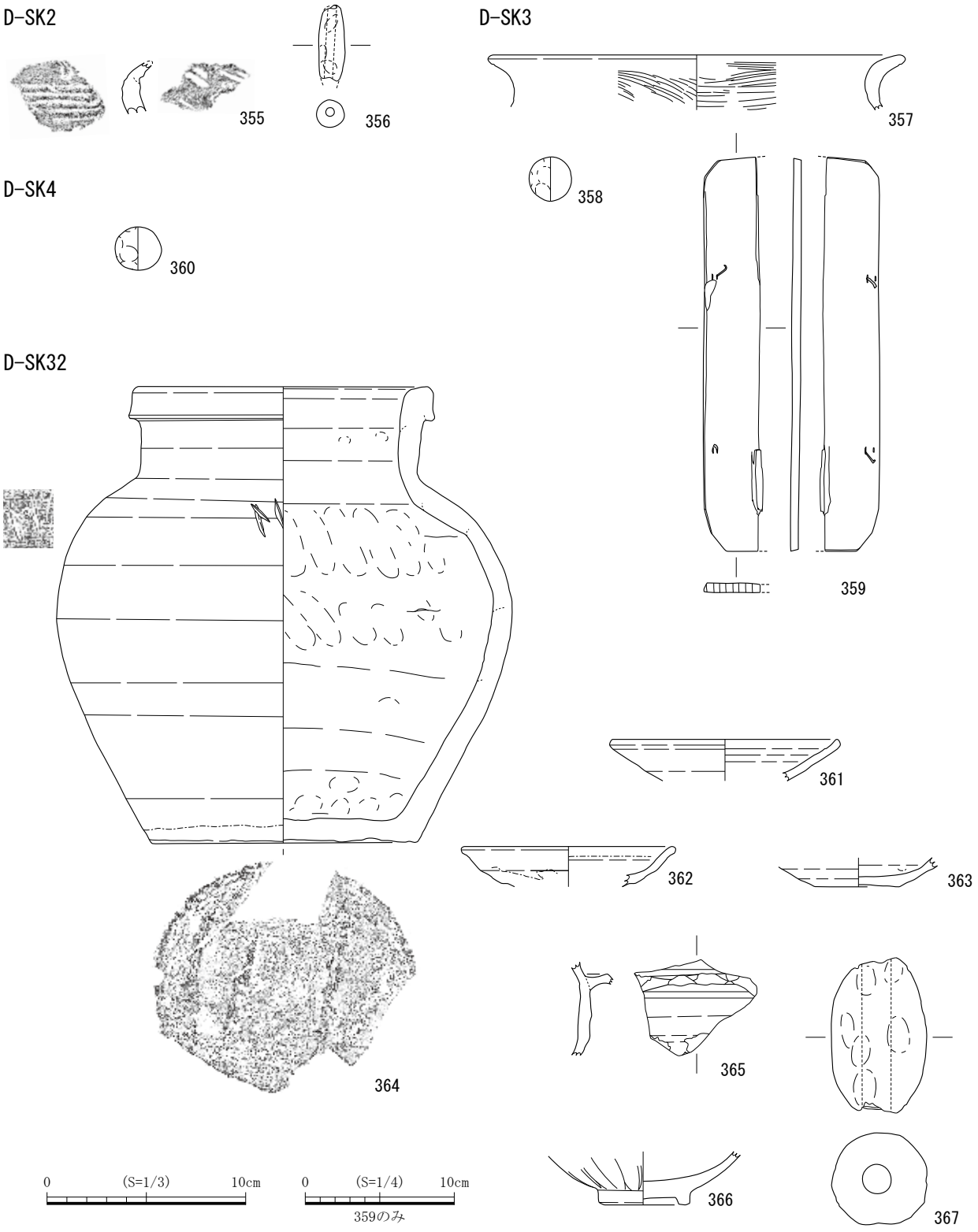
D-SK34（第96図、図版40）

368は陶器の片口鉢で、Ⅱ類に分類される。口縁端部は面取りがみられる。内外面ともにロクロナデが施され、外面体部にユビオサエが施される。内面に摩耗痕がみられる。常滑10型式で、年代は15世紀後半のものと考えられる。

D-SK36（第96図、図版40）

369は山茶碗の碗である。口縁はやや外反しており、端部は丸く収まる。体部は真っ直ぐ立ち上がる。高台は貼付高台で内外にユビナデを施す。断面形状は三角形である。内外面ともにロクロナデが施され、底部に回転糸切痕がみられる。内面底部に摩耗している。尾張型第５型式で、年代は12世紀後半から13世紀前半のものと考えられる。

370は土師器の羽釜である。口縁はやや外反しており、端部は面取りされる。内面は口縁部にヨコナデ、体部にナデが施される。外面は口縁部から鍔にヨコナデ、体部にヨコとナナメのハケが施される。年代の詳細は不明だが、15世紀後半のものと考えられる。



第95図　D-SK2～4、32遺物実測図

D-SK40（第96図、図版41）

371は金属製品で、長さ4.0㎝、幅0.9㎝、重さ3.7ｇである。先端はやや曲げられている。用途不明である。

372は漆器の椀である。口縁端部は丸く収まる。体部は丸みをもちながら立ち上がる。内面に赤漆をかける。外面は黒漆をかけ、体部に朱漆で不明な文様を描く。

D-SK41（第96図、図版40）

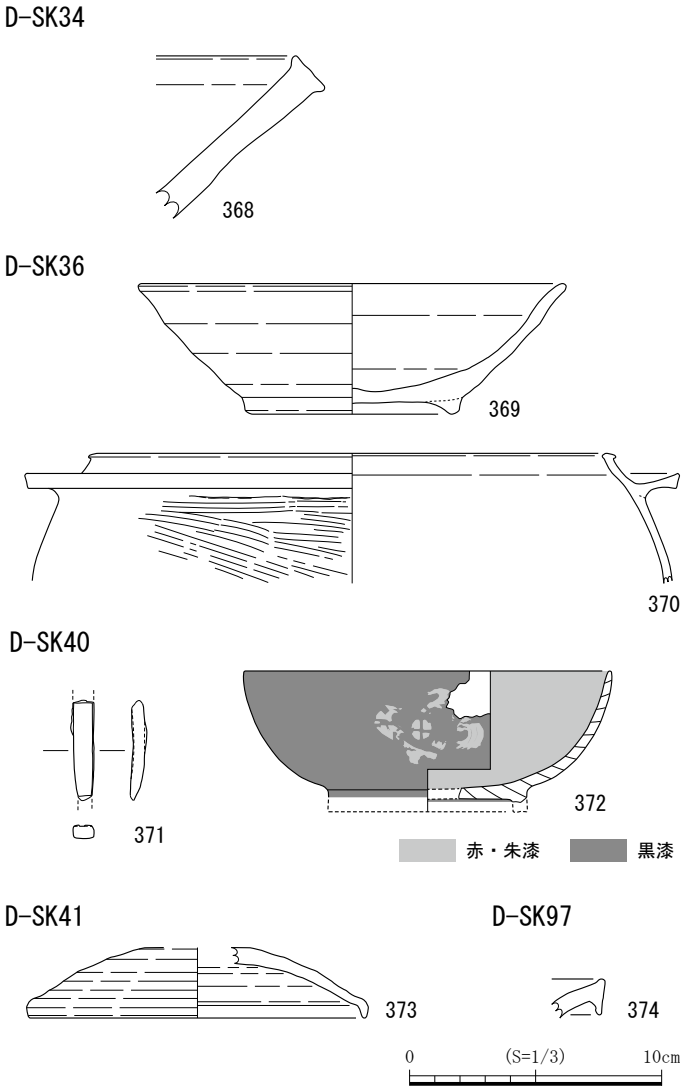
373は須恵器の杯蓋である。口縁端部は丸く収まる。体部は丸みをもつ。内外面ともにロクロナデ、外面体部にケズリが施される。焼成がやや不良である。O-10号窯式で、年代は８世紀後半のものと考えられる。

D-SK97（第96図、図版40）

374は須恵器の甕で、口縁端部の外側に面が取られる。内外面ともにヨコナデが施される。年代の詳細は不明だが、８世紀代のものと考えられる。

D-SK103（第97図、図版40）

375は山茶碗の小皿である。口縁はやや外反しており、端部は丸く収まる。内外面ともにロクロナデが施される。内面に降灰がみられる。胎土に約１㎜の小石を含む。尾張型第４型式もしくは第５型式で、年代は12世紀から13世紀前半のものと考えられる。



第96図　D-SK34、SK36、SK40、SK41、SK97遺物実測図

D-SK113（第97図、図版40）

376は須恵器の杯蓋である。体部はやや丸みをもつ。面取りはされていない。内外面ともにロクロナデが施され、さらに外面体部はケズリ調整されている。C－２号窯式で、年代は８世紀前半のものと考えられる。

D-SK168（第97図、図版41）

377は灰釉陶器の椀である。内外面ともにロクロナデが施され､高台は貼付高台で内外にユビナデを施す。小片のため時期不明である。

D-SK244（第97図、図版41）

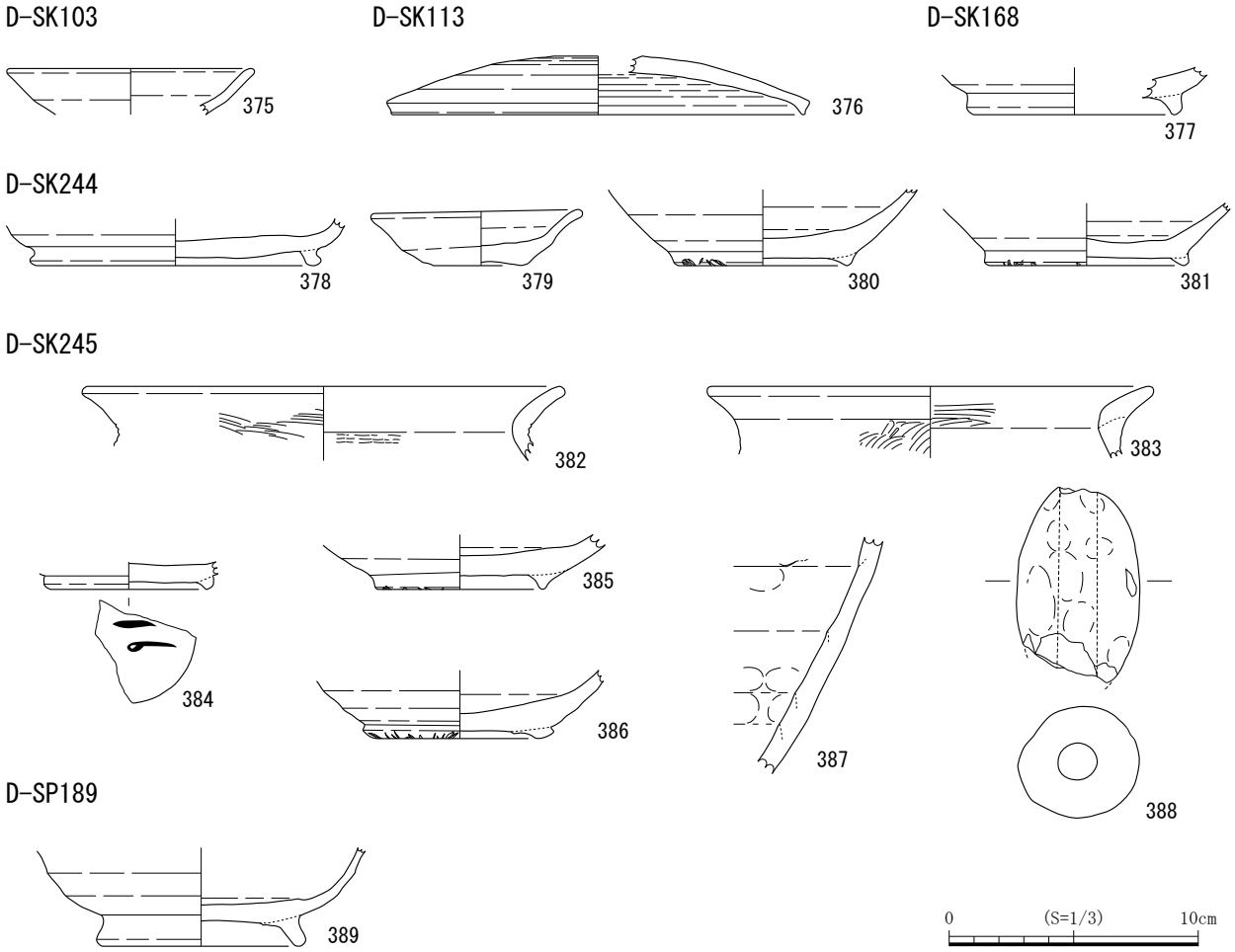
378は須恵器の有台杯である。体部は丸みを持ちながら立ち上がり、底部はやや下方に膨らむ。高台はやや外反しており貼付高台で、内外にユビナデを施す。断面の形状は丸みがある方形である。内外面ともにロクロナデが施され、摩耗がみられる。C－２号窯式で、年代は７世紀後半から８世紀前半のものと考

えられる。

379～381は山茶碗である。379は小皿である。口縁端部は丸く収まる。体部下半は直線的だが口縁部にかけて外反する。内面は体部にロクロナデが、底部に指圧痕が施される。外面は体部にロクロナデが施され、底部に回転糸切痕と板目状圧痕がみられる。尾張型第５型式で、年代は12世紀後半から13世紀前半のものと考えられる。380・381は碗である。380の体部はやや内湾しながら立ち上がる。高台は貼付高台で内外にユビナデを施す。籾殻痕がみられ、潰れている。内外面ともにロクロナデが施され、底部に回転糸切痕がみられる。胎土に約１㎜の小石を含む。尾張型第５型式で、年代は12世紀後半から13世紀前半のものと考えられる。381の体部は直線的に立ち上がる。高台は貼付高台である。断面形状は三角形で、内外面ともにロクロナデが施され、回転糸切痕と板目状圧痕がみられる。胎土に約１㎜の小石を含む。尾張型第６型式で、年代は13世紀前半のものと考えられる。

D-SK245（第97図、図版41）

382・383は土師器の甕である。382の口縁端部は丸く収まる。内面は口縁部にヨコナデとヨコハケが施される。外面は口縁部にヨコナデとナナメハケが施される。内面に摩耗がみられる。383の口縁は外反し、端部は丸く収まる。内外面ともに口縁部にヨコナデを施す。内面体部にヨコおよびナナメのハケとナデが施され、外面体部にナナメハケが施される。



第97図　D-SK103、SK113、SK168、SK244、SK245、SP189遺物実測図

384は灰釉陶器の皿である。高台は貼付高台である。内外にユビナデを施す。断面形状は方形で、底部に判読不明な墨書がある。内外面ともにロクロナデが施され、底部に回転糸切痕がみられる。内面に一部灰釉が施釉される。H-72号窯式で、年代は10世紀後半から11世紀初めのものと考えられる。

385・386は山茶碗の碗である。385の高台は貼付高台で籾殻痕がみられる。内外面ともにロクロナデが施され、ススが付着する。底部は回転糸切痕がみられる。尾張型第５型式で、年代は12世紀後半から13世紀前半のものと考えられる。386の体部は丸みをもちながら立ち上がる。高台は貼付高台で内外にユビナデを施す。籾殻痕がみられる。内外面ともにロクロナデが施され、底部に回転糸切後ナデがみられる。胎土に約１～３㎜の小石を含む。尾張型第５型式で、年代は12世紀後半から13世紀前半のものと考えられる。

387は陶器の羽釜で、常滑産である。内面はヨコナデ、ユビオサエが施され、粘土紐輪積痕がみられる。外面はヨコナデとナデが施される。年代の詳細は不明だが、12世紀後半のものと考えられる。

388は土錘で、残存長が7.8㎝、最大径が4.9㎝で、孔径1.5㎝、重さが149.3ｇである。孔内に棒などを抜いたときについた擦痕がみられ、外面にナデとユビオサエが施されている。

D-SP189（第97図、図版41）

389は灰釉陶器の深椀である。高台の貼付高台で内外にユビナデを施す。断面は丸く収まる。内外面ともにロクロナデが施され、底部に回転糸切痕がみられる。H-72号窯式で、年代は10世紀後半から11世紀初めのものと考えられる。

表土（第98図、図版41）

390は陶器の縁釉小皿である。口縁はやや外反しており、端部は丸く収まる。内外面ともにロクロナデが施され、底部に回転糸切痕がみられる。内面に摩耗がみられる。内外面ともに鉄釉が漬け掛けされる。古瀬戸後期様式Ⅳ期新で、年代は15世紀後半のものと考えられる。

391は土師器の鍋の把手である。内面はナデが施される。外面はユビナデやユビオサエが施される。

392は土師器の無台杯である。口縁端部は丸く収まる。体部は真っ直ぐ立ち上がる。内外面ともにロクロナデが施され、外面底部に回転糸切痕がみられる。

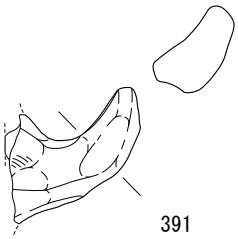
包含層（第98図、図版41）

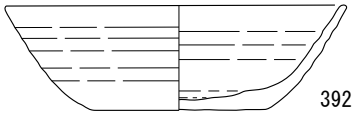
393は須恵器の杯蓋である。口縁端部は丸く収まり、かえしがみられる。内面はロクロナデが施され、外面は体部にケズリ、体部から口縁部にロクロナデが施される。Ｉ-17号窯式で、年代は７世紀のものと考えられる。

394～397は陶器である。394は袴腰形香炉である。口縁は外反しており、端部は丸く収まる。体部は丸く立ち上がる。脚部は一脚のみ残っている。内外面ともにロクロナデが施される。脚部から底部にかけてユビナデが施され、底部に回転糸切痕がみられる。外面に灰釉が施釉され、内面に釉だれがみられる。古瀬戸後期様Ⅱ期で、年代は14世紀のものと考えられる。395・396は広口壺である。395の口縁は直立しており、端部は帯を呈する。内外面ともにヨコナデが施され、鉄釉が施釉される。内面にユビオサエが施され、粘土紐輪積痕がみられる。外面に印花文を施す。内面口縁部に一部露胎がみられる。古瀬戸中期様式Ⅲ期である。396の口縁は外反しており、端部は玉縁状に収める。頸部は直立している。内外面ともにヨコナデが施される。常滑６a型式で、年代は13世紀中頃のものと考えられる。397は羽釜である。鍔はやや下がっている。内外面ともにヨコナデが施される。年代は12世紀後半のものと考えられる。

表土

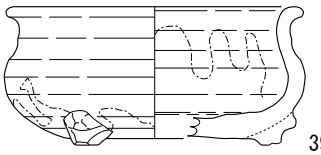
390

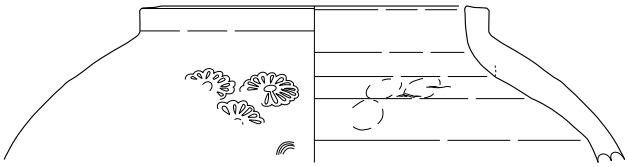

391


392

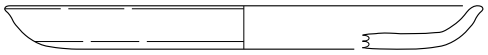
包含層

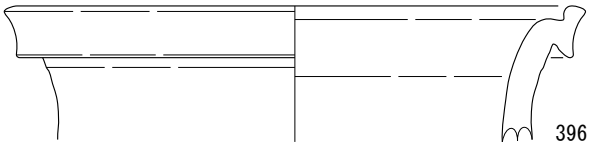
393

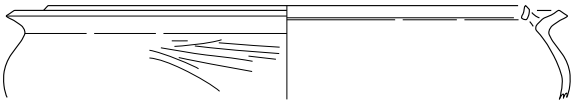

394

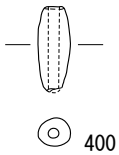

395

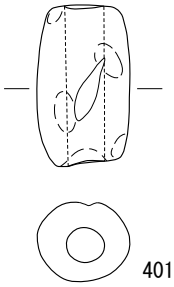
397

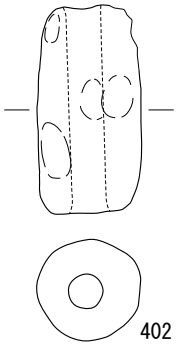

398


396

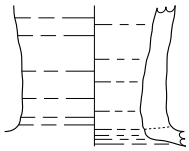

399

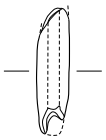

400


401

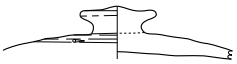

402

検出


403


404

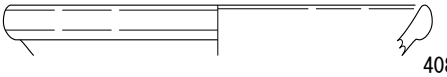
排水溝


405

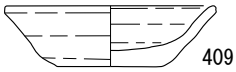
406

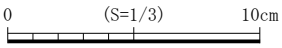
島畑部分

407


408

壁面


409



第98図　Ｄ区　遺構外出土遺物実測図

398・399は土師器である。398は皿である。口縁はやや外反しており、端部は丸く収まる。内外面の口縁部から体部にかけてヨコナデが、底部にナデが施される。399は羽釜である。口縁端部は丸く収まる。穿孔がみられる。内面はナデが施される。外面は口縁部から鍔にかけてナデ、体部にナナメとヨコのハケが施される。年代の詳細は不明だが、14世紀後半から15世紀のものと考えられる。

400～402は土錘である。400は残存長が3.4㎝、最大径が1.3㎝で、孔径が0.4㎝、重さが4.6ｇである。孔内に棒などを抜いたときについた擦痕がみられ､外面はナデが施され､被熱がみられる。401は長さが6.4㎝、最大径が3.7㎝で、孔径が1.5㎝、重さが80.9ｇである。孔内に棒などを抜いたときについた擦痕がみられ、外面はナデとユビオサエが施され、摩耗がみられる。402は長さが8.3㎝、最大径が4.1㎝で、孔径が1.4㎝、重さが140.7ｇである。孔内に棒などを抜いたときについた擦痕がみられ、外面はナデとユビオサエが施される。

検出（第98図、図版41）

403は須恵器の長頸瓶である。頸部は直立する。頸部と胴部に接合痕がみられる。内外面ともにロクロナデが施され、降灰がみられる。O-10号窯式で、年代は８世紀後半のものと考えられる。

404は土錘である。残存長が5.0㎝、最大径が1.3㎝で、孔径が0.5㎝、重さが7.1ｇである。孔内に棒などを抜いたときについた擦痕がみられ、外面はナデが施され、摩耗がみられる。

排水溝（第98図、図版41）

405は須恵器の杯蓋である。内面はロクロナデが施される。外面は摘み部分から体部にかけてロクロナデ、体部はケズリが施される。Ｉ-25号窯式で、年代は８世紀前半のものと考えられる。

406は陶器の縁釉小皿である。口縁はやや外反しており、端部は丸く収まる。内外面ともにロクロナデが施され、外面底部は回転糸切痕がみられる。内外面ともに口縁部に灰釉が漬け掛けされる。古瀬戸後期様式Ⅳ期新で、年代は15世紀後半のものと考えられる。

島畑部分（第98図、図版42）

407は須恵器の平瓶である。体部は真っ直ぐ立ち上がる。高台は貼付高台で内外にユビナデを施される。断面形状が方形で、外面体部はケズリが施される。年代の詳細は不明だが、８世紀頃だと思われる。

408は白磁の碗である。口縁が外側に折り返されている。内外面ともにロクロナデが施され、透明釉が施釉される。年代は11世紀後半から12世紀前半のものと考えられる。

壁面（第98図、図版42）

409は山茶碗の小皿である。口縁はやや外反し、端部は丸く収まる。体部は直線的に立ち上がる。内外面ともに口縁部から体部にかけてロクロナデが施される。内面底部にユビナデが施され、外面底部に回転糸切痕がみられる。胎土に約２～３㎜の小石を含む。尾張型第５型式で、年代は12世紀後半から13世紀前半のものと考えられる。

２．Ｄ区の遺物（第２遺構面）

D-SD251（第99図、図版42）

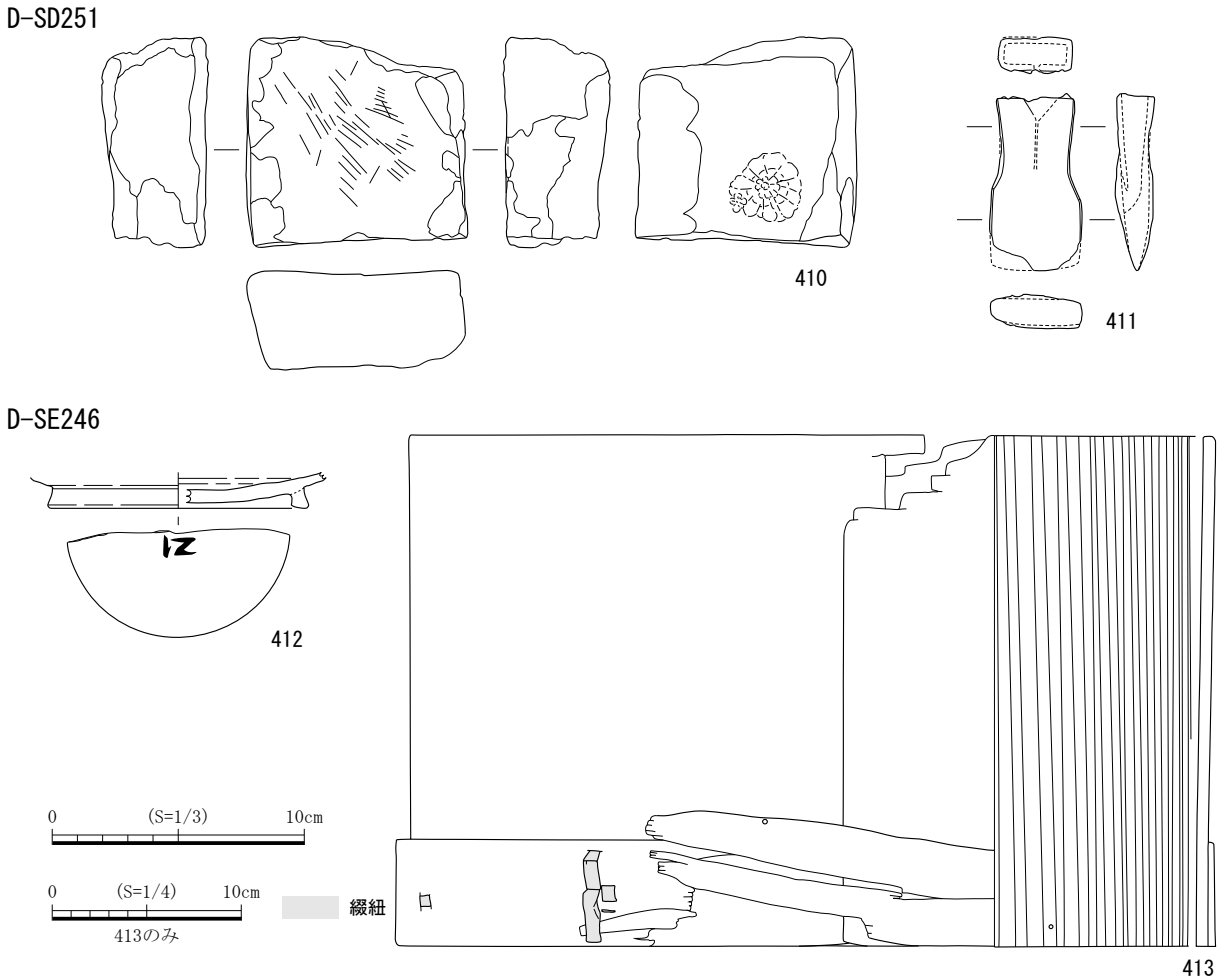
410は砥石である。断面方形で上下端部は欠損している。３面を砥石として使用している。

411は金属製品の手斧で、長さ7.0cm、上端部幅2.9cm、下端部幅3.7cmである。刃先が一部残存している。

D-SE246（第99図、図版42）

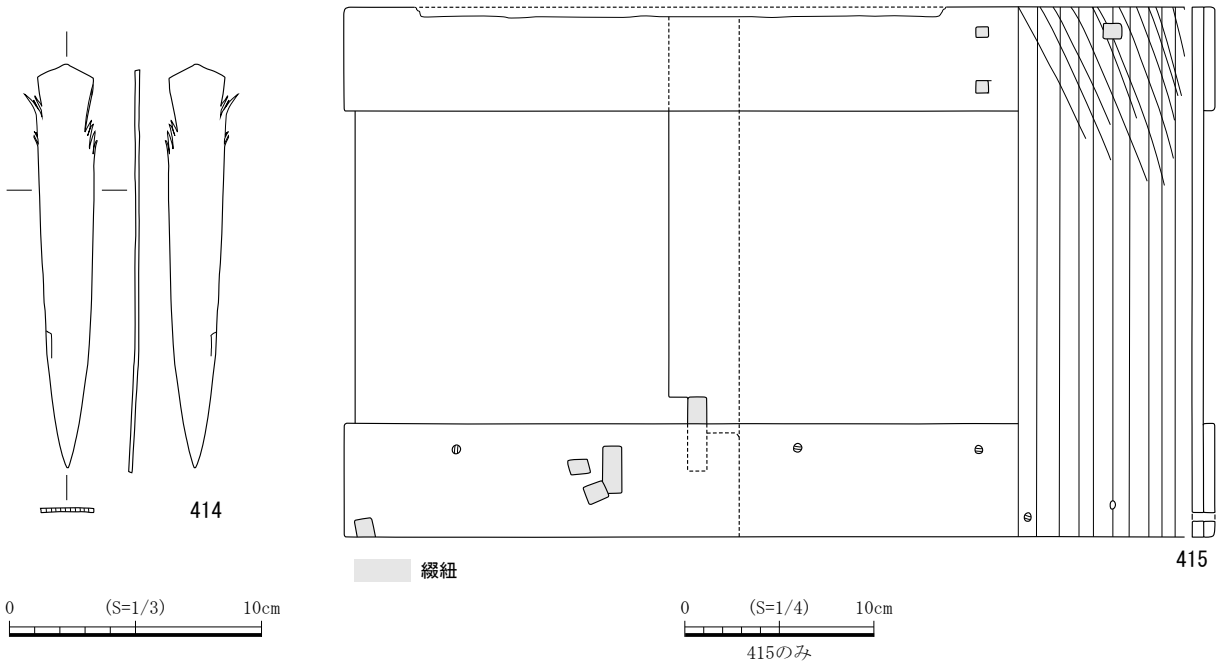
412は須恵器の有台杯である。高台は貼付高台で内外にユビナデを施す。断面形状は方形である。外面底部に「江」の墨書がみられる。内外面ともにロクロナデが施され、底部にケズリが施される。C－２号窯式で、年代は８世紀前半のものと考えられる。

413は木製品の曲物側板で、直径42.2cm、高さ27.0cmである。内面に縦平行線のケビキ痕が残存する。下位には直径43.4cm、幅5.6cmの箍（たが）があり、0.7cm幅の綴紐が残る。また、直径0.2cmの釘孔が残る。側板の木取りは追柾目、箍（たが）は板目である。



第99図　D-SD251、SE246遺物実測図

D-SE247



第100図　D-SE247遺物実測図

D-SE247（第100図、図版42）

414・415は木製品である。414は斎串で、長さ16cmである。木取りは柾目である。下端部は両側から削られ剣先状を呈し、上部側面左右に切れ込みが入り、上端部は圭頭状を呈する。９世紀前半のものと考えられる。415は曲物側板で、直径44.9cm、高さ28.0cmである。内面に縦平行線と斜平行線のケビキ痕が残存する。上下に箍（たが）があり、いずれも直径46.1cmで、幅は上が5.5cm下が6.0cmである。下位に直径0.5cmの釘孔が６ヶ所みられ、そのうち４ヶ所に木釘が残る。また、側板と箍（たが）に0.7～1.0cm幅の綴紐が残る。木取りは側板、箍（たが）ともに板目である。

D-SK204（第101図、図版43）

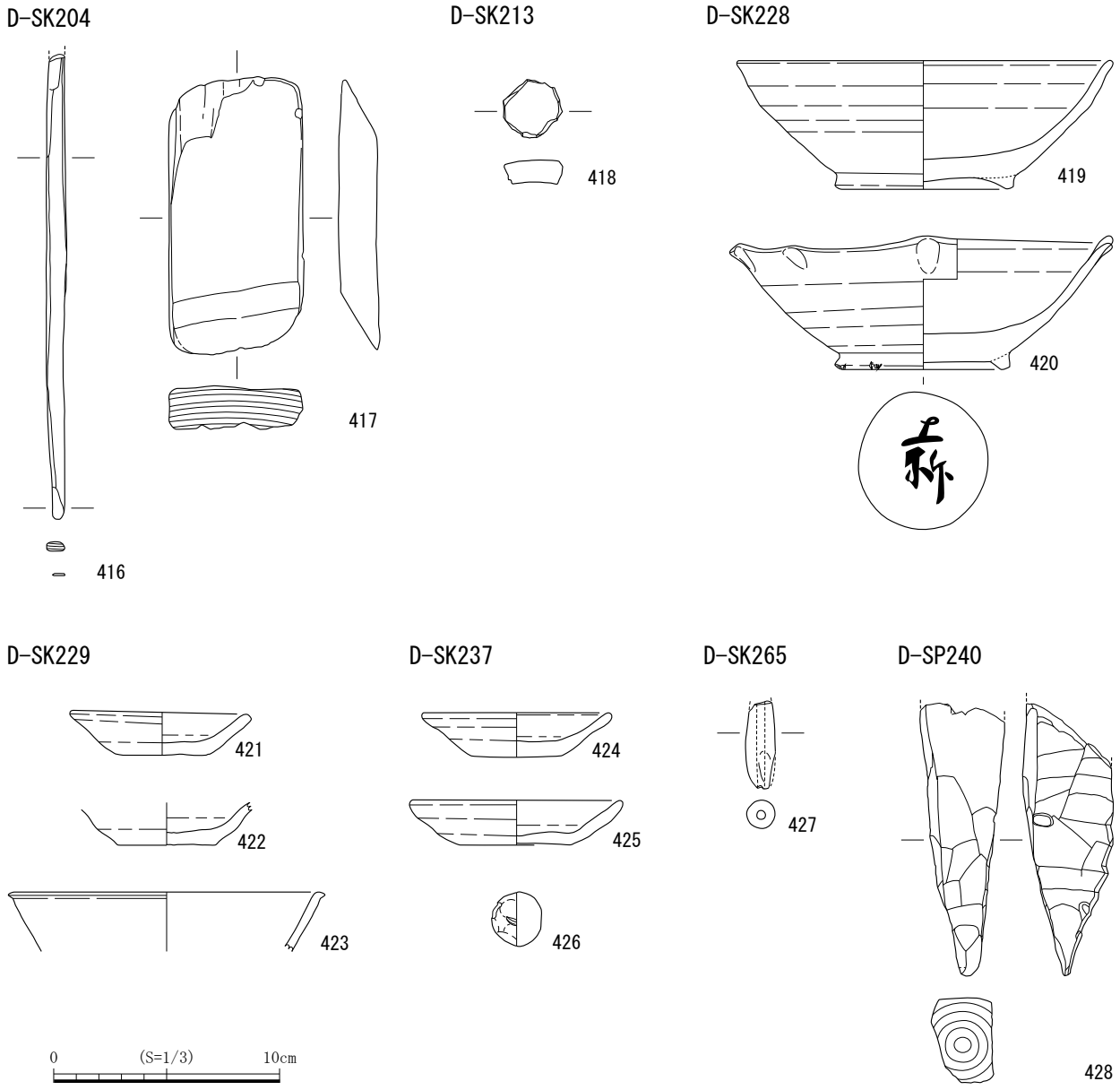
416・417は木製品である。416は串状木製品で、残存長は20.6cmである。木取りは柾目である。側面は下端部から上端部にむかってケズリが施される。下端部はやや細く薄く成形されている。417はくさびである。長さ12.1cm幅5.9cmである。木取りは板目である。裏面は割取られ、摩耗している。両端がナナメにケズリが施される。側面はケズリが施される。

D-SK213（第101図、図版43）

418は陶器の加工円板である。長さが2.6cm、幅が2.6cm、厚さが1.0cmで、重さが3.5ｇである。表裏面にナデ、側面に打ち欠きが施される。

D-SK228（第101図、図版43）

419・420は山茶碗である。419は碗である。口縁はやや外反しており、端部は丸く収まる。体部は直線的に立ち上がり、体部上位で緩やかに屈曲する。高台は貼付高台で、内外にユビナデを施す。端部は削られ面取りされる。籾殻痕はなく、摩耗が著しい。内外面ともにロクロナデが施され、降灰がみられる。底部に回転糸切痕がみられ、ススが付着する。内面底部の摩耗が著しい。尾張型第３型式で、年代は11世紀



第101図　D-SK204、SK213、SK228、SK229、SK237、SK265、SP240遺物実測図

後半から12世紀初頭のものと考えられる。420は輪花碗である。口縁は外反しており、端部は丸く収まり、不定位に３ヶ所の輪花が施される。体部は直線的に立ち上がる。高台は貼付高台で端部は削られ面取りされ、籾殻痕がみられる。底部に判読不明な墨書がある。内外面ともにロクロナデが施される。外面は輪花部にユビオサエが施され、底部に回転糸切痕がみられる。体部から底部にかけて鉄分が付着する。内面は底部に重ね焼痕と摩耗がみられる。尾張型第４型式で、年代は12世紀のものと考えられる。

D-SK229（第101図、図版43）

421・422は山茶碗の小皿である。421の口縁端部は丸く収まり、体部は直線的に立ち上がる。内外面にロクロナデが施される。内面底部には指圧痕が施され、外面底部に回転糸切痕がみられる。口縁端部に降灰がみられ、内面は摩耗がしている。尾張型第５型式で、年代は12世紀後半から13世紀前半のものと考えられる。422の体部は直線的に立ち上がる。外面底部に回転糸切痕と板目状圧痕がみられる。内外面とも

にロクロナデが施され、内面底部には指圧痕がみられる。尾張型第５型式で、年代は12世紀後半から13世紀前半のものと考えられる。

423は白磁の碗である。体部はやや丸みを帯びて立ち上がり、口縁端部は外につまみだされる。内外面にロクロナデが施され、透明釉が施釉される。年代は12世紀中頃から12世紀後半のものと考えられる。

D-SK237（第101図、図版43）

424は山茶碗の小皿である。口縁端部は丸く収まり、体部は直線的に立ち上がる。内外面ともにロクロナデが施される。内面底部にユビナデが施され、重ね焼痕がみられる。内面底部は摩耗している。外面底部には回転糸切り後ナデと板目状圧痕がわずかにみられる。底部外縁に擦れた痕がみられることから、内面同様に摩耗していると思われる。胎土に約１～２㎜の小石が含まれる。尾張型第５型式で、年代は12世紀後半から13世紀前半のものと考えられる。

425は土師器の小皿である。口径9.2㎝、器高2.0㎝である。口縁端部は丸く収まる。体部は直線的に立ち上がり、口縁付近でやや丸みを帯びる。内外面にロクロナデが施され、ススが付着する。外面底部に回転糸切痕がみられる。

426は陶器の陶丸である。ナデとユビオサエが施され、籾殻痕がみられる。

D-SK265（第101図、図版43）

427は土錘である。残存長が3.9㎝、最大径が1.3㎝で、孔径が0.4㎝、重さが5.3ｇである。胎土に約３㎜の小石含む。孔内に棒などを抜いたときについた擦痕がみられ、外面にナデとユビオサエが施される。

D-SP240（第101図、図版43）

428は木製品の杭で、残存長は16.1㎝である。木取りは芯持ち材である。下端部にむかって尖るようにケズリが施される。

第１表　遺物観察表

図版番号	掲載番号	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	遺構	種別	器種	法量（cm）（ ）は推定、［ ］は残存			土器型式・年代	調整・技法等		胎土	焼成	色調	釉薬	備考
						口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ		外面	内面					
62	1		A-SD31	陶器	広口壷	－	－	［4.0］	12～13世紀	ヘラナデ ナデ 不調整	降灰により不明瞭	密	良	7.5YR3/3 暗褐	－	常滑産
62	2		A-SD31	陶器	加工円板	2.5	2.9	1.0	－	ナデ	－	密	良	N7/ 灰白	－	重さ:8.7ｇ 降灰あり
62	3		A-SE35	灰釉陶器	椀	(14.3)	(7.2)	3.9	O-53～H-72号窯式	ロクロナデ 貼付高台 施釉	ロクロナデ 施釉	密	良	釉薬: 5Y8/1 灰白 胎土: 5Y7/1 灰白	灰釉	
62	4		A-SE35	灰釉陶器	椀	(14.6)	－	［3.4］	O-53号窯式	ロクロナデ 施釉	ロクロナデ 施釉	密	良	釉薬: 7.5Y7/1 灰白 胎土: 7.5Y8/1 灰白	灰釉	
62	5		A-SE35	木製品	曲物側板	直径 48.0	箍直径 (48.8)	［24.0］ /0.3 ～ 0.6	－	釘孔(12ヶ所) 木釘入り (4ヶ所) 綴紐	ケビキ痕	－	－	－	－	木取り:板目 樹種:ヒノキ 木釘径:0.5cm/ 長さ:2.5cm
63	6		A-SK10	山茶碗	碗	－	(8.2)	［2.3］	尾張型 第5型式	ロクロナデ ユビナデ 籾殻痕 貼付高台	ロクロナデ	密	良	N8/ 灰白	－	降灰あり 摩耗あり
63	7		A-SK14	山茶碗	小皿	7.9	4.3	2.2	尾張型 第5型式	ロクロナデ 回転糸切痕 板目状圧痕	ロクロナデ 指圧痕	密	良	N8/ 灰白	－	降灰あり
63	8		A-SK14	山茶碗	小皿	(8.8)	(4.5)	［2.1］	尾張型 第5型式	ロクロナデ 回転糸切痕	ロクロナデ	密	良	N8/ 灰白	－	径5mm程の小石を含む 降灰あり
63	9		A-SK14	山茶碗	碗	(15.0)	－	［3.1］	尾張型 第4･5型式	ロクロナデ	ロクロナデ	密	良	N7/ 灰白	－	径5mm程の小石を含む
63	10		A-SK14	山茶碗	碗	(14.8)	－	［3.7］	尾張型 第4型式	ロクロナデ	ロクロナデ	密	良	N8/ 灰白	－	
63	11		A-SK14	山茶碗	碗	－	6.3	［2.9］	尾張型 第5型式	ロクロナデ ユビナデ 籾殻痕 回転糸切痕 貼付高台	ロクロナデ	密	良	5Y7/1 灰白	－	径3mm程の小石を含む 降灰あり
63	12		A-SK14	土師器	伊勢型鍋	(24.0)	－	［8.2］	12～13世紀か	ナデ ユビオサエ	ナデ ユビオサエ 粘土紐輪積痕 接合痕	密	良	外面: 10YR8/1 灰白 内面:10YR7/2 にぶい黄橙	－	径3mm程の小石を含む スス付着
63	13		A-SK14	山茶碗	加工円板	3.0	2.6	1.0	－	ユビナデ 高台剝離	ロクロナデ	密	良	7.5Y7/1 灰白	－	重さ:9.2ｇ
63	14		A-SK14	山茶碗	加工円板	2.9	2.7	1.5	尾張型 第5･6型式	ロクロナデ ユビナデ 貼付高台	ロクロナデ	密	良	N7/ 灰白	－	重さ:9.4ｇ
63	15		A-SK14	木製品	加工板	［13.2］	［6.1］	0.8	－	ケズリ	－	－	－	－	－	木取り:板目 樹種:ヒノキ 全体的に風化
63	16		A-SK19	灰釉陶器	椀	－	(6.6)	［2.1］	H-72号窯式	ロクロナデ ユビナデ 回転糸切痕 貼付高台 施釉	ロクロナデ 重ね焼痕 施釉	密	良	釉薬: N8/ 灰白 胎土: 5Y8/1 灰白	灰釉	摩耗あり
63	17		A-SK19	灰釉陶器	椀	－	(8.0)	［2.9］	H-72号窯式	ロクロナデ ユビナデ 回転糸切痕 貼付高台	ロクロナデ	密	良	5Y7/1 灰白	－	付着物あり 降灰あり
63	18		A-SK19	灰釉陶器	輪花椀	(16.3)	7.3	5.7	百代寺窯式か	ロクロナデ ユビナデ ユビオサエ 回転糸切痕 貼付高台	ロクロナデ	密	良	5YR7/4 にぶい橙	－	輪花1ヶ所残存
63	19		A-SK19	山茶碗	碗	－	(7.0)	［3.9］	尾張型 第3型式	ロクロナデ ユビナデ 回転糸切痕 貼付高台	ロクロナデ	密	良	N7/ 灰白	－	使用痕あり スス付着
63	20		A-SK19	山茶碗	碗	(16.8)	(7.5)	5.8	尾張型 第3型式	ロクロナデ ユビナデ 回転糸切後 ナデ 貼付高台	ロクロナデ 重ね焼痕	密	良	2.5Y8/1 灰白	－	降灰あり 摩耗あり
63	21		A-SK19	土師器	椀	(15.7)	(6.8)	4.1	12世紀末か	ロクロナデ 回転糸切痕	ロクロナデ	密	不良	5Y7/1 灰白	－	
63	22		A-SK19	灰釉陶器	加工円板	3.0	2.7	1.5	O-53号窯式	ユビナデ 貼付高台	ロクロナデ	密	良	7.5Y7/1 灰白	－	重さ:9.7ｇ
63	23		A-SK19	土師器	不明	［6.8］	［4.4］	［1.4］	－	ナデ 接合痕	ユビオサエ 接合痕	密	良	10YR5/2 灰黄褐	－	用途不明

図版番号	掲載番号	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	遺構	種別	器種	法量（cm）（ ）は推定、[ ]は残存			土器型式・年代	調整・技法等		胎土	焼成	色調	釉薬	備考
						口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ		外面	内面					
63	24		A-SK20	灰釉陶器	椀	-	(7.5)	[3.3]	0-53号窯式	ロクロナデ ユビナデ 回転糸切痕 貼付高台 施釉	ロクロナデ 重ね焼痕	密	良	釉薬: N8/ 灰白 胎土: 5Y7/1 灰白	灰釉	降灰あり 摩耗あり
64	25		A-SK33	灰釉陶器	椀	(14.0)	-	[3.4]	0-53～H-72号窯式	ロクロナデ	ロクロナデ	密	良	2.5Y7/1 灰白	-	被熱による変色あり 降灰あり
図版27	26		A-SK33	灰釉陶器	鉢	-	-	2.6	-	ロクロナデ 施釉	ロクロナデ 施釉	密	良	釉薬: 5Y8/1 灰白 胎土: N8/ 灰白	灰釉	写真のみ掲載
64	27		A-SK33	山茶碗	碗	(15.0)	-	[3.2]	尾張型 第4･5型式	ロクロナデ	ロクロナデ	密	良	10YR5/1 褐灰	-	降灰あり
64	28		A-SK33	山茶碗	碗	(16.4)	-	[3.2]	尾張型 第4･5型式	ロクロナデ	ロクロナデ	密	良	5Y7/1 灰白	-	降灰あり
64	29		A-SK33	山茶碗	碗	(16.4)	-	[2.9]	尾張型 第4･5型式	ロクロナデ	ロクロナデ	密	良	N7/ 灰白	-	降灰あり
64	30		A-SK33	山茶碗	碗	(17.0)	(8.0)	6.2	尾張型 第5型式	ロクロナデ ユビナデ 籾殻痕 回転糸切痕 貼付高台	ロクロナデ	密	良	N7/ 灰白	-	降灰あり 使用による摩耗あり
64	31		A-SK34	土師器	清郷型鍋	(21.4)	-	[6.6]	10世紀か	ヨコナデ ナデ 粘土紐輪積痕	ヨコナデ 板ナデ	密	良	7.5YR5/6 明褐	-	径5mm程の小石含む スス付着
64	32		A-SK34	土師器	清郷型鍋	-	-	[7.5]	10世紀か	ナデ ヨコナデ ユビオサエ	ヨコナデ 板ナデ	粗	良	10YR5/2 灰黄褐	-	径5mm程の小石を多く含む スス付着
64	33		A-SK34	土師器	鍋	(23.8)	-	[2.6]	12世紀以前	ヨコナデ	ヨコナデ	密	良	10YR6/3 にぶい黄橙	-	スス付着
64	34		A-SK34	灰釉陶器	椀	(15.8)	-	[3.5]	百代寺窯式	ロクロナデ	ロクロナデ	密	良	7.5Y7/1 灰白	-	
64	35		A-SK34	山茶碗	碗	(15.0)	-	[5.0]	尾張型 第4･5型式	ロクロナデ	ロクロナデ	密	良	10YR7/1 灰白	-	降灰あり
64	36		A-SK34	灰釉陶器	椀	-	8.0	[2.8]	尾張型 第3型式	ロクロナデ ユビナデ ナデ 回転糸切痕 貼付高台	ロクロナデ ナデ ユビオサエ	密	良	N7/ 灰白	-	降灰あり スス付着 摩耗あり
64	37		A-SK34	山茶碗	碗	-	8.3	[3.9]	尾張型 第3型式	ロクロナデ ユビナデ 回転糸切後 ナデ 貼付高台	ロクロナデ	密	良	N7/ 灰白	-	降灰あり 炭化物付着
64	38		A-SK34	灰釉陶器か山茶碗	碗	-	(8.0)	[3.0]	11世紀後半～12世紀初頭か	ロクロナデ ユビナデ 回転糸切後 ナデ 貼付高台	ロクロナデ	密	良	N8/ 灰白	-	スス付着 摩耗あり
64	39		A-SK41	山茶碗	碗	(9.4)	-	[2.4]	東濃型 生田2号窯式	ロクロナデ 糸切痕	ロクロナデ	密	良	N7/ 灰白	-	
64	40		A-SK41	山茶碗	碗	-	(6.0)	[1.9]	東濃型 谷迫間 2号窯式	ロクロナデ ユビナデ 籾殻痕 回転糸切痕 貼付高台	ロクロナデ	密	良	5Y8/1 灰白	-	
64	41		A-SK41	土師器	小皿	(10.0)	(5.4)	[2.1]	-	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	密	良	10YR7/3 にぶい黄橙	-	
65	42		A-SK42	山茶碗	小碗	10.0	4.7	3.2	尾張型 第4型式 前半頃	ロクロナデ 回転糸切痕 籾殻痕 貼付高台	ロクロナデ	密	良	N8/ 灰白	-	降灰あり 摩耗あり
65	43		A-SK43	山茶碗	碗	-	7.0	[2.8]	尾張型 第5型式	ロクロナデ ユビナデ 籾殻痕 回転糸切痕 貼付高台	ロクロナデ	密	良	5Y7/1 灰白	-	降灰あり スス付着 使用痕あり
65	44		A-SK43	山茶碗	碗	-	(7.0)	[4.2]	尾張型 第5型式	ロクロナデ ユビナデ 籾殻痕 回転糸切痕 貼付高台	ロクロナデ ユビナデ 重ね焼痕	密	良	N7/ 灰白	-	降灰あり
65	45		A-SK43	山茶碗	碗	(15.0)	-	[5.0]	尾張型 第4型式	ロクロナデ	ロクロナデ	密	良	N8/ 灰白	-	降灰あり

図版番号	掲載番号	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	遺構	種別	器種	法量（cm）（ ）は推定、［ ］は残存			土器型式・年代	調整・技法等		胎土	焼成	色調	釉薬	備考
						口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ		外面	内面					
65	46		A-SK43	山茶碗	硯	5.0	-	［1.5］	尾張型第5型式	ロクロナデ ユビナデ 回転糸切痕 貼付高台	ロクロナデ	密	良	N7/ 灰白	-	墨痕あり 摩耗あり
65	47		A-SU29	陶器	片口鉢	-	(13.6)	［5.5］	尾張型第3型式	ロクロナデ ユビナデ ケズリ 不調整 貼付高台	ロクロナデ	密	良	5Y7/1 灰白	-	片口鉢Ⅰ類 常滑産 使用痕あり 摩耗あり 降灰あり
65	48		A-SU30	山茶碗	碗	-	(7.0)	［2.4］	尾張型第5型式	ロクロナデ ユビナデ 籾殻痕 回転糸切痕 貼付高台	ロクロナデ	密	良	5Y7/1 灰白	-	
図版27	49	B57	包含層Ⅳ層	陶器	擂鉢	-	-	［3.3］		ロクロナデ 施釉	擂目 施釉	密	良	釉薬: 7.5YR4/4 褐 胎土: 2.5Y8/2 灰白	錆釉	写真のみ掲載
図版27	50	B57	包含層Ⅳ層	磁器	碗	-	-	［3.8］		ロクロナデ 呉須絵 施釉	ロクロナデ 呉須絵 施釉	密	良	釉薬:8/ 灰白 胎土:9/ 白	透明	写真のみ掲載
66	51	B58	包含層Ⅴ層	須恵器	瓶	-	(7.2)	［16.7］	0-10号窯式	ロクロナデ 貼付高台	ロクロナデ ナデ 接合痕	密	良	外面:2.5Y5/2 暗灰黄 内面: 2.5Y5/1 黄灰	-	降灰あり
66	52	G51	包含層Ⅴ層	陶器	擂鉢	-	-	［4.9］	12～13世紀	タタキ ナデ 粘土紐輪積痕	ナデ	密	良	5Y7/1 灰白	-	降灰あり
図版27	53	A53 B53	包含層Ⅴ層	磁器	碗	-	-	［3.0］	-	ロクロナデ ケズリ 施釉	ロクロナデ 施釉	密	良	釉薬:8/ 灰白 胎土:9/ 白	透明	写真のみ掲載
66	54	F48	包含層Ⅴ層	陶器	加工円板	3.5	3.1	0.8	戦国末期	施釉	施釉	密	良	釉薬:5YR3/4 暗赤褐 胎土: 7.5Y7/1 灰白	鉄釉	重さ:12.0ｇ
66	55	D58	包含層Ⅴ層	石製品	碁石	2.3	2.1	1.1	-	-	-	-	-	-	-	重さ:8.2ｇ
67	56		B-SD17	陶器	片口鉢	-	(13.4)	［4.4］	尾張型第5型式	ユビナデ ナデ ケズリ 貼付高台	ロクロナデ 粘土紐輪積痕	密	良	2.5Y7/1 灰白	-	片口鉢Ⅰ類 常滑産 降灰あり 使用による摩耗あり
図版28	57		B-SD17	青磁	碗	-	-	［1.4］	-	ケズリ 施釉	刻劃文 施釉	密	良	釉薬:5Y6/2 灰オリーブ 胎土:8/ 灰白	青磁	写真のみ掲載
67	58		B-SD33	須恵器	甕	(16.4)	-	［3.9］	-	ヨコナデ タタキ	ヨコナデ	密	良	N7/ 灰白	-	
67	59		B-SD33	山茶碗	小皿	7.7	4.2	1.9	尾張型第5型式	ロクロナデ 回転糸切痕	ロクロナデ	密	良	N7/ 灰白	-	降灰あり
67	60		B-SE24	灰釉陶器	椀	-	(6.4)	［1.9］	0-53号窯式	ロクロナデ ユビナデ ヘラ切り 貼付高台	ロクロナデ	密	良	N8/ 灰白	-	降灰あり 使用痕あり
67	61		B-SE24	灰釉陶器	椀	-	6.9	［2.7］	百代寺窯式	ロクロナデ ユビナデ 回転糸切痕 貼付高台	ロクロナデ	密	良	2.5Y7/1 灰白	-	降灰あり
67	62		B-SE24	山茶碗	小皿	8.1	5.2	2.0	尾張型第6型式	ロクロナデ 糸切後ナデ 板目状圧痕 底部墨書	ロクロナデ ユビナデ	密	良	N8/ 灰白	-	径5㎜程の小石を含む 降灰あり
67	63		B-SE24	山茶碗	小皿	(7.9)	5.3	1.6	尾張型第6型式	ロクロナデ 回転糸切痕	ロクロナデ	密	良	2.5Y7/1 灰白	-	径3㎜程の小石を含む 降灰あり
67	64		B-SE24	山茶碗	小皿	(8.8)	(5.8)	1.8	尾張型第7型式	ロクロナデ 回転糸切痕 板目状圧痕	ロクロナデ ユビナデ	密	良	2.5Y7/1 灰白	-	径5㎜程の小石を含む 降灰あり
67	65		B-SE24	山茶碗	碗	-	(5.6)	［1.8］	尾張型第6型式	ロクロナデ ユビナデ 籾殻痕 板目状圧痕 貼付高台	ロクロナデ ユビナデ	密	良	N8/ 灰白	-	
67	66		B-SE24	山茶碗	碗	(14.5)	-	［4.1］	尾張型第6型式	ロクロナデ	ロクロナデ	やや粗	良	N8/ 灰白	-	径3㎜程の小石を多く含む
67	67		B-SE24	山茶碗	碗	14.9	6.4	5.2	尾張型第6型式	ロクロナデ ユビナデ 籾殻痕 回転糸切痕 貼付高台	ロクロナデ	密	良	2.5Y7/1 灰白	-	径3㎜程の小石を含む 降灰あり

図版番号	掲載番号	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	遺構	種別	器種	法量（cm）（ ）は推定、［ ］は残存			土器型式・年代	調整・技法等		胎土	焼成	色調	釉薬	備考
						口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ		外面	内面					
67	68		B-SE24	山茶碗	碗	(14.0)	-	[3.6]	東濃型窯洞1号窯式	ロクロナデ	ロクロナデ	密	良	2.5Y7/1 灰白	-	
67	69		B-SE24	山茶碗	加工円板	2.3	2.3	1.4		ユビナデ 籾殻痕 貼付高台	ロクロナデ	密	良	N7/ 灰白	-	重さ:7.7g 摩耗あり
67	70		B-SE24	山茶碗	加工円板	3.1	3.0	1.6		ユビナデ 籾殻痕 貼付高台	ロクロナデ	密	良	5Y7/1 灰白	-	重さ:14.9g 摩耗あり
67	71		B-SK25	山茶碗	碗	-	6.7	[3.3]	尾張型第5型式	ロクロナデ ユビナデ 籾殻痕 回転糸切痕 貼付高台	ロクロナデ	密	良	5Y7/1 灰白	-	
68	72		B-SX21	山茶碗	碗	-	(9.0)	[2.4]	尾張型第3型式	ロクロナデ ユビナデ 回転糸切痕 貼付高台	ロクロナデ	密	良	5Y7/1 灰白	-	降灰あり スス付着 使用による摩耗あり
68	73		B-SX21	山茶碗	加工円板	5.3	4.9	1.1	尾張型第5型式	ロクロナデ	ロクロナデ 回転糸切痕	密	良	N7/ 灰白	-	重さ:25.1g
68	74		B-SX31	灰釉陶器	椀	-	(8.0)	[1.8]	0-53号窯式	ロクロナデ ユビナデ 回転糸切痕 貼付高台	ロクロナデ	密	良	N8/ 灰白	-	降灰あり 使用による摩耗あり
68	75		B-SX31	灰釉陶器	椀	-	(6.6)	[2.0]	0-53号窯式	ロクロナデ ユビナデ 貼付高台 施釉	ロクロナデ 施釉	密	良	釉薬:10YR8/1 灰白 胎土:10YR8/2 灰白	灰釉	使用による摩耗あり
68	76		B-SX31	灰釉陶器	椀	-	(7.4)	[2.2]	0-53号窯式	ロクロナデ ユビナデ 貼付高台	ロクロナデ	密	良	N7/ 灰白	-	使用による摩耗あり
68	77		B-SX31	山茶碗	小皿	(7.2)	(3.8)	1.6	尾張型第6型式	ロクロナデ 回転糸切痕	ロクロナデ ユビナデ	密	良	N8/ 灰白	-	
68	78		B-SX31	山茶碗	碗	-	(6.6)	[1.7]	尾張型第6型式	ロクロナデ ユビナデ 籾殻痕 糸切後ナデ 板目状圧痕 貼付高台	ロクロナデ ユビナデ	密	良	2.5Y7/1 灰白	-	径1mm程の小石を含む
68	79		B-SX31	山茶碗	碗	-	(6.7)	[3.1]	尾張型第6型式	ロクロナデ ユビナデ 籾殻痕 回転糸切痕 貼付高台	ロクロナデ ユビナデ 重ね焼痕	密	良	N8/ 灰白	-	径2mm程の小石を含む 降灰あり
68	80		B-SX31	土師器	清郷型鍋	-	-	[3.0]	-	ヨコナデ ナデ ユビオサエ	ヨコナデ 板ナデ	密	良	7.5YR6/4 にぶい橙	-	径8mm程の小石を含む
68	81		B-SX31	陶器	加工円板	2.8	2.6	1.2	-	降灰により不明瞭	ナデ	密	良	表:7.5Y5/3 灰オリーブ 裏:7.5YR4/4 褐	-	重さ:10.5g
69	82		B-SD95	須恵器	有台杯	(16.8)	(10.3)	7.1	0-10号窯式	ロクロナデ 貼付高台	ロクロナデ	密	良	素地:2.5Y7/2 灰黄 釉薬:10YR4/3 にぶい黄褐	-	降灰あり
70	83		B-SE37	山茶碗	小皿	7.8	3.5	1.7	尾張型第5型式	ロクロナデ 回転糸切痕 板目状圧痕	ロクロナデ	密	良	5Y8/1 灰白	-	口縁歪みあり 降灰あり
70	84		B-SE37	山茶碗	小皿	7.8	4.6	2.0	尾張型第5型式	ロクロナデ 回転糸切痕	ロクロナデ	密	良	N8/ 灰白	-	降灰あり
70	85		B-SE37	山茶碗	小皿	8.0	4.0	2.2	尾張型第5型式	ロクロナデ 回転糸切後ナデ	ロクロナデ	密	良	N7/ 灰白	-	降灰あり
70	86		B-SE37	山茶碗	碗	15.7	7.7	4.7	尾張型第5型式	ロクロナデ ユビナデ 籾殻痕 回転糸切痕 貼付高台	ロクロナデ	密	良	N8/ 灰白	-	口縁歪みあり 降灰あり
70	87		B-SE37	山茶碗	碗	16.1	6.8	6.0	尾張型第5型式	ロクロナデ ユビナデ 籾殻痕 回転糸切痕 貼付高台	ロクロナデ ユビナデ	密	良	5Y7/1 灰白	-	径4mm程の小石を含む
70	88		B-SE37	山茶碗	碗	15.2	-	4.7	尾張型第6型式	ロクロナデ 籾殻痕 貼付高台	ロクロナデ	密	良	N8/ 灰白	-	降灰あり
70	89		B-SE37	土師器	伊勢型鍋	(22.8)	-	[2.4]	12世紀頃	ナデ	ナデ 接合痕	密	良	N8/ 灰白	-	スス付着

図版番号	掲載番号	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	遺構	種別	器種	法量（cm）（ ）は推定、［ ］は残存			土器型式・年代	調整・技法等		胎土	焼成	色調	釉薬	備考
						口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ		外面	内面					
71	90		B-SK41	灰釉陶器	椀	－	(5.0)	[2.2]	百代寺窯式か	ロクロナデ ユビナデ 回転糸切後 ナデ 貼付高台 施釉	ロクロナデ 施釉	密	良	釉薬:10YR5/2 灰黄褐 胎土: 2.5Y7/2 灰黄	灰釉	摩耗あり
71	91		B-SK41	山茶碗	碗	－	－	[2.0]	尾張型 第5型式	ロクロナデ 回転糸切痕 貼付高台剥離	ロクロナデ	密	良	N7/ 灰白	－	径3㎜程の小石を含む 降灰あり 使用による摩耗あり
71	92		B-SK44	灰釉陶器	椀	－	(7.4)	[1.4]	H-72号窯式	ユビナデ 回転糸切痕 貼付高台	ロクロナデ	密	良	N8/ 灰白	－	
71	93		B-SK44	山茶碗	小皿	(7.7)	(4.6)	1.6	尾張型 第6型式	ロクロナデ 回転糸切痕	ロクロナデ	密	良	N8/ 灰白	－	降灰あり
71	94		B-SK44	山茶碗	小皿	7.9	5.0	1.9	尾張型 第7型式	ロクロナデ 回転糸切痕	ロクロナデ	密	良	2.5Y7/1 灰白	－	径7㎜程の小石を含む
71	95		B-SK44	陶器	加工円板	3.3	2.8	1.1	－	ナデ	ナデ	密	良	表: 7.5YR4/4 褐 裏:N5/ 灰	－	重さ:14.3ｇ
71	96		B-SK44	瓦	丸瓦	(5.0)	(9.8)	2.6	－	ケズリ	ケズリ ヨコナデ ナデ 布目痕 コビキ痕	密	良	N7/ 灰白	－	降灰あり
71	97		B-SK45	山茶碗	碗	－	(7.6)	[2.4]	尾張型 第5型式	ロクロナデ ユビナデ 籾殻痕 回転糸切痕 貼付高台	ロクロナデ ユビナデ	密	良	N8/ 灰白	－	径8㎜程の小石を含む
71	98		B-SK78	土師器	甕	(18.5)	－	[3.6]	－	ナデ ユビオサエ ナナメハケ	ナデ ヨコハケ	密	良	5YR6/6 橙	－	径1㎜程の小石を多く含む
72	99		B-SK86	山茶碗	小皿	8.2	4.0	2.1	尾張型 第5型式	ロクロナデ 回転糸切痕	ロクロナデ 指圧痕	密	良	10YR7/1 灰白	－	径2㎜程の小石を含む 降灰あり
72	100		B-SK86	山茶碗	小皿	7.4	3.8	2.1	尾張型 第5型式	ロクロナデ 回転糸切痕 板目状圧痕	ロクロナデ 指圧痕	密	良	5Y7/1 灰白	－	
72	101		B-SK86	山茶碗	小皿	(8.0)	(4.1)	1.9	尾張型 第5型式	ロクロナデ 回転糸切後 ナデ 板目状圧痕	ロクロナデ	密	良	N8/ 灰白	－	
72	102		B-SK86	山茶碗	小皿	(7.7)	4.2	2.3	尾張型 第5型式	ロクロナデ 回転糸切痕 板目状圧痕	ロクロナデ	密	良	外面: N8/ 灰白 内面(漆): 7.5YR2/3 極暗褐	－	径7㎜程の小石を含む 漆付着あり
72	103		B-SK86	山茶碗	小皿	7.7	4.0	2.0	尾張型 第5型式	ロクロナデ 回転糸切後 ナデ 重ね焼痕	ロクロナデ	密	良	N7/ 灰白	－	降灰あり
72	104		B-SK86	山茶碗	小皿	7.8	4.1	2.1	尾張型 第5型式	ロクロナデ 回転糸切痕	ロクロナデ	密	良	N7/ 灰白	－	径5㎜程の小石を含む 口縁歪みあり 降灰あり
72	105		B-SK86	山茶碗	小皿	7.3	4.1	2.5	尾張型 第5型式	ロクロナデ 回転糸切痕 底部墨書	ロクロナデ	密	良	N7/ 灰白	－	墨書:上？ 径5㎜程の小石を含む 降灰あり
図版30	106		B-SK86	山茶碗	小皿	－	(5.0)	[2.8]	尾張型 第5型式	ロクロナデ 回転糸切痕	ロクロナデ	密	良	N7/ 灰白	－	漆付着か 写真のみ掲載
72	107		B-SK86	山茶碗	碗	(15.0)	(6.8)	[4.7]	尾張型 第5型式	ロクロナデ 籾殻痕 回転糸切痕 貼付高台	ロクロナデ	密	良	N7/ 灰白	－	
72	108		B-SK86	山茶碗	碗	(15.0)	(6.5)	4.9	尾張型 第5型式	ロクロナデ 籾殻痕 貼付高台	ロクロナデ	密	良	N7/ 灰白	－	降灰あり スス付着 使用による摩耗あり
72	109		B-SK86	山茶碗	碗	15.2	6.4	5.5	尾張型 第5型式	ロクロナデ ユビナデ 籾殻痕 回転糸切痕 貼付高台	ロクロナデ	密	良	5Y7/1 灰白	－	径5㎜程の小石を含む 降灰あり
72	110		B-SK86	山茶碗	碗	(15.9)	(6.3)	5.1	尾張型 第5型式	ロクロナデ 籾殻痕 回転糸切痕 貼付高台	ロクロナデ	密	良	N8/ 灰白	－	降灰あり

図版番号	掲載番号	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	遺構	種別	器種	法量（cm）（ ）は推定、［ ］は残存			土器型式・年代	調整・技法等		胎土	焼成	色調	釉薬	備考
						口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ		外面	内面					
72	111		B-SK86	山茶碗	碗	15.2	6.0	5.7	尾張型第5型式	ロクロナデ ユビナデ 籾殻痕 回転糸切痕 貼付高台	ロクロナデ	密	良	2.5Y7/1 灰白	－	径3mm程の小石を含む
72	112		B-SK86	山茶碗	碗	14.8	6.5	5.8	尾張型第5型式	ロクロナデ ユビナデ 籾殻痕 回転糸切痕 貼付高台	ロクロナデ	密	良	N7/ 灰白	－	降灰あり
72	113		B-SK86	山茶碗	碗	(14.6)	－	[4.4]	尾張型第5型式	ロクロナデ	ロクロナデ	密	良	N7/ 灰白	－	径3mm程の小石を含む
72	114		B-SK86	山茶碗	碗	－	6.3	[4.1]	尾張型第5型式	ロクロナデ ユビナデ 籾殻痕 回転糸切痕 貼付高台	ロクロナデ	密	良	N7/ 灰白	－	スス付着
72	115		B-SK86	山茶碗	碗	－	(7.5)	[1.3]	尾張型第5･6型式	ロクロナデ ユビナデ 籾殻痕 貼付高台	ロクロナデ	密	良	2.5Y7/3 浅黄	－	
72	116		B-SK86	山茶碗	碗	－	6.6	5.0	尾張型第6型式	ロクロナデ ユビナデ 籾殻痕 回転糸切痕 貼付高台	ロクロナデ	密	良	N7/ 灰白	－	降灰あり スス付着
図版30	117		B-SK86	灰釉陶器か山茶碗	碗	(10.4)	－	[2.8]	－	ロクロナデ	ロクロナデ	密	良	7/ 灰白	－	降灰あり 写真のみ掲載
72	118		B-SK86	陶器	広口壺	(19.4)	－	[8.7]	常滑4型式	ナデ ユビオサエ 粘土紐輪積痕	ナデ ユビオサエ 粘土紐輪積痕	密	良	外面: N8/ 灰白 内面: 7.5YR5/3 にぶい褐	－	降灰あり
72	119		B-SK86	陶器	壺	(23.4)	－	[4.0]	常滑5型式	ヨコナデ	ヨコナデ 粘土紐輪積痕	密	良	胎土: 5Y7/1 灰白 外面: 7.5YR4/2 灰褐	－	降灰あり
72	120		B-SK86	陶器	広口瓶	－	(18.0)	[3.4]	12～13世紀か	ナデ ケズリ	ロクロナデ ユビナデ	密	良	7.5Y7/1 灰白	－	
図版30	121		B-SK86	青磁	皿	－	－	[1.0]	12世紀中頃～後半か	ケズリ 施釉	ロクロナデ 画線 点綴文 施釉	密	良	釉薬: 5Y7/2 灰白 胎土:8/ 灰白	青磁	同安窯系 青磁皿Ⅰ類か 写真のみ掲載
72	122		B-SK86	土師器	小皿	9.8	7.2	[1.5]	12～13世紀頃	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	密	良	10YR7/2 にぶい黄橙	－	付着物あり
72	123		B-SK86	陶器	加工円板	2.3	2.5	1.2	－	降灰により不明瞭	ナデ	密	良	N7/ 灰白	－	重さ:8.6ｇ
72	124		B-SK86	陶器	加工円板	2.3	2.6	1.1	－	ナデ	ナデ	やや密	良	表: 2.5Y6/1 黄灰 裏:7.5YR5/2 灰褐	－	重さ:8.6ｇ
72	125		B-SK86	鉄製品	雁股鏃	4.5	3.3	0.9	－			－	－	－	－	重さ:12.0ｇ
72	126		B-SK86	木製品	折敷	(22.2)	(24.9)	0.7	－	穿孔(2ヶ所か)		－	－	－	－	木取り:柾目 樹種:ヒノキ 表裏面摩滅
73	127		B-SK87	山茶碗	小皿	－	(4.4)	[1.5]	尾張型第5型式	ロクロナデ ナデ	ロクロナデ	密	良	2.5Y7/1 灰白	－	降灰あり
73	128		B-SK87	山茶碗	小皿	7.9	3.6	2.3	尾張型第5型式	ロクロナデ 回転糸切痕	ロクロナデ	密	良	5Y7/1 灰白	－	降灰あり
73	129		B-SK87	山茶碗	碗	(14.6)	－	[3.6]	尾張型第4型式	ロクロナデ	ロクロナデ	密	良	N8/ 灰白	－	降灰あり
73	130		B-SK88	土師器	甕	－	－	[2.3]	－	ナナメハケ ナデ	ヨコハケ ナデ	密	良	5YR7/6 橙	－	径2mm程の小石を含む 剥離あり 摩耗あり
73	131		B-SK88	山茶碗	碗	－	(7.2)	[2.5]	尾張型第5型式	ロクロナデ ユビナデ 籾殻痕 回転糸切痕 貼付高台	ロクロナデ	密	良	5Y7/1 灰白	－	径5mm程の小石を含む 降灰あり
73	132		B-SK88	山茶碗	碗	－	(6.2)	[2.3]	東濃型窯洞1号窯式	ロクロナデ ユビナデ 籾殻痕 回転糸切痕 貼付高台	ロクロナデ	密	良	2.5Y7/1 灰白	－	降灰あり

図版番号	掲載番号	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	遺構	種別	器種	法量（cm）（ ）は推定、［ ］は残存			土器型式・年代	調整・技法等		胎土	焼成	色調	釉薬	備考
						口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ		外面	内面					
73	133		B-SK88	陶器	甕	－	－	［4.5］	常滑7型式	ナデ 押印文	ヘラナデ 粘土紐輪積痕	密	良	5Y7/1 灰白	灰釉	押印文:山形文組合せ 降灰あり
73	134		B-SK89	灰釉陶器	椀	－	(6.6)	［2.0］	0-53号窯式	ロクロナデ ナデ 貼付高台 施釉	ロクロナデ 重ね焼痕 施釉	密	良	釉薬: 5Y7/2 灰白 胎土: 5Y8/1 灰白	灰釉	摩耗あり
73	135		B-SK89	山茶碗	小皿	8.0	3.9	2.1	尾張型第6型式	ロクロナデ 回転糸切痕	ロクロナデ	密	良	N7/ 灰白	－	降灰あり
73	136		B-SK89	山茶碗	碗	(12.2)	(5.2)	5.6	尾張型第6型式	ロクロナデ ユビナデ 籾殻痕 回転糸切痕 貼付高台	ロクロナデ	密	良	N7/ 灰白	－	径3㎜程の小石を含む
73	137		B-SK89	土師器	小皿	(10.0)	(8.0)	1.6	－	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	密	良	10YR8/2 灰白	－	スス付着 付着物あり
74	138		B-SK97	山茶碗	碗	－	(6.4)	［2.1］	尾張型第5型式	ロクロナデ ユビナデ 籾殻痕 回転糸切痕 貼付高台	ロクロナデ	密	良	N7/ 灰白	－	径3㎜程の小石を含む
74	139		B-SK98	須恵器	有台椀	－	(8.4)	［2.5］	0-10号窯式	ロクロナデ ユビナデ ケズリ ヘラ切り後 ナデ 貼付高台	ロクロナデ	密	良	N6/ 灰	－	摩耗あり
74	140		B-SK98	山茶碗	碗	－	(7.7)	［3.4］	尾張型第5型式	ロクロナデ ユビナデ 籾殻痕 回転糸切痕 貼付高台	ロクロナデ	密	良	2.5Y7/2 灰黄	－	スス付着
74	141		B-SK104	山茶碗	碗	(14.9)	－	［4.7］	尾張型第5型式	ロクロナデ	ロクロナデ	密	良	N8/ 灰白	－	降灰あり
74	142		B-SK104	山茶碗	碗	－	(7.0)	［3.0］	尾張型第5型式	ロクロナデ ナデ 籾殻痕 貼付高台	ロクロナデ	密	良	N8/ 灰白	－	径2㎜程の小石を含む
75	143		B-SP10	山茶碗	碗	(15.0)	6.3	5.5	尾張型第5型式	ロクロナデ ユビナデ 籾殻痕 回転糸切後 ナデ 貼付高台	ロクロナデ	密	良	N7/ 灰白	－	径3㎜程の小石含む 降灰あり スス付着
75	144		B-SP12	土師器	伊勢型鍋	(24.0)	－	［2.0］	12～13世紀か	ナデ	ナデ 接合痕	密	良	7.5YR6/4 にぶい橙	－	径2㎜程の小石を含む 金雲母を微量含む スス付着
75	145		B-SP12	山茶碗	碗	14.0	5.8	5.6	尾張型第5型式	ロクロナデ ユビナデ 籾殻痕 回転糸切痕 板目状圧痕 貼付高台	ロクロナデ	密	良	5Y8/1 灰白	－	径5㎜程の小石を含む 降灰あり
75	146		B-SP12	土製品	土錘	［4.7］	1.2	0.9	－	ナデ	孔内: 調整不明	密	良	10YR7/3 にぶい黄橙	－	孔径:0.3㎝ 重さ:4.7ｇ
75	147		B-SP35	山茶碗	碗	14.8	6.4	5.3	尾張型第6型式	ロクロナデ ユビナデ 籾殻痕 回転糸切後 ナデ 貼付高台	ロクロナデ 指圧痕 籾殻痕 重ね焼痕	密	良	N7/ 灰白	－	径5㎜程の小石を含む
75	148		B-SP63	山茶碗	碗	15.1	7.2	4.9	尾張型第4型式	ロクロナデ ユビナデ 籾殻痕 回転糸切痕 貼付高台 施釉	ロクロナデ 施釉	密	良	釉薬: 5Y8/2 灰白 胎土: 5Y8/1 灰白	灰釉	第5型式に近いか 径5㎜程の小石を含む 玉縁碗
76	149		B-SP77	山茶碗	碗	－	(6.6)	［2.2］	尾張型第6型式	ロクロナデ ユビナデ 籾殻痕 回転糸切痕 貼付高台	ロクロナデ	密	良	N8/ 灰白	－	降灰あり
76	150		B-SP112	須恵器	盤	(13.8)	－	［1.4］	0-10号窯式	ロクロナデ	ロクロナデ	密	良	7.5Y6/1 灰	－	
76	151		B-SP113	山茶碗	小皿	8.4	4.8	1.8	尾張型第6型式	ロクロナデ 回転糸切痕	ロクロナデ ユビナデ	密	良	N7/ 灰白	－	降灰あり

図版番号	掲載番号	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	遺構	種別	器種	法量（cm）（ ）は推定、[ ]は残存			土器型式・年代	調整・技法等		胎土	焼成	色調	釉薬	備考
						口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ		外面	内面					
76	152		B-SZ53	須恵器	高杯	12.1	9.2	9.2	I-17号窯式	ロクロナデ ケズリ	ロクロナデ ケズリ	密	良	N7/ 灰白	－	口縁歪みあり
77	153	M32	壁面 Ⅰ～Ⅱ層	須恵器	壺	(12.4)	－	[3.1]	6世紀頃か	ヨコナデ 波状文	ヨコナデ	密	良	2.5Y6/1 黄灰	－	猿投系か
77	154	P26	包含層 Ⅱb層	須恵器	蓋	7.2	－	2.0	0-10号窯式	ロクロナデ ナデ ケズリ 接合痕	ロクロナデ	密	良	N7/ 灰白	－	摘:宝珠形 摘径:1.6cm 三彩小壺に似た大きさ・形状
77	155	031・032 P31・P32	包含層 Ⅱ層	須恵器	無台杯	17.0	12.1	9.8	C-2号窯式	ロクロナデ ケズリ	ロクロナデ	密	良	2.5Y5/1 黄灰	－	
77	156	O28	検出 Ⅱb層	山茶碗	小皿 (輪花か)	8.0	4.5	1.7	尾張型 第5型式	ロクロナデ 回転糸切後 ナデ	ロクロナデ 指圧痕	密	良	N8/ 灰白	－	輪花3ヶ所か 降灰あり
77	157	P32	包含層 Ⅱ層	山茶碗	碗	(13.7)	(5.6)	4.7	尾張型 第6型式	ロクロナデ ユビナデ 籾殻痕 回転糸切痕 貼付高台	ロクロナデ ユビナデ	密	良	2.5Y8/1 灰白	－	降灰あり
図版31	158	M31 M32	包含層 Ⅱb層	白磁	大皿	(23.0)	－	[2.5]	－	ロクロナデ ケズリ 施釉	ロクロナデ 施釉	密	良	釉薬: 7.5Y8/1 灰白 胎土:9/ 白	透明	写真のみ掲載
図版31	159	N31 N32	包含層 Ⅱ層	青磁	碗	(17.0)	－	[2.4]	－	ロクロナデ ケズリ 施釉	ロクロナデ 施釉	密	良	釉薬:5GY6/1 オリーブ灰 胎土: N7/ 灰白	青磁	写真のみ掲載
77	160	M31 M32	包含層 Ⅱb層	瓦	丸瓦	[5.3]	[5.4]	[6.3]/ 1.6	－	ナデ タタキ(縄目) 側面:ケズリ	布目痕	密	良	2.5Y7/1 灰白	－	面取り:0.9cm
78	161	M27	包含層 Ⅲ層	須恵器	長頸瓶	(7.7)	－	[6.9] + [10.0]	0-10号窯式	ロクロナデ ケズリ	ロクロナデ	密	良	7.5Y5/1 灰	－	二段構成 小ぶりの タイプ
78	162	M26	包含層 Ⅲ層	須恵器	有台盤	－	(9.6)	[2.6]	0-10号窯式	ロクロナデ 回転ヘラ切り 貼付高台	ロクロナデ	密	やや不良	7.5YR7/6 橙	－	使用による摩耗あり
78	163	M28	包含層 Ⅲ層	山茶碗	小皿	(7.8)	(4.3)	2.0	尾張型 第5型式	ロクロナデ 回転糸切後 ナデ	ロクロナデ ユビナデ	密	良	N8/ 灰白	－	
78	164	N29 N29	包含層 Ⅲ層	山茶碗	小皿	8.2	3.9	2.3	尾張型 5型式	ロクロナデ 回転糸切後 ナデ	ロクロナデ	密	良	5Y8/1 灰白	－	降灰あり
78	165	M28	包含層 Ⅲ層	山茶碗	小皿	8.5	5.5	2.0	尾張型 第6型式	ロクロナデ 回転糸切痕	ロクロナデ	密	良	N7/ 灰白	－	径3mm程の小石を含む
78	166	M28	包含層 Ⅲ層	山茶碗	小皿	8.0	4.8	1.6	尾張型 第7型式	ロクロナデ 回転糸切痕 板目状圧痕	ロクロナデ ユビナデ	密	良	10YR7/1 灰白	－	
78	167	M29	包含層 Ⅲ層	山茶碗	小碗	(8.7)	4.3	2.6	尾張型 第4型式	ロクロナデ 籾殻痕 回転糸切後 ナデ 貼付高台	ロクロナデ	密	良	N8/ 灰白	－	
78	168	M28	包含層 Ⅲ層	山茶碗	碗	(15.6)	(7.2)	5.1	尾張型 第5型式	ロクロナデ ユビナデ 籾殻痕 回転糸切痕 貼付高台	ロクロナデ	密	良	N8/ 灰白	－	降灰あり
78	169	M28	包含層 Ⅲ層	山茶碗	碗	(14.8)	(7.2)	4.7	尾張型 第5型式	ロクロナデ ユビナデ 籾殻痕 回転糸切痕 貼付高台	ロクロナデ	密	良	2.5Y7/1 灰白	－	径5mm程の小石を含む
78	170	N29	包含層 Ⅲ層	山茶碗	碗	(14.7)	(6.0)	4.6	尾張型 第5型式	ロクロナデ ユビナデ 籾殻痕 回転糸切痕 貼付高台	ロクロナデ 重ね焼痕	密	良	5Y7/1 灰白	－	降灰あり
78	171	M28	包含層 Ⅲ層	山茶碗	碗	(14.4)	(6.8)	5.5	尾張型 第6型式	ロクロナデ ユビナデ 籾殻痕 回転糸切痕 貼付高台	ロクロナデ ユビナデ	密	良	N8/ 灰白	－	降灰あり
78	172	M28	包含層 Ⅲ層	山茶碗	碗	(16.3)	(7.5)	5.1	尾張型 第6型式	ロクロナデ ユビナデ 籾殻痕 回転糸切痕 貼付高台	ロクロナデ ユビナデ	密	良	N8/ 灰白	－	
78	173	O26 O27	Ⅲ層	山茶碗	碗	－	－	[1.2]	尾張型 第7型式	ロクロナデ 回転糸切痕 貼付高台剥離 底部墨書	ロクロナデ	密	良	N8/ 灰白	－	

図版番号	掲載番号	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	遺構	種別	器種	法量（cm）（ ）は推定、[ ]は残存			土器型式・年代	調整・技法等		胎土	焼成	色調	釉薬	備考
						口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ		外面	内面					
78	174	026 027	Ⅲ層	山茶碗	碗	－	(6.0)	[2.5]	尾張型 第7型式	ロクロナデ 回転糸切痕	ロクロナデ 指圧痕	密	良	2.5Y8/1 灰白	－	径5mm程の小石を含む 降灰あり 付着物あり
78	175	P31	包含層 Ⅲ層	土師器	甕	(15.4)	－	[2.6]	－	ナナメハケ ヨコナデ	ヨコハケ ナデ	密	良	5YR6/6 橙	－	径1mm程の小石を含む 摩耗あり
78	176	032	包含層 Ⅲ層	近世陶器	灰釉片口	(13.6)	－	[4.5]	17世紀中頃	ロクロナデ 施釉	ロクロナデ 施釉	密	良	釉薬: 5Y7/3 浅黄 胎土: 5Y8/2 灰白	灰釉	
78	177	026 027	Ⅲ層	近世陶器	壺	－	(10.9)	[4.7]	－	ヘラナデ ナデ 籾殻痕	ナデ	密	良	10YR7/1 灰白	－	降灰あり 摩耗あり
78	178	026 027 P27	Ⅲ層	白磁	碗	－	(5.4)	[2.7]	12世紀中頃	ロクロナデ 削出高台 施釉	ロクロナデ 施釉	密	良	釉薬: 5Y8/1 灰白 胎土:2.5Y8/2 灰白	透明	
図版32	179	026 027 P27	Ⅲ層	青磁	皿	－	(7.0)	[1.4]	12世紀中頃 ～後半か	ケズリ 施釉	刻劃文 施釉	密	良	釉薬:5Y6/2 灰 オリーブ 胎土: 2.5Y7/1 灰白	青磁	龍泉窯系 青磁皿Ⅰ類か 写真のみ掲載
78	180	M29	包含層 Ⅲ層	土製品	土錘	8.2	5.0	4.9	－	ナデ ユビオサエ	孔内:棒などを抜いた際の擦痕	密	良	7.5YR7/4 にぶい橙	－	孔径:1.6cm 重さ:165.2ｇ スス付着
78	181	M29	包含層 Ⅲ層	土製品	土錘	6.5	2.8	2.7	－	ナデ ユビオサエ	孔内:棒などを抜いた際の擦痕	密	良	10YR8/2 灰白	－	孔径:0.9cm 重さ:39.2ｇ
78	182	M28	包含層 Ⅲ層	不明	刀子	[21.2] 茎部 7.7	最大 2.4 刃部 1.8 茎部 1.5	刃部 0.7 茎部 0.9	－	茎部:目釘孔 (1ヶ所)	－	－	－	－	－	目釘孔サビで埋まる 刃先欠損 重さ:58.3ｇ
79	183	M29	包含層 Ⅳ層	弥生土器	壺	－	－	[4.7]	弥生中期か	ナデ 粘土紐輪積痕	ナデ 粘土紐輪積痕	密	良	10YR8/2 灰白	－	径5mm程の小石を含む
79	184	M29	包含層 Ⅳ層	須恵器	鉢	－	－	[5.0]	C-2～0-10号 窯式	ロクロナデ	ロクロナデ	密	良	2.5Y6/1 黄灰	－	
79	185	M29	包含層 Ⅳ層	須恵器	高盤	－	－	[6.7]	0-10～K-14号 窯式	ロクロナデ 接合痕	ロクロナデ 接合痕	密	良	5Y6/1 灰	－	降灰あり
79	186	M28	包含層 Ⅳ層	灰釉陶器	不明	－	(16.7)	[6.0]	－	ロクロナデ ナデ 施釉	ロクロナデ	密	良	釉薬:5Y5/3 灰オリーブ 胎土: 5Y7/1 灰白	灰釉	降灰あり
79	187	M28	包含層 Ⅳ層	山茶碗	小皿	7.8	4.5	1.7	尾張型 第6型式	ロクロナデ 回転糸切痕	ロクロナデ ユビナデ	密	良	2.5Y7/1 灰白	－	
79	188	M28	包含層 Ⅳ層	山茶碗	碗	(16.0)	(7.4)	4.8	尾張型 第6型式	ロクロナデ ユビナデ 籾殻痕 回転糸切痕 板目状圧痕 貼付高台	ロクロナデ ユビナデ	密	良	2.5Y7/1 灰白	－	降灰あり
79	189	N29 M29	包含層 Ⅳ層	山茶碗	片口小碗	7.9	3.9	3.2	尾張型 第3型式	ロクロナデ ユビナデ 貼付高台	ロクロナデ	密	良	N8/ 灰白	－	径5mm程の小石を含む 降灰あり 摩耗あり
79	190	M28	包含層 Ⅳ層	土師器	伊勢型鍋	(21.3)	－	[6.9]	12～13世紀	ナデ ユビオサエ	ナデ 粘土紐輪積痕 接合痕	密	良	2.5YR6/8 橙	－	径1mm程の小石を含む 摩耗あり
79	191	M29	検出 Ⅳ層上部	土師器	伊勢型鍋	(26.0)	－	[2.3]	12～13世紀か	ナデ ユビオサエ	ナデ 接合痕	密	良	7.5YR7/3 にぶい橙	－	径1mm程の小石を含む スス付着
79	192	M28	包含層 Ⅳ層	土製品	土錘	7.4	4.7	4.1	－	ナデ ユビオサエ	孔内:棒などを抜いた際の擦痕	密	良	10YR8/2 灰白	－	孔径:1.5cm 重さ:155.3ｇ 径3mm程の小石を含む
80	193		C-SE2	須恵器	無台椀	(13.1)	(6.6)	3.5	0-10号窯式	ロクロナデ 回転糸切痕 底部墨書	ロクロナデ	密	良	7.5Y5/1 灰	－	付着物あり 降灰あり
80	194		C-SE2	須恵器	有台椀	－	(9.0)	[2.6]	0-10号窯式	ロクロナデ ユビナデ ケズリ 貼付高台	ロクロナデ	密	良	N6/ 灰	－	
80	195		C-SE2	灰釉陶器	椀	15.3	6.7	4.5	K-90号窯式	ロクロナデ ユビナデ 回転ヘラ切り 貼付高台	ロクロナデ 施釉	密	良	釉薬: 7.5Y7/1 灰白 胎土: 10YR7/1 灰白	灰釉	径5mm程の小石を含む 摩耗あり

図版番号	掲載番号	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	遺構	種別	器種	法量（cm）（ ）は推定、[ ]は残存			土器型式・年代	調整・技法等		胎土	焼成	色調	釉薬	備考
						口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ		外面	内面					
81	196		C-SE2	木製品	曲物側板	直径 47.0	箍直径 47.8	[13.5] /0.4	－	綴紐	ケビキ痕	－	－	－	－	木取り:板目 樹種:ヒノキ
81	197		C-SE2	木製品	井戸枠部材	110.6	最大 9.0 上 7.2 中 8.6 下 7.2	9.0 上 7.2 中 8.6 下 7.2	－	ケズリ くぼみ孔	－	－	－	－	－	木取り: 芯持丸木 樹種:ヒノキ 丸太材1本使い 自然面あり
81	198		C-SE2	木製品	井戸枠部材	53.5	上3.5 中4.0 下3.0	上2.7 中3.8 下2.5	－	ケズリ	－	－	－	－	－	木取り: 芯持丸木 樹種:ヒノキ
81	199		C-SE2	木製品	井戸枠部材	[97.5]	14.6	4.1	－	割取り	－	－	－	－	－	木取り:板目 樹種:ヒノキ 自然面あり
81	200		C-SE2	木製品	井戸枠部材	[83.5]	最大 23.5 上23.0 下 [20.4]	3.7～ 0.4 上3.7 下2.3	－	ケズリ 切断	－	－	－	－	－	木取り:板目 樹種:ヒノキ 裏面節残る
82	201		C-SK8	須恵器	杯蓋	13.1	－	3.0	0-10号窯式	ロクロナデ ケズリ 接合痕 墨書	ロクロナデ	密	良	10YR5/1 褐灰	－	摘:扁平 摘径:2.7cm 墨書:西家？
82	202		C-SK8	須恵器	蓋	(16.8)	－	[1.7]	0-10号窯式	ロクロナデ ケズリ	ロクロナデ	密	良	N6/ 灰	－	摘部分欠損 降灰あり
82	203		C-SK8	須恵器	無台椀	11.8	5.0	4.2	0-10号窯式	ロクロナデ 回転糸切痕	ロクロナデ	密	良	2.5Y6/1 黄灰	－	使用痕あり スス付着
82	204		C-SK8	須恵器	無台椀	12.7	6.0	4.1	0-10号窯式	ロクロナデ 回転糸切痕 底部線刻 底部墨書	ロクロナデ	密	良	10YR7/4 にぶい黄橙	－	墨書:長？ 線刻:一 緋襷あり
82	205		C-SK8	須恵器	有台椀	14.1	7.2	4.6	0-10号窯式	ロクロナデ ケズリ 貼付高台	ロクロナデ	密	良	5YR5/1 褐灰	－	降灰あり
82	206		C-SK8	須恵器	甕	29.2	－	[15.0]	C-2号窯式	ヨコナデ タタキ	ヨコナデ	密	良	N5/ 灰	－	
83	207		C-SK26	山茶碗	碗	－	(8.4)	[1.4]	尾張型 第3型式	ロクロナデ ユビナデ 回転糸切後 ナデ 貼付高台	ロクロナデ	密	良	N8/ 灰白	－	
83	208		C-SK26	山茶碗	碗	－	(6.0)	[1.7]	尾張型 第5型式	ロクロナデ 籾殻痕 回転糸切痕 貼付高台	ロクロナデ	密	良	N8/ 灰白	－	径2mm程の小石を含む 降灰あり
83	209		C-SK26	山茶碗	碗	－	－	[1.7]	尾張型 第5型式	ロクロナデ 回転糸切痕 貼付高台	ロクロナデ 重ね焼痕	密	良	5Y7/1 灰白	－	
83	210		C-SK26	山茶碗	碗	－	－	[2.8]	尾張型 第5型式	ロクロナデ	ロクロナデ	密	良	2.5Y8/1 灰白	－	降灰あり
83	211		C-SK31	山茶碗	碗	－	－	[1.9]	尾張型 第6型式	ロクロナデ	ロクロナデ	密	良	2.5Y8/1 灰白	－	
83	212		C-SK31	青磁	輪花碗	－	－	[4.0]	12世紀中頃 ～後半か	ロクロナデ ケズリ 施釉	ロクロナデ 刻劃文 施釉	密	良	釉薬:2.5Y6/3 にぶい黄 胎土: 2.5Y8/1 灰白	青磁	龍泉窯系 青磁碗Ⅰ類か 輪花1ヶ所残存
84	213		Ⅱb層	須恵器	長頸瓶	(9.4)	－	[1.2]	0-10号窯式	ロクロナデ	ロクロナデ	密	良	2.5Y7/1 灰白	－	降灰あり
84	214	I29	表土 Ⅰ・Ⅱ層	灰釉陶器	椀	(14.2)	－	[2.9]	0-53号窯式	ロクロナデ 施釉	ロクロナデ 施釉	密	良	釉薬: 2.5Y6/2 灰黄 胎土: 2.5Y8/1 灰白	灰釉	
84	215		包含層 Ⅲ層	須恵器	甕	－	(16.0)	[5.8]	0-10号窯式	ナデ タタキ 接合痕	タテナデ ナデ 接合痕	密	良	10YR6/1 褐灰	－	
84	216		包含層 Ⅲ層	灰釉陶器	皿	(13.2)	(6.8)	2.8	0-53号窯式	ロクロナデ ケズリ 貼付高台 施釉	ロクロナデ 施釉	密	良	釉薬: 5Y8/1 灰白 胎土: 5Y7/1 灰白	灰釉	使用による摩耗あり
84	217		包含層 Ⅲ層	灰釉陶器	椀	(16.3)	－	[4.1]	0-53号窯式	ロクロナデ 施釉	ロクロナデ 施釉	密	良	釉薬:5Y6/2 灰オリーブ 胎土: 5Y7/2 灰白	灰釉	

図版番号	掲載番号	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	遺構	種別	器種	法量（cm）（ ）は推定、[ ]は残存			土器型式・年代	調整・技法等		胎土	焼成	色調	釉薬	備考
						口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ		外面	内面					
84	218		包含層Ⅲ層	灰釉陶器	椀	(15.0)	6.4	4.2	K-90号窯式	ロクロナデ ユビナデ ヘラ切り後ナデ 貼付高台 施釉	ロクロナデ 重ね焼痕 施釉	密	良	釉薬:5Y6/2 灰オリーブ 胎土:5Y8/1 灰白	灰釉	使用による摩耗あり
84	219		包含層Ⅲ層	灰釉陶器	深椀	-	(8.0)	[2.7]	O-53号窯式	ロクロナデ 貼付高台 施釉	ロクロナデ 施釉	密	良	釉薬:7.5Y6/2 灰オリーブ 胎土:N7/ 灰白	灰釉	摩耗あり
84	220		包含層Ⅲ層	山茶碗	碗	-	6.6	[4.5]	尾張型第5型式	ロクロナデ 籾殻痕 回転糸切痕 貼付高台	ロクロナデ	密	良	2.5Y7/1 灰白	-	径3mm程の小石を含む
84	221		包含層Ⅲ層	土師器	伊勢型鍋	(15.2)	-	[5.7]	-	タテハケ ヨコナデ ナデ ユビオサエ	ヨコハケ ヨコナデ	密	良	2.5YR6/6 橙	-	スス付着 摩耗あり
85	222		D-SP76	山茶碗	碗	(14.8)	-	[3.2]	尾張型第5型式	ロクロナデ	ロクロナデ	密	良	N7/ 灰白	-	摩耗あり
86	223		D-SD1	須恵器	杯蓋	-	-	[1.6]	C-2号窯式	ロクロナデ ケズリ	ロクロナデ	密	良	10Y6/1 灰	-	摘:扁平 摘径:3.9cm
86	224		D-SD1	須恵器	杯蓋	-	-	[1.7]	C-2号窯式	ロクロナデ 接合痕	ロクロナデ	密	良	N6/ 灰	-	摘:宝珠形 摘径:3.4cm 降灰あり
86	225		D-SD1	須恵器	杯蓋	(14.4)	-	[1.7]	C-2号窯式	ロクロナデ	ロクロナデ	密	良	7.5YR5/1 褐灰	-	摘部分欠損
86	226		D-SD1	須恵器	杯蓋	(13.5)	-	[2.2]	C-2号窯式	ロクロナデ ケズリ	ロクロナデ	密	良	N6/ 灰	-	摘部分欠損
86	227		D-SD1	須恵器	杯蓋	-	-	[2.1]	-	ロクロナデ ケズリ 接合痕	ロクロナデ	密	良	5Y6/1 灰	-	摘:宝珠形 摘径:3.1cm 口縁部欠損のため時期不明
86	228		D-SD1	須恵器	杯蓋	(12.7)	-	[2.7]	K-90号窯式	ロクロナデ	ロクロナデ	密	良	5Y8/1 灰白	-	
86	229		D-SD1	須恵器	有台杯	-	(13.4)	[2.6]	7世紀末か	ロクロナデ ヨコナデ ケズリ 貼付高台	ロクロナデ	密	良	2.5Y6/1 黄灰	-	摩耗あり
86	230		D-SD1	須恵器	有台杯	-	(13.8)	[1.9]	O-10号窯式	ロクロナデ ユビナデ ケズリ 貼付高台	ロクロナデ	密	良	10YR5/1 褐灰	-	
86	231		D-SD1	須恵器	短頸壺	-	(13.3)	[9.6]	O-10号窯式	ロクロナデ ケズリ ユビナデ 貼付高台	ロクロナデ 粘土紐輪積痕	密	良	2.5Y7/1 灰白	-	
86	232		D-SD1	灰釉陶器	椀	-	(6.6)	[2.7]	H-72号窯式	ロクロナデ ユビナデ 回転糸切痕 貼付高台 施釉	ロクロナデ 施釉	密	良	釉薬: 2.5Y8/1 灰白 胎土: 2.5Y7/1 灰白	灰釉	摩耗あり
86	233		D-SD1	灰釉陶器	椀	-	(7.4)	[2.3]	H-72号窯式	ロクロナデ ユビナデ 回転糸切痕 貼付高台	ロクロナデ	密	良	5Y7/1 灰白	-	摩耗あり
86	234		D-SD1	灰釉陶器	椀	-	(7.2)	[2.0]	O-53号窯式	ロクロナデ ユビナデ ケズリ後ナデ 貼付高台 施釉	ロクロナデ 施釉	密	良	釉薬: 2.5GY7/1 明オリーブ灰 胎土: 10YR8/1 灰白	灰釉	摩耗あり
86	235		D-SD1	山茶碗	小皿	8.0	4.6	2.2	尾張型第5型式	ロクロナデ 回転糸切痕	ロクロナデ	密	良	2.5Y8/1 灰白	-	径1mm程の小石を含む 降灰あり
86	236		D-SD1	山茶碗	碗	-	7.2	[1.8]	東濃型第3型式	ロクロナデ ユビナデ 貼付高台 回転糸切痕	ロクロナデ 重ね焼痕	密	良	2.5Y7/1 灰白	-	降灰あり 摩耗あり
86	237		D-SD1	山茶碗	碗	-	(7.7)	[2.2]	尾張型第3型式	ロクロナデ ユビナデ 回転糸切痕 貼付高台	ロクロナデ	密	良	5Y7/1 灰白	-	径5mm程の小石を含む 降灰あり 摩耗あり
86	238		D-SD1	山茶碗	碗	-	6.9	[2.9]	尾張型第3型式	ロクロナデ ユビナデ 回転糸切痕 貼付高台	ロクロナデ	密	良	2.5Y8/1 灰白	-	降灰あり

図版番号	掲載番号	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	遺構	種別	器種	法量（cm）（ ）は推定、［ ］は残存			土器型式・年代	調整・技法等		胎土	焼成	色調	釉薬	備考
						口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ		外面	内面					
86	239		D-SD1	山茶碗	碗	－	(8.0)	[2.0]	東濃型 谷迫間 2号窯式	ロクロナデ ユビナデ 籾殻痕 回転糸切痕 貼付高台	ロクロナデ	密	良	N8/ 灰白	－	降灰あり 摩耗あり
86	240		D-SD1	山茶碗	碗	－	(7.0)	[3.1]	尾張型 第5型式	ロクロナデ ユビナデ 籾殻痕 回転糸切痕 貼付高台	ロクロナデ	密	良	N8/ 灰白	－	径1mm程の小石を含む 降灰あり
86	241		D-SD1	山茶碗	碗	－	(6.0)	[1.1]	尾張型 第5型式 もしくは 第6型式	ロクロナデ 板目状圧痕 回転糸切痕 貼付高台剥離 底部墨書	ロクロナデ ユビナデ	密	良	2.5Y8/1 灰白	－	
86	242		D-SD1	山茶碗	碗	(12.1)	(5.4)	2.3	東濃型 脇之島 3号窯式	ロクロナデ 回転糸切痕	ロクロナデ	密	良	5Y8/1 灰白	－	
86	243		D-SD1	山茶碗	碗	11.8	4.2	2.8	東濃型 生田2号窯式	ロクロナデ 回転糸切痕	ロクロナデ	密	良	2.5Y8/2 灰白	－	
86	244		D-SD1	山茶碗	碗	(10.4)	(5.0)	2.5	東濃型 生田2号窯式	ロクロナデ 回転糸切痕	ロクロナデ	密	良	2.5Y7/1 灰白	－	
86	245		D-SD1	山茶碗	碗	11.5	4.3	3.3	東濃型 生田2号窯式	ロクロナデ 回転糸切痕	ロクロナデ	密	良	2.5Y8/2 灰白	－	
86	246		D-SD1	山茶碗	碗	(10.3)	3.8	2.8	東濃型 生田2号窯式	ロクロナデ 回転糸切痕	ロクロナデ	密	良	10YR8/1 灰白	－	スス付着
86	247	H4	D-SD1	山茶碗	碗	(10.7)	3.7	2.3	東濃型 生田2号窯式	ロクロナデ 回転糸切痕	ロクロナデ	密	良	2.5Y7/3 浅黄	－	
86	248		D-SD1	山茶碗	碗	(10.8)	(4.4)	2.6	東濃型 生田2号窯式	ロクロナデ 回転糸切痕 底部一部に 重ね焼痕	ロクロナデ	密	良	10YR7/2 にぶい黄橙	－	
86	249		D-SD1	陶器	片口鉢	－	(12.2)	[7.2]	尾張型 第4型式	ロクロナデ ユビナデ ケズリ 貼付高台	ロクロナデ	密	良	10YR7/1 灰白	－	降灰あり 摩耗あり
86	250		D-SD1	陶器	片口鉢	－	(10.6)	[6.1]	尾張型 第5型式	ロクロナデ ユビナデ ケズリ 回転糸切後ナデか 貼付高台	ロクロナデ	密	良	2.5Y7/1 灰白	－	径2mm程の小石を含む 降灰あり 摩耗あり
87	251		D-SD1	陶器	縁釉小皿	(9.6)	(4.0)	2.5	古瀬戸 後期様式 Ⅳ期新	ロクロナデ 回転糸切痕 施釉	ロクロナデ 施釉	密	良	釉薬:7.5Y6/3 オリーブ黄 胎土: 2.5Y8/2 灰白	灰釉	
87	252		D-SD1	陶器	縁釉小皿	(9.9)	(4.0)	2.0	古瀬戸 後期様式 Ⅳ期新	ロクロナデ 回転糸切痕 施釉	ロクロナデ 施釉	密	良	釉薬: 7.5YR1/4 褐灰 胎土: 2.5Y8/2 灰白	鉄釉	
87	253		D-SD1	陶器	縁釉小皿	(10.0)	(6.2)	2.4	古瀬戸 後期様式	ロクロナデ 回転糸切痕 施釉	ロクロナデ 施釉	密	良	釉薬:5Y7/3 浅黄 胎土:10YR8/3 浅黄橙	灰釉	
87	254		D-SD1	陶器	小皿	(8.8)	－	[1.7]	近世	ロクロナデ 施釉	ロクロナデ 施釉	密	良	釉薬: 7.5YR3/4 暗褐 胎土: 2.5Y8/2 灰白	鉄釉	瀬戸産
87	255		D-SD1	陶器	卸皿	－	－	[1.5]	古瀬戸 後期様式	ロクロナデ 回転糸切痕	ロクロナデ 卸目 施釉	密	良	釉薬:7.5Y5/3 灰オリーブ 胎土: 2.5Y7/2 灰黄	灰釉	
87	256		D-SD1	陶器	卸目付 大皿	－	－	[4.7]	古瀬戸 後期様式Ⅱ期	ロクロナデ 施釉	ロクロナデ 施釉	密	良	釉薬:7.5Y6/2 灰オリーブ 胎土:2.5Y7/1 灰白	灰釉	
87	257		D-SD1	陶器	卸目付 大皿	(31.4)	－	[2.2]	古瀬戸 後期様式 Ⅳ期新	ロクロナデ 施釉	ロクロナデ 施釉	密	良	釉薬: 2.5Y7/4 浅黄 胎土: 2.5Y8/2 灰白	灰釉	磨耗による釉薬のハガレあり
87	258		D-SD1	陶器	卸目付 大皿	(31.7)	－	[4.3]	古瀬戸 後期様式 Ⅳ期新	ロクロナデ 施釉	ロクロナデ 施釉	密	良	釉薬:2.5Y8/1 胎土: 10YR8/1 灰白	灰釉	
87	259		D-SD1	陶器	卸目付 大皿	－	－	[3.3]	古瀬戸 後期様式 Ⅳ期古	ロクロナデ 施釉	ロクロナデ 施釉	密	良	釉薬:7.5Y6/3 オリーブ黄 胎土:10YR7/3 にぶい黄橙	灰釉	

図版番号	掲載番号	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	遺構	種別	器種	法量（cm）（ ）は推定、［ ］は残存			土器型式・年代	調整・技法等		胎土	焼成	色調	釉薬	備考
						口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ		外面	内面					
87	260		D-SD1	陶器	卸目付大皿	－	(15.0)	[7.9]	古瀬戸後期様式Ⅳ期	ロクロナデ ケズリ 籾殻痕 施釉	ロクロナデ 卸目 施釉	密	良	釉薬:5Y6/3 オリーブ黄 胎土:10YR7/3 にぶい黄橙	灰釉	スス付着
87	261		D-SD1	陶器	直縁大皿	(29.2)	(13.2)	8.9	古瀬戸後期様式Ⅳ期新	ロクロナデ ケズリ 回転糸切痕 施釉	ロクロナデ 施釉	密	良	釉薬: 5Y7/3 浅黄 胎土: 5Y8/2 灰白	灰釉	脚部1ヶ所残存 三脚か 摩耗あり
87	262		D-SD1	陶器	天目茶碗	11.8	－	[5.0]	古瀬戸後期様式Ⅳ期新	ロクロナデ 施釉	ロクロナデ 施釉	密	良	釉薬: 10YR2/1 黒 胎土:10YR8/3 浅黄橙	鉄釉 錆釉	内面鉄釉のみ 摩耗あり
87	263		D-SD1	陶器	天目茶碗	(12.2)	(4.4)	5.8	古瀬戸後期様式Ⅳ期新	ロクロナデ ケズリ 貼付高台 施釉	ロクロナデ 施釉	密	良	釉薬: 7.5YR3/2 黒褐 胎土: 2.5Y8/2 灰白	鉄釉	C類
87	264		D-SD1	陶器	天目茶碗	－	4.4	[4.3]	古瀬戸後期様式Ⅳ期	ロクロナデ ケズリ 削り出し高台 施釉	ロクロナデ 施釉	密	良	釉薬: 7.5YR2/2 黒褐 胎土: 2.5Y7/2 灰黄	鉄釉	
87	265		D-SD1	陶器	天目茶碗	－	4.4	[2.6]	古瀬戸中期様式Ⅳ期	ケズリ 回転糸切後ナデ 貼付高台	ロクロナデ 施釉	密	良	釉薬: 10YR2/1 黒 胎土: 2.5Y8/1 灰白	鉄釉	
図版36	266		D-SD1	陶器	天目茶碗	－	－	[3.2]	古瀬戸	ロクロナデ ケズリ 施釉	ロクロナデ 施釉	密	良	釉薬: 5YR3/1 黒褐 胎土: N8/ 灰白	鉄釉	写真掲載のみ
87	267		D-SD1	陶器	平碗	(14.8)	－	[3.6]	古瀬戸後期様式Ⅳ期新	ロクロナデ 施釉	ロクロナデ 施釉	密	良	釉薬:7.5Y5/3 灰オリーブ 胎土: 2.5Y8/1 灰白	灰釉	スス付着
87	268		D-SD1	陶器	盤類	－	－	[5.4]	古瀬戸後期様式Ⅳ期	ロクロナデ ケズリ 施釉	ロクロナデ 施釉	密	良	釉薬:5Y6/4 オリーブ黄 胎土:10YR8/2 灰白	灰釉	
87	269		D-SD1	陶器	内耳鍋	－	(10.2)	[2.8]	古瀬戸後期様式Ⅳ期	ロクロナデ ナデ 回転糸切痕	ロクロナデ	密	良	10R5/2 灰赤	－	
87	270		D-SD1	陶器	擂鉢	－	－	[5.4]	古瀬戸後期様式Ⅳ期	ロクロナデ 施釉	ロクロナデ 擂目 施釉	密	良	釉薬: 7.5YR4/4 褐 胎土:2.5Y8/1 灰白	錆釉	
87	271		D-SD1	陶器	擂鉢	－	(9.0)	[3.8]	古瀬戸後期様式Ⅳ期	ロクロナデ 回転糸切痕 施釉	ロクロナデ 擂目 施釉	密	良	釉薬:5YR3/3 暗赤褐 胎土:10YR8/1 灰白	錆釉	使用による摩耗あり
87	272		D-SD1	陶器	擂鉢	－	(10.4)	[6.1]	古瀬戸後期様式Ⅳ期	ロクロナデ 回転糸切痕 施釉	ロクロナデ 擂目 施釉	密	良	釉薬: 7.5YR5/2 灰褐 胎土: 7.5YR8/4 浅黄橙	錆釉	使用による摩耗あり
88	273		D-SD1	陶器	擂鉢	(27.9)	－	[2.5]	古瀬戸後期様式Ⅳ期新	ロクロナデ 施釉	ロクロナデ 施釉	密	良	釉薬: 7.5YR4/3 褐 胎土:2.5Y8/2 灰白	錆釉	
88	274		D-SD1	陶器	擂鉢	－	(10.8)	[7.0]	近世	ロクロナデ 回転糸切痕 施釉	ロクロナデ 擂目 施釉	密	良	釉薬: 7.5YR4/3 褐 胎土:2.5Y8/1 灰白	錆釉	砂粒付着 使用による摩耗あり
図版36	275		D-SD1	陶器	擂鉢	－	－	[6.3]	古瀬戸後期様式	ロクロナデ 施釉	ロクロナデ 施釉	密	良	釉薬: 7.5YR4/3 褐色 胎土:10YR8/4 浅青橙	錆釉	写真掲載のみ
88	276		D-SD1	陶器	広口壺	－	－	[10.6]	古瀬戸中期様式Ⅲ期	ヨコナデ 蕨手文/沈線/印花文 施釉	ヨコナデ 粘土紐輪積痕 施釉	密	良	釉薬: 2.5Y3/1 黒褐 胎土: 2.5Y8/1 灰白	鉄釉	
88	277		D-SD1	陶器	祖母懐茶壺	－	(12.6)	[6.3]	古瀬戸後期様式	ロクロナデ ケズリ後ナデ 施釉	ロクロナデ ユビナデ 施釉	密	良	釉薬: 10R4/2 灰赤 胎土:N7/ 灰白	錆釉	
88	278		D-SD1	陶器	合子の蓋	5.0	－	2.2	古瀬戸後期様式	ロクロナデ ナデ ユビオサエ 接合痕 回転糸切痕 施釉	－	密	良	釉薬:5YR4/3 にぶい赤褐 胎土:10YR7/1 灰白	鉄釉	付着物あり

図版番号	掲載番号	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	遺構	種別	器種	法量（cm）（ ）は推定、［ ］は残存			土器型式・年代	調整・技法等		胎土	焼成	色調	釉薬	備考
						口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ		外面	内面					
88	279		D-SD1	陶器	片口小瓶	－	(5.4)	[6.8]	古瀬戸 後期様式	ロクロナデ 沈線4条 回転糸切痕 施釉	ロクロナデ	密	良	釉薬: 2.5Y8/1 灰白 胎土: 7.5YR6/4 にぶい橙	鉄釉	鉄分付着
88	280		D-SD1	陶器	片口小瓶	－	(4.8)	[5.1]	古瀬戸 後期様式 Ⅳ期	ロクロナデ 回転糸切痕 施釉	ロクロナデ 施釉	密	良	釉薬:5YR4/2 灰褐 胎土:10YR7/1 灰白	鉄釉	
88	281		D-SD1	陶器	花瓶	6.4	－	[14.5]	古瀬戸 中期様式 Ⅲ期・Ⅳ期	ロクロナデ 施釉	ロクロナデ 接合痕 施釉	密	良	釉薬:10YR2/2 黒褐 胎土:10YR8/1 灰白	鉄釉	
88	282		D-SD1	陶器	土瓶か 甕	(10.2)	－	[4.5]	古瀬戸 後期様式 Ⅳ期	ロクロナデ 施釉	ロクロナデ 施釉	密	良	釉薬: 7.5YR5/4 にぶい褐 胎土: 7.5YR7/6 橙	錆釉	径3㎜程の小石を含む
88	283		D-SD1	陶器	土瓶か 甕	(11.9)	－	[4.3]	古瀬戸 後期様式 Ⅳ期	ロクロナデ 施釉	ロクロナデ 施釉	密	良	釉薬: 7.5YR5/4 にぶい褐 胎土:2.5Y8/2 灰白	錆釉	
88	284		D-SD1	陶器	土瓶 か 釜	(12.0)	－	[11.5]	古瀬戸 後期様式 Ⅳ期新	ロクロナデ ナデ ユビオサエ ケズリ 接合痕 施釉	ロクロナデ 施釉	密	良	釉薬: 5YR5/2 灰褐 胎土: 5YR8/1 灰白	錆釉	火覆いあり
88	285		D-SD1	陶器	片口鉢	－	－	[6.2]	常滑 11型式	ユビナデ ナデ	ナデ 擂目	密	やや不良	2.5YR5/6 明赤褐	－	被熱あり スス付着 使用による摩耗あり
88	286		D-SD1	陶器	壺	－	(12.2)	[4.8]	中世か	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ	密	良	10YR7/1 灰白	－	降灰あり
88	287		D-SD1	陶器	広口壺	(21.8)	－	[6.0]	常滑 9・10型式	ヨコナデ 接合痕	ヨコナデ ユビナデ 粘土紐輪積痕	密	良	5YR3/4 暗赤褐	－	
89	288		D-SD1	陶器	甕	－	－	[5.5]	常滑 10型式	ヨコナデ 接合痕	ヨコナデ	密	良	10R4/2 灰赤	－	
89	289		D-SD1	陶器	甕	－	(14.2)	[7.1]	常滑 10型式	ヘラナデ 底部不調整 接合痕	ナデ 粘土紐輪積痕 接合痕	密	良	5YR3/4 暗赤褐	－	被熱あり
89	290		D-SD1	陶器	壺	－	(15.0)	[10.7]	12世紀	ナデ ケズリ 施釉	ナデ ユビナデ 粘土紐輪積痕 施釉	密	良	釉薬: 2.5Y6/2 灰黄 胎土: 2.5Y7/1 灰白	灰釉	猿投産
図版37	291		D-SD1	青磁	碗	－	－	[2.5]	－	ケズリ 施釉	ロクロナデ 施釉	密	良	釉薬: 10Y7/2 灰白 胎土: 10YR7/1 灰白	青磁	龍泉窯産 写真掲載のみ
91	292		D-SD1	陶器	碗	－	(5.1)	[3.0]	－	ロクロナデ ケズリ 貼付高台 施釉	ロクロナデ 施釉	密	良	釉薬: 7.5Y7/3 浅黄 胎土: 2.5Y8/1 灰白	灰釉	
91	293		D-SD1	土師器	小皿	4.5	2.2	1.2	－	ヨコナデ ナデ ユビオサエ	ヨコナデ ナデ	密	良	10YR7/6 明黄褐	－	
91	294		D-SD1	土師器	小皿	7.9	3.3	1.7	－	ナデ ユビオサエ	ナデ	密	良	2.5Y8/2 灰白	－	一部焼成後打ち欠き(未使用) 付着物あり
91	295		D-SD1	土師器	小皿	6.8	3.2	1.3	－	ナデ ユビオサエ	ナデ	密	良	2.5Y8/1 灰白	－	摩耗あり
91	296		D-SD1	土師器	小皿	(7.2)	(5.0)	1.4	－	ヨコナデ ナデ ユビオサエ	ヨコナデ ナデ	密	良	2.5Y8/1 灰白	－	
91	297		D-SD1	土師器	小皿	(7.8)	4.0	1.6	－	ロクロナデ 回転糸切痕	ロクロナデ	密	良	7.5YR8/3 浅黄橙	－	
91	298		D-SD1	土師器	小皿	(8.2)	(4.8)	1.4	－	ナデ ユビオサエ	ナデ	密	良	10YR8/2 灰白	－	径8㎜程の小石を含む
91	299		D-SD1	土師器	小皿 (灯明皿)	7.5	3.2	1.7	－	ヨコナデ ナデ ユビオサエ	ヨコナデ ナデ 記号文	密	良	2.5Y8/2 灰白	－	記号文:「×」 スス付着

図版番号	掲載番号	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	遺構	種別	器種	法量（cm）（ ）は推定、［ ］は残存			土器型式・年代	調整・技法等		胎土	焼成	色調	釉薬	備考
						口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ		外面	内面					
91	300		D-SD1	土師器	小皿	8.5	5.3	1.8	－	ヨコナデ ナデ ユビオサエ	ヨコナデ ナデ ユビオサエ	密	良	10YR8/1 灰白	－	摩耗あり
91	301		D-SD1	土師器	小皿	8.5	6.9	1.7	－	ヨコナデ ナデ ユビオサエ	ヨコナデ ナデ	密	良	2.5Y7/2 灰黄	－	
91	302		D-SD1	土師器	小皿	9.8	6.0	1.9	－	ヨコナデ ナデ ユビオサエ	ヨコナデ ナデ	密	良	2.5Y8/2 灰白	－	
91	303		D-SD1	土師器	小皿	(9.9)	(4.4)	1.9	－	ヨコナデ ナデ ユビオサエ 底部墨書	ヨコナデ ナデ	密	良	10YR8/1 灰白	－	
91	304		D-SD1	土師器	皿	(12.9)	(3.9)	2.3	－	ロクロナデ ナデ	ロクロナデ ナデ	密	良	10YR8/2 灰白	－	
91	305		D-SD1	土師器	皿	(13.8)	(8.0)	1.7	－	ナデ	ナデ	密	良	10YR8/3 浅黄橙	－	摩耗あり
91	306		D-SD1	土師器	皿	12.2	7.2	2.3	－	ロクロナデ 回転糸切痕	ロクロナデ	密	良	7.5YR8/4 浅黄橙	－	
91	307		D-SD1	土師器	羽釜	(22.3)	－	[4.7]	14世紀末～ 15世紀中	ナナメハケ ヨコハケ ヨコナデ 接合痕	ヨコナデ ユビオサエ 粘土紐輪積痕	密	良	7.5YR8/3 浅黄橙	－	スス付着
91	308		D-SD1	土師器	釜	(14.6)	－	[3.2]	－	ヨコナデ 穿孔(1ヶ所)	ヨコナデ ユビオサエ 粘土紐輪積痕	密	良	7.5YR8/3 浅黄橙	－	スス付着
91	309		D-SD1	瓦質土器	香炉 か 火鉢	－	－	[3.0]	15世紀頃	ロクロナデ	ロクロナデ	密	良	10YR6/1 褐灰	－	
91	310		D-SD1	陶器	陶丸	2.5	2.6	2.4	－	ナデ ユビオサエ	－	密	良	5Y8/1 灰白	－	重さ:17.3g 降灰あり 摩耗あり
91	311		D-SD1	陶器	陶丸	1.9	2.2	1.9	－	ナデ ユビオサエ 籾殻痕	－	密	良	5Y8/1 灰白	－	重さ:8.7g
91	312		D-SD1	陶器	陶丸	1.9	1.8	1.8	－	ナデ ユビオサエ	－	密	良	2.5Y8/1 灰白	－	重さ:6.3g 摩耗あり
91	313		D-SD1	陶器	陶丸	2.3	2.4	2.1	－	ナデ ユビオサエ	－	密	良	N8/ 灰白	－	重さ:13.0g
91	314		D-SD1	陶器	陶丸	2.0	2.1	2.0	－	ナデ ユビオサエ	－	密	良	N8/ 灰白	－	重さ:9.1g
91	315		D-SD1	土製品	土錘	[3.8]	1.6	1.5	－	ナデ ユビオサエ	孔内:棒など を抜いた際の 擦痕	密	良	10YR6/4 にぶい黄橙	－	孔径:0.3cm 重さ:7.2g 径1mm程の小石 を含む
91	316		D-SD1	土製品	土錘	[4.3]	1.6	1.5	－	ナデ	孔内:棒など を抜いた際の 擦痕	密	良	10YR8/4 浅黄橙	－	孔径:0.4cm 重さ:8.5g 磨耗あり
91	317		D-SD1	土製品	土錘	4.9	2.8	2.7	－	ナデ ユビオサエ	孔内:棒など を抜いた際の 擦痕	密	良	10YR8/1 灰白	－	孔径:0.7cm 重さ:48.8g 磨耗あり
91	318		D-SD1	土製品	土錘	6.9	4.9	[4.6]	－	ナデ ユビオサエ	孔内:棒など を抜いた際の 擦痕	密	良	10YR7/1 灰白	－	孔径:1.5cm 重さ:151.9g
91	319		D-SD1	青銅製	不明	8.7	1.1	0.2	－	－	－	－	－	－	－	重さ:7.4g
91	320		D-SD1	木製品	漆椀	(15.8)	－	[6.3]	－	黒漆 朱漆文様	赤漆	－	－	－	－	
91	321		D-SD1	木製品	漆椀	(13.8)	－	[4.7]	－	黒漆 朱漆文様	赤漆	－	－	－	－	文様:「井桁文」
91	322		D-SD1	木製品	漆椀	－	(6.0)	[3.4]	－	黒漆	黒漆 朱漆文様	－	－	－	－	朱漆:詳細不明
91	323		D-SD1	木製品	漆椀	－	(7.4)	[1.5]	－	黒漆	黒漆 赤漆痕跡あり	－	－	－	－	摩耗あり
92	324		D-SD1	木製品	串	[14.8]	上端部 0.7 下端部 0.4	上端部 0.4 下端部 0.2	－	ケズリ	－	－	－	－	－	木取り:板目 下端部ナナメ 一方向に削り 尖らせる

図版番号	掲載番号	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	遺構	種別	器種	法量（cm）（ ）は推定、[ ]は残存			土器型式・年代	調整・技法等		胎土	焼成	色調	釉薬	備考
						口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ		外面	内面					
92	325		D-SD1	木製品	串	[13.5]	上端部0.7 下端部0.4	上端部0.4 下端部0.4	-	ケズリ	-	-	-	-	-	木取り:板目 下端部短く削り尖らせる 黒化
92	326		D-SD1	木製品	串	[12.8]	上端部0.7 下端部0.4	上端部0.4 下端部0.3	-	ケズリ	-	-	-	-	-	木取り:柾目 下端部細く削り尖らせる
92	327		D-SD1	木製品	串	[10.1]	0.6	0.4	-	ケズリ	-	-	-	-	-	木取り:柾目 幅・厚み一定
92	328		D-SD1	木製品	匙	12.1	上端部0.6 下端部2.2	上端部0.4 下端部0.4	-	ケズリ	-	-	-	-	-	木取り:柾目 摩耗あり
92	329		D-SD1	木製品	用途不明	9.3	3.0	1.0	-	ケズリ 孔(1ヶ所) 折り取り	-	-	-	-	-	木取り:柾目
92	330		D-SD1	木製品	曲物底板	[20.0]	[8.5]	1.0	-	釘孔(1ヶ所) 小孔(2ヶ所?) 表裏:刃物痕	-	-	-	-	-	木取り:柾目 表面と先端焦げ著しい 2次使用か？
92	331		D-SD1	木製品	折敷	30.2	[27.7]	0.6	-	裏:刃物痕 側板:キザミ 結合孔(3ヶ所) 綴紐 側板痕	-	-	-	-	-	木取り:柾目
92	332		D-SD1	木製品	折敷底板	29.5	[4.6]	0.6	-	裏:刃物痕 結合孔(一部分)	-	-	-	-	-	木取り:柾目
92	333		D-SD1	木製品	折敷底板	26.5	[6.0]	0.3	-	結合孔 (2ヶ所) 側板痕	-	-	-	-	-	木取り:柾目
92	334		D-SD1	木製品	用途不明	[11.9]	3.5	0.4	-	ケズリ 穿孔(1ヶ所)	-	-	-	-	-	木取り:柾目
92	335		D-SD1	木製品	用途不明	14.4	[3.3]	0.8	-	ケズリ 表:刃物痕 裏:刃物痕 穿孔(貫通3ヶ所/未貫通20ヶ所)	-	-	-	-	-	木取り:柾目 2次使用か？
93	336		D-SD22	土製品	土錘	[3.9]	1.6	1.4	-	ナデ	孔内:棒などを抜いた際の擦痕	密	良	2.5Y8/2 灰白	-	孔径:0.4cm 重さ:7.1g 磨耗あり
94	337		D-SE33	灰釉陶器	椀	-	(7.8)	[1.7]	0-53号窯式	ロクロナデ ユビナデ 貼付高台	ロクロナデ	密	良	5Y7/1 灰白	-	降灰あり 摩耗あり
94	338		D-SE33	陶器	内耳鍋か	(19.5)	-	[7.1]	古瀬戸 後期様式 Ⅳ期新か	ロクロナデ	ロクロナデ	密	良	7.5YR4/2 灰褐	-	径2mm程の小石を含む スス付着
94	339		D-SE33	陶器	天目茶碗	(10.4)	-	[2.7]	古瀬戸 後期様式 Ⅰ期	ロクロナデ 施釉	ロクロナデ 施釉	密	良	釉薬:2.5Y4/4 オリーブ褐 胎土:2.5Y8/1 灰白	鉄釉	
94	340		D-SE33	陶器	直縁大皿	-	-	[3.5]	古瀬戸 後期様式 Ⅳ期	ロクロナデ 施釉	ロクロナデ 施釉	密	良	釉薬:10YR3/3 暗褐 胎土:2.5Y8/2 灰白	錆釉	
94	341		D-SE33	木製品	くさび	13.9	上端部1.6 下端部0.8	最大0.9上端部0.8 下端部0.6	-	ケズリ 割取り	-	-	-	-	-	木取り:板目
94	342		D-SE33	木製品	くさび	12.1	上端部4.0 下端部2.6	最大1.6上端部1.4 下端部0.7	-	ケズリ 割取り 切断	-	-	-	-	-	木取り:柾目 自然面あり
94	343		D-SE33	木製品	くさび	13.5	上端部3.8 下端部3.6	上端部1.5 下端部0.9	-	ケズリ 圧痕？ 割取り 切断	-	-	-	-	-	木取り:柾目
94	344		D-SE33	木製品	くさび	13.2	上端部5.2 下端部4.6	最大1.8 上端部1.6 下端部0.6	-	ケズリ 割取り 切断	-	-	-	-	-	木取り:柾目 自然面あり

図版番号	掲載番号	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	遺構	種別	器種	法量（cm）（ ）は推定、[ ]は残存			土器型式・年代	調整・技法等		胎土	焼成	色調	釉薬	備考
						口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ		外面	内面					
94	345		D-SE33	木製品	くさび	14.2	上端部 2.6 下端部 2.5	最大 1.9上端部 1.6 下端部 0.8	－	ケズリ 割取り 切断	－	－	－	－	－	木取り:柾目
94	346		D-SE33	木製品	くさび	14.9	上端部 4.1 下端部 4.0	上端部 1.6 下端部 0.7	－	ケズリ 割取り 切断	－	－	－	－	－	木取り:柾目
94	347		D-SE33	木製品	くさび	14.9	上端部 4.1 下端部 3.9	最大 1.5上端部 1.2 下端部 0.8	－	ケズリ 割取り 切断	－	－	－	－	－	木取り:柾目
94	348		D-SE33	木製品	くさび	15.0	上端部 2.8 下端部 2.7	最大 2.2上端部 2.0 下端部 0.7	－	ケズリ 割取り 切断	－	－	－	－	－	木取り:柾目
94	349		D-SE33	木製品	くさび	13.5	上端部 4.7 下端部 3.8	最大厚 1.6 上端部 1.5 下端部 0.7	－	ケズリ 割取り 切断	－	－	－	－	－	木取り:柾目
94	350		D-SE33	木製品	くさび	13.6	上端部 4.0 下端部 4.0	最大 1.9上端部 1.2 下端部 0.7	－	ケズリ 割取り 切断	－	－	－	－	－	木取り:柾目
94	351		D-SE33	木製品	くさび	16.6	上端部 4.3 下端部 3.4	最大 1.4上端部 1.4 下端部 0.6	－	ケズリ 割取り 切断	－	－	－	－	－	木取り:柾目
94	352		D-SE33	木製品	くさび	15.1	上端部 [3.4] 下端部 [3.3]	最大 [2.4] 上端部 [2.4] 下端部 [0.7]	－	ケズリ 割取り 切断	－	－	－	－	－	木取り:柾目 自然面あり
94	353		D-SE33	木製品	くさび	15.5	上端部 4.6 下端部 4.0	最大 1.6上端部 1.4 下端部 1.0	－	ケズリ 割取り 切断	－	－	－	－	－	木取り:柾目 圧力がかかって変形？ 使用痕か？
94	354		D-SE33	木製品	くさび	14.4	上端部 4.6 下端部 4.0	上端部 1.1 下端部 0.9	－	ケズリ 割取り 切断	－	－	－	－	－	木取り:板目 自然面あり
95	355		D-SK2	土師器	甕	－	－	[2.7]	－	ナナメハケ ナデ 粘土紐輪積痕	ヨコハケ ナデ	密	良	5YR6/6 橙	－	
95	356		D-SK2	土製品	土錘	[3.8]	1.3	1.4	－	ナデ ユビオサエ	孔内: 調整不明	密	良	10YR8/2 灰白	－	孔径:0.4cm 重さ:6.3g
95	357		D-SK3	土師器	甕	(20.4)	－	[2.8]	－	ナナメハケ ヨコナデ	ヨコハケ ヨコナデ	密	良	7.5YR8/2 灰白	－	
95	358		D-SK3	陶器	陶丸	2.2	2.2	2.1	－	ナデ ユビオサエ	－	密	良	5Y8/1 灰白	－	重さ:11.9g
95	359		D-SK3	木製品	折敷底板	26.5	[4.0]	0.6	－	結合孔(2つ 1組/2ヶ所) 綴紐	－	－	－	－	－	木取り:柾目
95	360		D-SK4	陶器	陶丸	2.2	2.4	2.1	－	ナデ ユビオサエ	－	密	良	5Y8/1 灰白	－	重さ:11.5g
95	361		D-SK32	山茶碗	碗	(11.2)	－	[2.1]	東濃型 生田2号窯式	ロクロナデ	ロクロナデ	密	良	10YR8/4 浅黄橙	－	
95	362		D-SK32	陶器	縁釉小皿	(10.4)	－	[2.1]	古瀬戸 後期様式	ロクロナデ 施釉	ロクロナデ 施釉	密	良	釉薬: 7.5YR5/3 にぶい褐 胎土: 2.5Y8/3 淡黄	鉄釉	
95	363		D-SK32	陶器	縁釉小皿	－	4.3	[1.4]	古瀬戸 後期様式	ロクロナデ 回転糸切痕 施釉	ロクロナデ 施釉	密	良	釉薬: 5Y7/4 浅黄 胎土: 2.5Y8/1 灰白	灰釉	

図版番号	掲載番号	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	遺構	種別	器種	法量（cm）（ ）は推定、[ ]は残存			土器型式・年代	調整・技法等		胎土	焼成	色調	釉薬	備考
						口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ		外面	内面					
95	364		D-SK32	陶器	玉縁壺	14.5	13.0	23.1	常滑 10型式	ヨコナデ ヘラナデ (ヨコ) ケズリ(ヨコ) ヘラ描き記号文 接合痕 ゲタ痕	ヨコナデ ナデ ユビオサエ 粘土紐輪積痕	密	良	5YR3/2 暗赤褐	－	口縁部に使用による摩耗あり スス付着
95	365		D-SK32	陶器	把手	(2.1)	(6.2)	[4.8]	近世	ロクロナデ 施釉	ロクロナデ	密	良	釉薬:5YR4/3 にぶい赤褐 胎土:2.5Y6/1 黄灰	鉄釉	
95	366		D-SK32	青磁	碗	－	4.1	[2.7]	13世紀 初頭前後～ 後半か	連弁文 削り出し高台 施釉	ロクロナデ 施釉	密	良	釉薬: 2.5GY6/1 オリーブ灰 胎土: N8/ 灰白	青磁	龍泉窯系 青磁碗Ⅱ類か 高台内釉付着
95	367		D-SK32	土製品	土錘	[7.8]	4.8	4.7	－	ナデ ユビオサエ	孔内:棒などを抜いた際の擦痕	密	良	10YR8/3 浅黄橙	－	孔径:1.5cm 重さ:164.4g 径2mm程の小石を含む 端部2ヶ所窪む
96	368		D-SK34	陶器	片口鉢	－	－	[6.4]	常滑 10型式	ロクロナデ ユビオサエ	ロクロナデ	密	良	7.5YR5/4 にぶい褐	－	片口鉢Ⅱ類 摩耗あり
96	369		D-SK36	山茶碗	碗	(16.7)	(7.9)	5.2	尾張型 第5型式	ロクロナデ ユビナデ 回転糸切痕 貼付高台	ロクロナデ	密	良	5Y7/1 灰白		摩耗あり
96	370		D-SK36	土師器	羽釜	(20.2)	－	[5.2]	15世紀後半か	ナナメハケ ヨコハケ ヨコナデ 粘土紐輪積痕	ヨコナデ ナデ	密	良	10YR8/3 浅黄橙	－	被熱あり スス付着
96	371		D-SK40	鉄製	不明	[4.0]	0.9	0.6	－	－	－	－	－	－	－	重さ:3.7g
96	372		D-SK40	木製品	漆椀	(14.4)	－	[5.2]	－	黒漆 朱漆文様	赤漆					
96	373		D-SK41	須恵器	杯蓋	(13.3)	－	[2.8]	0-10号窯式	ロクロナデ ケズリ	ロクロナデ	密	やや不良	2.5Y5/1 黄灰	－	摘部分欠損
96	374		D-SK97	須恵器	甕	－	－	[1.6]	8世紀代	ヨコナデ	ヨコナデ	密	良	N5/ 灰	－	
97	375		D-SK103	山茶碗	小皿	(9.6)	－	[1.9]	尾張型 第4・5型式	ロクロナデ	ロクロナデ	密	良	2.5Y7/1 灰白	－	径1mm程の小石を含む 降灰あり
97	376		D-SK113	須恵器	杯蓋	(16.5)	－	[2.4]	C-2号窯式	ロクロナデ ケズリ	ロクロナデ	密	やや不良	5YR6/3 にぶい橙 口縁部: N5/ 灰	－	摘部分欠損
97	377		D-SK168	灰釉陶器	椀	－	(8.1)	[1.9]	－	ロクロナデ ユビナデ 貼付高台	ロクロナデ	密	良	2.5Y8/1 灰白	－	
97	378		D-SK244	須恵器	有台杯	－	(11.2)	[1.9]	C-2号窯式	ロクロナデ ユビナデ 回転糸切後 ケズリ 貼付高台	ロクロナデ	密	良	2.5Y6/1 黄灰	－	使用による摩耗あり
97	379		D-SK244	山茶碗	小皿	8.2	3.8	2.3	尾張型 第5型式	ロクロナデ 回転糸切後 ナデ 板目状圧痕	ロクロナデ 指圧痕	密	良	2.5Y7/1 灰白	－	摩耗あり
97	380		D-SK244	山茶碗	碗	－	(6.7)	[3.1]	尾張型 第5型式	ロクロナデ ユビナデ 籾殻痕 回転糸切痕 貼付高台	ロクロナデ	密	良	2.5Y7/1 灰白	－	径1mm程の小石を含む 摩耗あり
97	381		D-SK244	山茶碗	碗	－	(7.8)	[2.5]	尾張型 第6型式	ロクロナデ ユビナデ 籾殻痕 回転糸切痕 板目状圧痕 貼付高台	ロクロナデ	密	良	N8/ 灰白	－	径1mm程の小石を含む 摩耗あり
97	382		D-SK245	土師器	甕	(19.0)	－	[3.0]	－	ナナメハケ ヨコナデ	ヨコハケ ヨコナデ ナデ	普通	良	5YR7/4 にぶい橙	－	摩耗あり
97	383		D-SK245	土師器	甕	(17.5)	－	[2.9]	－	ナナメハケ ヨコナデ 粘土紐輪積痕	ナナメハケ ヨコハケ ヨコナデ ナデ 粘土紐輪積痕	密	良	2.5YR6/6 橙	－	

図版番号	掲載番号	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	遺構	種別	器種	法量（cm）（ ）は推定、[ ]は残存			土器型式・年代	調整・技法等		胎土	焼成	色調	釉薬	備考
						口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ		外面	内面					
97	384		D-SK245	灰釉陶器	皿	－	(6.3)	[1.1]	H-72号窯式	ロクロナデ ユビナデ 回転糸切痕 貼付高台 底部墨書	ロクロナデ 施釉	密	良	釉薬:10Y7/2 灰白 胎土:5Y8/1 灰白	灰釉	摩耗あり
97	385		D-SK245	山茶碗	碗	－	6.6	[2.3]	尾張型 第5型式	ロクロナデ ユビナデ 籾殻痕 回転糸切痕 貼付高台	ロクロナデ	密	良	2.5Y6/1 黄灰	－	スス付着 摩耗あり
97	386		D-SK245	山茶碗	碗	－	6.5	[2.8]	尾張型 第5型式	ロクロナデ ユビナデ 籾殻痕 回転糸切後 ナデ 貼付高台	ロクロナデ	密	良	10YR8/1 灰白	－	径3mm程の小石を含む
97	387		D-SK245	陶器	羽釜	－	－	[9.5]	12世紀後半	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ユビオサエ 粘土紐輪積痕	密	良	5YR4/2 灰褐	－	常滑産
97	388		D-SK245	土製品	土錘	[7.8]	4.9	4.5	－	ナデ ユビオサエ	孔内:棒などを抜いた際の擦痕	密	良	10YR8/1 灰白	－	孔径:1.5cm 重さ:149.3g
97	389		D-SP189	灰釉陶器	深椀	－	8.0	[4.0]	H-72号窯式	ロクロナデ ユビナデ 回転糸切痕 貼付高台	ロクロナデ 施釉	密	良	釉薬: 2.5Y6/2 灰黄 胎土: 2.5Y7/1 灰白	灰釉	
98	390		表土	陶器	縁釉小皿	10.0	4.3	2.5	古瀬戸 後期様式 Ⅳ期新	ロクロナデ 回転糸切痕 施釉	ロクロナデ 施釉	密	良	釉薬: 7.5YR4/4 褐 胎土: 5Y8/2 灰白	鉄釉	摩耗あり
98	391		表土	土師器	鍋の把手	[5.4]	3.9	2.1	－	ユビナデ ユビオサエ	ナデ	密	良	10YR8/2 灰白	－	
98	392		表土	土師器	無台杯	(13.4)	6.9	4.2	－	ロクロナデ 回転糸切痕	ロクロナデ	密	良	10YR8/4 浅黄橙	－	
98	393	F2	包含層	須恵器	杯蓋	(11.9)	－	[1.5]	I-17号窯式	ロクロナデ ケズリ	ロクロナデ	密	良	N6/ 灰	－	摘部分欠損
98	394	F2	包含層	陶器	袴腰形 香炉	(11.1)	7.0	5.5	古瀬戸 後期様式 Ⅱ期	ロクロナデ ユビナデ 接合痕 回転糸切痕 施釉	ロクロナデ 釉だれ	密	良	釉薬: 10Y7/2 灰白 胎土: 2.5Y8/1 灰白	灰釉	脚部1ヶ所残存 三脚か 未使用品か
98	395	F2	包含層	陶器	広口壺	(13.8)	－	[6.2]	古瀬戸 中期様式 Ⅲ期	ヨコナデ 印花文 施釉	ヨコナデ ユビオサエ 粘土紐輪積痕 施釉	密	良	釉薬: 2.5Y3/1 黒褐 胎土: 2.5Y8/1 灰白	鉄釉	
98	396	E2	包含層	陶器	広口壺	(21.8)	－	[5.4]	常滑 6a型式	ヨコナデ	ヨコナデ	密	良	5YR6/1 褐灰	－	
98	397	F4	包含層	陶器	羽釜	－	－	[4.6]	12世紀後半	ヨコナデ 粘土紐輪積痕	ヨコナデ 粘土紐輪積痕	密	良	7.5Y4/2 灰オリーブ	－	常滑産
98	398	F2	包含層	土師器	皿	(18.6)	(14.8)	1.7	－	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	密	良	5YR6/6 橙	－	
98	399	F2	包含層	土師器	羽釜	(19.0)	－	[3.7]	14世紀後半 ～15世紀	ナデ ナナメハケ ヨコハケ 穿孔(1ヶ所)	ナデ	密	良	7.5YR8/3 浅黄橙	－	被熱あり
98	400	F2	包含層	土製品	土錘	[3.4]	1.3	1.1	－	ナデ	孔内:棒などを抜いた際の擦痕	密	良	10YR7/3 にぶい黄橙	－	孔径:0.4cm 重さ:4.6g 被熱あり
98	401	F6	包含層	土製品	土錘	6.4	3.7	3.2	－	ナデ ユビオサエ	孔内:棒などを抜いた際の擦痕	密	良	2.5Y8/2 灰白	－	孔径:1.5cm 重さ:80.9g 磨耗あり
98	402	G2	包含層	土製品	土錘	8.3	4.1	4.1	－	ナデ ユビオサエ	孔内:棒などを抜いた際の擦痕	密	良	10YR7/1 灰白	－	孔径:1.4cm 重さ:140.7g
98	403	G4	検出	須恵器	長頸瓶	－	－	[5.6]	O-10号窯式	ロクロナデ 接合痕	ロクロナデ 接合痕	密	良	2.5Y8/1 灰白	－	降灰あり
98	404	F3	検出	土製品	土錘	[5.0]	1.3	[1.2]	－	ナデ	孔内:棒などを抜いた際の擦痕	密	良	7.5YR6/3 にぶい褐	－	孔径:0.5cm 重さ:7.1g 磨耗あり
98	405	D4	排水溝	須恵器	杯蓋	－	－	[2.1]	I-25号窯式	ロクロナデ ケズリ 接合痕	ロクロナデ	密	良	2.5GY7/1 明オリーブ灰	－	摘:宝珠形 摘径:3.0cm
98	406	D2	排水溝	陶器	縁釉小皿	9.7	3.8	2.0	古瀬戸 後期様式 Ⅳ期新	ロクロナデ 回転糸切痕 施釉	ロクロナデ 施釉	密	良	釉薬:7.5Y5/2 灰オリーブ 胎土: 2.5Y8/2 灰白	灰釉	摩耗あり

図版番号	掲載番号	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	遺構	種別	器種	法量（cm）（ ）は推定、[ ]は残存			土器型式・年代	調整・技法等		胎土	焼成	色調	釉薬	備考
						口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ		外面	内面					
98	407	F2	島畑部分	須恵器	平瓶	－	－	[4.0]	8世紀末	ユビナデ ケズリ 貼付高台	降灰により不明瞭	密	良	10YR6/2 灰黄褐	－	釉たまりあり
98	408	F2	島畑部分	白磁	碗	(16.5)	－	[2.0]	11世紀後半～12世紀前半	ロクロナデ 施釉	ロクロナデ 施釉	密	良	釉薬: 5Y7/1 灰白 胎土: 5Y8/1 灰白	透明	
98	409	D10	北壁	山茶碗	小皿	(8.2)	4.2	2.4	尾張型第5型式	ロクロナデ 回転糸切痕	ロクロナデ ユビナデ	密	良	5Y7/1 灰白	－	径3mm程の小石を含む 摩耗あり
99	410		D-SD251	石製品	砥石(荒砥)	[8.4]	8.7	3.9	－	表面: 擦痕残る 裏面: タタキ痕 3面を砥面として使用 上下端は欠損	－	－	－	－	－	砂岩
99	411		D-SD251	鉄製	手斧	7.0	上端部2.9 下端部3.7	上端部1.5 下端部1.3	－	－	－	－	－	－	－	重さ:47.7g 刃先一部残存
99	412		D-SE246	須恵器	有台杯	－	10.2	[1.4]	C-2号窯式	ロクロナデ ユビナデ ケズリ 貼付高台 底部墨書	ロクロナデ	密	やや不良	5Y5/1 灰	－	墨書:「江」
99	413		D-SE246	木製品	曲物側板	直径42.2	箍直径43.4	27.0/0.3～0.6	－	釘孔(2ヶ所) 綴紐	ケビキ痕	－	－	－	－	木取り: 追柾目(側板) 板目(箍)
100	414		D-SE247	木製品	斎串	16.0	2.2	0.2	－	ケズリ 切り込み	－	－	－	－	－	木取り:柾目
100	415		D-SE247	木製品	曲物側板	直径44.9	箍直径46.1	28.0/0.6	－	釘孔(6ヶ所、木釘入り4ヶ所) 綴紐	ケビキ痕	－	－	－	－	木取り: 板目(側板) 板目(箍)
101	416		D-SK204	木製品	串	[20.6]	上端部0.8 下端部0.5	上端部0.4 下端部0.1	－	ケズリ	－	－	－	－	－	木取り:柾目
101	417		D-SK204	木製品	くさび	12.1	5.9	1.9	－	ケズリ 割取り	－	－	－	－	－	木取り:板目 摩耗あり
101	418		D-SK213	陶器	加工円板	2.6	2.6	1.0	－	ナデ	－	密	良	2.5Y6/2 灰黄	－	重さ:8.5g 降灰あり
101	419		D-SK228	山茶碗	碗	(16.6)	7.4	5.7	尾張型第3型式	ロクロナデ ユビナデ 回転糸切痕 貼付高台	ロクロナデ	密	良	2.5Y7/2 灰黄 2.5Y7/1 灰白	－	降灰あり スス付着 摩耗あり
101	420		D-SK228	山茶碗	輪花碗	16.8	7.0	5.9	尾張型第4型式	ロクロナデ ユビナデ 籾殻痕 回転糸切痕 貼付高台 底部墨書	ロクロナデ ユビオサエ 重ね焼痕	密	良	10YR7/1 灰白	－	輪花(3ヶ所) 鉄分付着 降灰あり 摩耗あり
101	421		D-SK229	山茶碗	小皿	7.7	4.4	2.0	尾張型第5型式	ロクロナデ 回転糸切痕	ロクロナデ 指圧痕	密	良	N8/ 灰白	－	降灰あり 摩耗あり
101	422		D-SK229	山茶碗	小皿	－	4.4	[1.9]	尾張型第5型式	ロクロナデ 板目状圧痕 回転糸切痕	ロクロナデ 指圧痕	密	良	2.5Y8/1 灰白	－	降灰あり
101	423		D-SK229	白磁	碗	(13.5)	－	[2.6]	12世紀中頃～後半か	ロクロナデ 施釉	ロクロナデ 施釉	密	良	釉薬: 2.5GY8/1 灰白 胎土: N8/ 灰白	透明	
101	424		D-SK237	山茶碗	小皿	(8.2)	4.0	2.0	尾張型第5型式	ロクロナデ 回転糸切後ナデ 板目状圧痕	ロクロナデ ユビナデ 重ね焼痕	密	良	2.5Y8/2 灰白	－	径2mm程の小石を含む 降灰あり 摩耗あり
101	425		D-SK237	土師器	小皿	9.2	5.0	2.0	－	ロクロナデ 回転糸切痕	ロクロナデ	密	良	10YR7/4 にぶい黄橙	－	スス付着
101	426		D-SK237	陶器	陶丸	2.4	2.2	2.2	－	ナデ ユビオサエ 籾殻痕	－	密	良	N8/ 灰白	－	重さ:12.7g
101	427		D-SK265	土製品	土錘	[3.9]	1.2	1.3	－	ナデ ユビオサエ	孔内:棒などを抜いた際の擦痕	密	良	7.5YR6/4 にぶい橙	－	孔径:0.4cm 重さ:5.3g 径3mm程の小石を含む
101	428		D-SP240	木製品	杭	[16.1]	5.0	5.2	－	ケズリ	－	－	－	－	－	木取り:芯持ち材

第５章　自然科学分析

第１節　第10次調査

１．放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ
伊藤　茂・加藤和浩・廣田正史・佐藤正教・山形秀樹・Zaur Lomtatidze・小林克也

（１）はじめに

愛知県名古屋市の千音寺遺跡第10次調査で採取された試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。なお、同一試料を用いて種実同定も行われている（種実同定の項参照）。

（２）試料と方法

試料は、井戸跡であるC-SE2から出土した生の種実（ヒョウタン仲間果実）１点（試料No.1:PLD-47564）である。なお、発掘調査所見ではC-SE2は古代と考えられている。測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS:NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}Ｃ濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}Ｃ年代、暦年代を算出した。

第２表　測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-47564	試料No.1 遺構:C-SE2	種類:生の種実（ヒョウタン仲間果実） 状態:dry	超音波洗浄 有機溶剤処理:アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸:1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム:1.0 mol/L,塩酸:1.2 mol/L）

（３）結果

第３表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}Ｃ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した^{14}Ｃ年代、図１に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下１桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}Ｃ年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}Ｃ年代（yrBP）の算出には、^{14}Ｃの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した^{14}Ｃ年代誤差（±１σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の^{14}Ｃ年代がその^{14}Ｃ年代誤差内に入る確率が68.27％であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

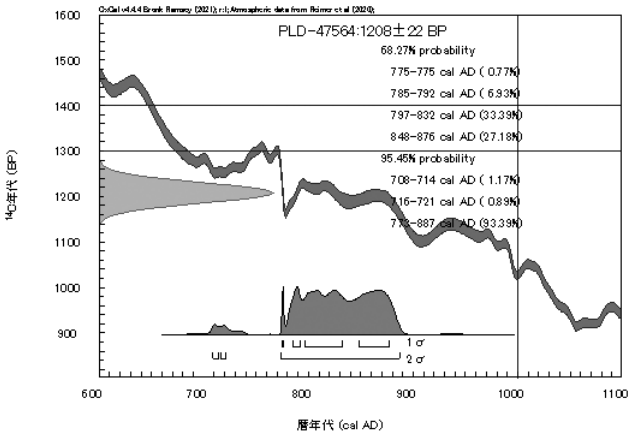
暦年較正とは、大気中の^{14}Ｃ濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}Ｃ年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}Ｃ濃度の変動、および半減期の違い（^{14}Ｃの半減期5730±40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}Ｃ年代の暦年較正にはOxCal4.4（較正曲線データ:IntCal20）を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された^{14}Ｃ年代誤差に相当する68.27％信頼限界の暦年代範囲であり、同様に２σ暦年代範囲は95.45％信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年

代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

第３表　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	δ ^{13}C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP ± 1σ)	^{14}C 年代 (yrBP ± 1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-47564 試料No.1	-29.91 ± 0.46	1208 ± 22	1210 ± 20	775-775 cal AD (0.77%) 785-792 cal AD (6.93%) 797-832 cal AD (33.39%) 848-876 cal AD (27.18%)	708-714 cal AD (1.17%) 716-721 cal AD (0.89%) 773-887 cal AD (93.39%)



第102図　暦年校正結果

（４）考察

井戸跡C-SE2から出土した生の種実（試料No.1:PLD-47564）は、２σ暦年代範囲（確率95.45%）で708-714 cal AD (1.17%)、716-721 cal AD (0.89%)、773-887 cal AD (93.39%)となり、８世紀初頭～９世紀後半を示した。これは、飛鳥時代末・奈良時代初～平安時代前期に相当する。試料は生の種実であり、測定結果は種実の結実年代を示す。

参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の^{14}C年代編集委員会編「日本先史時代の^{14}C年代」:3-20, 日本第四紀学会.

Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). Radiocarbon, 62(4), 725-757, doi:10.1017/RDC.2020.41. https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41 (cited 12 August 2020)

２．第 10 次調査から出土した大型植物遺体

バンダリ　スダルシャン（パレオ・ラボ）

（１）はじめに

愛知県名古屋市中川区富田町に所在する千音寺遺跡第10次調査において、土坑や井戸跡より採取された大型植物遺体の同定を行い、当時の利用植物について検討した。なお、一部の試料については放射性炭素年代測定も行われている（第５章第１節１）。

（２）試料と方法

試料は、肉眼で確認・回収された現地取り上げ試料の２試料で、土坑C-SK31から採取された１試料（試料№2）と、古代の井戸跡C-SE2の曲物内から採取された１試料（試料№3）である。

同定および計数は、肉眼および実体顕微鏡下で行った。計数の方法は、完形または一部が破損していても１個体とみなせるものは完形として数え、１個体に満たないものは破片とした。

（３）結果

同定した結果、木本植物のモモ核と、草本植物のヒョウタン仲間果実の、計２分類群が見いだされた（第４表）。

以下に、出土した大型植物遺体を遺構別に記載する。

第４表　第10次調査において出土した大型植物遺体

		遺物 No.	試料№.2	試料№.3
		遺構	C-SK31	C-SE2
			土坑	井戸跡
		採取位置	南	曲物内
		時期	古　代	
分類群		採取方法	現地取上げ	
モモ	核		(2)	
ヒョウタン仲間	果実			(4)

（括弧内は破片数）

土　坑C-SK31:モモの破片が２点得られた。

井戸跡C-SE2:ヒョウタン仲間の破片が４点得られた。

以下に、得られた分類群の記載を行い、第103図に写真を示して同定の根拠とする。なお、分類群の学名は米倉・梶田（2003-）に準拠した。

①モモ　*Prunus persica*（L.）Batsch　核　バラ科　（試料№2）

暗褐色で、完形ならば上面観は両凸レンズ形、側面観は楕円形で先が尖る。表面に不規則な深い皺がある。また、片側の側面には縫合線に沿って深い溝が入る。残存高17.8mm、残存幅13.2mm。

②ヒョウタン仲間　*Lagenaria siceraria*（Molina）Standl.　果実　ウリ科　（試料№3）

褐色で、破片のため全体形は不明。表面は平滑で、やや光沢がある。壁は厚い。花梗痕もしくは花落ち部分が残存している。残存長57.8mm、残存幅68.0mm、厚さ6.5mm。

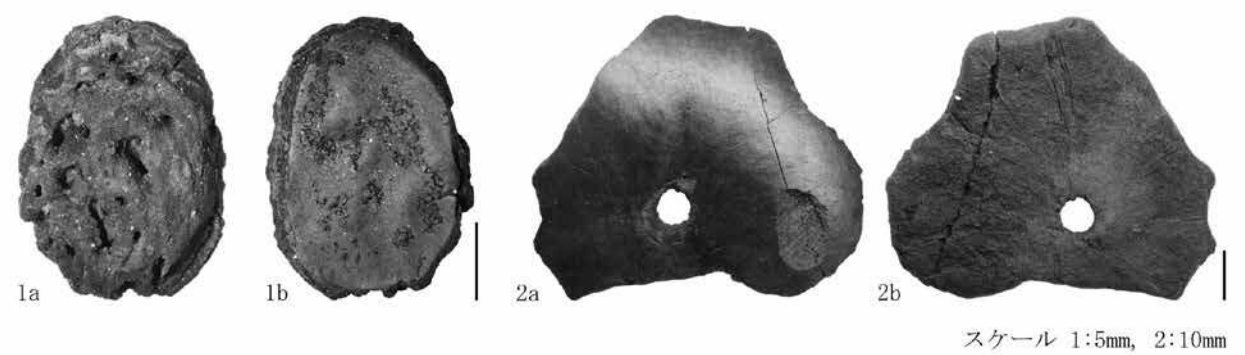
（４）考察

古代の井戸跡C-SE2の曲物内からは、栽培植物で畑作物のヒョウタン仲間の果実が得られた。ヒョウタン仲間は、果実を加工して、容器などに利用される。ただし、今回得られた果実は破片であり、臍も残存しておらず、全体形は不明であった。

土坑C-SK31からは、栽培植物で果樹のモモの核が得られた。モモ核は、果肉を食べた後に、食用にならない核の部分が廃棄され、土坑に堆積した可能性がある。

引用文献

米倉浩司・梶田　忠（2003-）BG Plants 和名－学名インデックス（YList），http://ylist.info



１．モモ核（土坑C-SK31、試料№2）　２．ヒョウタン仲間果実（井戸跡C-SE2、試料№3）

第103図　第10次調査において出土した大型植物遺体

３．第 10 次調査跡出土木製品の樹種同定

小林克也（パレオ・ラボ）

（１）はじめに

愛知県名古屋市の千音寺遺跡の第10次調査で出土した木製品の樹種同定を行った。

（２）試料と方法

試料は、いずれも古代の井戸跡である、A-SE14、A-SE35、B-SE86、C-SE2から出土した木製品、計８点である。

樹種同定は、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）について、カミソリで薄い切片を切り出し、ガムクロラールで封入して永久プレパラートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡にて検鏡および写真撮影を行なった。

（３）結果

同定の結果、いずれの試料も針葉樹のヒノキであった。同定結果を第５表に示す。

第５表　第10次調査出土木製品の樹種同定結果一覧

掲載番号	出土遺構	層位	器種	樹種	木取り	時期
5	A-SE35	3	曲物側板	ヒノキ	板目	古代
15	A-SE14	3	底板か？	ヒノキ	板目	古代
126	B-SE86	3	底板か？	ヒノキ	柾目	古代
196	C-SE2		曲物側板	ヒノキ	板目	古代
197	C-SE2		井戸枠部材	ヒノキ	芯持丸木	古代
198	C-SE2		井戸枠部材	ヒノキ	芯持丸木	古代
199	C-SE2		井戸枠部材	ヒノキ	板目	古代
200	C-SE2		井戸枠部材	ヒノキ	板目	古代

以下に、同定された材の特徴を記載し、第104図に光学顕微鏡写真を示す。

①ヒノキ　*Chamaecyparis obtusa*（Siebold et Zucc.）Endl.　ヒノキ科　第104図　1a-1c(掲載No.126)、2a-2c(掲載No.199、3a-3c(No.197)

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は薄く、早材から晩材への移行は急である。放射組織は単列で、高さ１～15列である。分野壁孔はトウヒ～ヒノキ型で、１分野に２個みられる。

ヒノキは福島県以南の暖温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。材はやや軽軟で加工しやすく、強度に優れ、耐朽性が高い。

（４）考察

同定の結果、試料はいずれもヒノキであった。ヒノキは木理通直でまっすぐに生育し、加工性が良い樹種である（伊東ほか，2011）。底板や曲物、井戸枠部材には、まっすぐで加工性が良いヒノキが選択利用されていた可能性が考えられる。

愛知県内の平安時代頃の木製品では、曲物にも井戸枠にも、ヒノキが多く利用されており（伊東・山田編，2012）、傾向は一致する。

引用文献

伊東隆夫・佐野雄三・安部　久・内海泰弘・山口和穂（2011）日本有用樹木誌．238p，海青社.

伊東隆夫・山田昌久編（2012）木の考古学―出土木製品用材データベース―．449p，海青社.

４．繊維製品の素材同定

黒沼保子（パレオ・ラボ）

（１）はじめに

千音寺遺跡第10次調査で出土した編物と思われる植物素材の束１点について、樹脂包埋法による素材同定を行った。

（２）試料と方法

試料は、C-SE2遺構の曲物内から出土した編物と思われる植物の素材束である。試料は泥ごと取り上げられており、水洗して植物素材束を抽出した（第105図-３～５）。

まず肉眼と実体顕微鏡で試料を観察し、樹脂包埋用に一部を採取した。樹脂包埋では、アセトンの上昇系列で脱水処理を行なった後、エポキシ樹脂に包埋した。樹脂包埋試料は、ミクロトームを用いて切片を作製し､プレパラートに封入した。プレパラートは光学顕微鏡下で観察し､現生標本と比較して同定を行った。プレパラートは、パレオ・ラボに保管されている。

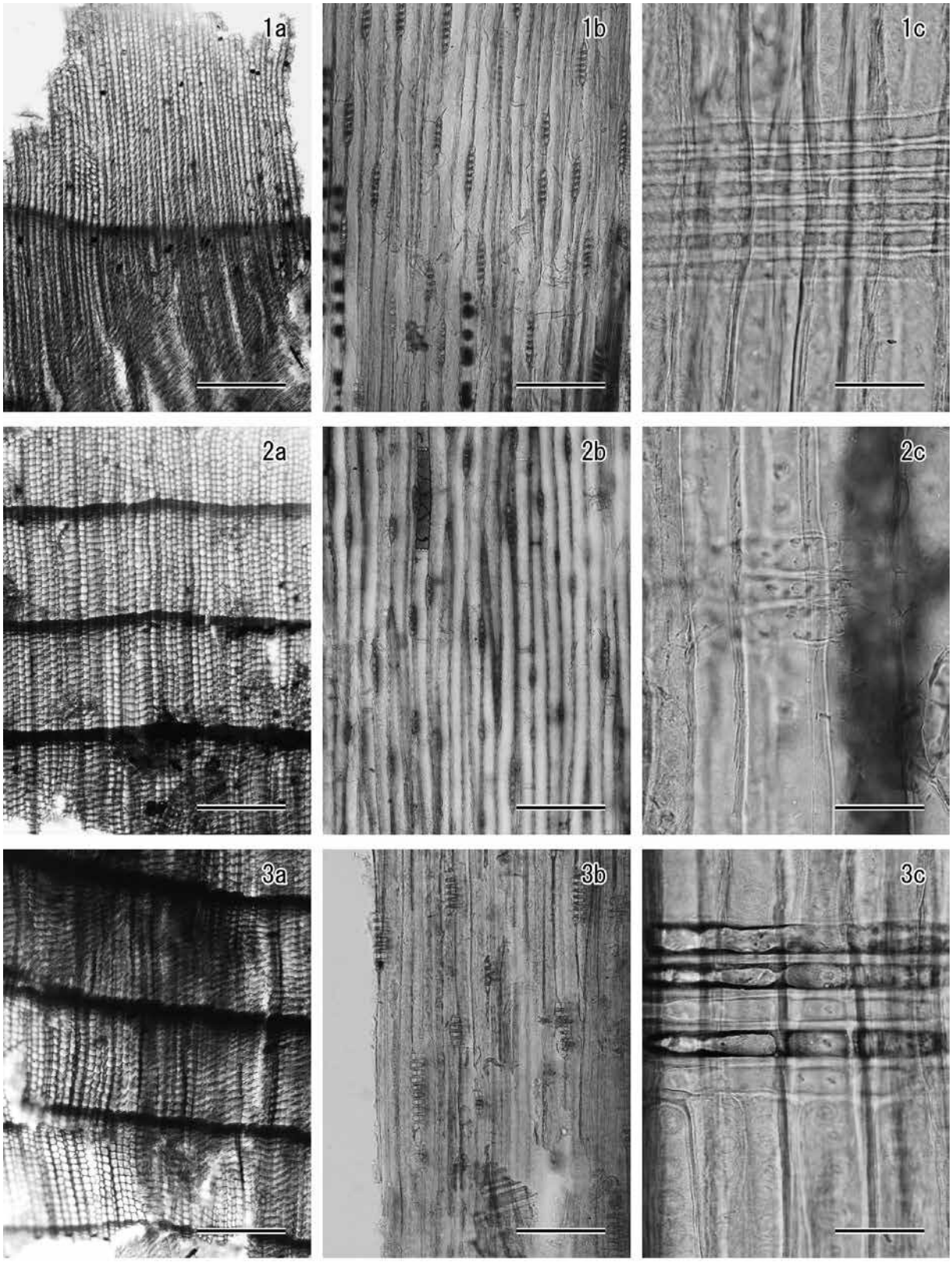
（３）結果

同定の結果、試料はタケ亜科であった。結果を第６表に示す。素材束には、加工や編組の痕跡は確認できなかった。素材は幅５㎜以下で、厚さは１～２㎜ほどである。結果を第６表に示す。

次に、素材植物の特徴と同定根拠を示す。また、試料の光学顕微鏡写真を第105図に示す。

①タケ亜科　Subfam. *Bambusoideae*　イネ科　第105図　1a-1c、2a-2c　（試料№4）

試料は、横断面が扁平なテープ状で、幅５㎜、厚さ１㎜ほどである。表皮は薄く、下表皮組織は数細胞層で、下表皮と中心部の間に維管束がまばらに散在する。維管束はややつぶれているが、中心部側に現生木部、その外側両側にそれぞれ１本の大きな丸い後生木部道管、原生木部の反対側の表皮側にひとかたまりの篩部をもつ、いわゆるイネ科型の維管束である。中心部の空隙の有無は不明である。また、維管束周囲の繊維組織である維管束鞘が発達している。



1a-1c．ヒノキ(掲載No.126)　2a-2c．ヒノキ(掲載No.199)　3a-3c．ヒノキ(掲載No.196)

a：横断面(スケール=500 μm)　b：接線断面(スケール=200 μm)　c：放射断面(スケール=50 μm)

第104図　第10次調査出土木製品の光学顕微鏡写真

第６表　植物束の素材同定

遺跡略号	遺物番号	遺構番号	取り上げ年月日	出土遺物	出土位置	素材	素材幅	厚さ
SNJ 10 次	試料№.4	C-SE2	2022/3/17	編物	曲物内	タケ亜科	5mm	1 ～ 2mm

（４）考察

素材束は、加工や編組の痕跡は確認できなかった。もとから編組ではないのか、埋没の段階で解けたのかは不明である。素材は幅５mm以下、厚さ１～２mmほどで、組織の表皮に厚みがないため、小径のササ類の可能性がある。維管束の周囲の維管束鞘が発達しているため、ヨシなどのイネ科の草本ではないと思われる。

５．第 10 次調査出土の動物遺体

三谷智広（パレオ・ラボ）

（１）はじめに

千音寺遺跡第10次調査において出土した動物遺体の同定結果を報告する。

（２）試料と方法

試料は、C-SK8から出土した動物骨１点である。脆弱なため、土ごと取り上げられており、室内でクリーニング作業を行った。クリーニングは、骨をパラロイドＢ-72で強化し、骨周辺の土を竹ぐしや刷毛などを使い除去した。クリーニング後の試料を肉眼で観察し、標本との比較により分類群を同定した。

（３）結果

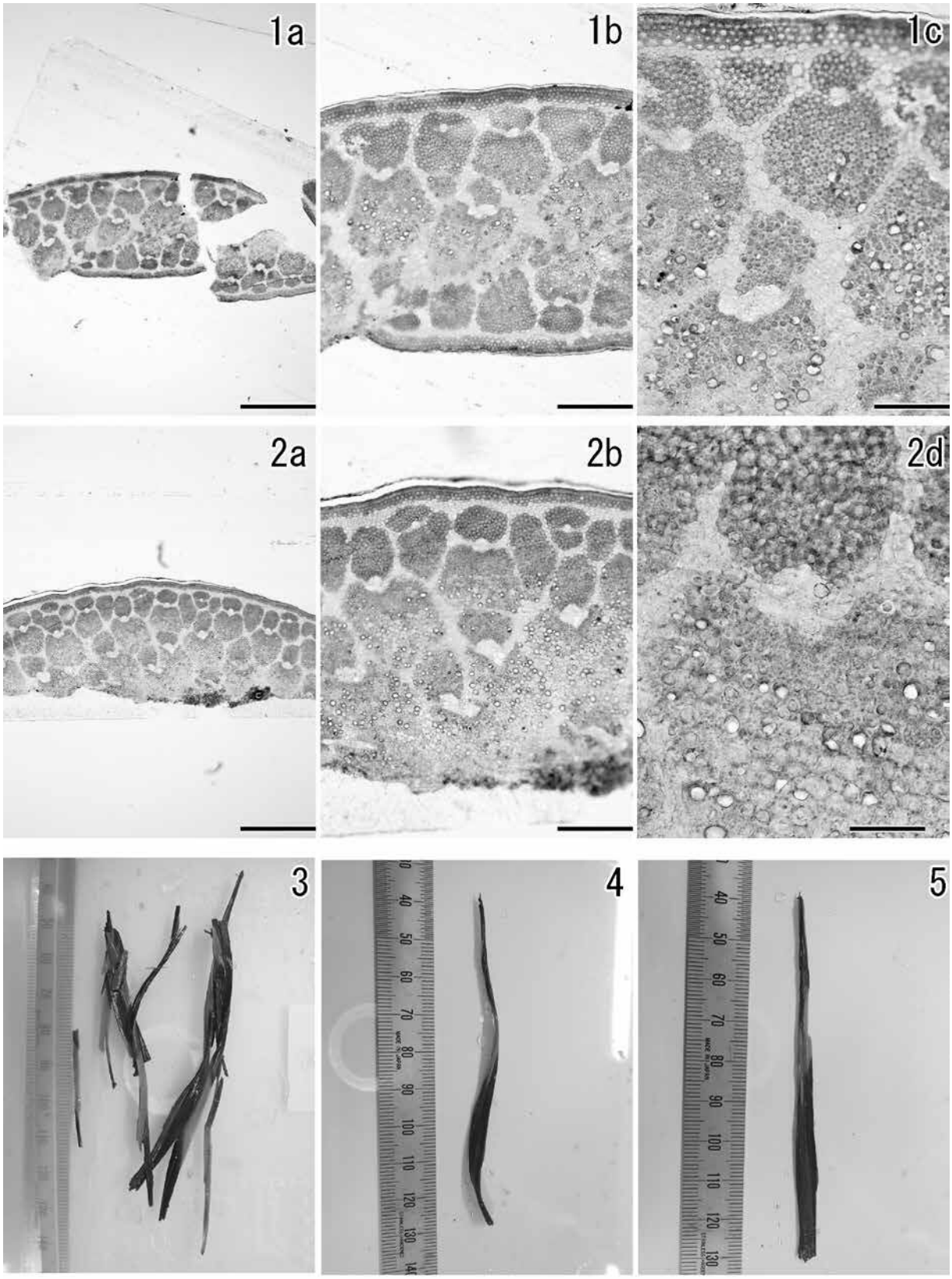
同定結果を第７表に示した。試料は、ウマの左下顎骨である。頬側の下顎体は消失しており、舌側の下顎体は保存状態は悪いが残存している。臼歯は、第３前臼歯から第３後臼歯が残存する。第１後臼歯の歯冠高は34.0mmであり、ウマの歯冠高と年齢の相関表（松井，2008）によれば、推定年齢は11～12才と推定される。

第７表　千音寺遺跡出土動物遺体の同定結果

試料番号	遺構	分類群	左右	部位	備　　考
試料№.5	C-SK8	ウマ	左	下顎骨	第３前臼歯～第３後臼歯残存

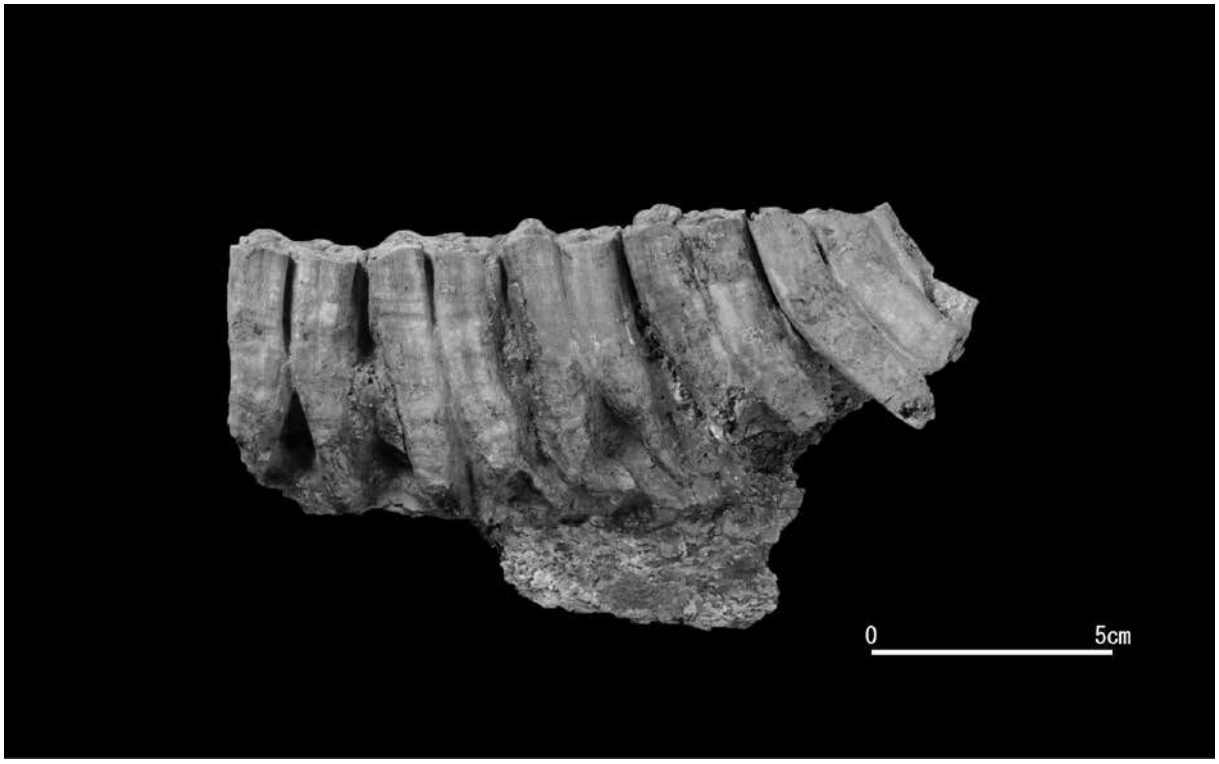
引用文献

松井　章（2008）動物考古学．312p，京都大学学術出版会．

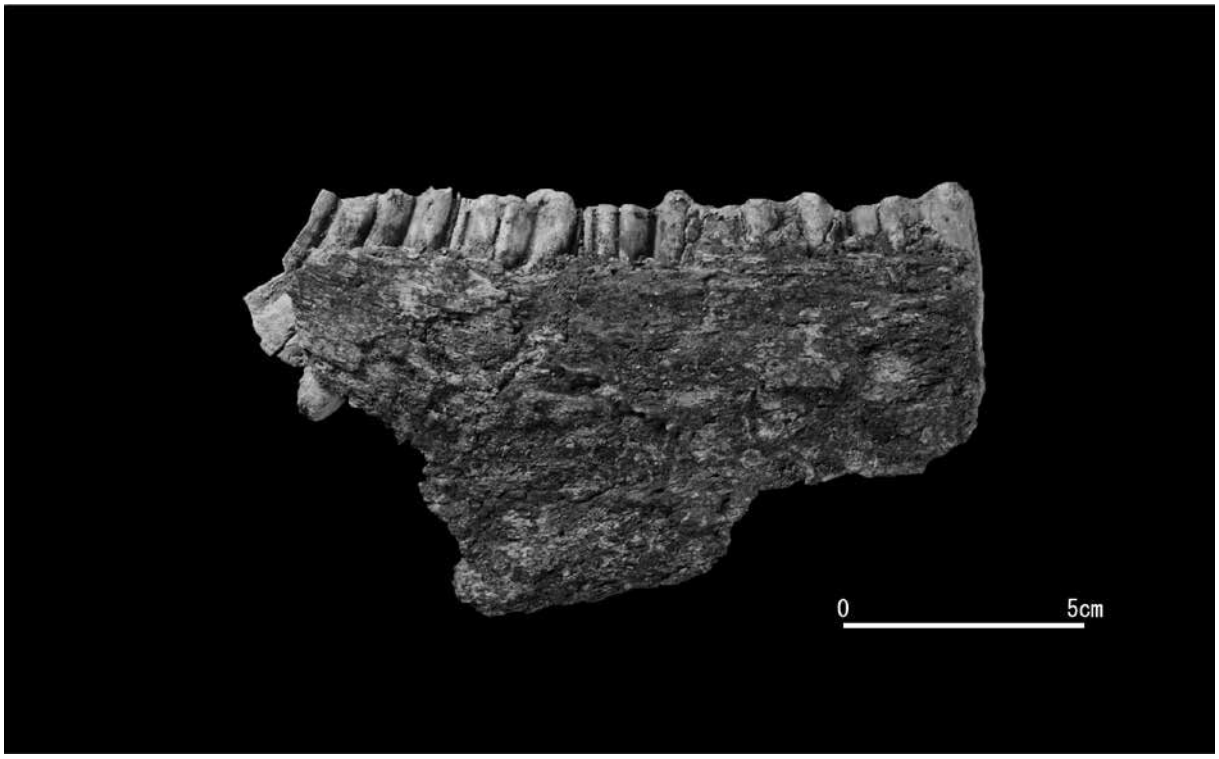


1a-1c．タケ亜科（試料№4-1）　2a-2d．タケ亜科（試料№4-2）　３．水洗後の試料写真
４．試料写真（試料№4-1）　５．（試料№4-2）
a：スケール=500μm　b：スケール=200μm　c：スケール=50μm　d：スケール=200μm

第105図　素材束の光学顕微鏡写真と試料写真



第106図　第10次調査出土のウマ左下顎骨（頬側）



第107図　第10次調査出土のウマ左下顎骨（舌側）

第２節　第11次調査

１．放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ

伊藤　茂・加藤和浩・廣田正史・佐藤正教・山形秀樹・Zaur Lomtatidze・小林克也

（１）はじめに

愛知県名古屋市の千音寺遺跡第11次調査から出土した試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。なお、同一試料を用いて種実同定も行われている(種実同定の項参照)。

（２）試料と方法

試料は、井戸跡であるD-SE247から出土した生の種実（ヒョウタン仲間果実）１点（試料No.6:PLD-47565)である。発掘調査所見では､D-SE247は古代と考えられている。測定試料の情報､調製データは第８表のとおりである。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS:NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}Ｃ濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}Ｃ年代、暦年代を算出した。

第８表　測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-47565	試料No.6 遺構:D-SE247	種類：生の種実（ヒョウタン仲間果実） 状態:dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸:1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム:1.0 mol/L, 塩酸:1.2 mol/L)

（３）結果

第９表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}Ｃ)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した^{14}Ｃ年代、第108図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下１桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}Ｃ年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}Ｃ年代（yrBP）の算出には、^{14}Ｃの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した^{14}Ｃ年代誤差（±１σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の^{14}Ｃ年代がその^{14}Ｃ年代誤差内に入る確率が68.27％であることを示す。

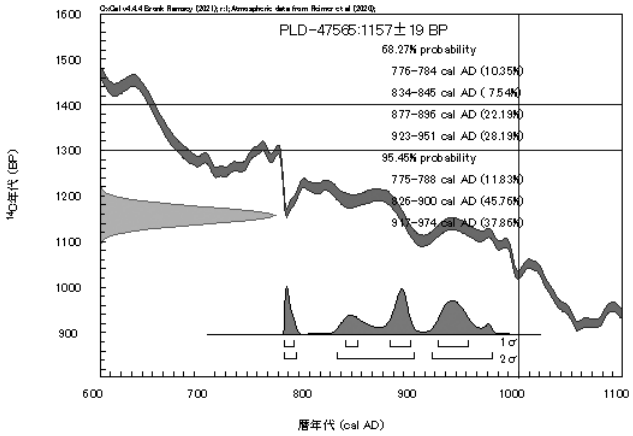
なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の^{14}Ｃ濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}Ｃ年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}Ｃ濃度の変動､および半減期の違い（^{14}Ｃの半減期5730±40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}Ｃ年代の暦年較正には0xCal4.4（較正曲線データ:IntCal20）を使用した。なお、１σ暦年代範囲は、0xCalの確率法を使用して算出された^{14}Ｃ年代誤差に相当する68.27％信頼限界の暦年代範囲であり、同様に２σ暦年代範囲は95.45％信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}Ｃ年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

第９表　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	δ ^{13}C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP ± 1 σ)	^{14}C 年代 (yrBP ± 1 σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
PLD-47565 試料No.6	-26.65 ± 0.14	1157 ± 19	1155 ± 20	776-784 cal AD (10.35%) 834-845 cal AD (7.54%) 877-896 cal AD (22.19%) 923-951 cal AD (28.19%)	775-788 cal AD (11.83%) 826-900 cal AD (45.76%) 917-974 cal AD (37.86%)



第108図　暦年校正結果

（４）考察

井戸跡D-SE247から出土した生の種実（試料No.6:PLD-47565）は、２σ暦年代範囲（確率95.45％）で775-788 cal AD (11.83％)、826-900 cal AD (45.76％)、917-974 cal AD (37.86％)となり、８世紀後半～10世紀後半を示した。これは、飛鳥時代～平安時代前期に相当する。試料は生の種実であり、測定結果は種実の結実年代を示す。

発掘調査所見ではD-SE247は古代と考えられており、調査所見と測定結果は整合的である。

参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(１), 337-360.

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の^{14}C年代編集委員会編「日本先史時代の^{14}C年代」:3-20, 日本第四紀学会.

Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). Radiocarbon, 62(4), 725-757, doi:10.1017/RDC.2020.41. https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41 (cited 12 August 2020)

２．第 11 次調査から出土した大型植物遺体

バンダリ スダルシャン（パレオ・ラボ）

（１）はじめに

愛知県名古屋市中川区富田町に所在する千音寺遺跡第11次調査の土坑や井戸跡より採取された大型植物遺体の同定を行い、当時の利用植物について検討した。なお、一部の試料については放射性炭素年代測定も行われている（第５章第２節１）。

（２）試料と方法

試料は、肉眼で確認･回収された現地取り上げ試料の５試料で、古代の溝跡D-SD1から採取された２試料、井戸跡D-SE3とD-SE33、D-SE247から採取された各１試料である。

同定および計数は、肉眼および実体顕微鏡下で行った。計数の方法は、完形または一部が破損していても１個体とみなせるものは完形として数え、１個体に満たないものは破片とした。

（３）結果

同定した結果、木本植物ではモモ核とオニグルミ核の２分類群、草本植物ではヒョウタン仲間果実の１分類群の、計３分類群が見いだされた（第10表）。

以下に、出土した大型植物遺体を遺構別に記載する。

溝跡D-SD1:完形のモモとオニグルミ（動物食痕）が１点ずつ得られた。

井戸跡D-SE3:完形のモモが１点得られた。

井戸跡D-SE33:完形のモモが１点得られた。

井戸跡D-SE247:ヒョウタン仲間の破片が９点得られた。

以下に、得られた分類群の記載を行い、第109図に写真を示して同定の根拠とする。なお、分類群の学名は米倉・梶田（2003-）に準拠した。

①モモ　*Prunus persica*（L.）Batsch　核　バラ科

黄褐色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は楕円形で先が尖る。下端に大きな着点がある。表面に不規則な深い皺がある。また、片側の側面には縫合線に沿って深い溝が入る。高さ26.8mm、幅20.0mm、厚さ16.1mm。

②オニグルミ　*Juglans mandshurica* Maxim. var. sachalinensis (Komatsu) Kitam.　核　クルミ科

黄褐色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は広卵形。表面に縦方向の縫合線があり、浅い溝と凹凸が不規則に入る。溝や凹凸の間には微細な皺がある。内部は二室に分かれる。高さ27.0mm、残存幅18.5mm、厚さ22.5mm。

③ヒョウタン仲間　*Lagenaria siceraria*（Molina）Standl.　果実　ウリ科

褐色で、破片のため全体形は不明。表面は平滑で、やや光沢がある。壁は厚い。花梗痕もしくは花落ち部分が残存している。残存長64.0mm、残存幅78.6mm、厚さ6.3mm。

（４）考察

古代の溝跡と井戸跡から出土した大型植物遺体を同定した結果、栽培植物で果樹のモモの核、栽培植物で畑作物のヒョウタン仲間の果実、野生植物で食用として利用可能なオニグルミの核が得られた。

溝跡D-SD1と、井戸跡D-SE3、D-SE33から得られたモモ核は、果肉を食べた後に、食用にならない核の

第10表　第11次調査において出土した大型植物遺体（括弧内は破片数）

	遺物 No.	試料№.7	試料№.8	試料№.9	試料№.10	試料№.11
	遺構	D-SD1		D-SE3	D-SE33	D-SE247
		溝跡		井戸跡		
	採取位置	③	-	北	-	北
	層位	２層	３層	２層	-	４層
	時期	古代				
分類群	採取方法	現地取上げ				
モモ	核（完形）	1		1	1	
オニグルミ	核（動物食痕）		1			
ヒョウタン仲間	果実					（9）

第11表　モモ核の大きさ（単位:㎜）

遺構	高さ	幅	厚さ
溝跡 D-SD1	31.2	18.4	13.2
井戸跡 D-SE3	26.8	20.0	16.1
井戸跡D-SE33	27.4	20.0	14.7
最小	26.8	18.4	13.2
最大	31.2	20.0	16.1
平均	28.5	19.5	14.7
標準偏差	2.4	0.9	1.5

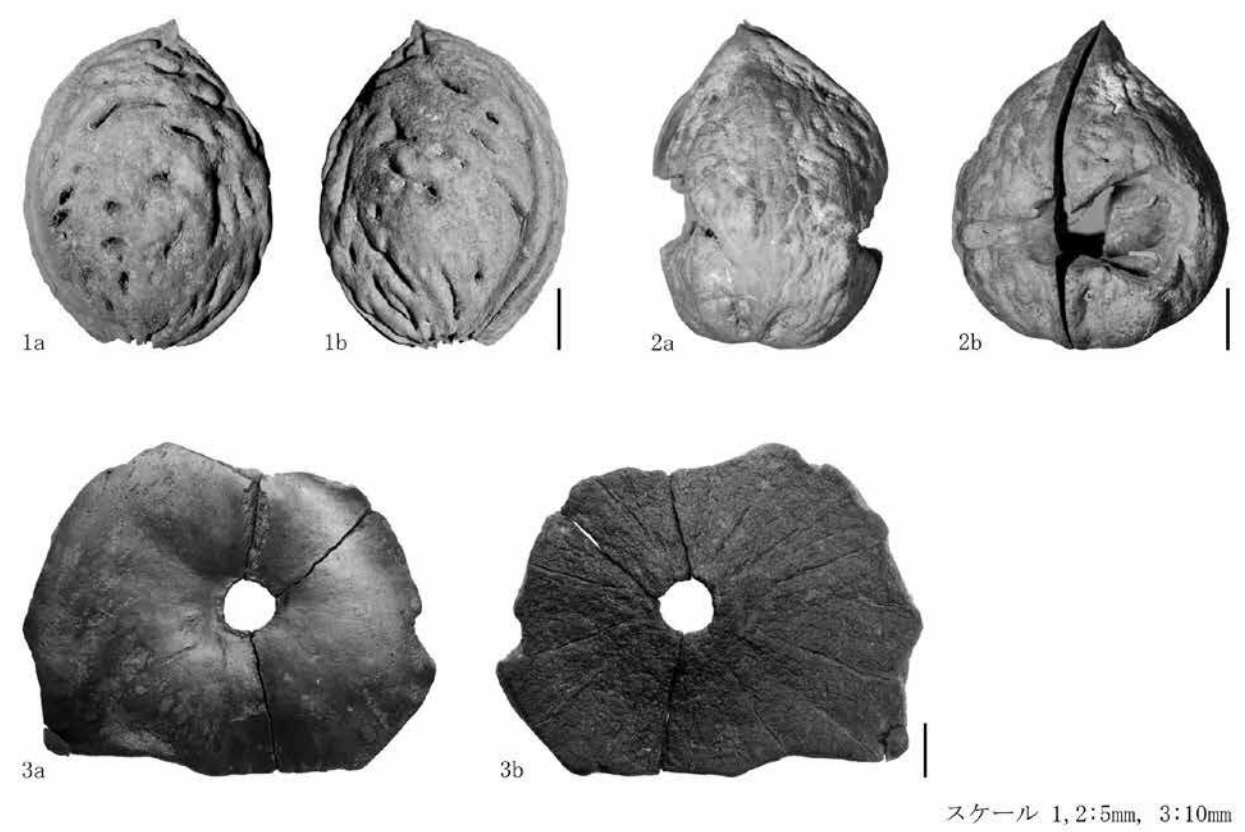
部分が廃棄され、溝や井戸に堆積した可能性がある。得られた完形３個体のモモ核の大きさを計測した結果、高さが平均28.5±2.4㎜、幅が平均19.5±0.9㎜、厚さが平均14.7±1.5㎜で、縦長の個体であった（第11表）。山梨県内の遺跡から出土したモモ核の事例を集成した新津（1999）によると、モモの核は時代ごとに大きさや形状が変化しており、弥生時代には核長が24.6～26.5㎜と比較的大きくかつ丸味が強い核が多いのに対し、平安時代から近世には縦長になる傾向があるという。さらに、奈良・平安時代のモモの核長は23.6～26.6㎜で、鎌倉時代には大きさの変異幅が大きく、江戸時代後期になると大型になり、平均核長26.9㎜、最大で38.0㎜程度の核がみられるとしている。今回の千音寺遺跡第11次調査で産出したモモ核の大きさは、高さ平均28.5±2.4㎜で、山梨県内の奈良・平安時代のモモ核より大きめの核であった。溝跡D-SD1の２層から得られたオニグルミは、ネズミ類によるとみられる動物食痕が残る個体であった。

井戸跡D-SE247からは、栽培植物で畑作物のヒョウタン仲間の果実が得られた。ヒョウタン仲間は、果実を加工して、容器などに利用される。ただし、今回得られた果実は破片であり、臍も残存しておらず、全体形は不明であった。

引用文献

新津　健（1999）遺跡から出土するモモ核について―山梨県内の事例から―．山梨考古学論集，Ⅳ，361-374，山梨県考古学協会．

米倉浩司・梶田　忠（2003-）BG Plants 和名－学名インデックス（YList），http://ylist.info



１．モモ核（井戸跡D-SE33 試料№10）　２．オニグルミ核（溝跡D-SD1 ３層 試料№8）、
３．ヒョウタン仲間果実（井戸跡D-SE247 ４層 試料№11）

第109図　第11次調査において出土した大型植物遺体

３．第 11 次調査跡出土木製品の樹種同定

小林克也（パレオ・ラボ）

（１）はじめに

愛知県名古屋市の千音寺遺跡の第11次調査で出土した木材の樹種同定を行った。

（２）試料と方法

試料はいずれも古代の井戸跡である、D-SE33、D-SE244、D-SE246、D-SE247から出土した木材、計６点である。各試料について、切片採取前に木取りの確認を行なった。

樹種同定は、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）について、カミソリで薄い切片を切り出し、ガムクロラールで封入して永久プレパラートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡にて検鏡および写真撮影を行なった。

（３）結果

同定の結果、針葉樹のヒノキ１分類群と、単子葉のタケ亜科１分類群の、計２分類群がみられた。ヒノキは４点で、タケ亜科が２点見られた。同定結果を第12表に示す。

以下に、同定された材の特徴を記載し、第110図に光学顕微鏡写真を示す。

第12表　第11次調査出土木製品の樹種同定結果一覧

遺物番号	出土遺構	層位	器種	樹種	木取り
試料№12	D-SE33		竹	タケ亜科	丸
試料№13	D-SE244	3	竹	タケ亜科	丸
試料№14	D-SE246	2	曲物側板	ヒノキ	追柾目
試料№15	D-SE246	2	曲物タガ	ヒノキ	板目
試料№16	D-SE247	4	曲物側板	ヒノキ	板目
試料№17	D-SE247	4	曲物タガ	ヒノキ	板目

①ヒノキ　Chamaecyparis obtusa（Siebold et Zucc.）Endl.　ヒノキ科　第110図　１a-１c(試料№14・15)、２a-２c(試料№16・17)

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は薄く、早材から晩材への移行は急である。放射組織は単列で、高さ１～15列である。分野壁孔はトウヒ～ヒノキ型で、１分野に２個みられる。

ヒノキは福島県以南の暖温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。材はやや軽軟で加工しやすく、強度に優れ、耐朽性が高い。

②タケ亜科　Subfam. Bambusoideae　イネ科　第110図　３a(試料№12)、４a(試料№13)

向軸側の原生木部、その左右の２個の後生木部、背軸側の篩部の三つで構成される維管束が散在する単子葉植物の稈である。維管束の配列は不整中心柱となる。維管束鞘の細胞は厚壁であり、向・背軸部に関わりなく厚くなる。

タケ亜科はいわゆるタケ・ササの仲間で、日本には12属ある。

（４）考察

同定の結果、曲物側板および曲物箍(たが)はヒノキ、竹はタケ亜科であった。ヒノキは木理通直でまっすぐに生育し、加工性が良い樹種である(伊東ほか，2011)。また、タケ亜科はまっすぐに生育し、しなやかで折れにくいという材質を持つ（室井，1973)。

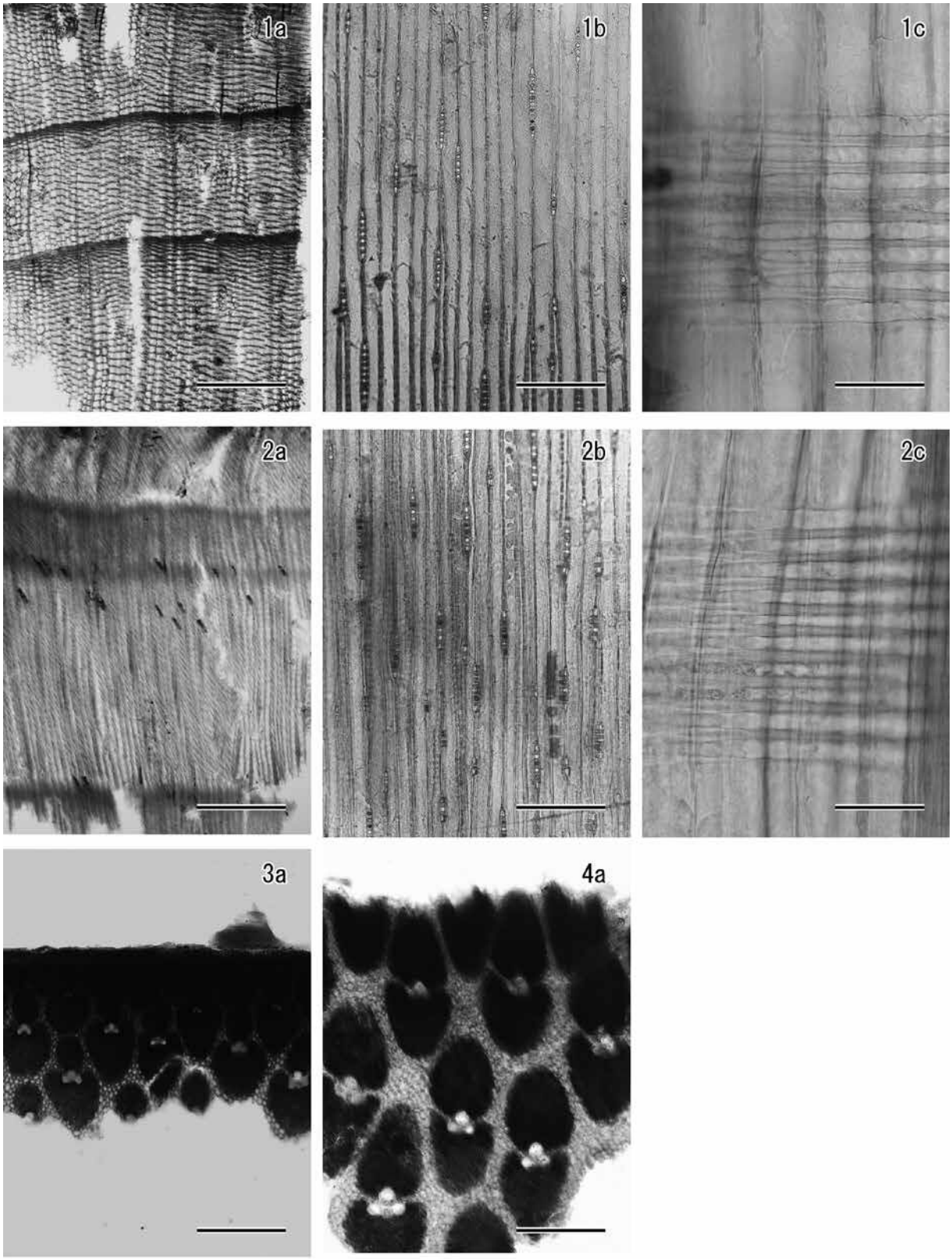
愛知県内の平安時代頃の曲物では、ヒノキが多く確認されており（伊東･山田編，2012)、傾向は一致する。

引用文献

伊東隆夫・佐野雄三・安部　久・内海泰弘・山口和穂（2011）日本有用樹木誌．238p，海青社.

伊東隆夫・山田昌久編（2012）木の考古学―出土木製品用材データベース―．449p，海青社.

室井　綽（1973）ものと人間の文化史　10・竹．311p，法政大学出版局.



1a-1c．ヒノキ(試料№14・15)　2a-2c．ヒノキ(試料№16・17)　3a.タケ亜科(試料№12)　4a．タケ亜科(試料№13)
a：横断面(スケール=500 μm)　b：接線断面(スケール=200 μm)　c：放射断面(スケール=50 μm)

第110図　第10次調査出土木材の光学顕微鏡写真

第６章　結　語

第１節　第10次調査のまとめ

１．第Ⅰ期（古墳時代）

第Ⅰ期の遺構は、Ｂ区の中央部で検出されたB-SZ53のみである。半円状に検出された溝から完形の小型高坏が１点出土した。この地区から出土した古墳時代の遺物はこの１点のみであり、第11次調査も含め、同時期の遺物は僅少で、土師器の甕など集落に伴う生活色を推察させる遺物のないことから、集落の存在は考えられない。

次に考えられるのは、墳墓あるいは祭祀の可能性である。そのような視点でB-SZ53をみると、遺物の出土した溝は、半円状に弧を描いており、小規模ながら古墳の周溝の一部である可能性が考えられ、そうすれば高坏は供献土器ということになろう。本遺構は低地と微高地の境にあたる箇所で検出されている。検出面は東側が微高地となっているため、西側の周溝は後世削平された可能性もある。溝の円弧は短く、周溝を復元したとしても墳丘規模は大きくならない。こうした点は、遺物の少ないこと、遺物の年代が7世紀後半であること、墳丘規模の小さいことなどから、終末期の古墳であった可能性が高い。終末期古墳の中には、周溝の痕跡すら認められないものもある。同様な終末期古墳としては、兵庫県宝塚市雲雀山東尾根古墳群[(1)]が著名で、小横穴式石室、小竪穴石室を主体部とする。またこうした古墳から遺物の出土例は少ないが、雲雀山東尾根古墳群の13号墳ではB-SZ53より出土したのと同様の小型高坏が出土している[(2)]。次に遺跡の立地から見てみると、本遺跡は雲雀山東尾根古墳群のような丘陵斜面地には形成されてないが、やはり同様の小横穴石室、小竪穴石室を主体部とする小規模な終末期古墳によって構成される古墳群も知られている。滋賀県安曇川町（現高島市）上古賀の下井古墳群[(3)]は、安曇川左岸河岸段丘上の平地にあり、調査前までは墳丘は削平されていたためその存在すら知られていなかったもので、立地において本例と共通点がある。

以上の状況から、Ｂ区で検出したB-SZ53はやや微高地であった部分を利用して築造された低墳丘の古墳の可能性がきわめて高い。また群集墳とは異なり、単独で構築されていることから考えると、７世紀後半の特定個人の墓と推定される。

２．第Ⅱ期（奈良時代～平安時代初期）

第Ⅱ期の遺構は、西部に位置するＢ区とＣ区で確認できた。

Ｃ区北部で確認したC-SK8は方形でやや大型の土坑である。遺物は須恵器の甕、蓋、椀等が出土しており、杯蓋と無台椀には墨書がみられる。またウマの左下顎骨も出土しており、祭祀に使用されたものを廃棄した土坑の可能性も考えられる。C-SK8から出土した須恵器の甕のみＣ－２号窯式で奈良時代初期のものであるが、その他の土器の時期は主にＯ-10号窯式であり、奈良時代末期から平安時代初期のものである。隣接するC-SK5は遺物が出土しなかったが、埋土の土色等から同時期の遺構と考えられる。

C-SK8から3.0m程北で確認したC-SE2は、井戸枠と曲物が残存した状態で検出された。遺物は掘方から須恵器の有台杯、曲物内の埋土から底部に墨書がみられる須恵器の無台椀、井戸枠内で曲物の直上付近より灰釉陶器の椀が出土している。また曲物内の埋土から、破片ではあるがヒョウタン仲間の果実部分のみが出土した。その果実部分を使用して放射性炭素年代の測定をした結果と出土した土器の年代を合わせて考察すると、Ｏ-10号窯式～Ｋ-90号窯式のものがあり、使用時期は奈良時代末期から平安時代初期の８世

紀末から９世紀後半と考えられ、今回の調査において確認された井戸のなかでは最も古い。

Ｂ区では中央部でB-SD95、中央部よりやや東側でB-SP112を確認した。いずれも時期は８世紀後半頃である。また、B-SP112に近い地点の水田床土内からそれらより古い８世紀前半の須恵器の無台杯も出土している。

第Ⅱ期の遺構密度は希薄であるが、須恵器や灰釉陶器の出土が伴う井戸や土坑等が確認されており、Ｂ区やＣ区の近辺では生活区域となっていた様子がうかがえる。

３．第Ⅲ期（平安時代中期）

第Ⅲ期の遺構は、東部に位置するＡ区でのみ確認された。

検出された遺構は、井戸がA-SE35、大型土坑であるA-SK19とA-SK34、その他A-SK20がある。Ａ区の中央部で確認したA-SE35からは、井戸枠は残っていなかったが、底部に曲物が設置された状態で出土している。出土した遺物から、井戸が廃絶した時期は平安時代の10世紀から11世紀初頭頃である。

Ａ区の南東隅付近から検出したA-SK19は、水平に堆積する硬化層（鉄分沈着層）が確認でき、水が溜まっていた様子がうかがえる。井戸枠や曲物等の出土はなかったが、堆積状況から素掘りの井戸の可能性も考えられる。出土した遺物の時期は平安時代の10世紀後半から12世紀にわたるが、新しい時期のものから考えて、遺構の廃絶は12世紀初頭である。A-SK19から近い位置で検出したA-SK20は遺構の性格は不明だが、出土した灰釉陶器からみて10世紀前半と考えられる。A-SK34は土坑である。出土した遺物から、時期は重複している土坑の中では最も古い平安時代の11世紀中頃から12世紀初頭である。A-SK19でみられるような硬化層は確認できなかったが最下層の上部では鉄分の沈着が確認されており、埋土の最下層が粘性でしまりのない砂質土であることから、素掘りの井戸である可能性も考えられるが、A-SK19同様不明確である。

第Ⅲ期の遺構密度は希薄であるが、灰釉陶器や山茶碗の出土が伴う井戸や土坑等が確認されており、Ａ区の近辺では生活区域となっていた様子がうかがえる。

４．第Ⅳ期（平安時代後期～鎌倉時代）

第Ⅳ期の遺構は、土坑、井戸、溝、柱穴もしくは杭痕等がみられる。

井戸は、Ｂ区北西部の微高地上でB-SE24を検出した。井戸枠は確認できなかったが、底に曲物を埋置していることが確認できた。埋土より出土した遺物から、井戸が廃絶した時期は13世紀前半である。B-SE24のすぐ東側ではあるが、調査区内の低地部ではB-SE37を検出した。３層上面では完形の山茶碗の碗2点と、小皿３点が正位で出土しており、井戸を埋めていく過程で意図的に置かれた可能性が考えられる[(4)]。埋土より出土した遺物から、井戸が埋められた時期は12世紀後半から13世紀前半である。B-SE37もB-SE24と同様に井戸枠は確認できなかったが、底に曲物が設置された状態が確認された。

土坑は前述のA-SK34と重複してA-SK33、A-SK42、A-SK43がある。遺構の性格は不明であるが、出土遺物からみて、A-SK42は12世紀中頃、A-SK33とA-SK43は12世紀後半から13世紀初頭と約半世紀ずつ時期差がみ

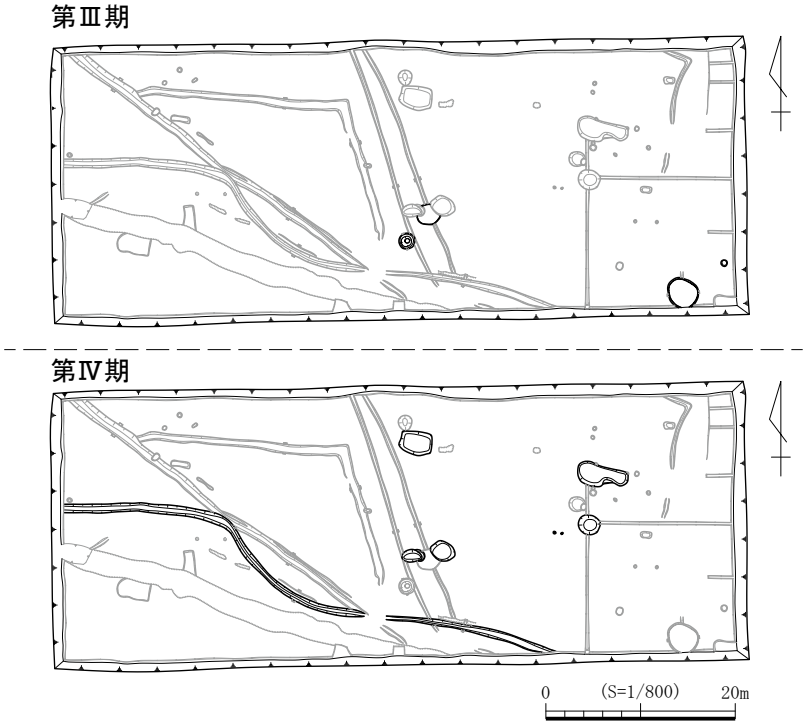
第13表　Ａ区遺構別山茶碗の産地一覧　※小破片を除く

	A-SK41	A-SK10	A-SK14	A-SK33	A-SK42	A-SK43
尾張型第	0	碗３	碗４ 小皿１	碗４	小碗１	碗４ （内１点は硯に転用）
東濃型	碗２	0	0	0	0	皿か１

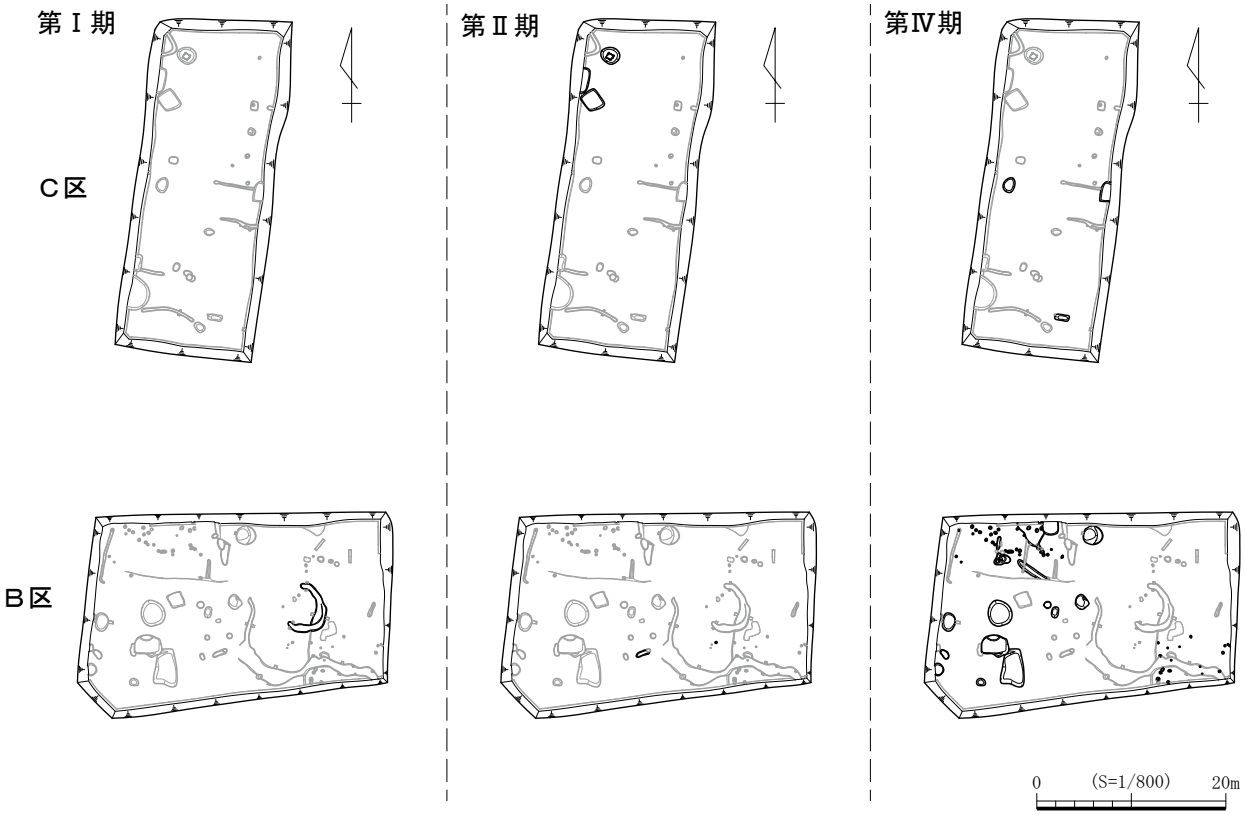
られる。Ａ区の東部で検出したA-SK14は、平面形が円形の大型土坑である。遺物は尾張型第４～６型式山茶碗、伊勢型鍋が出土していることから、時期は12世紀中頃から13世紀前半である。

この他Ａ区では、A-SK10、A-SK41、B-SK97、B-SK98の長軸が280cm～540cmを測り、やや方形の大型土坑である。いずれも調査区内においては、微高地というよりは低地の部分で検出している。出土した遺物から、時期は主に12世紀末から13世紀初頭であるが、Ａ区の土坑内より出土した土器についてみると、尾張型第山茶碗が主であるが、A-SK41においてのみ東濃型山茶碗が出土している(第13表)。平面方形の形状よりみて、何らかの採掘坑であることも考えられるが、詳細はわからなかった。

Ｂ区では南西部では、B-SK41、B-SK44、B-SK45、B-SKＫ104が確認された。時期はB-SK41、B-SK45、B-SK104が12世紀末から13世紀初頭で、B-SK44は13世紀中頃である。Ｂ



第111図　Ａ区遺構変遷図



第112図　Ｂ・Ｃ区遺構変遷図

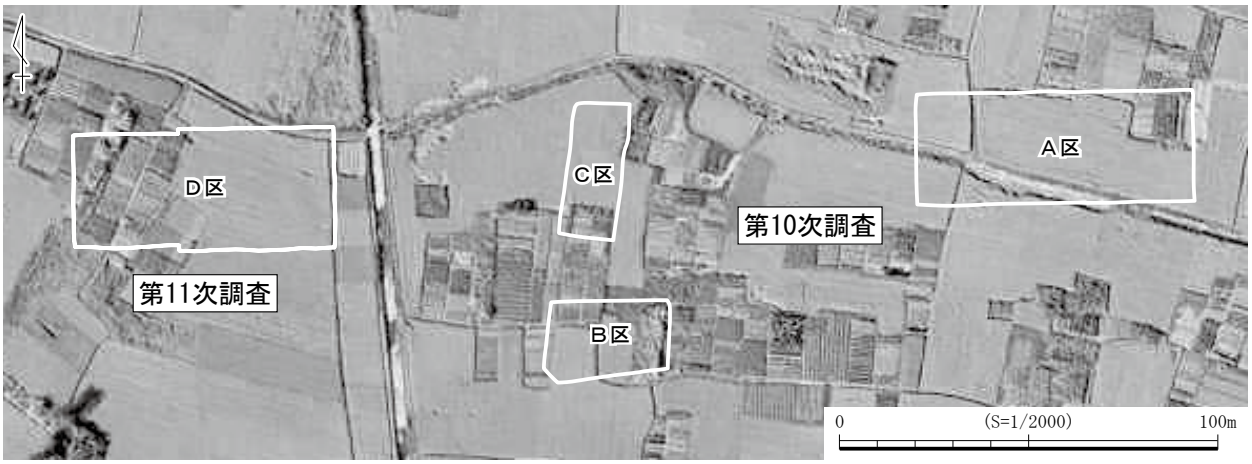
区中央付近では、B-SK86、B-SK87、B-SK88、B-SK89がある。このうちB-SK86の埋土は、第10次調査のどの土坑と比較しても黒色が強く、埋土から出土した遺物の量も突出して多量で、鉄製の雁股鏃も出土している。また、木製品の残骸（曲物の底板と思われるものや、井戸枠の横木と思われるもの、竹片、木片など）を多く含んでいる。遺構の性格として井戸の可能性も考えられるが、不明である。１層の最下部で、ほぼ完形の山茶碗の碗２点、小皿２点が正位で出土している。おそらく埋めていく段階で、意図的に置かれた可能性が考えられる[(4)]。出土した遺物から、井戸が埋められた時期は12世紀後半から13世紀中頃である。この他、B-SK87、B-SK88の時期は12世紀末から13世紀初頭（尾張型第５型式、東濃型窯洞窯式）で、B-SK89は13世紀前半（尾張型第６型式）である。

Ｃ区では南部でC-SK31を確認した。方形の土坑で、埋土にモモの核の破片も含む植物遺体が出土している。時期は13世紀前半（尾張型第６型式）である。廃棄土坑の可能性が考えられる。Ｃ区東部ではC-SK26があり、時期は12世紀末から13世紀初頭（尾張型第５型式）である。Ｃ区ではC-SK10から遺物が出土しなかったが、埋土の土色がC-SK26と似ているため、同時期の遺構である可能性が考えられる。

溝はA-SD31がある。遺物の出土は希薄であったが、常滑の広口壺が確認された。時期は12世紀後半から13世紀前半頃である。A-SD31のすぐ南側に、ほぼ並行して流れる現代の水路跡が検出されており、A-SD31を踏襲して後世も使用されていたと考えられる。

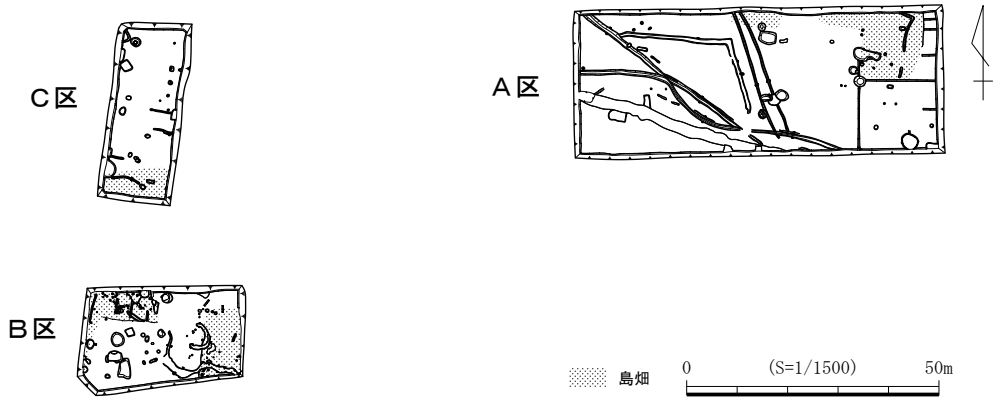
Ｂ区の微高地で柱穴群を検出した。北西部の柱穴群では、B-SP12とB-SP35の底部で完形の山茶碗が出土している。柱穴の底部から発見される山茶碗は、柱の礎として据えられた可能性も考えられる。一方、礎石になるような石を確認することは出来なかったが、地盤が軟弱であることから、他の柱穴には礎板が用いれられていた可能性も考えられる。南東部の微高地でも、北西部ほどではないが柱穴を数基確認することができた。B-SP63も同様にピットの底部で関係の山茶碗が出土している。

やや微高地となっているＢ区の北西部及び南東部においては、建物や柱列として成立しなかったものの、山茶碗の出土が伴うピットや井戸を確認したため、屋敷地があった可能性がある。近年まで水田として使用されていた低地においては、水田化のためもともとの遺構面を削平された可能性もあり、遺構密度は希薄であるが、山茶碗などが出土した井戸や大型土坑、溝などを確認しており、全調査区を通して生活区域となっていた様子がうかがえる。



第113図　空中写真（1975(昭50)年10月6日撮影）

出典:国土地理院ウェブサイト
https://mapps.gsi.go.jp/maplibSearch.do?specificationId=479720



第114図　第10次島畑範囲

５．第Ⅴ期（室町時代以降）

第Ⅴ期の遺構は、Ａ区の島畑状に形成された盛土部分で検出された耕作遺構A-SN1がある。A-SN1は複数回にわたって盛土された島畑部分の中間で確認したが、出土した遺物はほとんどが磁器等の小片であるため、近世以降に利用されていた耕作遺構と考えられる。今回の調査では、全ての調査区にて島畑を確認しており、周辺の調査と同様に微高地であった部分を、近世以後に島畑として活用されてきた様子をうかがうことができた。

第２節　第11次調査のまとめ

１．第Ⅰ期（古墳時代）

この時代の遺構、遺物は確認されなかった。

２．第Ⅱ期（奈良時代～平安時代初期）

第Ⅱ期の遺構は、調査区の主に西半部で確認された。

井戸 D-SE246 では井戸の底部に曲物が残存した状態で検出されたが、曲物は底が抜かれており二段重ねであった。曲物の底にはさまれるようにして「江」の墨書がある須恵器杯の小片が出土している。（写真５）掘方から土器から類推して、井戸の開鑿は８世紀前半を上限とする時期と思われる。

D-SE247 でも曲物が底部に残存した状態で検出された。また、曲物内の中央部底面より 10 ㎝上の位置から斎串が１点出土している。斎串は上端が西南西、下端が東北東を向き、それぞれの検出高（標高）は上端が -1.51 m、下端が -1.50 mとほぼ水平の状態であっことから、井戸を埋めるに際して意識的に置かれていたものであろう。また 10 次調査の C-SE2 同様にヒョウタンの仲間の果実の破片が、曲

写真５　D-SE246出土「江」墨書土器

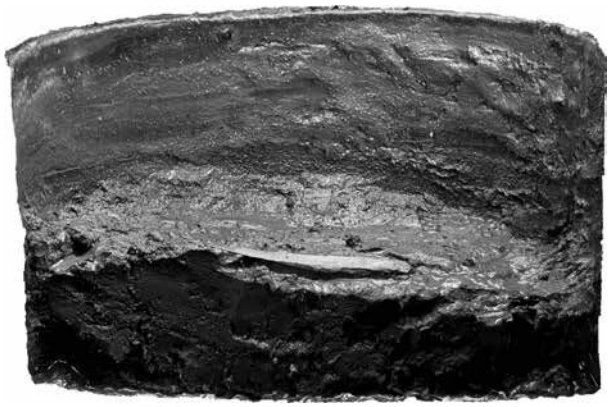


写真６　D-SE247斎串出土状況

物中央部よりやや北の曲物底面から 12 ㎝上より出土している。また斎串より下の井戸底までの埋土中から灰釉陶器椀、壺もしくは瓶類の小破片が出土している。また斎串より上の埋土中からも灰釉陶器皿の小破片が１点出土している。なお、井戸の埋土中より出土した土器片はこの３点のみである。ヒョウタンの仲間の果実を使用した年代測定した結果は９世紀前半から 10 世紀初頭が求められており、出土土器との年代差も近いことから、この時期に井戸の埋戻しが行われたと思われる。

曲物内部の埋土は褐灰色粘土が堆積していた。斎串出土地点より下層も上層も同じ埋土で、違いは見られない。以上のことから考えて、井戸を埋めるにあたって、まず井戸底から 10 ㎝埋めてならし、その面に斎串を置いて、再び埋戻していったと思われる。井戸埋めにあたっては、その途中に井戸埋めのまつりに使用した土器などを並べて、埋めるケースなどもあるが、ここでは土器類のかわりに斎串を用いたと思われる。また埋土内にほとんど土器片を含まないのは、井戸を埋めるにあたって混じり物にない清浄の土を用いていたことを推測させる。

溝は D-SD251 が調査区の西側に東西を分断するようにある。溝内の底面に砂層がないことから、水が常時流れていたのかどうかは不明である。遺物は少なく、土師器片１点、摩滅した須恵器片１点、鉄製袋状手斧が１点、砥石が１点など出土している。溝は調査区南端付近で南西に直角に屈曲しており、何らかの区画を意図したものだった可能性があり、第Ⅱ期にこの近辺が生活区域となっていた様子がうかがえる。

３．第Ⅲ期（平安時代中期）

第Ⅲ期の遺構は希薄であり、東西に土坑、柱穴がわずかに認められるにすぎず、相互の関連性はうかがえない。西半部でD-SK168より灰釉陶器椀が出土しており、時期は10世紀前半から10世紀中頃の時期が考えられる。またD-SP189より灰釉陶器深椀が出土しており、時期は10世紀後半から11世紀初頭と考えられる。

第Ⅲ期この近辺においては、生活区域があったものの、屋敷地として利用されていた可能性が考えにくい。

４．第Ⅳ期（平安時代後期～鎌倉時代）

第Ⅳ期の遺構は、柵、長方形土坑、土坑などがみられる。

長方形土坑は、調査区の東側に集中し、D-SK207、D-SK212、D-SK213、D-SK230、D-SK237 と５基が検出されており、それぞれ長軸を北西から南東にむけている。形状は一見土墓壙を思わせるが、規模を平均計測した結果、長軸 464 ㎝、短軸 186 ㎝、深さ 61 ㎝であり、土墓壙とするには規模が大きすぎるように思われる[(5)]。

土坑は調査区西半部にあり、D-SK103、D-SK228、D-SK229、D-SK244、D-SK245 の 5 基が検出されている。このうち D-SK228 からは 12 世紀初頭から 12 世紀中頃の尾張型第３型式山茶碗の碗、尾張型第４型式山茶碗輪花碗が出土している。また D-SK229 からは白磁碗と、12 世紀後半から 13 世紀前半の尾張型第５型式山茶碗小皿が出土している。この２基の土坑は近接しているが、山茶碗の型式から推定すると約半世紀時期差がみられる。

調査区西側の北寄りに近接して、D-SA296 と D-SA297 を検出した。共に方向以外柱列間に規則性はなく、また互いの方向もずれている不規則なものである。

柵の南８ｍで検出された土坑 D-SK40 は底面より 40 ㎝上から底部を上に向けた状態で、漆椀が出土している。

第Ⅳ期は遺構密度が希薄であるが、現代まで島畑として使用されていた微高地で柱穴列が確認できたことから、屋敷地があった可能性がある。近年まで水田として使用されていた低地においては、水田化のためもともとの遺構面を削平された可能性もあり、遺構密度は希薄であるが、山茶碗や白磁などが出土した土坑や、長方形土坑を確認しており、生活区域となっていた様子がうかがえる。

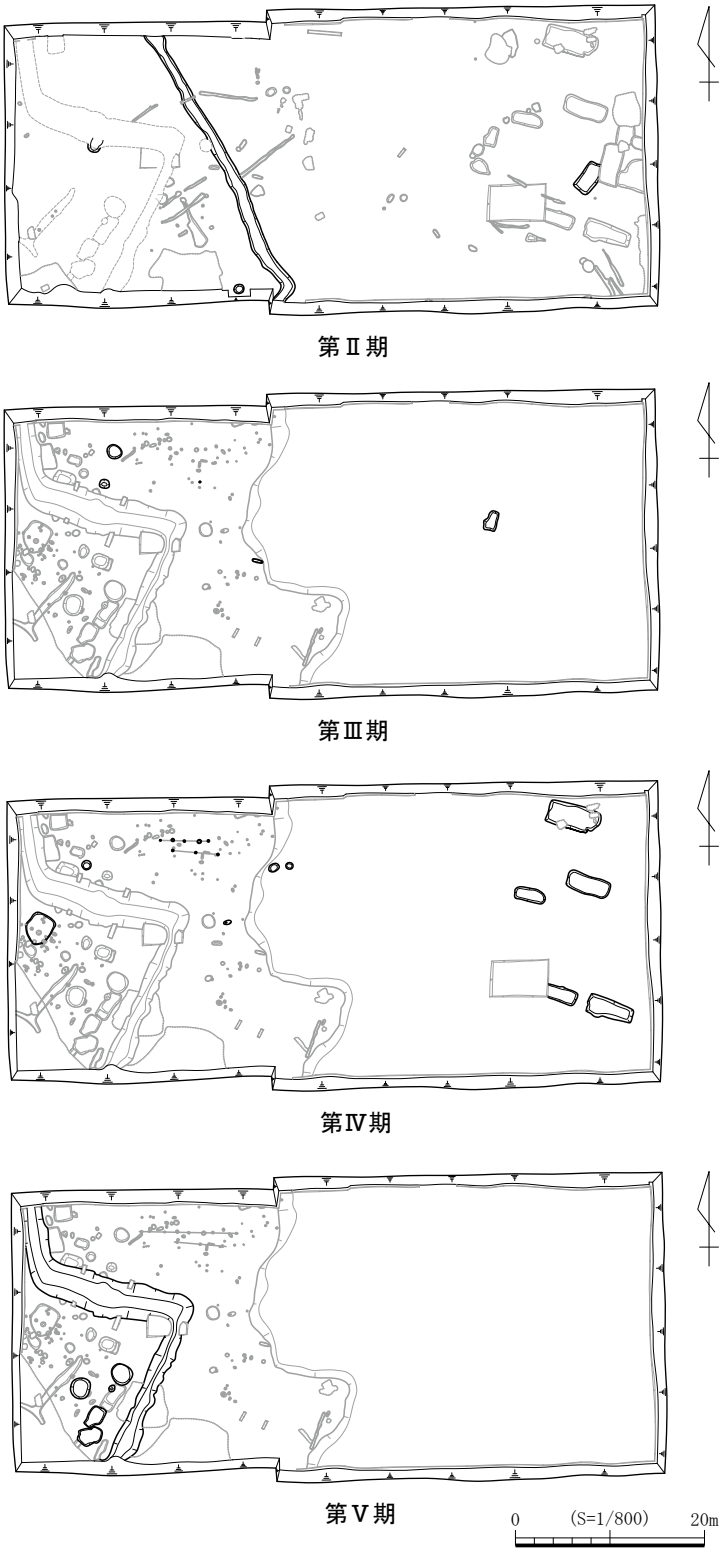
５．第Ⅴ期（室町時代以降）

第Ⅴ期の遺構は、溝、井戸、土坑などが調査区西半部の上層にみられる。

溝D-SD1は、調査区北西隅から調査区西半部南側に延びる。溝の標高からみると北西隅が高く、調査区北西隅から調査区西半部南に流れている。素掘りであるが北側では西から東に屈曲し、直線的に流れ、南側の調査区端付近では西側に屈曲する形状になっており、さらに途中直角に折れ曲がるなど、人工的に掘られた溝とみられる。溝内の堆積は４層が確認された。

１層目からは東濃型山茶碗（15世紀中頃）、２層目からは古瀬戸平碗（15世紀中頃）、３層目からは古瀬戸片口小瓶（15世紀中頃）をはじめとする15世紀代の陶磁器が多く出土した。出土遺物はほぼ同時期で、溝内の堆積も同質の均質な土であるため15世紀中頃に一気に埋められたものと考えられる。

11次調査区は氾濫平野であり、この溝の底面を形成する砂層はそれに準じるものと思われる。出土遺物には黒漆の漆椀や、折敷の底板などの木製品が含まれ、この付近の微高地上に生活の跡が求められよう。おそらく屋敷地などを区画する溝であろうか。



第115図　第11次遺構変遷図

明確に井戸と確認できるのは、南側がやや崩れた方形の掘方をもつD-SE33で、土坑内から竹製の箍（たが）と木製のくさびが出土している。もともとは結桶が存在していたが、井戸を廃棄する際に、桶の木材部分を抜

き取ったものと考えられる。

D-SE33に近接してある土坑D-SK32、D-SK42は、D-SE33に規模が近似し、素掘りの井戸の可能性もうかがえるが、井戸とするにたる十分な遺物がないため、可能性を示すにとどめたい。

第３節　加工円板

本遺跡の出土遺物の中には、加工円板がしばしば見られ、１次・２次調査においても多く確認されている。今回の調査では、掲載した13点のほか、総計33点が各層より出土している。大きさは、直径2.0cm～３.0cm前後である。最も大きいものは直径5.0cmほどで、山茶碗の小皿の底部を利用している。円板の素材としては、主に山茶碗や陶器がよくみられる。素材に山茶碗や灰釉陶器を用いている場合には、高台部あるいは底部を使用していることが多い。高台部を使用したものは23点で、そのほとんどが高台部を残している。また高台は無いが底部を使用したものは７点あった。このことは１次・２次調査の結果とも合致することから、千音寺遺跡の範囲における、円板を加工する際の１つの特徴と言える。

円板の年代についてみると、遺構から出土した加工円板は20点あり、それらの遺構の廃絶時期は、すべて第Ⅳ期（平安時代末期～鎌倉時代）である。

第４節　井戸

井戸は、第10調査において４基、第11次調査においては３基確認した。

第Ⅱ期（奈良時代～平安時代初期）で確認した井戸は、C-SE2、D-SE246、D-SE247がある。今回の第10次調査と第11次調査を合わせてみても、井戸枠が確認されたのはこの第Ⅱ期のC-SE2のみである。ほぼ同じ期間に発掘調査が行われていた第９次調査[(6)]の１区においても、８世紀末から９世紀初頭に埋められた井戸（063SE）があり、D-SE247同様斎串が出土している。湧水のため串の出土状況は不明だが、D-SE247における斎串の出土状況から考えて、井戸を埋めるにあたって同様な使用があったことが推定されよう。

D-SE246は二段重ねの曲物が設置されており、曲物の底に押さえられるようにして「江」と墨書された須恵器片が出土している。なおD-SE246からは井戸枠は確認されなかった。

第Ⅲ期（平安時代中期）から第Ⅳ期（平安時代後半～鎌倉時代）で確認した井戸は、A-SE35、B-SE24、B-SE37がある。すべての井戸において底に曲物が確認されたが、井戸枠は残っていなかった。B-SE37では山茶碗の碗や小皿が井戸を埋めていく過程で正位に据えられ、埋めていく過程で何らかのまつりが行われていた可能性が考えられる。

第Ⅴ期（室町時代以降）で確認した井戸はD-SE33がある。D-SE33は出土状況から、もともと結桶が存在していたものと考えられる。今回の第10次調査と第11次調査の中では最も新しい井戸である。

今回の調査において、検出された７基中の井戸のうち、６基の井戸で井戸枠が確認できなかった。地山の土質が軟弱地であることから、もともとは井戸枠が設置されていたものと推察される。おそらく同様に桶を使用したD-SE33においても、桶の木材部分が抜き取られ、この遺跡の共通性が認められる。井戸の使用が終わった際には、井戸枠に使用していた木材が抜かれて、再利用もしくは転用されていたと推察されるのである。

＜註＞

（１）石野博信1973「兵庫県宝塚市長尾山古墳群」『論集終末期古墳』 塙書房

（２）岡田　務1974「畿内における終末期の群集墳の一形態」『古代研究』４　元興寺仏教民俗資料研究所考古学研究室

（３）中江　彰1979「高島郡安曇川町上古賀遺跡」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』Ⅵ－１　滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会

（４）久世康博2000「井戸はどうして埋められたのか（土器を入れる）」『研究紀要』第７号　京都市埋蔵文化財研究所研究

（５）本遺跡の北西約７㎞に位置する愛西市川田遺跡の土壙墓85基と比較した結果、形状はともに隅丸方形であるが、平均法量は、長軸185㎝、短軸95㎝、深さ27㎝と、本遺跡の長方形土坑よりはるかに小さい。また、埋土も川田遺跡ではほぼ単層であるのに対して、当調査区の長方形土坑では複数層の堆積が認められるなどの違いがある。こうしたことから、当調査区の長方形土坑は土壙墓とは考え難い。

（６）樋田泰之・林順・坂野俊哉・鬼頭剛　2023『千音寺遺跡第９次発掘調査報告書』 名古屋市緑政土木局・名古屋市教育委員会

土師器・須恵器・灰釉陶器

時期区分		本報告で用いる暦年代			猿投（系）窯
古墳時代	後期	600		初頭	H-44
			7 世紀	前～中葉	H-15
	終末期			中～後葉	H-16
		700		末葉	I-17
奈良時代			8 世紀	前葉	C-2
				中葉	(NN-32)
				後葉	(O-10)
平安時代		800	9 世紀	前葉	IG-78　K-14
				中葉	(K-5)
				後葉	K-90
		900	10 世紀	前葉	(K-21)
				中葉	O-53
				後葉	H-72
		1000	11 世紀	前葉	百代寺
				中葉	
		1080		後葉	

【引用・参考文献】

愛知県　2015『愛知県史　別編　窯業１　古代　猿投系』

中野晴久 2005 「常滑・渥美」『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』

藤澤良祐 1982 「古瀬戸中期様式の成立過程」『東洋陶磁』 第８号　東洋陶磁学会

藤澤良祐 1987 「本業焼の研究（１）」『研究紀要』Ⅵ　瀬戸市歴史民俗資料館

藤澤良祐 1988 「本業焼の研究（２）」『研究紀要』Ⅶ　瀬戸市歴史民俗資料館

藤澤良祐 1989 「本業焼の研究（３）」『研究紀要』Ⅷ　瀬戸市歴史民俗資料館

藤澤良祐 1991 「瀬戸古窯址群Ⅱ－古瀬戸後期様式の編年－」『研究紀要』Ⅹ　瀬戸市歴史民俗資料館

藤澤良祐 1993 「山茶碗の現状と課題」『研究紀要』３　三重県埋蔵文化財センター

藤澤良祐 1995 「瀬戸古窯址群Ⅲ－古瀬戸前期様式の編年－」『研究紀要』第３輯　（財）瀬戸市埋蔵文化財センター

藤澤良祐 2002 「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『研究紀要』第10輯　（財）瀬戸市埋蔵文化財センター

藤澤良祐 2008 『中世瀬戸窯の研究』高志書院

北村和弘 1996 「尾張の伊勢型鍋」『鍋と甕そのデザイン』 第４回東海考古学フォーラム

中世陶器

時期区分	本報告で用いる暦年代		尾張型山茶碗（藤澤 1993）		東濃型山茶碗（藤澤 1993）	古瀬戸（藤澤 1982･1991･1995）			常滑（中野 2005）	伊勢型鍋（北村 1996）	羽釜（北村 1996）
平安時代	12 世紀		Ⅱ	4	谷迫間				1b 型式		
									2 型式	A2類	
		1200	Ⅲ	5	浅間窯下 丸石３ 窯洞	前期	Ⅰ		3 型式		
鎌倉時代	13 世紀			6	白土原		Ⅱ		4 型式	A3類	
				7	明和				5 型式	A4a類	
							Ⅲ		6a 型式	A4b類	A1類
			Ⅳ	8	大畑大洞		Ⅳ		6b 型式	A5類	A2類
		1300				中期	Ⅰ		7 型式		
	14 世紀						Ⅱ				
				9	大畑大洞新		Ⅲ				
南北朝時代							Ⅳ		8 型式		A3類
						後期	Ⅰ				
室町時代		1400		10	大洞東		Ⅱ		9 型式	A6類	A4類
							Ⅲ				
	15 世紀			11	脇之島		Ⅳ	古	10 型式		B1類
					生田			新			
		1500							11 型式		B2類
	16 世紀										

参考文献

富田のあゆみ編集委員会　1985『富田のあゆみ』富田地区名古屋市合併三十周年記念事業実行委員会
東海地方史学協会　1981『海東海西郡誌』東海地方史学協会
日下英之　1994『佐屋路歴史散歩』七賢出版中部事業部
名古屋市教育委員会　1994『なごやの街道　２』名古屋市教育委員会
愛知県史編さん委員会　2015『愛知県史　別編　窯業１　古代　猿投系』 愛知県
愛知県史編さん委員会　2007『愛知県史　別編　窯業２　中世・近世　瀬戸系』 愛知県
愛知県史編さん委員会　2012『愛知県史　別編　窯業３　中世・近世　常滑系』 愛知県
木川正夫・蔭山誠一ほか　2002「川田遺跡」愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第103集　愛知県埋蔵文化財センター　pp. 22-24
北村和宏　1996「尾張の「伊勢型鍋」」『鍋と甕そのデザイン』東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
北村和宏　1996「尾張の羽釜」『鍋と甕そのデザイン』 東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
下濱貴子・宮田明・藁科哲男・浦蓉子　2014.3『八日市地方遺跡Ⅱ－小松駅東土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－第３部 勾玉編 第４部木器編』石川県小松市教育委員会
日本中世土器研究会編 2022『新版　概説中世の土器・陶磁器』 真陽社
藤本清志(編)・青野美和(編)・乗松真也 2021.3『発掘調査報告書 第201集 新谷森ノ前遺跡２次　1　木質遺物編－一般国道196号今治道路(今治湯ノ浦IC～今治朝倉IC間)埋蔵文化財調査報告書　10－』公益財団法人　愛媛県埋蔵文化財センター
野澤則幸　2001　「千音寺遺跡第３次発掘調査」『埋蔵文化財発掘調査報告書36』名古屋市文化財調査報告49　名古屋市見晴台考古資料館
伊藤雅乃　2001『千音寺遺跡（北宮田団地）発掘報告書』 株式会社パスコ
東園千輝男　2001『下水道工事に伴う埋蔵文化発掘調査報告書千音寺遺跡』 国際航業株式会社
村木　誠　2002「千音寺遺跡第４次発掘調査報告」『埋蔵文化財発掘調査報告書41』名古屋市文化財調査報告54　名古屋市見晴台考古資料館
近藤真人・新山雅広・山形秀樹　2004『千音寺追跡発掘調査報告書　―第４次中川区富田町千音寺付近下水道築造工事に伴う調査―』株式会社イビソク
田原和美　2005　『千音寺遺跡第５次発掘調査報告書』名古屋市見晴台考古資料館
大浜良介 2004『千音寺遺跡発掘調査報告書 ―第６次中川区富田町千音寺付近下水道築造工事に伴う調査―」株式会社二友組
木村有作　2015「千音寺遺跡（第６次･第７次)」『埋蔵文化財発掘調査報告書73』名古屋市文化財調査報告90　名古屋市教育委員会文化財保護室
佐野貴紀・田中夕佳・竹原弘展　2018『千音寺遺跡第８次発掘調査報告書　―宮田用水排水路移設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』株式会社イビソク
樋田泰之・林順・坂野俊哉・鬼頭剛　2023『千音寺遺跡第９次発掘調査報告書』 名古屋市緑政土木局・名古屋市教育委員会

写　真　図　版

１．空中写真（昭和50（1975）年10月６日撮影）

出典:国土地理院ウェブサイト
https://mapps.gsi.go.jp/maplibSearch.do?specificationId=479720

１．Ａ区　調査前風景（南東から）

２．Ａ区　第１調査面（島畑）（南西から）

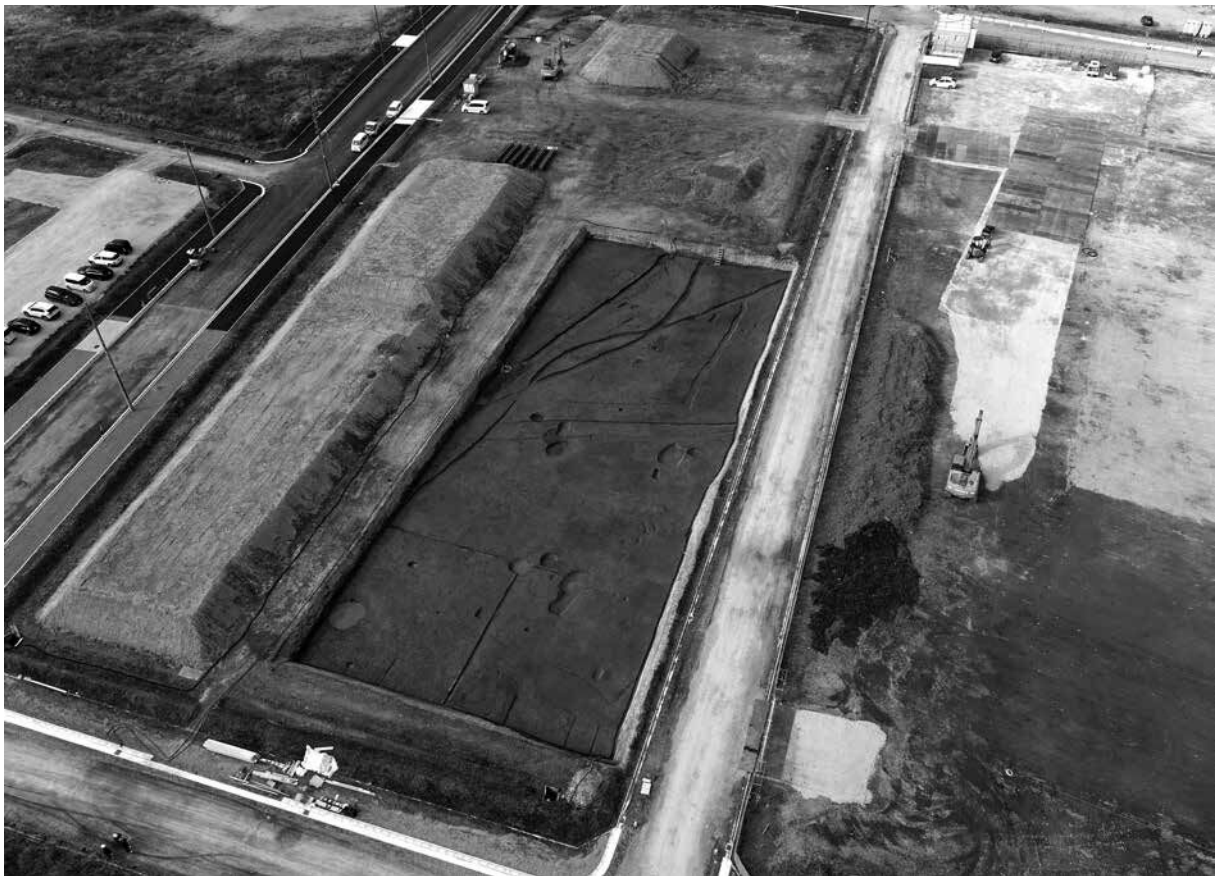
３．Ａ区　第１調査面（島畑）（南西から）

４．A-SN1検出状況（東から）

５．A-SN1完掘状況（東から）

図版３

１．Ａ区　調査区全景　第２遺構面（北が上）



２．Ａ区　調査区全景　第２遺構面（北東から）

１．A-SD31・SD39完掘状況（南東から）

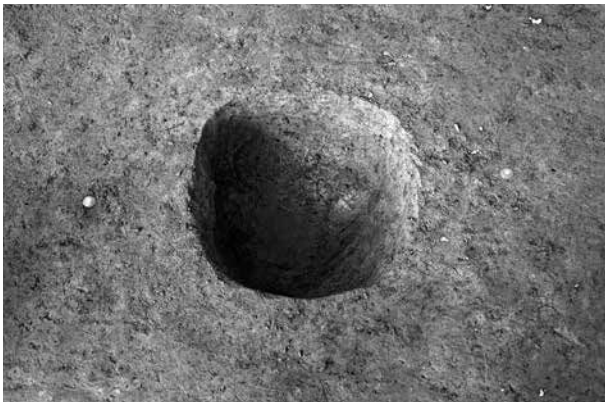
２．A-SD39・SD40完掘状況（北西から）

３．Ａ区調査区西部近景（西から）

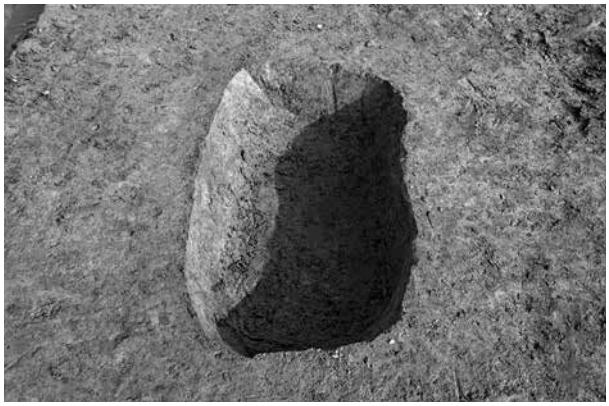
４．A-SE35曲物検出状況（南西から）

５．A-SE35曲物検出状況（南西から）

図版５



１．A-SK8完掘状況（南東から）



２．A-SK15完掘状況（西から）

３．A-SK10完掘状況（西から）

４．A-SK10完掘状況（東から）

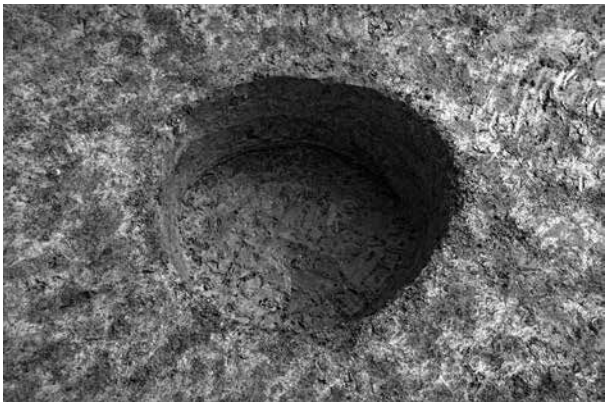
５．A-SK14遺物出土状況（西から）

６．A-SK14遺物出土状況（西から）

７．A-SK19遺物出土状況（北から）

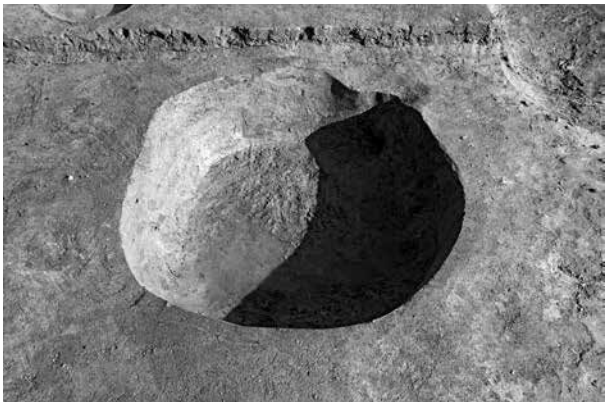
８．A-SK19遺物出土状況（北から）

１．A-SK18完掘状況（南西から）



２．A-SK20完掘状況（西から）

３．A-SK23完掘状況（西から）



４．A-SK28完掘状況（西から）

５．A-SK33完掘状況（南から）

６．A-SK41完掘状況（南から）

７．A-SK43完掘状況（北西から）

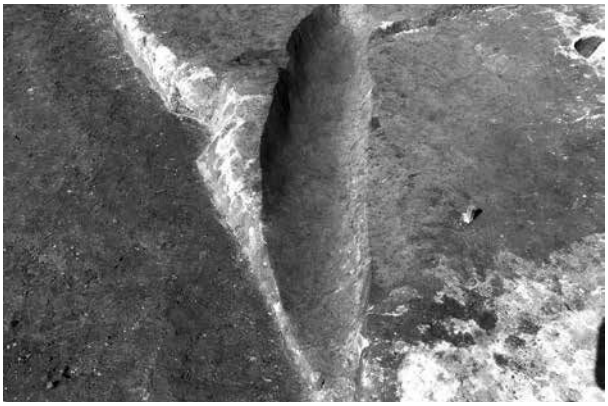
８．A-SU29・SU30完掘状況（北から）

図版７

１．Ｂ区　調査前風景（北から）

２．Ｂ区　調査区全景（第1遺構面）（北が上）

１．B-SD17完掘状況（南から）



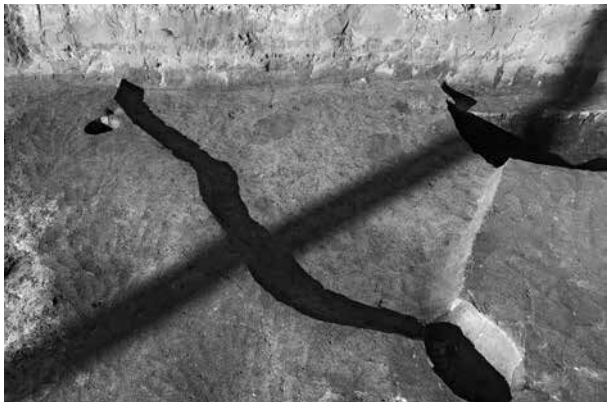
２．B-SD33完掘状況（南東から）

３．B-SE24遺物出土状況（南から）

４．B-SE24完掘状況（南から）

５．B-SK25完掘状況（南から）

６．B-SX21完掘状況（南から）



７．B-SX31完掘状況（南から）

８．包含層（Ⅲ層）遺物出土状況（南から）

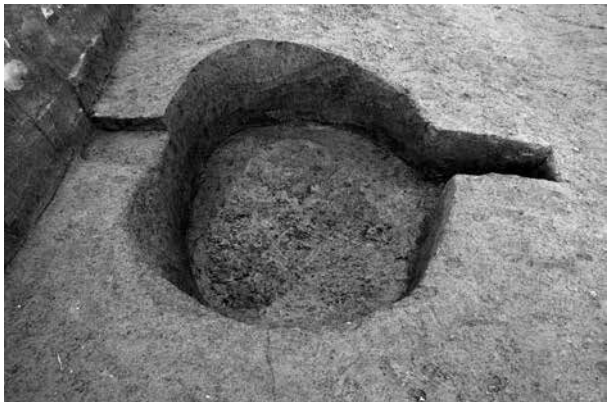
図版９

１．Ｂ区　調査区全景　第２遺構面（北が上）

２．Ｂ区　調査区全景　第２遺構面（北東から）

１．B-SE37遺物出土状況（南から）

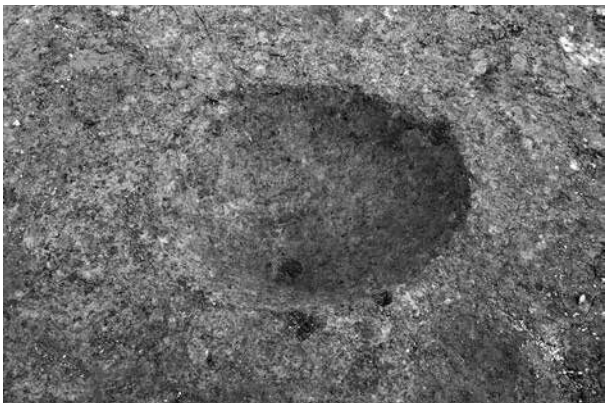
２．B-SE37完掘状況（南から）



３．B-SK41完掘状況（南から）

４．B-SK44完掘状況（北東から）

５．B-SK45完掘状況（東から）



６．B-SK78完掘状況（南から）

７．B-SK86遺物出土状況（西半）（北西から）

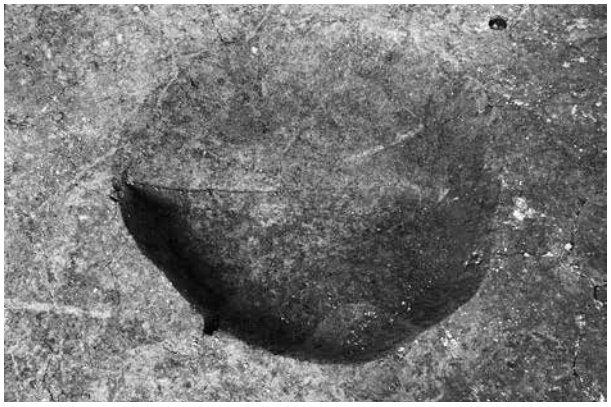
８．B-SK86遺物出土状況（西半）（北西から）

図版11

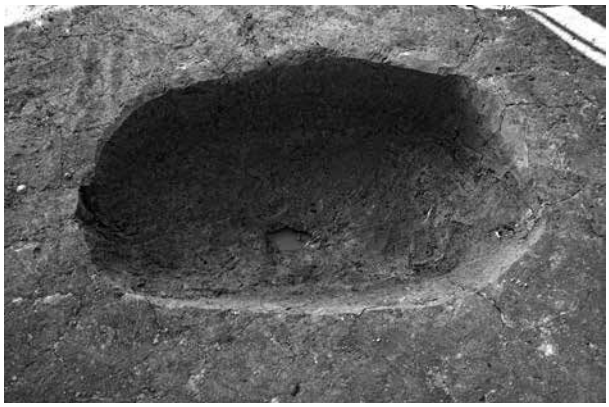
１．B-SK86遺物出土状況（東半）（西から）

２．B-SK86遺物出土状況（東半）（西から）

３．B-SK86完掘状況（西から）



４．B-SK87完掘状況（南から）

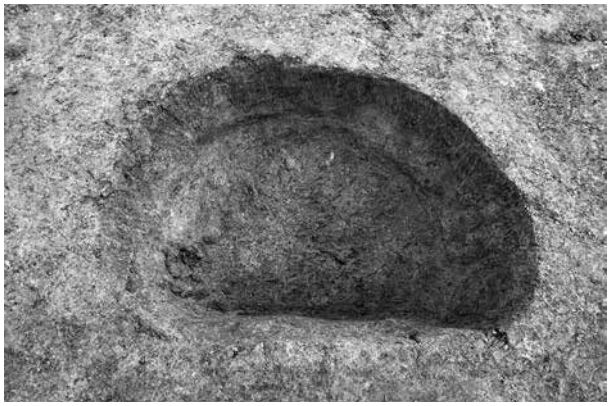


５．B-SK88完掘状況（東から）

６．B-SK89完掘状況（南から）

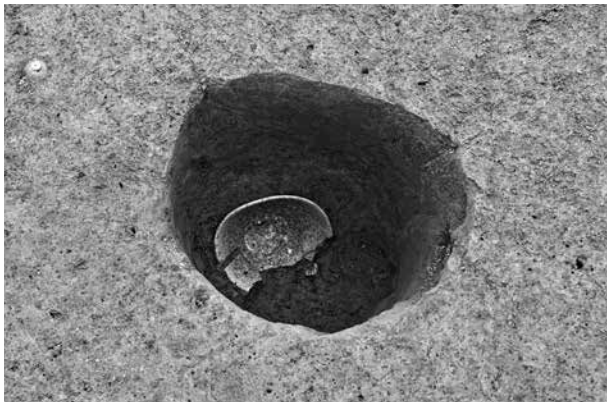
７．B-SK97完掘状況（南西から）

８．B-SK98完掘状況（南から）



１．B-SK104完掘状況（南から）

２．B-SK111完掘状況（北東から）



３．B-SP12遺物出土状況（北から）

４．B-SP35遺物出土状況（北から）

５．B-SP63遺物出土状況（西から）

６．B-SP77完掘状況（南から）

７．B-SP112完掘状況（南から）

８．B-SP113完掘状況（南から）

図版13

１．B-SP124完掘状況（南から）

２．B-SP125完掘状況（東から）

３．B-SZ53遺物出土状況（西から）

４．B-SZ53遺物出土状況（東から）

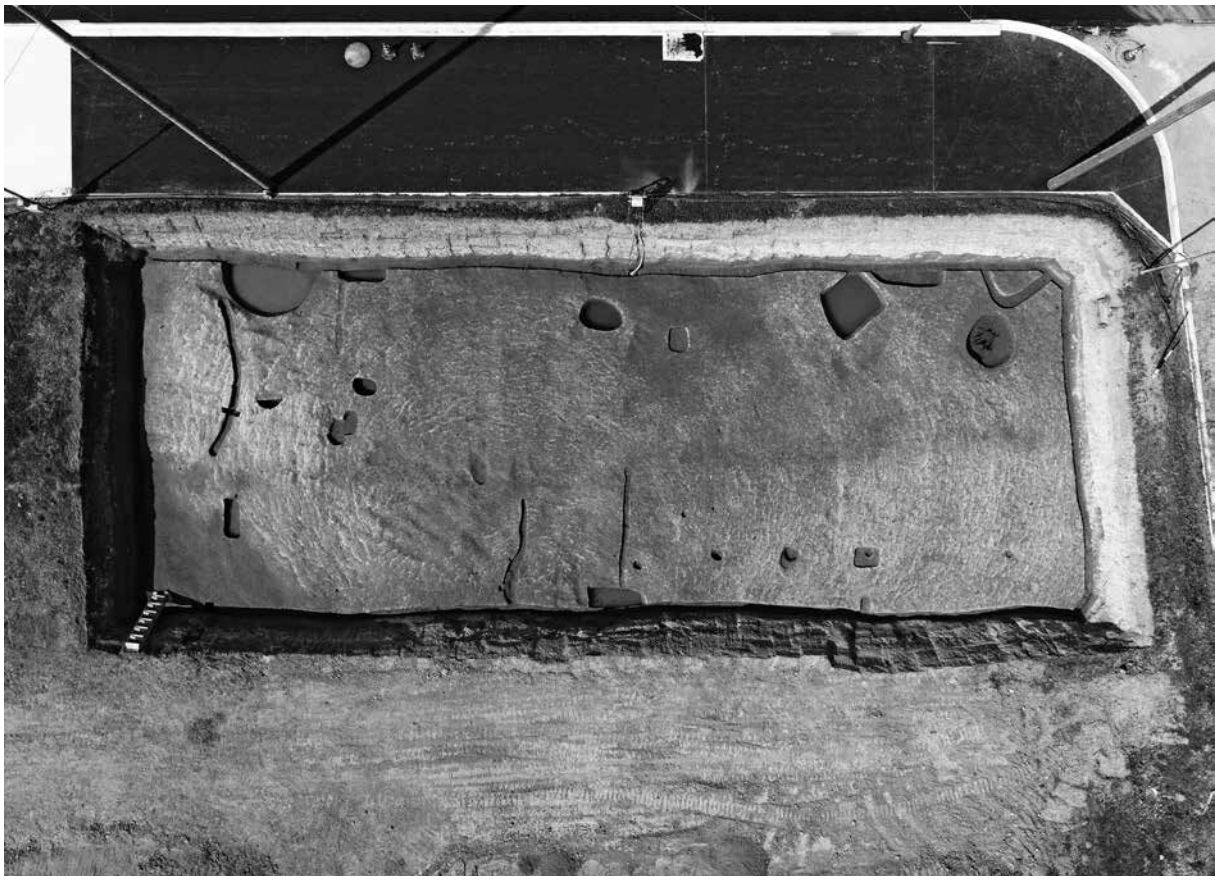
５．B-SZ53完掘状況（南から）

６．B-SD95完掘状況（東から）

７．Ｂ区北西部柱穴群（北西から）

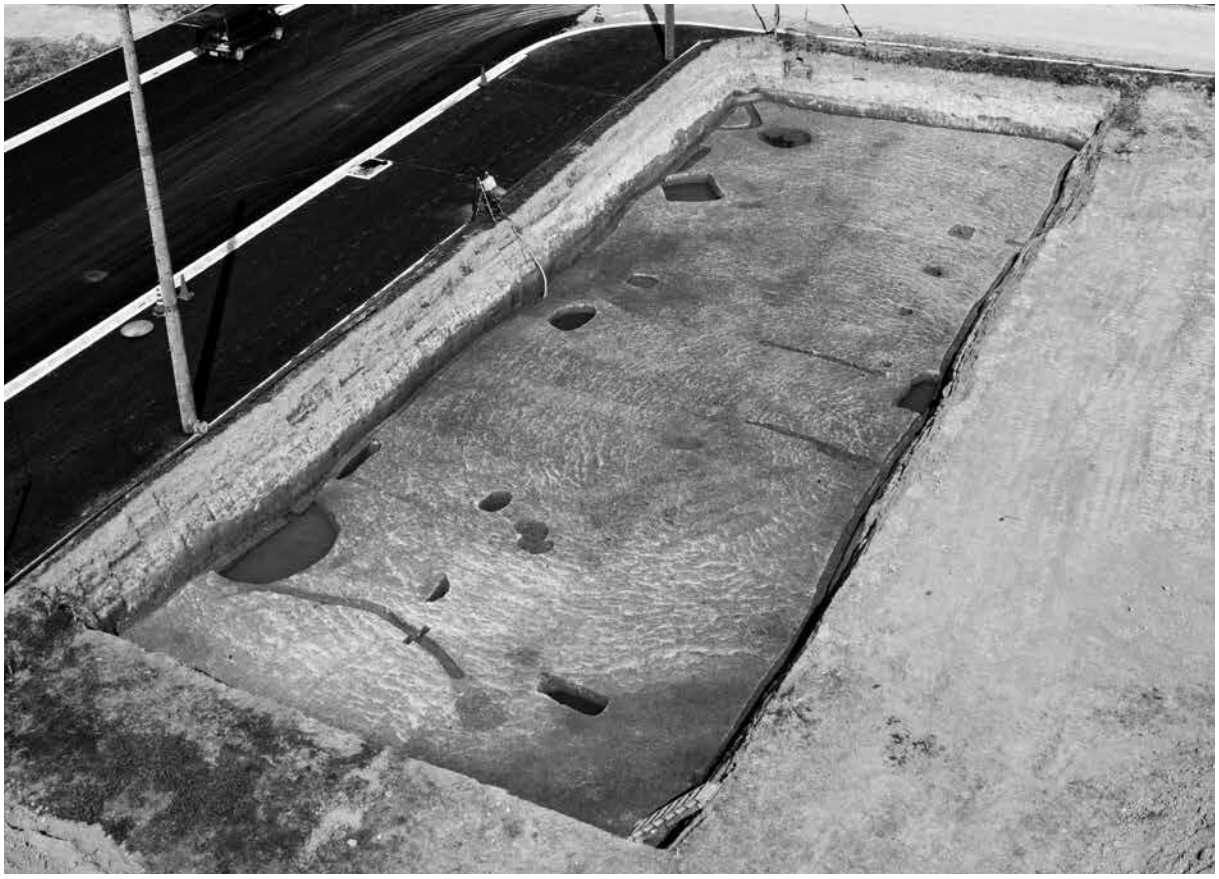
８．Ｂ区北西部柱穴群（北東から）

１．Ｃ区　調査前風景（南から）



２．Ｃ区　調査区全景（西が上）

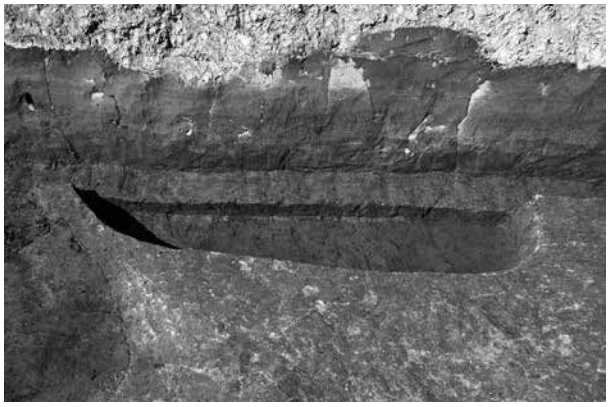
図版15



１．Ｃ区　調査区全景（南東から）

２．C-SE2井戸枠検出状況（南西から）

３．C-SE2遺物検出状況（南から）



４．C-SK5完掘状況（東から）

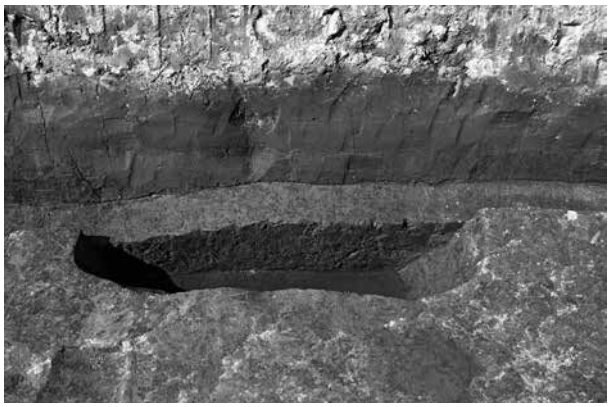
５．C-SK10完掘状況（東から）

１．C-SK8遺物出土状況（南半）1（北東から）

２．C-SK8遺物出土状況（南半）2（北東から）

３．C-SK8遺物出土状況（北半）（北東から）

４．C-SK8完掘状況（南東から）



５．C-SK11完掘状況（東から）

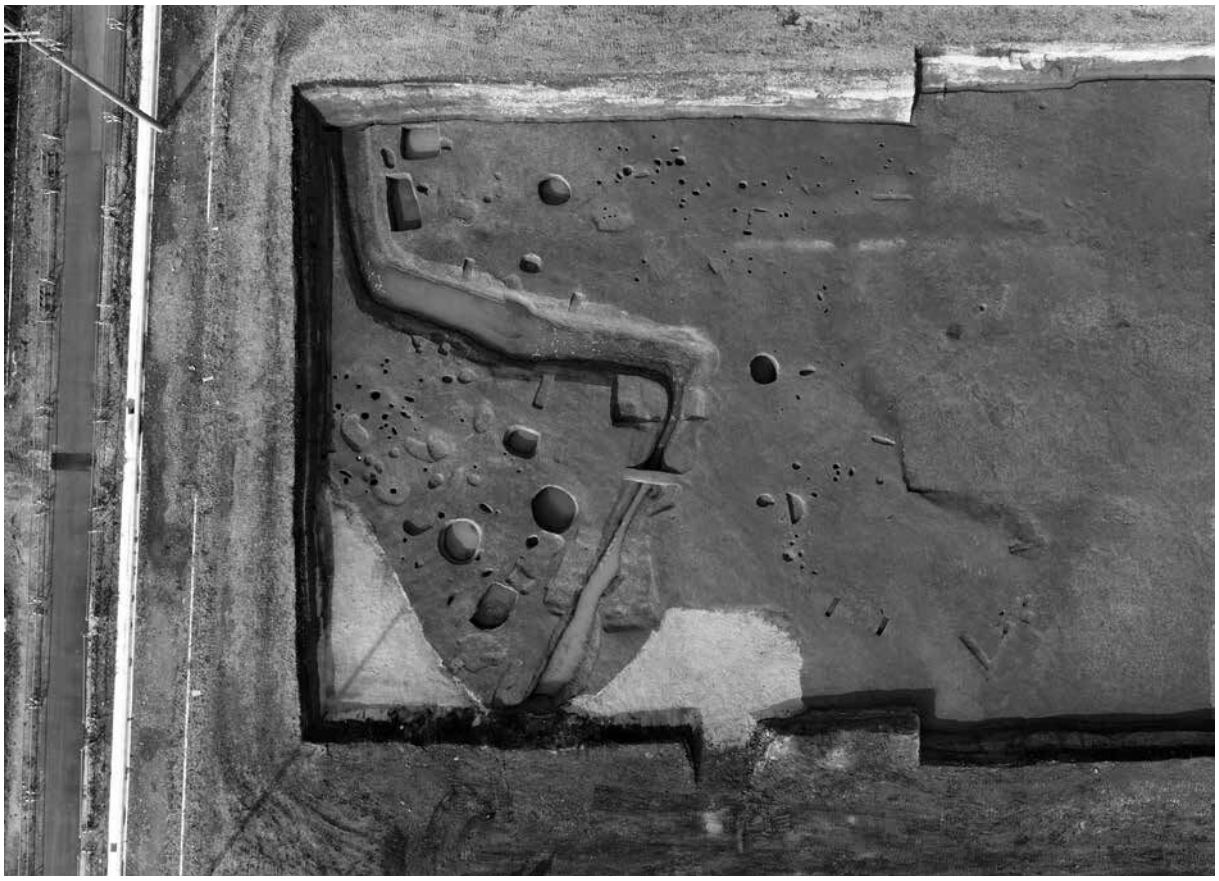
６．C-SK17完掘状況（東から）

７．C-SK26完掘状況（西から）

８．C-SK31完掘状況（東から）

図版17

１．Ｄ区　調査前風景（南東から）



２．Ｄ区　調査区全景　第１遺構面（北が上）

１．D-SD1完掘状況（北から）

２．D-SD1漆碗出土状況（西から）

図版19

１．D-SA296完掘状況（北西から）

２．D-SP76完掘状況（南から）

３．D-SA297完掘状況（南東から）

４．D-SD22完掘状況（南東から）

５．D-SE33枠状構造検出状況（東から）

６．D-SE33完掘状況（東から）

７．D-SK2完掘状況（南から）

８．D-SK3完掘状況（南から）

１．D-SK4完掘状況（南から）

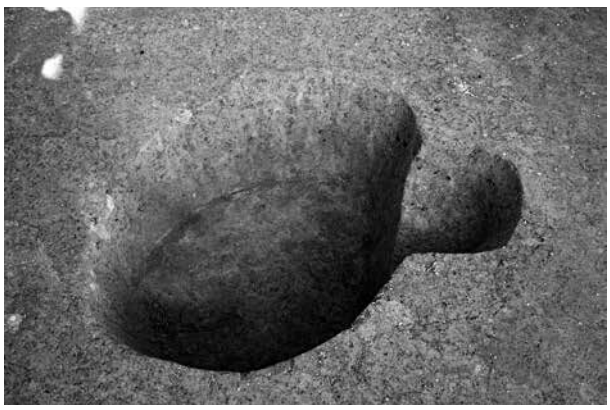
２．D-SK14完掘状況（南東から）

３．D-SK32完掘状況（南から）

４．D-SK34完掘状況（南から）

５．D-SK36完掘状況（西から）

６．D-SK40完掘状況（南から）



７．D-SK41完掘状況（南から）

８．D-SK42完掘状況（南から）

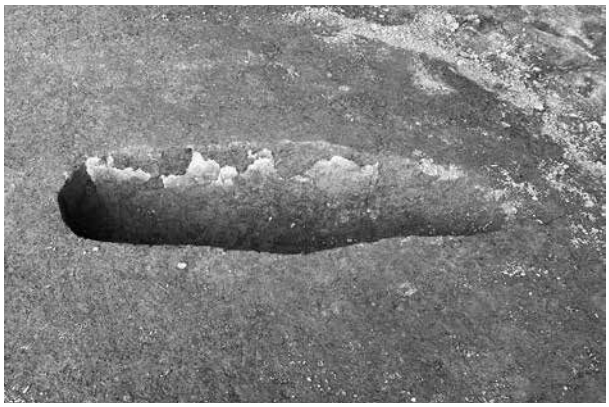
図版21

１．D-SK97完掘状況（南から）

２．D-SK99完掘状況（南から）

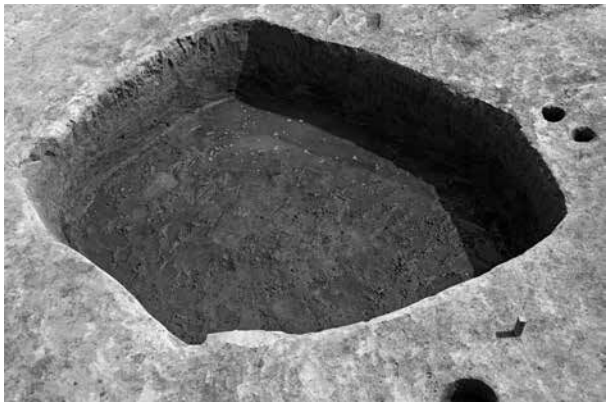
３．D-SK103完掘状況（南から）

４．D-SK113完掘状況（南から）

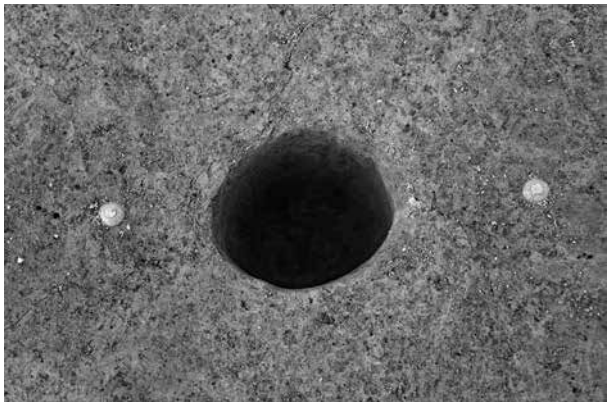


５．D-SK168完掘状況（南から）

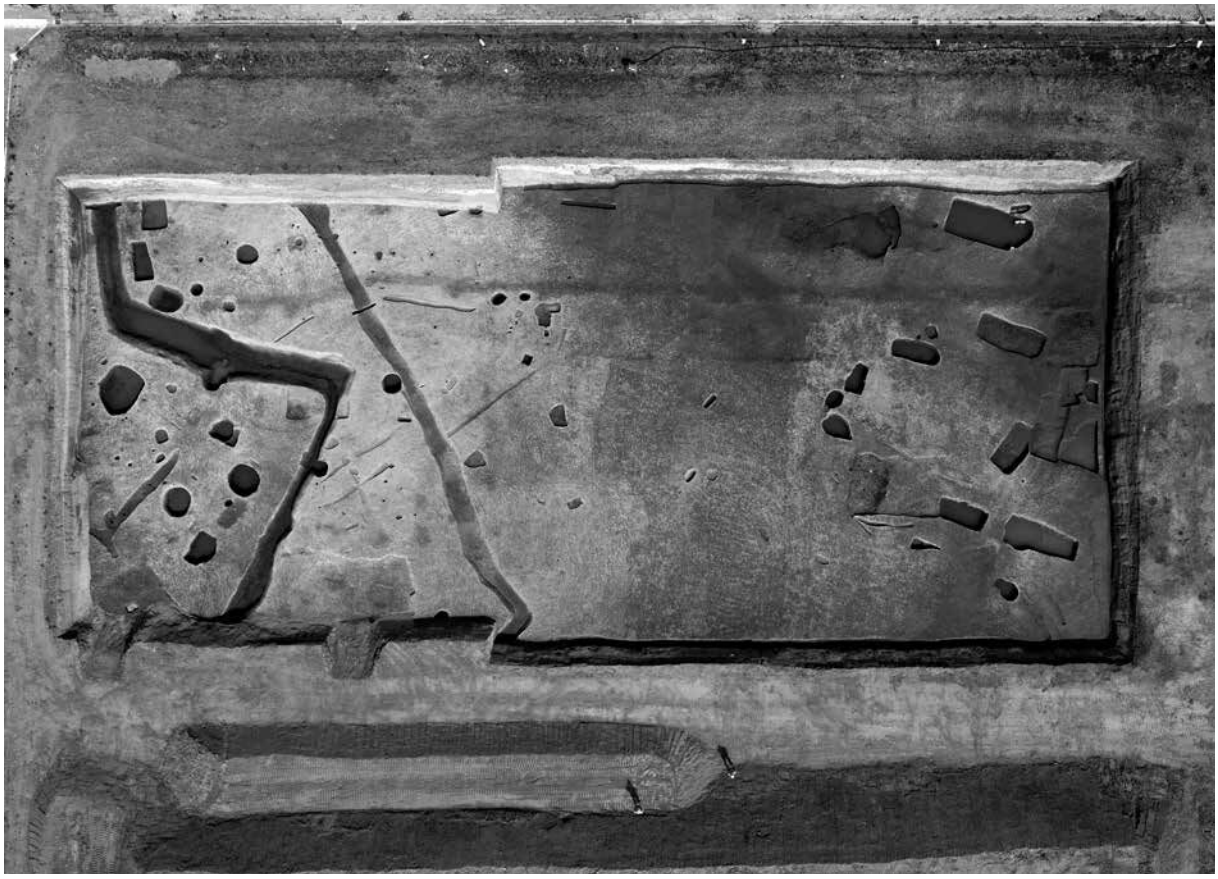
６．D-SK244完掘状況（西から）



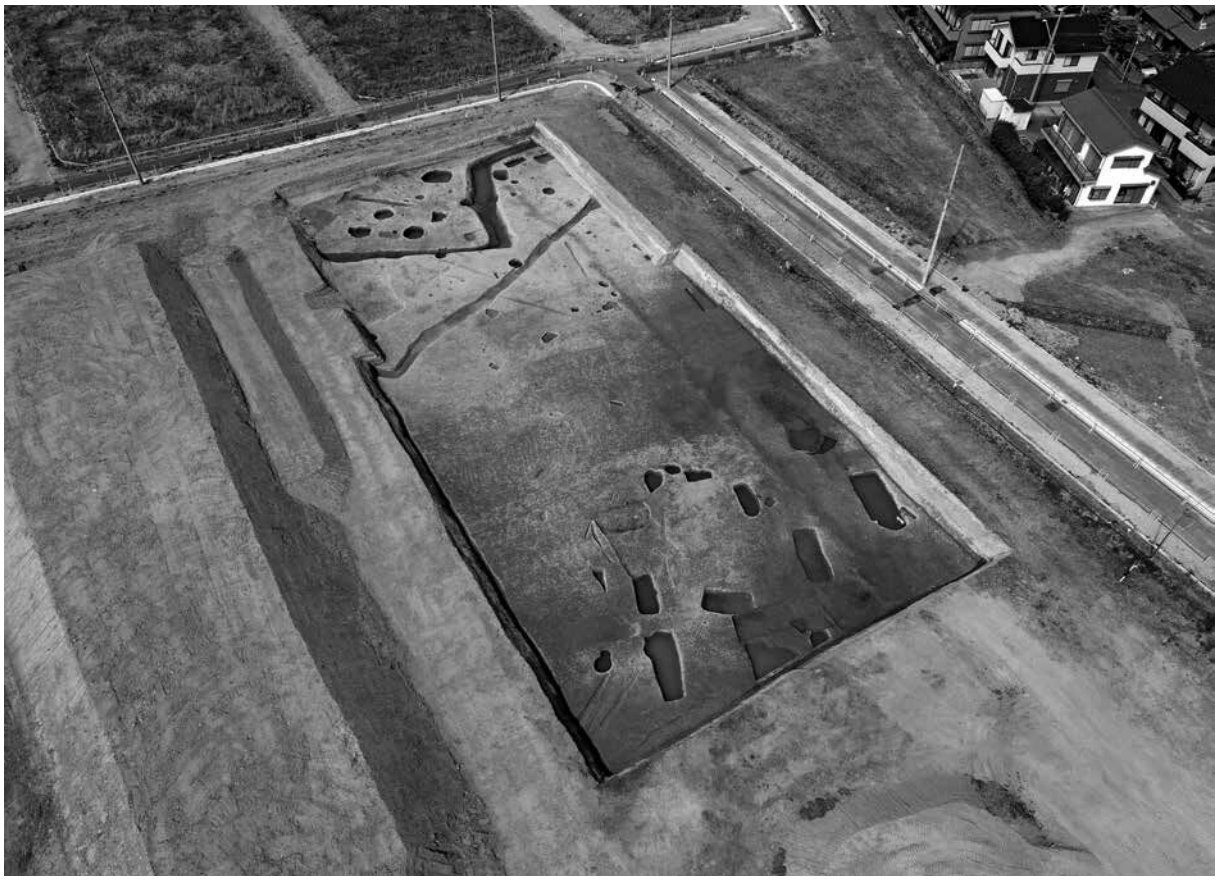
７．D-SK245完掘状況（西から）



８．D-SP189完掘状況（南から）



１．Ｄ区　調査区全景　第２遺構面（北が上）



２．Ｄ区　調査区全景　第２遺構面（南東から）

図版23

１．D-SD211完掘状況（南東から）

２．D-SD251完掘状況（南東から）

３．D-SE246曲物出土状況（南から）

４．D-SE247出土状況（北から）

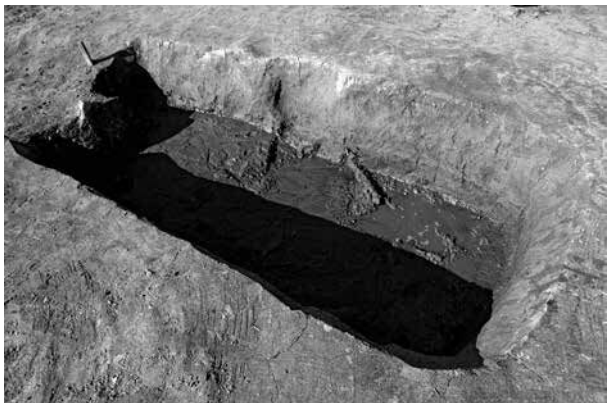
５．D-SE247曲物出土状況（北から）

１．D-SK202完掘状況（南東から）

２．D-SK203完掘状況（東から）

３．D-SK204完掘状況（南東から）

４．D-SK207完掘状況（南東から）



５．D-SK212完掘状況（南東から）

６．D-SK213完掘状況（西から）

７．D-SK218完掘状況（南から）

８．D-SK234完掘状況（南東から）

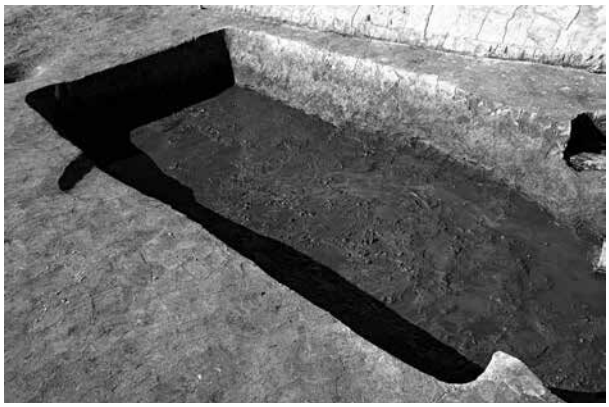
図版25

１．D-SK228完掘状況（南から）

２．D-SK228完掘状況（南から）

３．D-SK229出土状況（南から）

４．D-SK229完掘状況（南から）

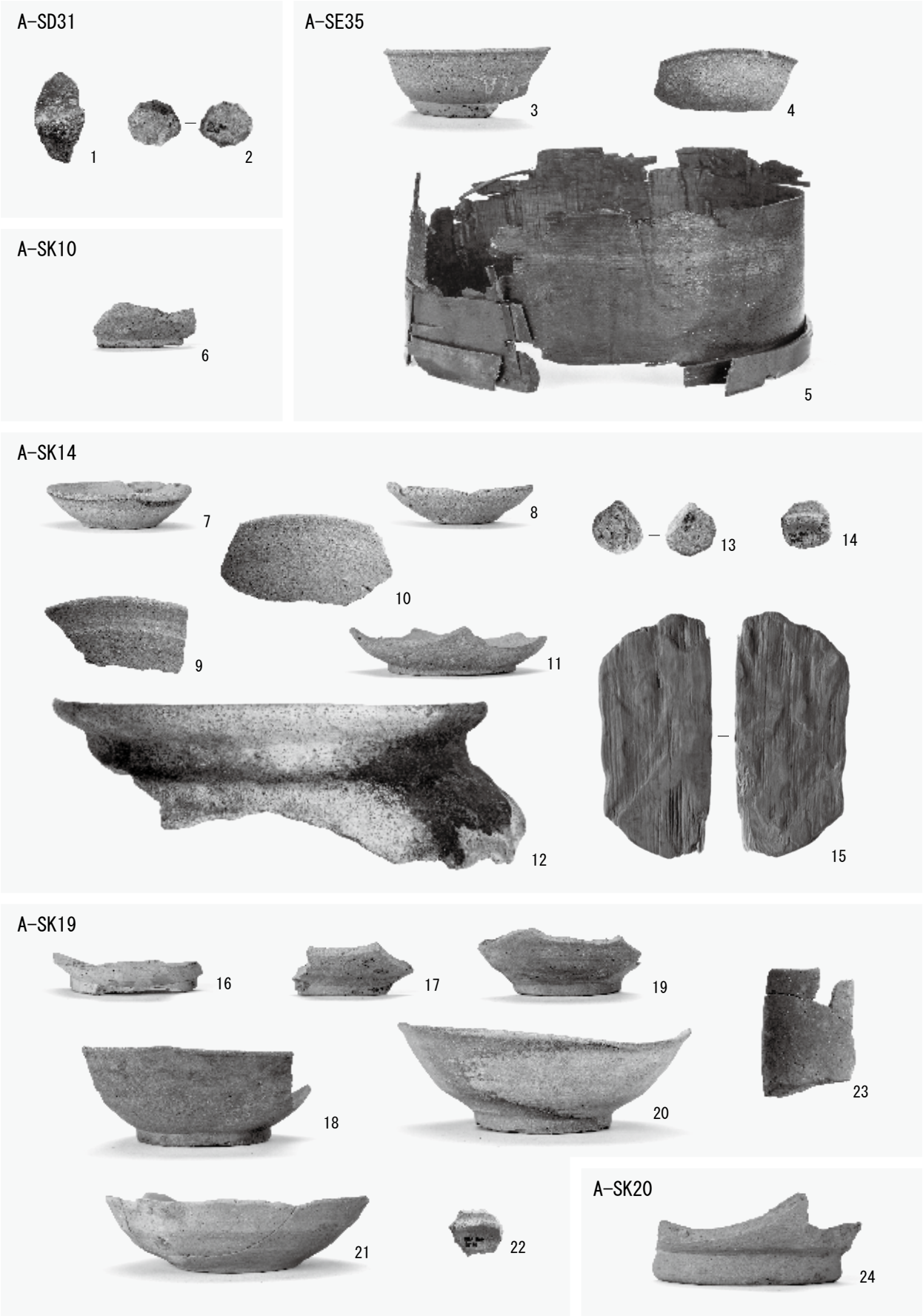


５．D-SK237完掘状況（南東から）

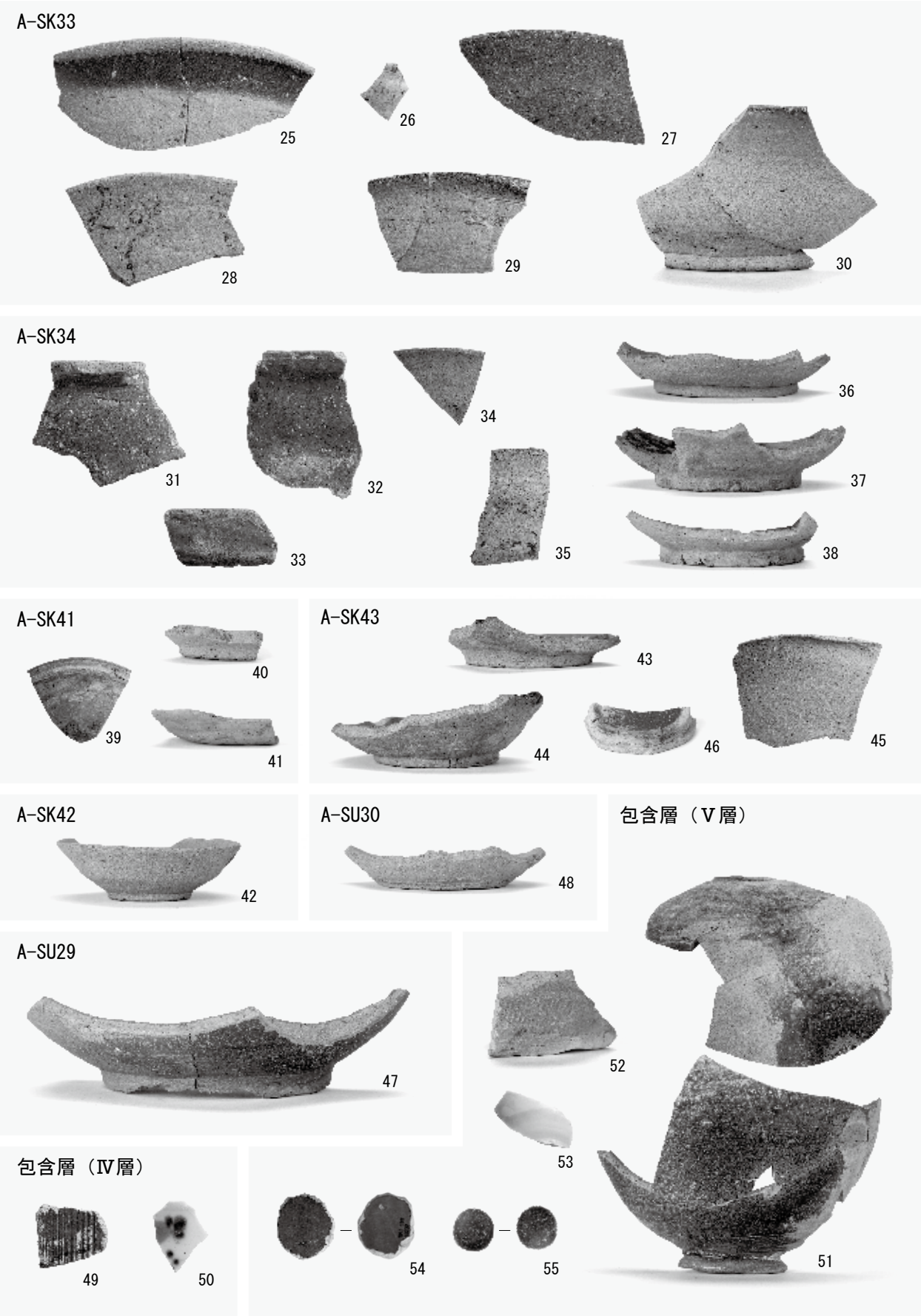
６．D-SK265完掘状況（南東から）

７．D-SP240出土状況（南から）

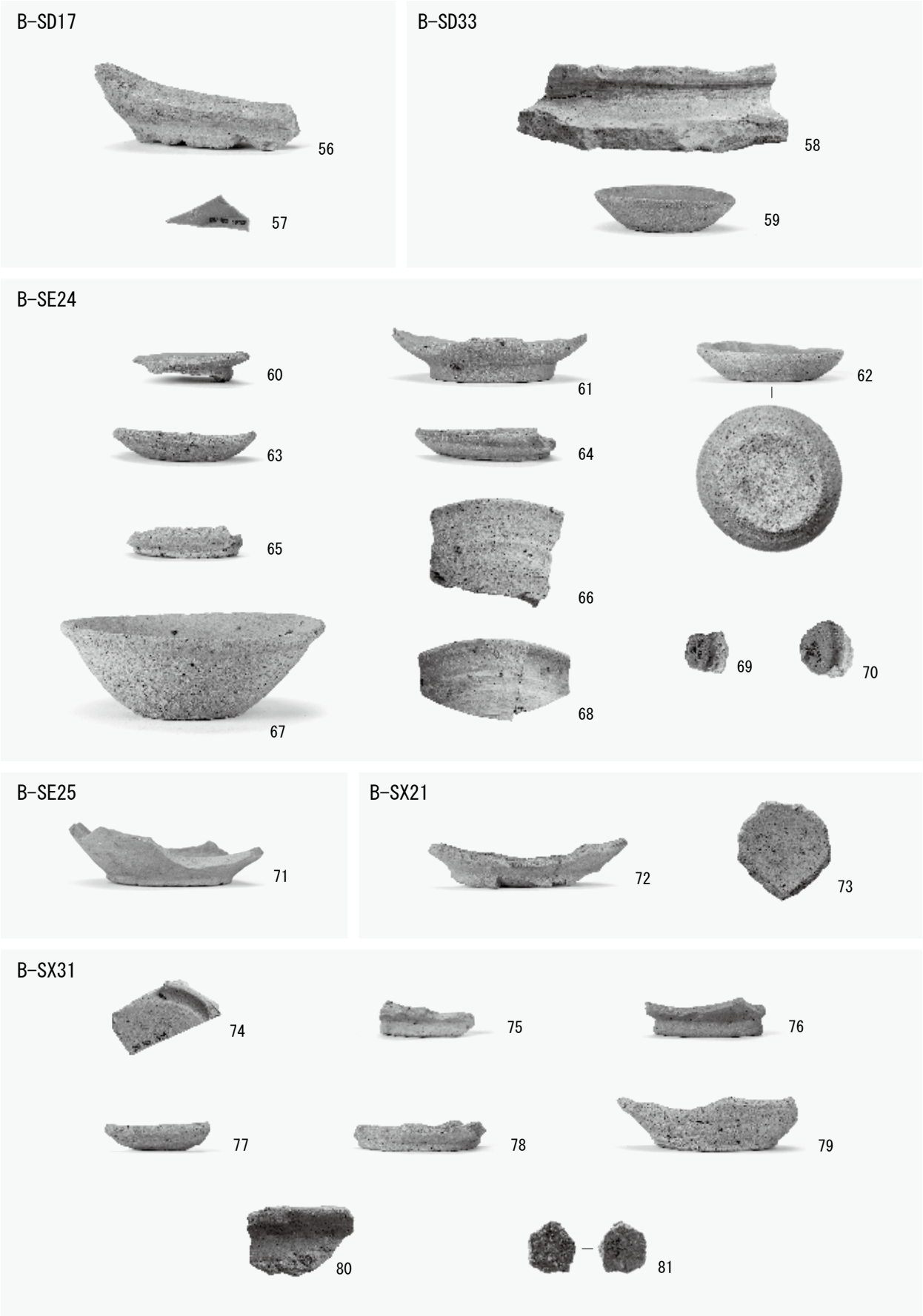
８．D-SP252出土状況（南から）


A-SD31
1
2
A-SE35
3
4
5
A-SK10
6
A-SK14
7
8
9
10
11
12
13
14
15
A-SK19
16
17
18
19
20
21
22
23
A-SK20
24

１．Ａ区　出土遺物１

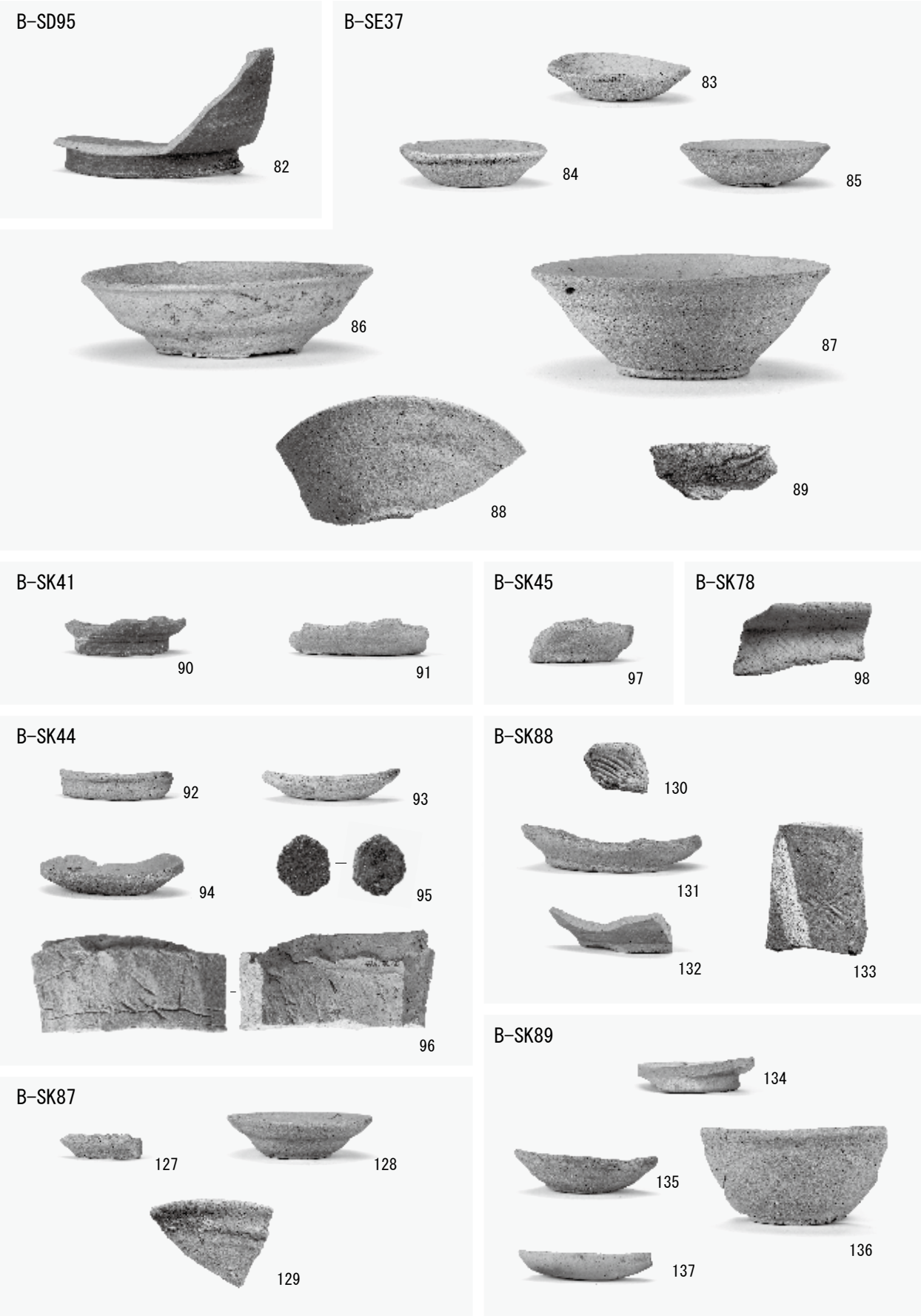

A-SK33
25
26
27
28
29
30
A-SK34
31
32
33
34
35
36
37
38
A-SK41
39
40
41
A-SK43
43
44
45
46
A-SK42
42
A-SU30
48
包含層（Ⅴ層）
A-SU29
47
52
53
51
包含層（Ⅳ層）
49
50
54
55

１．Ａ区　出土遺物２

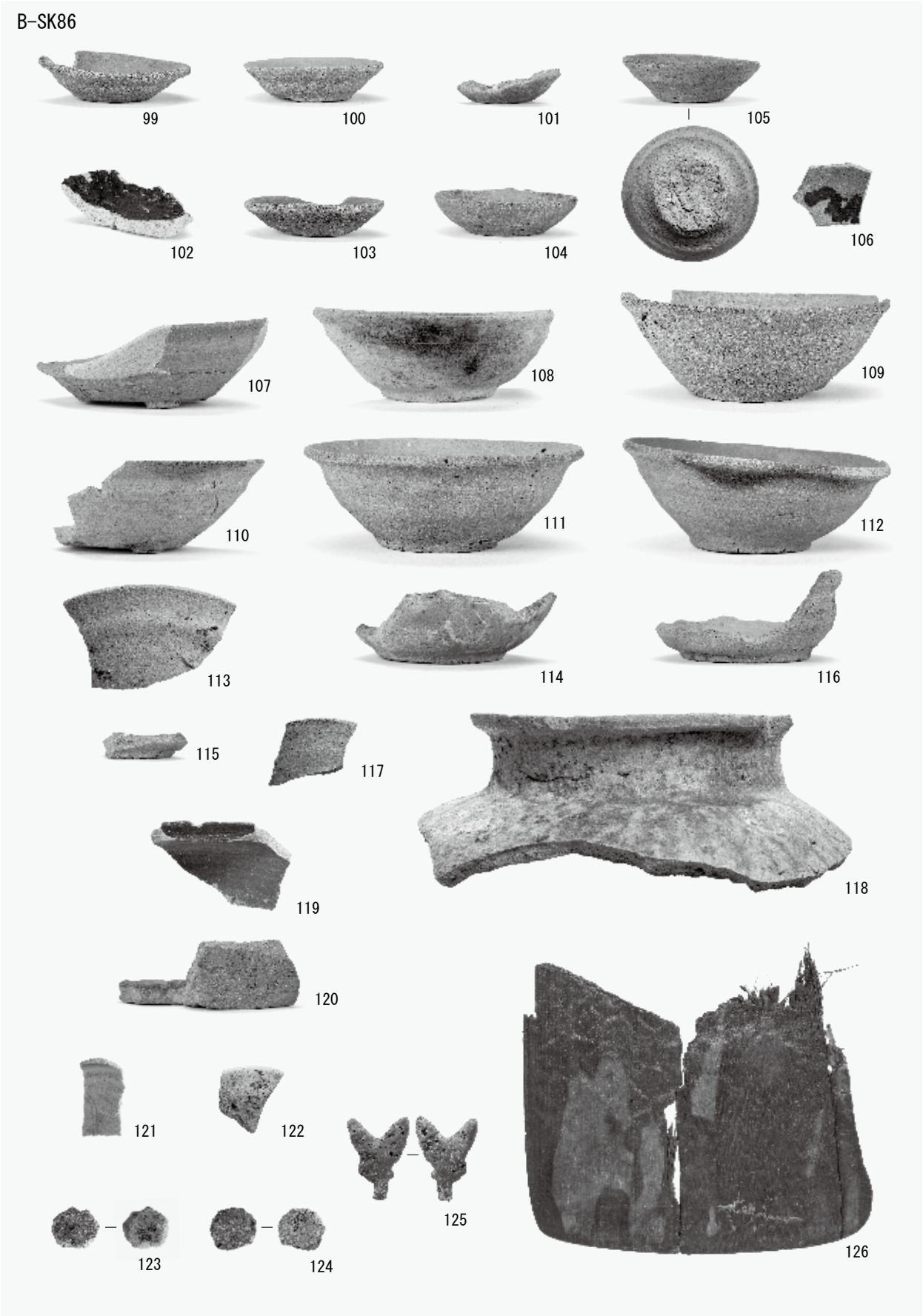

B-SD17
56
57
B-SD33
58
59
B-SE24
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
B-SE25
71
B-SX21
72
73
B-SX31
74
75
76
77
78
79
80
81

１．Ｂ区　出土遺物１

図版29

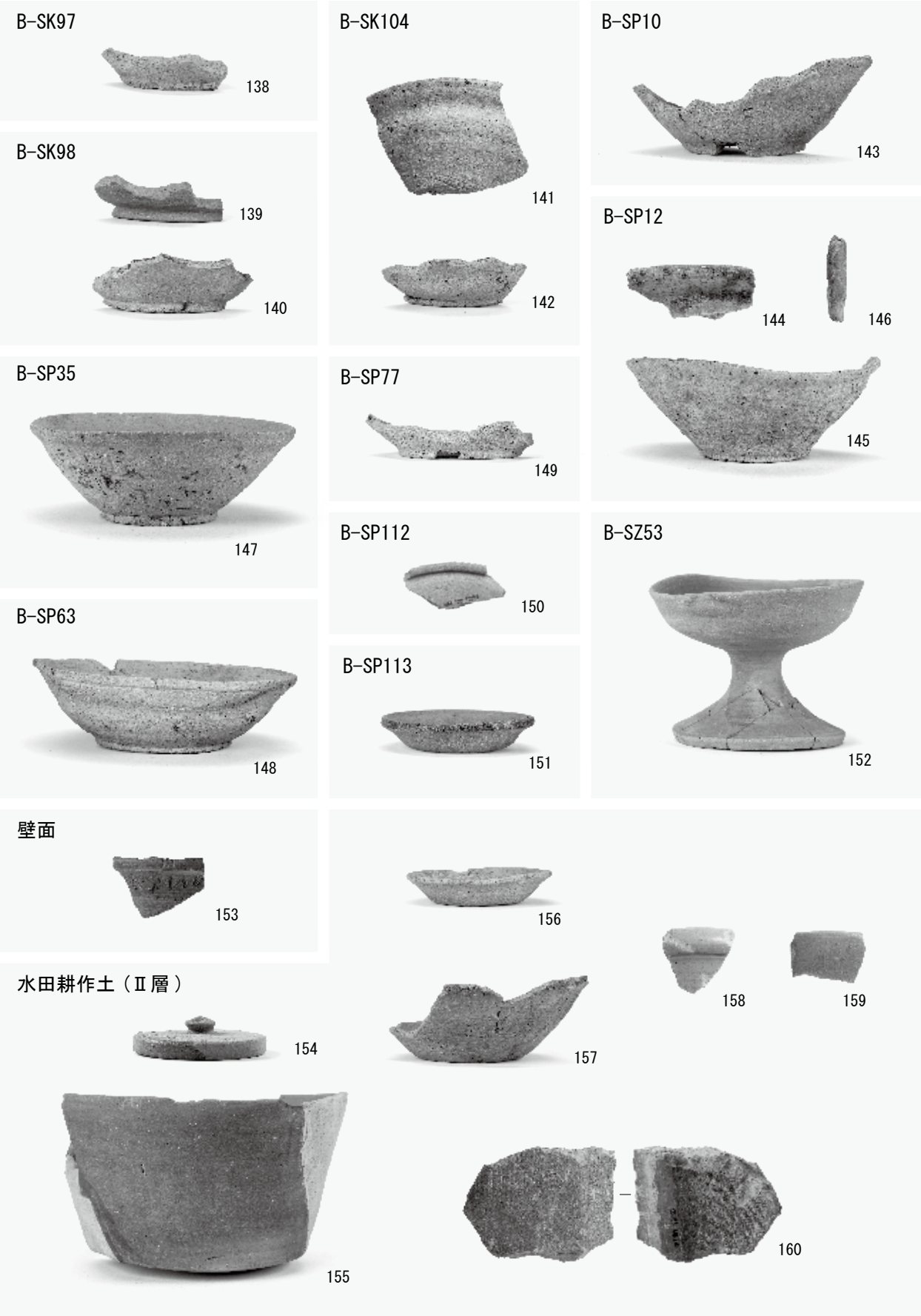


１．Ｂ区　出土遺物２

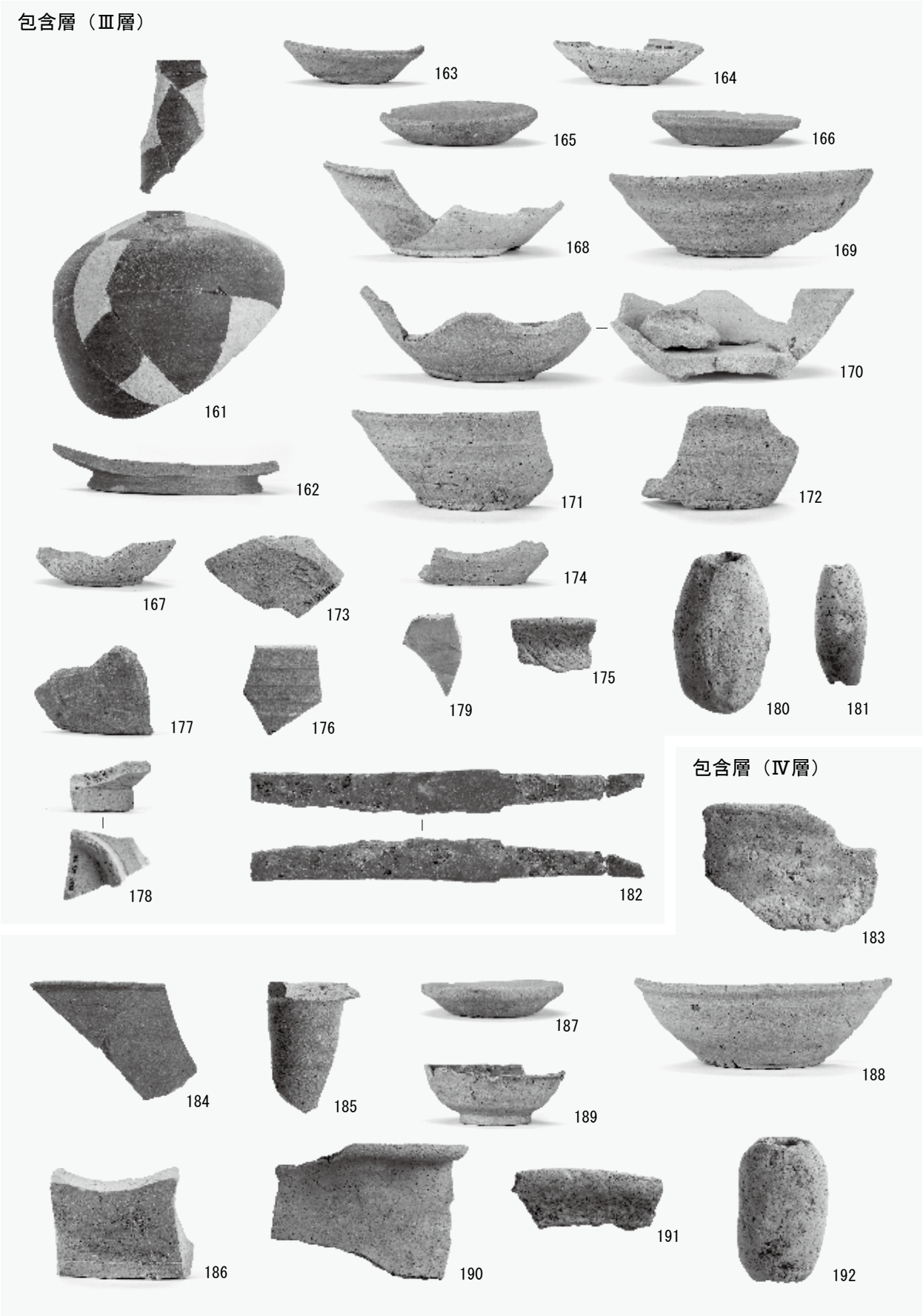

B-SK86
99
100
101
105
102
103
104
106
107
108
109
110
111
112
113
114
116
115
117
118
119
120
121
122
125
123
124
126

１．Ｂ区　出土遺物３

図版31

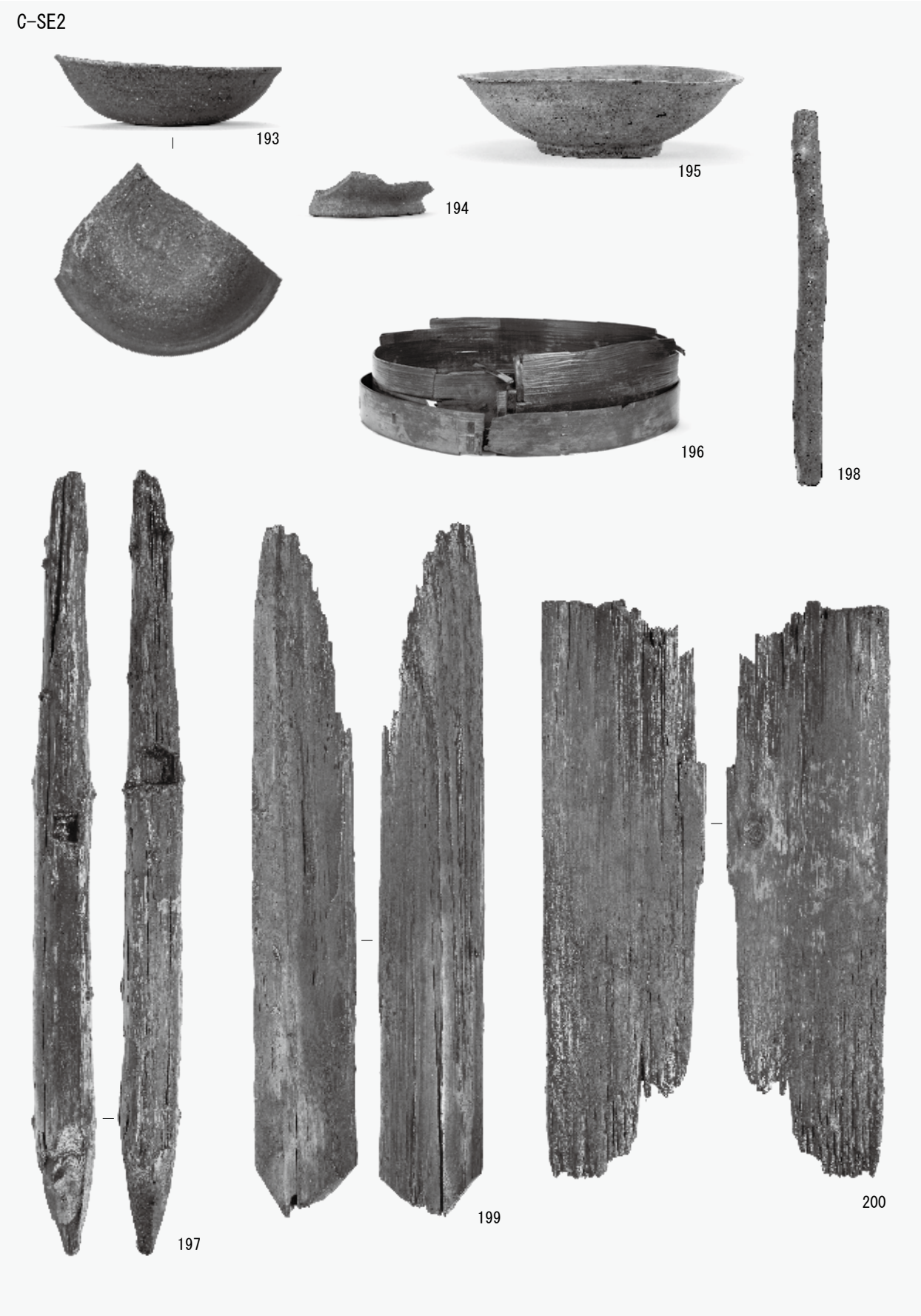


１．Ｂ区　出土遺物４


包含層（Ⅲ層）
163
164
165
166
168
169
161
170
162
171
172
167
173
174
175
177
176
179
180
181
178
182
包含層（Ⅳ層）
183
184
185
187
188
189
186
190
191
192

１．Ｂ区　出土遺物５

図版33



１．Ｃ区　出土遺物１

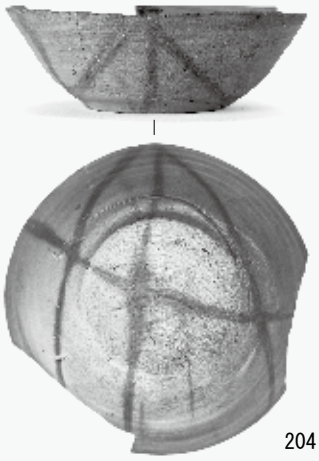
C-SK8

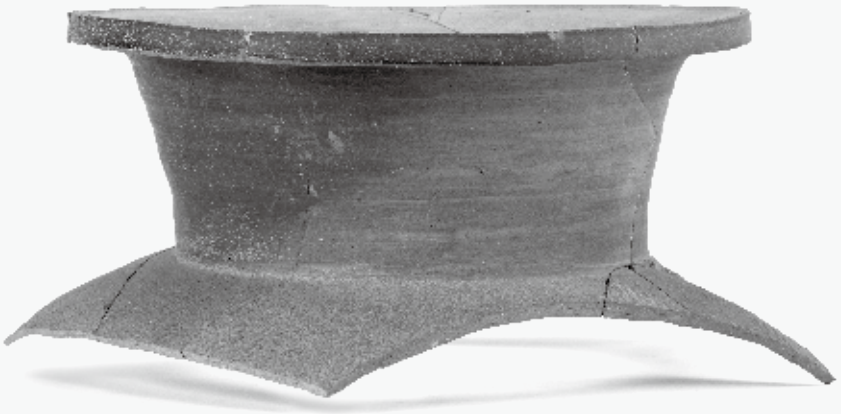
201

202

203

205


204


206

C-SK26

207

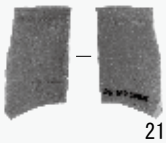
208

209

210

C-SK31

211


212

水田耕作土(Ⅱ層)

213

214

包含層(Ⅲ層)

215

216

217

218

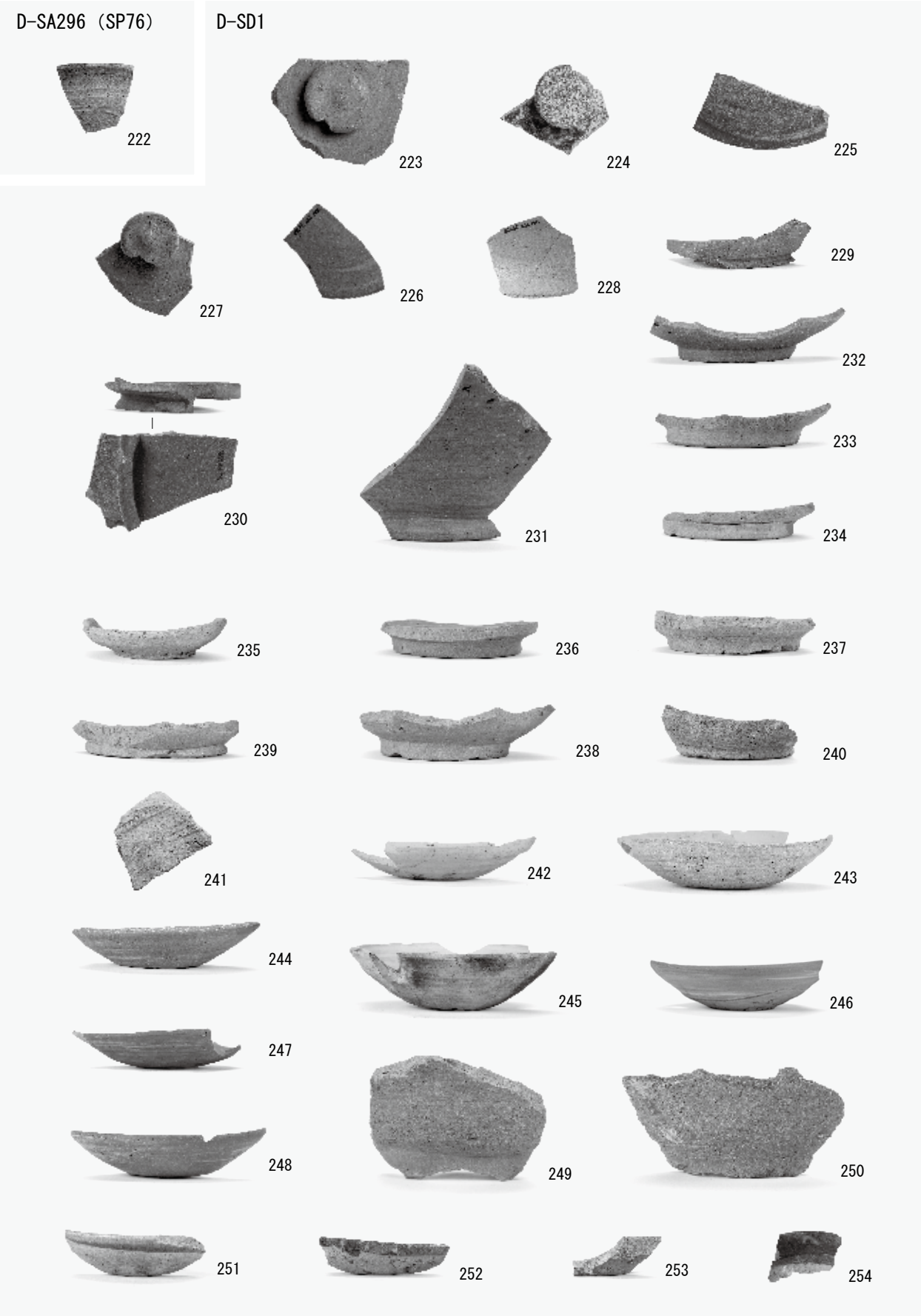
219

220

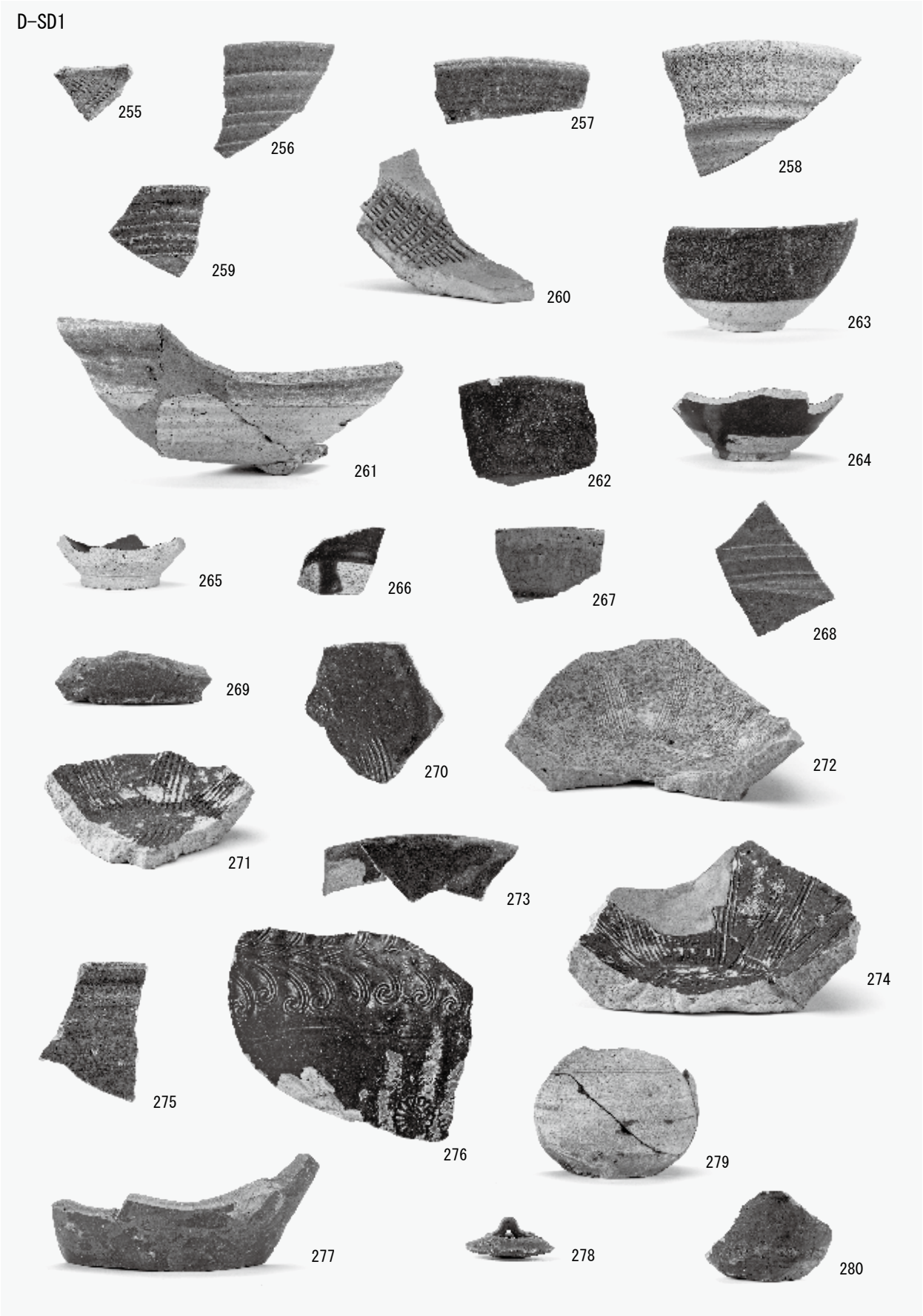
221

1．C区　出土遺物２

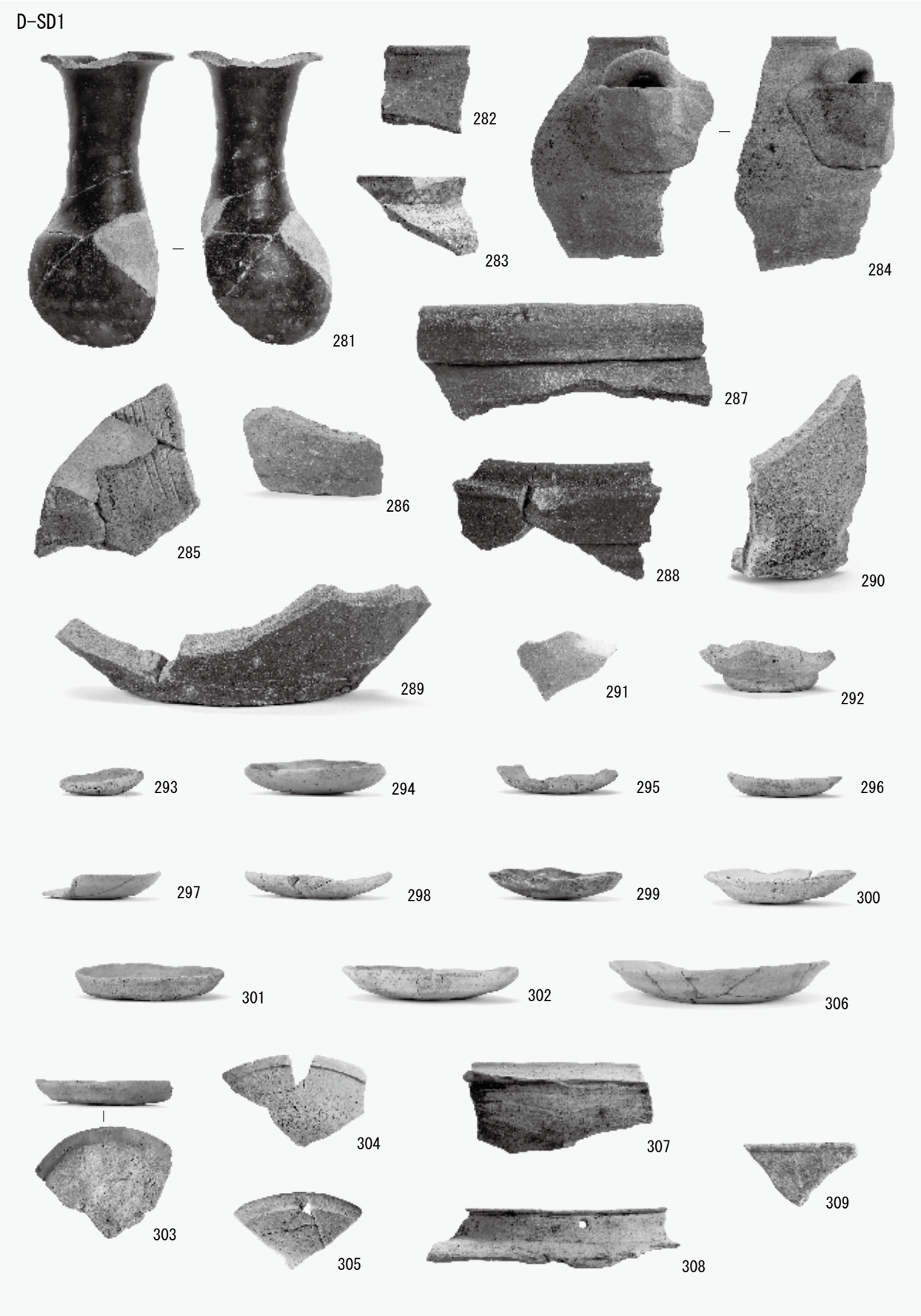
図版35



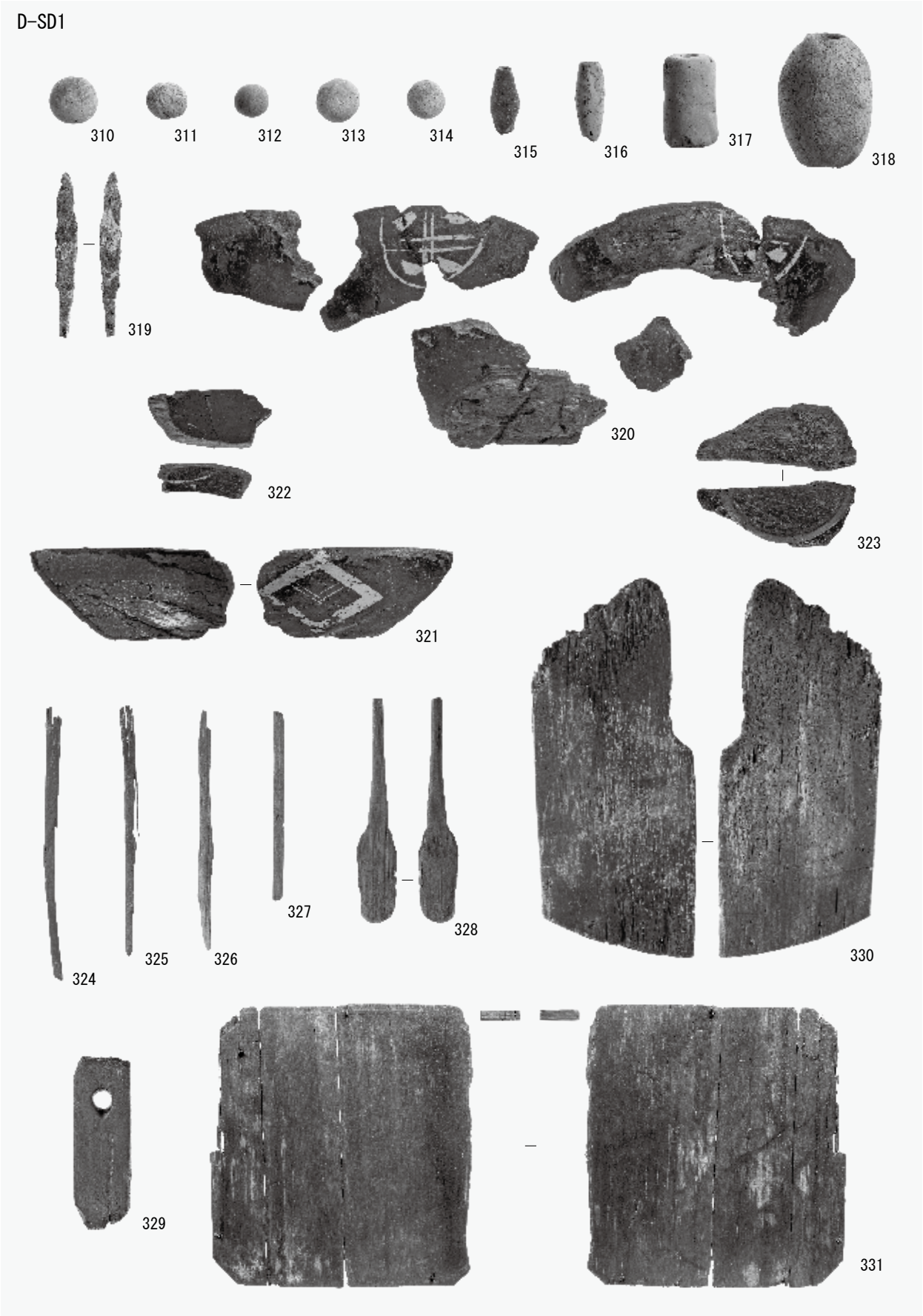
１．Ｄ区　出土遺物１


D-SD1
255
256
257
258
259
260
263
261
262
264
265
266
267
268
269
270
272
271
273
274
275
276
279
277
278
280

１．Ｄ区　出土遺物２

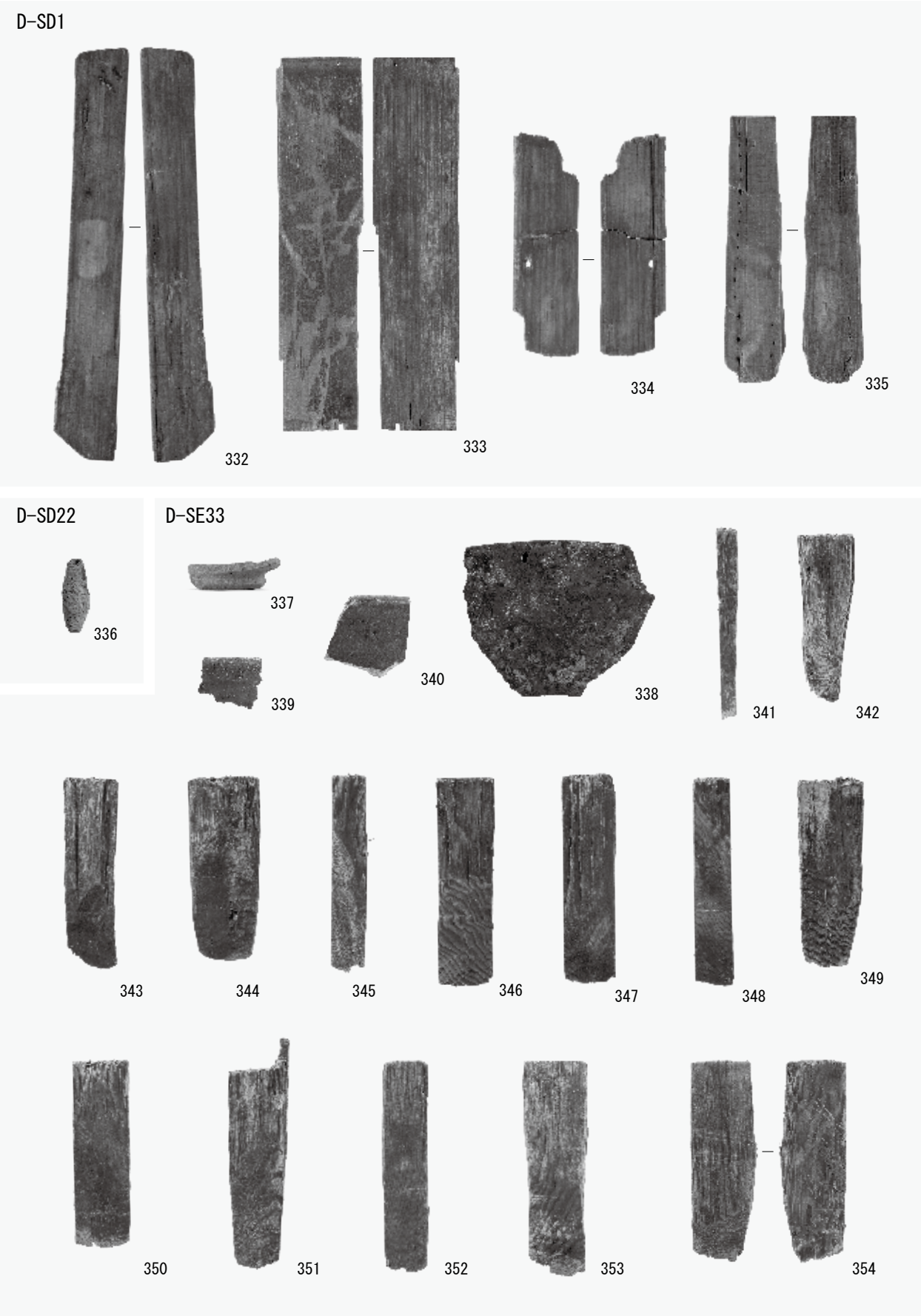

D-SD1
281
282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
303
304
305
306
307
308
309

１．Ｄ区　出土遺物３


D-SD1
310
311
312
313
314
315
316
317
318
319
320
321
322
323
324
325
326
327
328
329
330
331

１．Ｄ区　出土遺物４

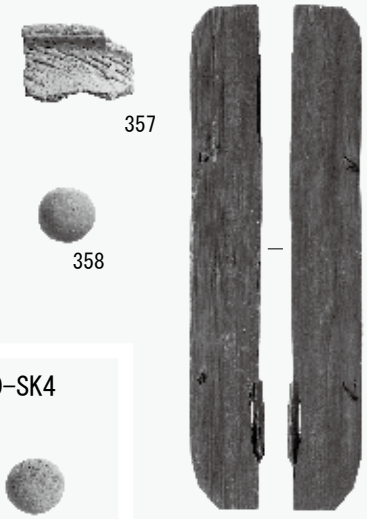
図版39



１．Ｄ区　出土遺物５

D-SK2

D-SK3



D-SK4

D-SK32

D-SK34

D-SK36

D-SK40

D-SK41

D-SK97

D-SK103

D-SK113

１．Ｄ区　出土遺物６

図版41

D-SK168

377

D-SK244

378

379

380

381

D-SK245

382

383

386

384

387

388

385

D-SP189

389

表土

390

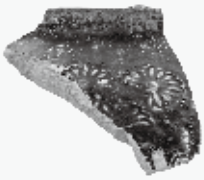
391

392

包含層

393

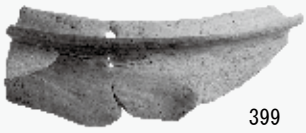
394


395

396

397

398


399

400

401

402

検出

403

404

排水溝

405

406

島畑部分

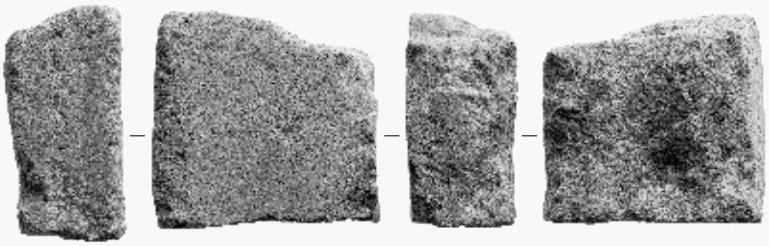
407

408

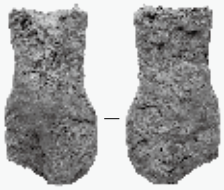
壁面

409

D-SD251



410



411

D-SE246

412

413

D-SE247

414

415

１．Ｄ区　出土遺物８

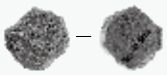
図版43

D-SK204

416

417

D-SK213


418

D-SK228

420

419

D-SK229

421

422

423

D-SK265

427

D-SK237

424

425

426

D-SP240

428

１．Ｄ区　出土遺物９

報　告　書　抄　録

ふりがな	せんのんじいせきだいじゅうじ・だいじゅういちじはっくつちょうさほうこくしょ
書名	千音寺遺跡第10次・第11次発掘調査報告書
副書名	
編著者名	岡田有司、澤田 孝、吉田 皓、前原一仁、山本和人、鈴木美咲、鈴木萌愛、株式会社パレオ・ラボ
編集機関	株式会社 イビソク
所在地	〒503-0854　岐阜県大垣市築捨町三丁目102番　TEL 0584-89-5507
発行機関	名古屋市千音寺土地区画整理組合
所在地	愛知県名古屋市中川区富田町大字千音寺字稲屋4181番地の１
発行年月日	西暦　2023年　５月　31日
調査成果機関	名古屋市教育委員会生涯学習部文化財保護室 〒460-8508　愛知県名古屋市中区三の丸三丁目１－１　TEL 052-972-3269　FAX 052-972-4202

所収遺跡（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
千音寺遺跡（せんのんじいせき）第10次（だいじゅうじ）	名古屋市（なごやし）中川区（なかがわく）富田町大字（とみだちょうおおあざ）千音寺（せんのんじ）	23100	13-15	35°09′52″	136°48′35″	2021/11/8～2022/3/28	3,111㎡	商業施設建設工事
千音寺遺跡（せんのんじいせき）第11次（だいじゅういちじ）				35°09′52″	136°48′28″	2021/12/9～2022/4/7	1,932㎡	

遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
千音寺遺跡第10次	遺物散布地	古墳～近世	井戸、溝、畑遺構、柱穴列、杭、土坑、	土師器・須恵器・灰釉陶器・山茶碗・古瀬戸・常滑・青磁・白磁・近世陶磁器・瓦・土錘・木製品・鉄製品・ウマの歯	古代から中世の集落が確認された。
千音寺遺跡第11次	遺物散布地	古代～中世	井戸、溝、柵、柱穴・杭、土坑	土師器・須恵器・灰釉陶器・山茶碗・古瀬戸・常滑・青磁・白磁・土錘・鉄斧・砥石・斎串・加工円板	室町時代の屋敷を区画する溝を検出した。

要約

＜第10次調査＞
　Ａ区では、平安時代から鎌倉時代にかけての溝、井戸、土坑などが確認され、灰釉陶器や山茶碗が出土した。北西部には畑遺構も検出され、近世に耕作された痕跡を確認した。
　Ｂ区では、古墳時代から鎌倉時代にかけての溝、井戸、土坑、柱穴などが確認された。後世に島畑として利用されていた微高地においては灰釉陶器や山茶碗などが多く出土した。馬蹄形の溝も確認しており、溝の底から須恵器の高杯が出土していることから古墳が存在していた可能性も考えられる。
　Ｃ区では、奈良時代から鎌倉時代にかけての柱列、溝、井戸、土坑などが確認され、須恵器、灰釉陶器、山茶碗などが出土した。今回調査においては唯一枠が残存した井戸を検出した。

＜第11次調査＞
　Ｄ区では、奈良時代から室町時代にかけての柱列、溝、井戸、土坑、柱穴などが確認され、須恵器、灰釉陶器、山茶碗などが出土した。西側には島畑状遺構も検出され、人工的に掘られた溝を確認した。

千音寺遺跡
第10次・第11次発掘調査報告書
―商業施設建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―

令和５年５月31日発行

編　　集　株式会社イビソク
〒503-0854　岐阜県大垣市築捨町三丁目102番
TEL 0584-89-5507

発　　行　名古屋市千音寺土地区画整理組合
〒454-0971　愛知県名古屋市中川区富田町大字
千音寺字稲屋4181番地の１
TEL 052-432-8286

印刷製本　西濃印刷株式会社
〒500-8074　岐阜県岐阜市七軒町15
TEL 058-263-4101